鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　25

平成20年度発掘調査報告

（第２分冊）

瑞泉寺周辺遺跡

佐助ヶ谷遺跡

弁ヶ谷遺跡

若宮大路周辺遺跡群

若宮大路周辺遺跡群

最明寺北亭跡

天神山城

平成21年３月

鎌倉市教育委員会

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　25

平成20年度発掘調査報告

（第２分冊）

瑞泉寺周辺遺跡

佐助ヶ谷遺跡

弁ヶ谷遺跡

若宮大路周辺遺跡群

若宮大路周辺遺跡群

最明寺北亭跡

天神山城

平成21年３月

鎌倉市教育委員会

瑞泉寺周辺遺跡（地点⑨）

佐助ヶ谷遺跡（地点⑩）

例　言

1　本書は平成20年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。

2　本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第１分冊に掲載した表のとおりである。

3　現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。

4　出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。

5　各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

総　目　次

（第２分冊）

9　瑞泉寺周辺遺跡（No.338）二階堂字紅葉ヶ谷647番６外

第１章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 5

第２章　調査の概要 …… 8

第３章　検出遺構と出土遺物 …… 13

第４章　まとめ …… 41

10　佐助ヶ谷遺跡（No. 203）佐助一丁目496 番５

第１章　遺跡概観 …… 63

第２章　検出された遺構と遺物 …… 68

第３章　まとめ …… 88

11　弁ヶ谷遺跡（No. 249）材木座六丁目643 番３

第１章　調査概観 …… 103

第２章　検出された遺構と出土遺物 …… 108

第３章　まとめ …… 127

12　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）由比ガ浜一丁目126 番１

13　若宮大路周辺遺跡群（No. 242）由比ガ浜一丁目126 番11

第１章　遺跡の立地と環境 …… 142

第２章　調査の経過と方法 …… 144

第３章　検出された遺構と遺物 …… 145

第４章　まとめ …… 160

14　最明寺北亭跡（No. 137）山ノ内字明月谷295 番４外

第１章　遺跡の立地と環境 …… 168

第２章　調査の経過と方法 …… 170

第３章　検出された遺構と遺物 …… 172

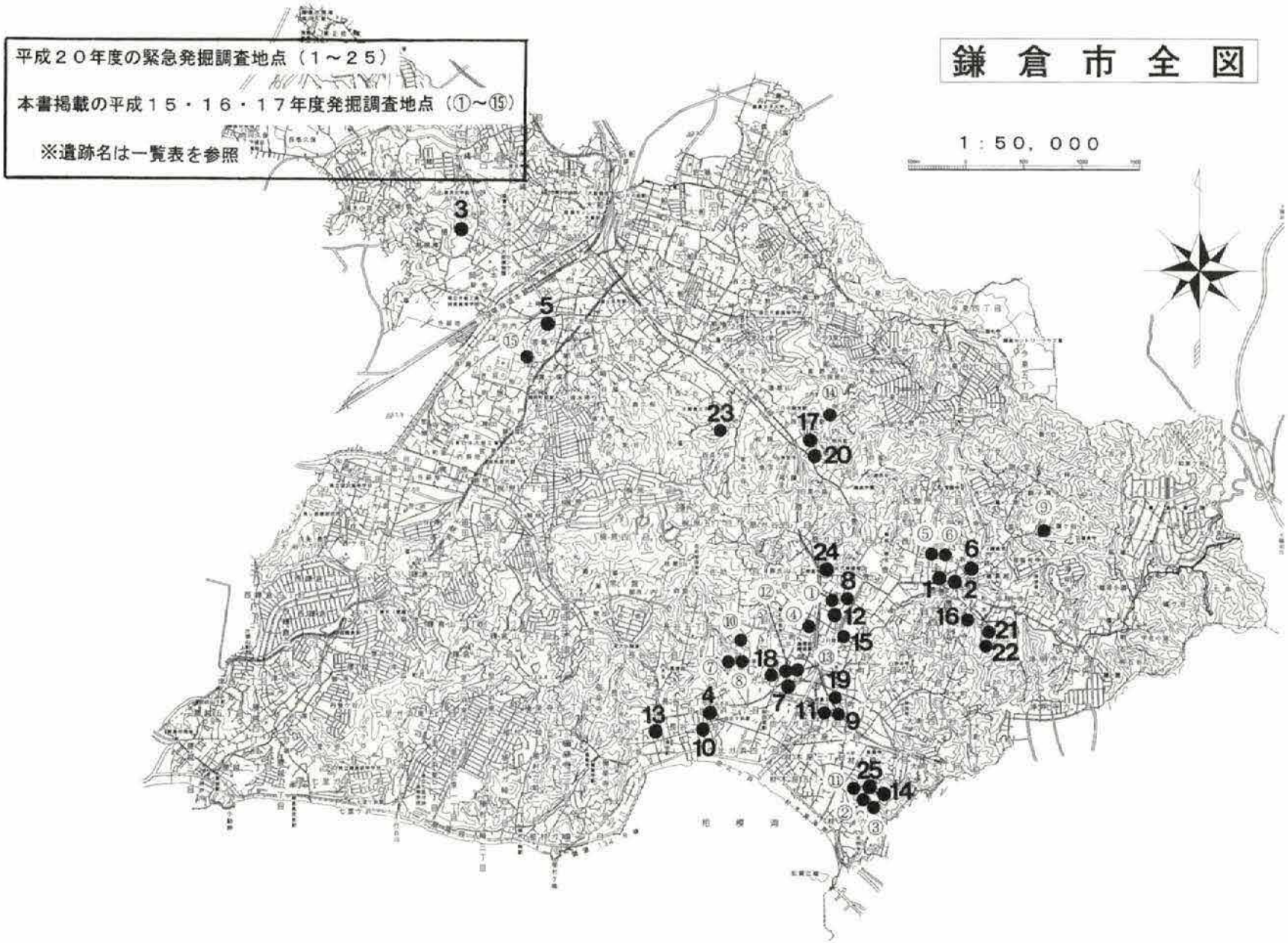
第４章　まとめ …… 174

15　天神山城（No. 384）山崎字宮廻689番１

第１章　遺跡の概観 …… 180

第２章　調査結果 …… 184

第３章　まとめ …… 188


平成２０年度の緊急発掘調査地点（１～２５）
本書掲載の平成１５・１６・１７年度発掘調査地点（①～⑮）
※遺跡名は一覧表を参照
鎌倉市全図
1：50，000

瑞泉寺周辺遺跡（No. 338）

ずいせんじしゅうへんいせき

二階堂字紅葉ヶ谷647番６外

例　言

1．本報は、瑞泉寺周辺遺跡の鎌倉市二階堂字紅葉ヶ谷647番６外地点における個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2．発掘調査は、平成15年９月12日～同年10月25日にかけて、調査面積50.00㎡を対象に鎌倉市教育委員会が実施した。
3．調査体制は、以下のとおりである。
　調査担当者：原　廣志
　調査員：須佐直子・太田美智子・須佐仁和・早坂伸市・久保田裕美・中川建二・栂岡渓音
　調査補助員：古田戸俊一・鈴木弘太・宇都洋平・小野夏菜・橋本和之・原考史・銘苅春也
　協力　機関：鎌倉考古学研究所・(株)斎藤建設
4．本報の執筆は、第１章「遺跡の位置と歴史的環境」については松吉大樹氏に原稿をお願いして掲載した。第２・３章を原が執筆し、第４章については調査員協議のもと原が稿を草した。また挿図・写真図版作成は須佐(直)・栂岡・山口・小野が実施した。
5．本報の掲載写真は、全景・個別遺構を原・須佐(仁) があたり、出土遺物は須佐(仁)が撮影した。
6．発掘調査における出土遺物、図面・写真類は、鎌倉市教育委員会が一括保管している。
7．本報の凡例は、以下の通りである。
　・図版縮尺
　　全測図：１／60　遺構図：１／20・１／40　遺物図：１／３
　・遺 構 図
　　遺構図のレベルは海抜標高の数値を示している。
　・遺 物 図
　　－・－・－は釉薬範囲を示す。黒塗りは主にかわらけ灯明皿付着の油煤煙や漆器の朱漆文様を表現している。
　・使用名称
　　本報中の「土丹」は三浦・葉山岩層の泥岩のことである。
8．現地調査及び資料整理においては、多くの方々からご助言、並びにご協力を戴いた。記して感謝の意を表したい(敬称略、五十音順)。
　秋山哲雄・宇都洋平・大三輪龍彦・小野正敏・河野眞知郎・菊川泉・菊川英政・古田戸俊一・斎藤慎一・佐藤仁彦・玉林美男・宗臺秀明・宗臺富貴子・鈴木絵美・鈴木弘太・手塚直樹・本澤慎輔・福田誠・松尾宣方・馬淵和雄・宮田真・八重樫忠郎・綿貫鋭次郎

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と歴史的環境……5
　１．位置……5
　２．歴史的環境……6
第２章　調査の概要……8
　１，調査の経過……8
　２．測量軸の設定……8
　３．層序と生活面……10
第３章　検出遺構と出土遺物……13
　１．第１面の遺構・遺物……13
　２．第２面の遺構・遺物……19
第４章　まとめ……41

図　目　次

図１　調査地点と周辺遺跡……5
図２　国土座標上の位置図・グリット配置図……9
図３　調査区西壁・北壁土層堆積図……11
図４　第１面全測図……12
図５　土壙・ピット（１）……13
図６　土壙・ピット（２）……14
図７　第１面各遺構・面上包含層出土遺物……15
図８　第２ａ面全測図……17
図９　第２ｂ面全測図……18
図10　建物１・落ち込み遺構……20
図11　建物１内遺物出土状況……21
図12　建物１出土遺物（１）……22
図13　建物１出土遺物（２）……23
図14　建物１出土遺物（３）……25
図15　落ち込み遺構・Ｐ１出土遺物……26
図16　土壙２～５・Ｐ３……27
図17　第１面下～第２a面上出土遺物……28
図18　各遺構・遺構外出土遺物……29

表　目　次

表１　出土遺物観察表（１）……31
表２　出土遺物観察表（２）……32
表３　出土遺物観察表（３）……33
表４　出土遺物観察表（４）……34
表５　出土遺物観察表（５）……35
表６　出土遺物観察表（６）……36
表７　出土遺物観察表（７）……37
表８　出土遺物観察表（８）……38
表９　出土遺物観察表（９）……39
表10　出土遺物観察表（10）……40
表11　遺物分類別出土数量・比率表……42

図 版 目 次

図版１．ａ.第１面全景（南より）　ｂ.土壙１(東より) ……43
図版２．ａ.第１面調査区北端域（北より）　ｂ.Ｐ２（東より）　ｃ.土壙２・Ｐ３（西より）
ｄ.Ｐ４（西より）　ｅ.Ｐ５（東より）……44
図版３．ａ.第２ａ面全景（南より）　ｂ.建物１下層の検出状況（東より）……45
図版４．ａ.建物１下層検出状況（南より）　ｂ.第２ａ面上炭・焼土層範囲（南より）
ｃ.第２ａ面北端落ち込み遺物出土状況（北より）……46
図版５．ａ.第２ｂ面全景（南より）　ｂ.建物１床下検出状況（東より）……47
図版６．ａ.建物１床下検出状況（南より）　ｂ.建物１礎石イ（北より）　ｃ.建物１礎石ロ（北より）
ｄ.建物１礎石ハ（北より）　ｅ.建物１礎石ニ（東より）……48
図版７．ａ.建物１下層出土木材（西より）　ｂ.建物１床下各柱・礎石（北より）
ｃ.建築材・礎石（西より）　ｄ．Ｐ１周辺（北より）……49
図版８．ａ.第２ｂ面方形土壙（西より）　ｂ.土壙２（東より）　ｃ.第２ａ面Ｐ１礎板出土状況（東より）
ｄ.調査区北西岩盤ライン（北より）　ｅ.同左（東より）……50
図版９．ａ.調査区北壁土層堆積　ｂ.調査区西壁土層堆積（南側）　ｃ.同上（中央）　ｄ.同上（北側）……51
図版10．ａ.第１面土壙１、Ｐ１・３・５・10、面上及び包含層出土遺物……52
図版11．ａ.第２面建物１（１）かわらけ小皿……53
図版12．ａ.第２面建物１（２）かわらけ大皿……54
図版13．ａ.第２面建物１（３）瀬戸小壺、常滑捏鉢、女瓦、砥石、銭、漆製品、木製品……55
図版14．ａ.第２ａ面北側落ち込み遺構　ｂ．第２ａ面Ｐ１……56
図版15．ａ.第１面下～第２ａ面上……57
図版16．ａ.第２ａ面下～第２ｂ面上……58

第１章　遺跡の位置と歴史的環境

１．位置

調査地点のある瑞泉寺周辺遺跡は、鎌倉市二階堂字紅葉ヶ谷647番６外に所在している。鎌倉市街の北東方にあたり、ＪＲ鎌倉駅の東北東約２Kmに位置し、鎌倉を取り囲む丘陵に近接している。周辺は二階堂川を中心にして谷戸が多方向に形成され、尾根筋も複雑に入り組んでいる。調査地点は二階堂川の左岸、紅葉ヶ谷と呼ばれる支谷に位置し、開口部の二階堂川に架かる通玄橋から始まる。谷戸は単一ではなく樹枝状に入り組んだいくつかの小支谷を構成した地形を呈しており、谷奥に現在もひっそりとした佇まいをみせる錦屏山瑞泉寺までの間、東西方向に伸びた谷筋を形成している。南西方の二階堂川右岸には明治二年(1869)創建の鎌倉宮（大塔宮）と、その東側に近接した尾根上には護良親王の墓と伝える石塔が存在する。また周辺には既に廃寺となっているが、鎌倉宮の地は東光寺の旧跡と伝えられ、その西側に残る小字名の「四つ石」（永福寺総門の四脚門か）から二階堂川上流の亀ヶ淵までの広い平坦地には「二階堂」の地名に由来する源頼朝御願寺の永福寺が、南西方の支谷（理智光寺ヶ谷）には理智光寺がそれぞれ存在していた。

番号	神奈川県遺跡台帳番	遺跡名	所在地
1	338	本調査地点 瑞泉寺周辺遺跡	二階堂字紅葉ヶ谷647番6外
2	338	瑞泉寺周辺遺跡	二階堂字紅葉ヶ谷653番3
3	61	永福寺跡	二階堂字三堂
4	265	理智光寺跡（理智光寺横遺跡）	二階堂理智光寺谷749番1
5	265	理智光寺跡	二階堂理智光寺谷750番1
6	265	理智光寺跡	二階堂理智光寺谷802番7

図１　調査地点と周辺遺跡

2．歴史的環境

紅葉ヶ谷に関する史料は少ない。元徳二年(1330)三月四日付に推定される金沢貞顕書状に「一太閤禅閤去月廿五日、石長老の二階堂紅葉谷の庵へにハかに入御」とあり(註1)、北条高時が紅葉谷にあった夢窓疎石の庵を訪れているが、「椙谷を当時紅葉谷申候也」と注されていることから椙谷(杉ヶ谷)との関係性も無視はできない。永仁二年(1294)六月十五日付定聖願文に「於南閻浮提大□□国相模国鎌倉二階堂椙谷勝福寺書写畢、東寺流持金剛権律師定聖(花押)」とあり(註2)、二階堂杉ヶ谷に勝福寺なる寺があったことがわかる。しかし年未詳(元弘二年カ)六月廿三日付理覚書状(註3)に「御札承候了、自杉谷未承候、蒙仰事候ハ、不可有疎略之儀候」と元徳二年三月以降の史料にまだ「杉谷」の地名が使用されていることが見てとれるので、一概に紅葉ヶ谷と杉ヶ谷を結びつけることはできない。また現在の杉ヶ谷は永福寺奥の亀ヶ淵よりもっと北に入って行ったところであり、紅葉ヶ谷とはかなり距離がある。現在の二階堂杉ヶ谷、紅葉ヶ谷を史料の地に当たるかどうかは未詳とせざるを得ない。

嘉暦二年(1327)、二階堂南芳庵に住していた夢窓疎石を開山、二階堂道蘊(貞藤)を開基として同地北側に瑞泉寺が創建された。以下『新編相模国風土記稿』所載の寺伝によると、中興開基は初代鎌倉公方の足利基氏で、当寺号にちなみ瑞泉寺殿玉厳道希との法名を持つ。境内は景勝地として知られ、鎌倉公方家をはじめ武士の尊崇をあつめていた。塔頭は南芳庵・果証院・勝光院・長春院・祥雲庵・羅漢院・三聖院・妙智院・証悟院・吉祥院・西芳院・東禅院があり、後に保寿院と永安寺が塔頭となったとされている。貞治元年(1367)二代将軍足利義詮が住持通叟和尚と当寺で詩作している。基氏の子氏満もしばしば参詣して観花の詩会を開いている。康暦元年(1379)氏満謀反の噂が広がるが、住職古天周誓が将軍足利義満の帰依をうけていたため、反心なき旨を記した告文を持たせて京都に送りことなきを得ている(註4)。康暦元年に五山準十刹となり(註5)、次いで至徳三年(1386)には関東十刹第二位にあてられている(註6)。永享十一年(1439)二月十一日、永享の乱で敗北した足利持氏は瑞泉寺塔頭氏満墓所永安寺において自害する(註7)。この時、住僧であった昌在西堂は持氏の子永寿丸を連れ甲斐国に逃げかくまった。のちに永寿丸が成氏と称して古河公方となると、その恩に報い毎年2月に当寺参詣を行い(註8)、古河公方の例格の1つに定めた(註9)。最盛期の室町前期には永安寺以下の塔頭を持ち興隆するが、戦国期に入ると主な保護者の没落により荒廃を招いた。慶長八年(1603)八月円覚寺西堂の雲如梵意(仏日庵主)が住持として入寺以降、円覚寺の末寺となる。境内は国史跡に指定され、本堂裏手の夢窓築造と伝える庭園は国名勝となっている。背後の山頂にある遍界一覧亭は嘉暦三年(1328)夢窓が建造して以来、多くの禅僧により詩会が催された旧跡であったが、元禄年間に水戸光圀が荒廃していた亭跡を再建したと伝えられる。

二階堂周辺の武家屋地としては、二階堂行政・行村が二階堂に家宅を有していたとある(註10)が場所については未詳。二階堂氏以外の史料は管見の限り確認できない。

本調査地点から、西に一つ谷戸を挟んだ永福寺側の谷戸では過去に発掘調査が行われている(註11)。報告書によると14世紀前葉頃に利用された谷戸開発の形態が見られるが、建物遺構等は確認されていない。本調査地点からは鎌倉時代後半的な様相の遺物を共伴する生活面から礎石建物・掘立柱建物が検出され、かわらけ・青磁算木文・瓦質香炉・天目茶碗などが出土していることから、寺社塔頭・武家屋地等の形態が推測される。先述したが鎌倉幕府滅亡以後も、瑞泉寺は鎌倉公方家などの保護により大いに隆盛した。同じ紅葉ヶ谷内に存在する本調査地点も何らかの関わりを持った地域だったのかもしれない(例えば瑞泉寺の塔頭)。浄妙寺周辺に鎌倉公方の屋敷が置かれていたと考えられることから(註12)、それに勤仕する御家人連中の家々も浄妙寺周辺に多く建てられたであろう。浄妙寺と瑞泉寺は裏山を越えればそう遠くなく(註13)、瑞泉寺周辺の谷戸内でもその影響が及んでいた可能性は否定できないと考える。

【註】

1．(元徳二年)三月四日金沢貞顕書状(金沢文庫文書『神奈川県史』資料編２古代・中世2844号文書)
2．永仁二年六月十五日定聖願文(相模宝金剛寺文書『神奈川県史』資料編２古代・中世1157号文書)
3．年未詳六月廿三日理覚書状(『鎌倉遺文』41、3042号文書)
4．「鎌倉大草紙」(『群書類従』第二十輯　合戦部)
5．玉村竹二校「扶桑五山記」(『鎌倉市文化財資料』第２集)
6．「鎌倉五山記」(続『群書類従』第二十七輯下　釈家部)
7．「鎌倉大草紙」(『群書類従』第二十輯　合戦部)
8．『新編相模国風土記稿』鎌倉郡二二　瑞泉寺項
9．「殿中以下年中行事」(『群書類従』第二十二輯　武家部)
10．『吾妻鏡』建久三年八月廿四日条、同建久三年九月十一日条、同元仁元年正月四日条、等。
11．福田誠「瑞泉寺周辺遺跡(No.338)二階堂字紅葉ヶ谷653番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15　平成10年度発掘調査報告書(第２分冊)』1999　鎌倉市教育委員会
12．山田邦明「室町時代の鎌倉」　五味文彦編『都市の中世』(吉川弘文館　1992)
13．浄妙寺東側の胡桃ヶ谷にあったと考えられている大楽寺(廃寺)は、永享元年(1429)二月十一日の永安寺炎上に際し類焼している(「鎌倉大日記」『増補続史料大成』51)。瑞泉寺塔頭永安寺の裏山を越えたところが胡桃ケ谷であったことからしても、瑞泉寺と浄妙寺の位置関係の近さが窺われる。

【参考文献】

1．鎌倉市史教育委員会『鎌倉市史　総説編』及び『鎌倉市史　社寺編』(吉川弘文館　1959)
2．『鎌倉廃寺事典』(有隣堂　1980)
3．石井進編『[もののふの都]鎌倉と北条氏』(新人物往来社　1999)
4．石井進・大三輪龍彦編『よみがえる中世【3】　武士の都鎌倉』(平凡社　1989)
5．河野眞知郎『中世都市鎌倉－遺跡が語る武士の都－』(講談社選書メチエ49　1995)
6．山村亜希「中世都市鎌倉の都市空間構造」(『史林』80－2　1997)

第２章　調査の概要

１．調査の経過

瑞泉寺周辺遺跡（No. 338）は鎌倉市二階堂紅葉ヶ谷647番６外に所在し、谷戸奥には本遺跡の名称に関わる鎌倉時代末期に足利氏外護のもと夢窓国師の開山による臨済宗錦屏山瑞泉寺があり、谷戸外の西方には国史跡永福寺跡が位置している。

本地点の調査は個人専用住宅の建設に先立つ発掘調査であった。建設計画は鋼管杭打ちを伴う基礎工事であったため、鎌倉市教育委員会による遺構確認の試掘調査が実施したところ、現地表下１m10cm以下に中世遺物包含層及び遺構面（生活面）の存在が明らかになり発掘調査を実施する運びとなった。現地調査は平成15年９月12日から約１ケ月半の予定で調査面積50㎡を対象として調査を開始した。発掘調査は９月12日に機材搬入し、確認調査の資料結果を受けて重機による表土掘削した。その後、人力により掘り下げを行なったが、調査期間中は多量の湧水と台風接近に伴う大雨などに悩まされながらの調査作業であった。その結果、13世紀末葉～14世紀代にかけて２時期の生活面と、それに伴う遺構・遺物が発見された。同年10月25日までの間に緊急調査に必要な記録保存を行ない調査機材の撤収を含め、現地調査を無事終了した。以下、主な作業内容について調査日誌の抜粋を記しておく。

調　査　日　誌　抄

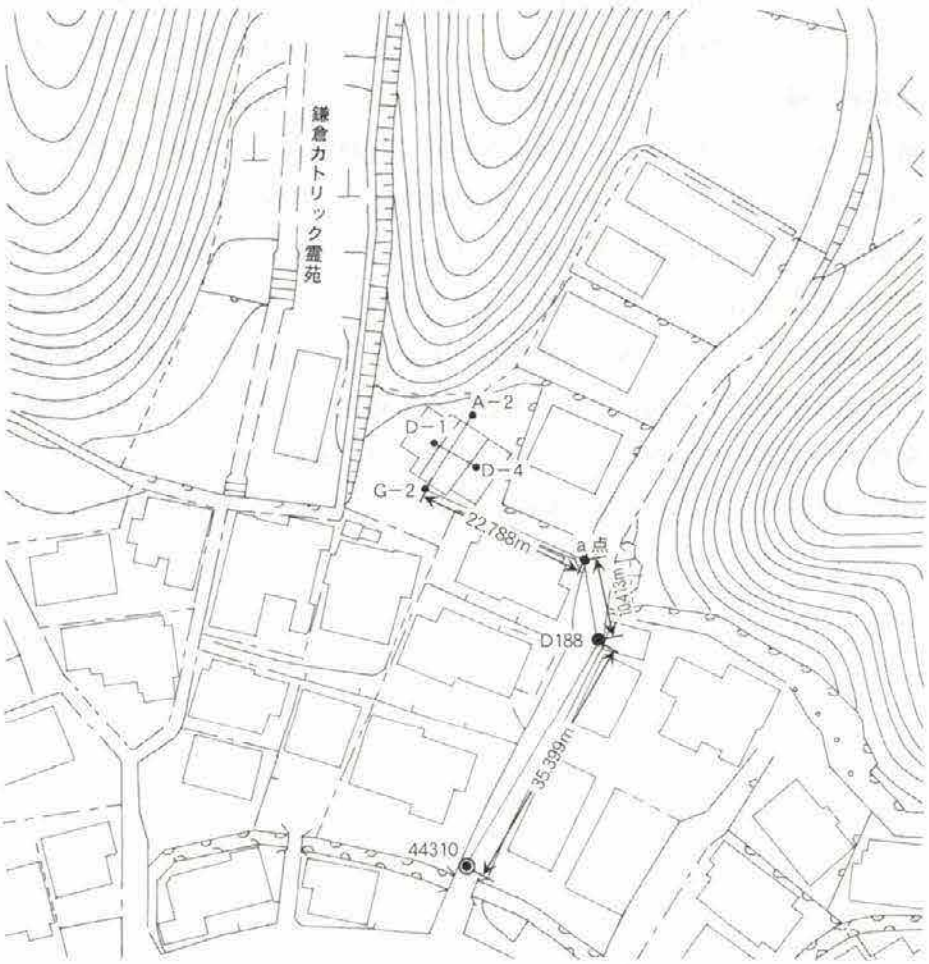
９月12日（金）　調査区を設定し、地表下１mまで重機による表土掘削。機材搬入とテント設営。
16日（月）　市４級基準点を基に測量軸方眼設定及び測量用水準点の原点レベル移動。
17日（火）　土丹版築の整地層による第１面検出作業を開始。
22日（月）　台風15号の影響で調査区壁の一部が崩落、復旧作業を実施。
10月２日（木）　第１面全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
７日（火）　第２面検出に向けて荒掘り作業開始。
14日（火）　礎石建物内の遺物溜り出土状況を写真撮影。
17日（金）　第２ａ面全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成。
20日（月）　第２面建物精査で出土した遺物の写真撮影。
23日（木）　第２ｂ面全景・個別遺構の写真撮影及び平面図作成
24日（金）　調査区西壁・北壁面の土層堆積図作成。
25日（土）　機材撤収、現地調査終了。

２．測量軸の設定

現地調査にあたり使用した測量軸の設定には、図２に示したように国土座標の数値を用いており、グリットは建物の建築範囲にほぼ平行して基準の南北軸を設けた。鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市３・４級基準点（第Ⅳ座標系）のうち、市３級基準点：44310（X＝－74,927.991　Y＝－23,539.119）とD188（X＝－74,902.371　Y＝－23,523.357）を採用した。グリットの基準としては、原点にあたるA－２杭（X＝－74,869.004　Y＝－23,537.869）とG－２杭（X＝－74,880.369　Y＝－23,543.968）を結んだ南北軸線で、真北から30°　5′　50″東に振れている。調査中に使用した海抜標高は、昭和63年に国指定史跡永福寺跡の測量基準点として史跡地内に設置された基準点No. ３（海抜18.227m：埋設金属標）から調査地の中心軸になるD－１杭（24 .450m）・D－４杭(24 .427m）上に仮水準点を移動した。従って、文章中及び挿図に記載されたレベル数値はこれを基準とした海抜標高である。調査地点

▲ 国土座標上の位置・グリッド配置図

▼ 調査地点周辺地図



国土座標値

44310	X	−74, 927. 968
(市3級基準点)	Y	−23, 539. 119
	Z	−23. 480
D 188	Y	−74, 902. 371
(市4級基準点)	X	−23, 523. 357
a点	Y	−74, 891. 978
	X	−23, 524. 123
A − 2杭	Y	−74, 869. 004
	X	−23, 537. 869
D − 1杭	Y	−74, 874. 155
	X	−23, 542. 613
	Z	−24. 450
D − 4杭	Y	−74, 877. 918
	X	−23, 537. 407
	Z	−24. 427
G − 2杭	Y	−74, 880. 396
	X	−23, 543. 968
	Z	−24. 315

図2　国土座標上の位置図・グリット配置図

は北緯35° 19′ 27″ ・東経139° 34′ 32″ である。

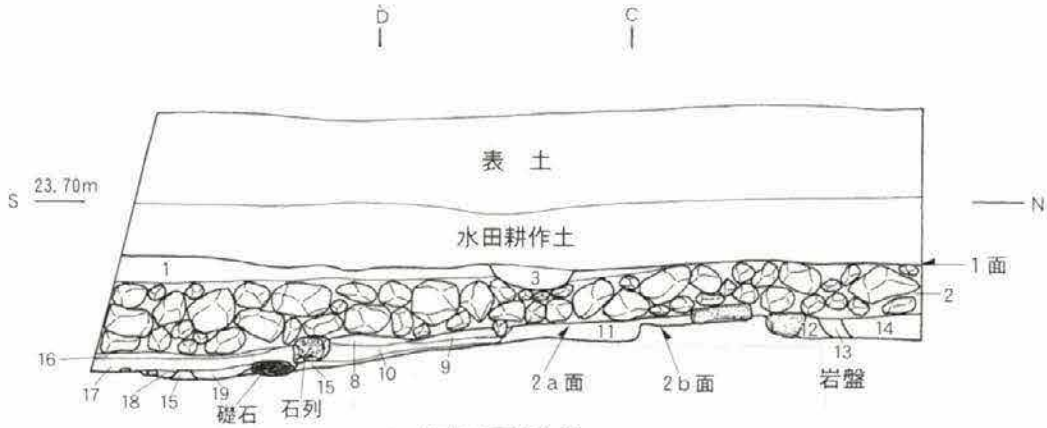
調査区グリットは、図２上段で示したように東西軸と南北軸をそれぞれ４m方眼を組み、北から東西軸をアルファベット、南北軸は西から算用数字を充てた。各グリットの名称は北西角の交差軸点をグリット名として呼称している。

３．層序と生活面

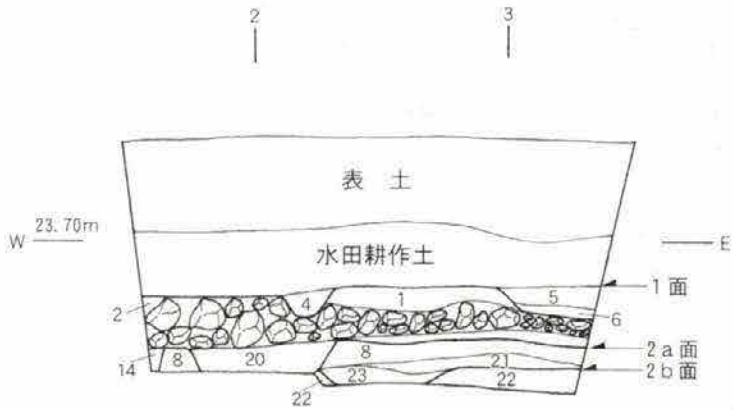
本遺跡のある一帯の紅葉ヶ谷（図１）は二階堂川に架かる通玄橋から始まり、谷戸は単一ではなく樹枝状に入り組んだいくつかの支谷を構成した地形を呈している。調査地点は紅葉ヶ谷中央部の瑞泉寺へ向かう道筋の北側である。南に向かって開いた小支谷で谷戸の開口部左側の山裾にあたり、裏手は北から南へ伸びる丘陵の先端に位置している。現地表は、海抜標高24.45m前後で北から南に向かって緩やかに傾斜した地形を呈している。調査で確認した土層は図３で示したように現代整地層の表土と近世・近代の水田耕作土を除去すると、現地表下110～120cmの深さで茶褐色粘質土の整地層と、大小土丹塊・明茶褐色砂質土から構成される生活面が確認された。この面にはいくつかの中世遺構が掘り込まれており、調査対象とすべき最初の面と認定した。以下、中世地山となる基盤層上面まで大別して２時期の生活面に伴う遺構が検出された（図３）。

第１面は海抜標高23.2～23.4m前後を呈し、表土下に厚さ40～50cmほど堆積した水田耕作土を除去すると、調査区Ｃラインから南東域にかけて茶褐色粘質土（１層）を確認できたが、北域では耕作が深くまで及んで削平されており、その下の堆積土は厚さ40～60cmの拳大～頭大の土丹塊を多量に混入した明茶褐色砂質土（２層）で大造成による整地が顔を覗かせた。このため、調査区壁直下の排水溝で観察したところ１層下に同じ整地層が確認されたので、両層上面を第１面として遺構を検出を行なった。

第２面は土丹地業層（８層）や炭層（11層）などの堆積土を挟んで上層のａ面、下層は基盤層直上のｂ面に分けることができ、海抜標高22.6～22.8mである。第１面の大小土丹塊によって埋め立てられた造成土を取り除くと、殆ど遺物包含層などの間層を挟まず生活面が認められた。調査区内で第２面を構成する土層のうち、北東側は尾根崖面沿いの削平岩盤面、ａ面ではＤライン付近の土丹塊列までが黄褐色粘質土の破砕土丹の弱い地業層と、その下に薄い間層を挟みｂ面とした暗青灰色粘質土の中世地山が確認された。さらに南半部の礎石を配した建物１の床下と思われる範囲には建築材の一部や廃棄された遺物に伴い脆弱な茶褐色粘質土を主体とした堆積土が認められた。第２面をａ・ｂ面に分けることができたが、建物遺構や出土遺物の観察から上下二時期の連続した生活面と見做して調査を行なっている。



▲ 調査区西壁土層



▲ 調査区北壁土層堆積

調査区西壁・北壁土層注記

1. 明茶褐色砂質土　20～30cm大土丹による地業版築層　しまり有
2. 茶褐色粘質土　土丹粒・片、かわらけ片、炭化物を含む　しまり有
3. 暗灰褐色粘土質　土丹粒、炭化物を含む　かわらけ片少量含む　ややしまり有　pit覆土
4. 茶褐色粘土質　かわらけ片、土丹粒を含む　ややしまり有　pit覆土
5. 黄茶褐色弱粘質土　かわらけ粒・片、土丹粒を含む　ややしまり有　pit覆土
6. 茶褐色粘土質　炭化物多量に含む　かわらけ粒・片少量含む　ややしまり有　〃
7. 茶褐色粘土質　かわらけ片多量に含む　炭化物、土丹粒含む　しまり有
8. 黄茶褐色粘土質　1～5cmの土丹による地業版築層
9. 黄褐色砂質土　1～3cmの土丹粒と砂による地業版築層
10. 暗灰褐色粘質土　土丹粒若干含む　しまり有
11. 炭層　1～3cmの土丹粒を含む　しまり無
12. 暗灰色砂層　かわらけ片、土丹粒を含む　しまり無
13. 暗灰色砂層　かわらけ片、土丹粒、木器、炭化物少量含む　しまり無　落ち込み遺構
14. 暗褐色砂質土　1～3cm土丹粒、木片、かわらけ片を含む　しまり無
15. 青灰色弱粘質土　砂粒、木片を含む　ややしまり有
16. 茶褐色弱粘質土　木片を若干含む　しまり無
17. 茶褐色弱粘質土　かわらけ片、炭化物、土丹粒を多量に含む
18. 暗灰褐色弱粘質土　土丹粒を多量に含む　ややしまり有
19. 暗灰褐色弱粘質土　土丹粒を多量に含む　18層に類似するがしまり無
20. 茶褐色粘質土　かわらけ片、炭化物をやや多量に含む　しまり有　遺構覆土
21. 暗褐色年質土　かわらけ片を少量含む　しまり無
22. 青灰色粘質土　黒褐色粘質土を一部に含む　しまり有　中世地山
23. 暗褐色粘質土　1～3cmの土丹粒、木片を少量含む　しまり有　遺構覆土

0　2m

図3　調査区西壁・北壁土層堆積図

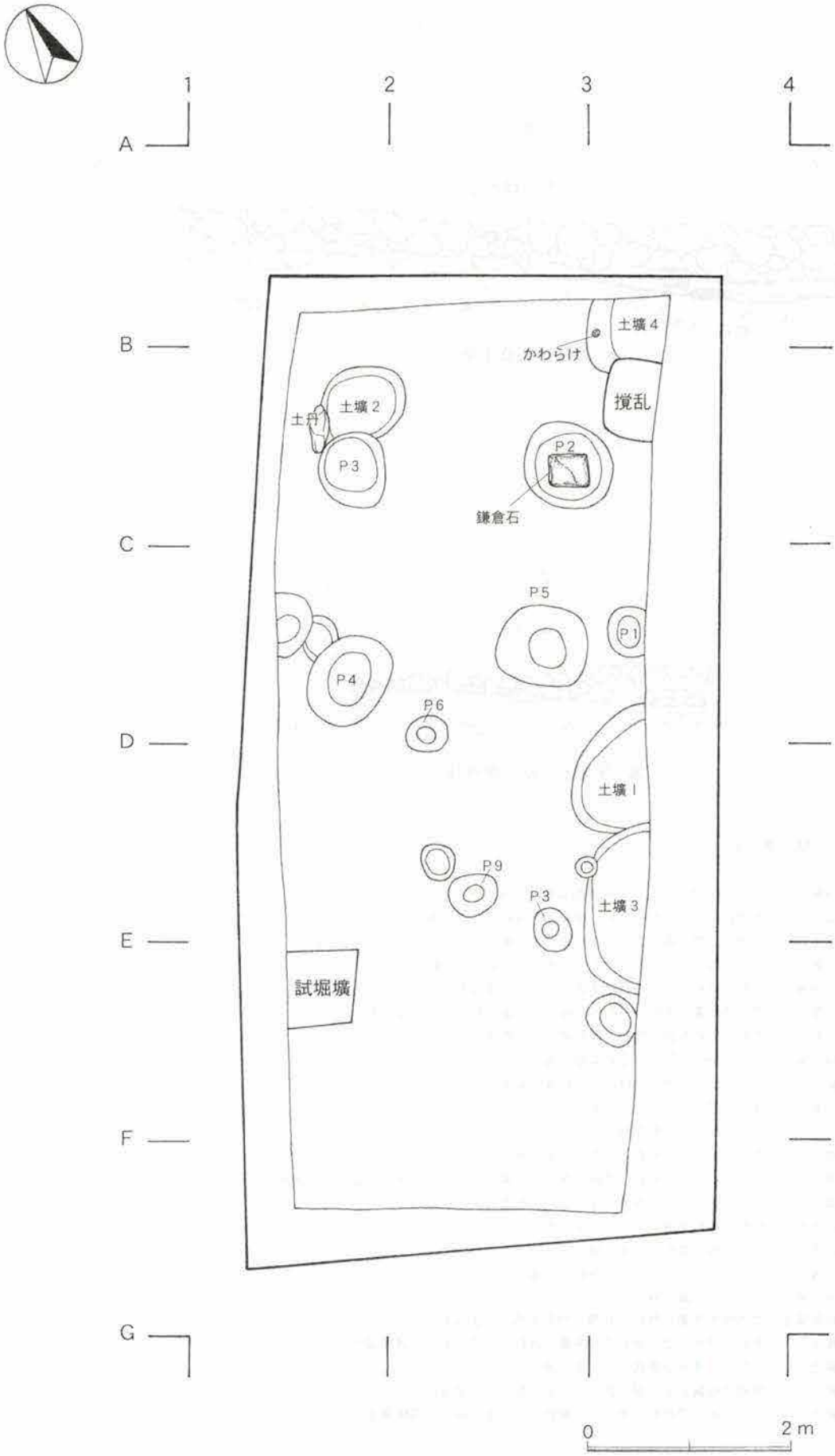

1
2
3
4
A
B
C
D
E
F
G
土壙4
かわらけ
撹乱
土壙2
土丹
P3
P2
鎌倉石
P5
P1
P4
P6
土壙1
P9
P3
土壙3
試堀壙
0
2m

図4　第1面全測図

第３章　検出遺構と出土遺物

１．第１面の遺構・遺物

第１面は現地表下115cm前後で表土や水田耕作土を除去すると、殆ど遺物包含層の堆積を挟まずに確認できた。この面の検出遺構は土壙３基とピット14口が確認されただけで、全体に遺構の密度が低い。出土遺物はロクロ成形かわらけを始め、少量の貿易陶磁器、瀬戸・常滑窯製品、瓦質製品、金属製品、石製品などである。

ａ．土壙（図５～７、図版１・10）

土壙１：Ｄ－３杭に近接した位置で検出した。土壙３に南端一部を壊され、東半部は調査区外に拡がり全体規模は不明ある。確認できた規模は東西径130cm・南北径110cm以上、深さ25cm程で断面が浅い皿状を呈し、図５で示したように掘り方西壁寄りに不整形の頭大土丹塊と、その周辺に完形品を含むかわらけが上下層から認められた。覆土は小礫状土丹・遺物片を多く含むやや締まりのある暗茶褐色砂質土である。出土遺物（図７）は、１～９がかわらけの大中小皿、器形は器高が高め碗型気味の薄い器壁で内湾した立ち上がりの薄手丸深型が主体となる。10が白かわらけ、11が鉄釘、12が銅銭「開元通宝」である。

土壙２：調査区北西隅に位置し、Ｐ３の掘削で南端が壊されているが、楕円形を呈する。規模は南北

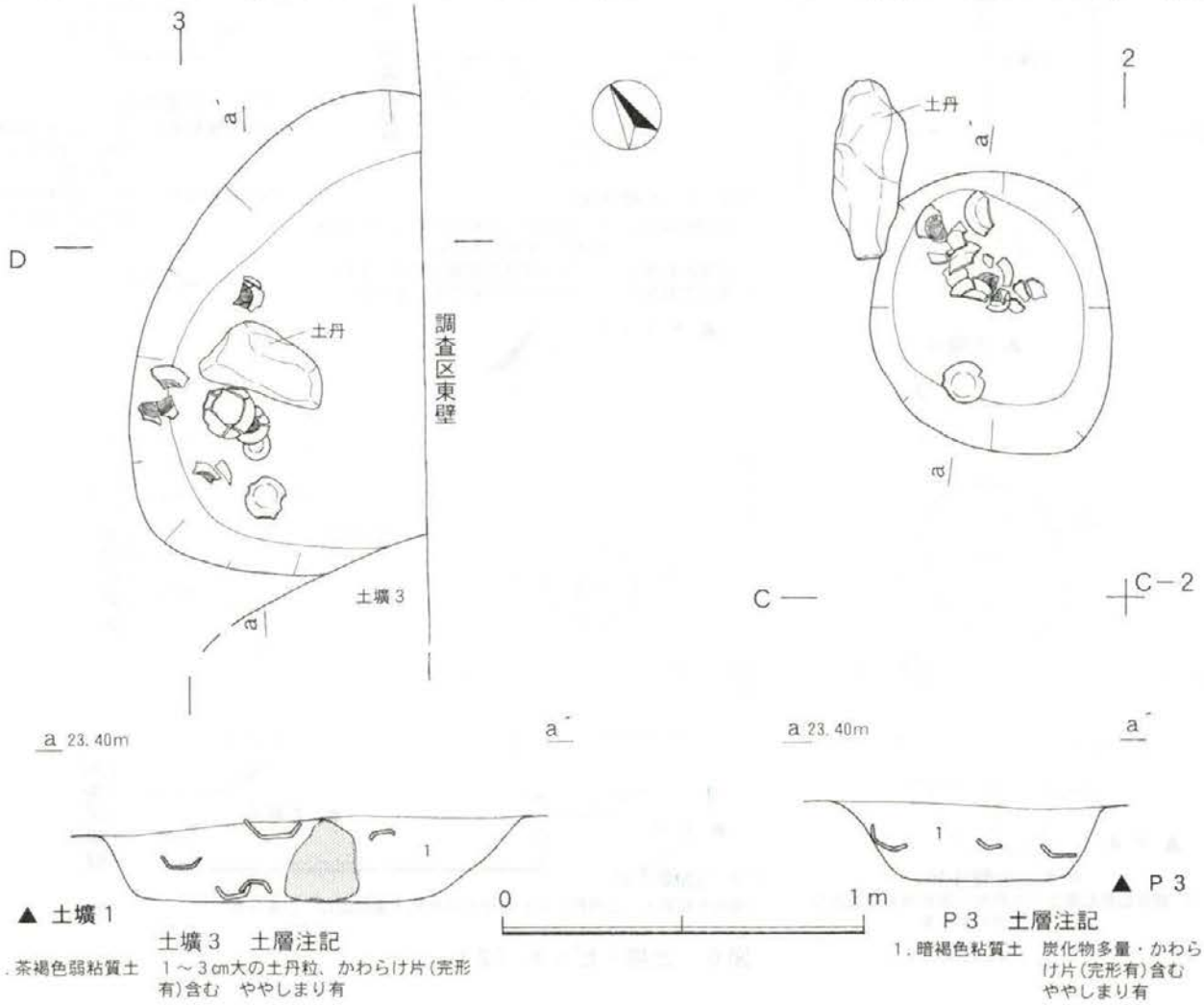


図５　土壙・ピット（１）

径75cm・東西径90cm程、深さ約15cmの浅い皿形の窪みであり、底面は下層整地の土丹塊が顔を出す。覆土は炭粒・遺物片を含む締まりのない茶褐色粘質土、図示可能な遺物は出土していない。

土壙３：土壙１の一部を切って掘り込まれ、東側は調査区外に拡がっている。確認された規模は南北径120cm・東西径60cm以上、深さ約12cmの底面が平らな掘り方である。覆土は遺物片と炭化物を含む茶褐色砂質土である。遺物は13・14のかわらけ大皿で器高が高めの厚手の器壁は内湾気味の器形である。

土壙４：Ｂ－３杭に位置し、遺構主体は調査区外に拡がっており、南端一部が近代ゴミ穴の攪乱で壊されていた。確認できた規模は東西径85cm・南北径80cm以上、深さ20cm程の浅い窪みで、覆土は小土丹や炭化物を多量に含む。出土遺物は32がかわらけ小皿で器高が低く薄手器壁が内湾気味に立ち上がる。33は常滑片口鉢　類で体部外面上位に菊花文の押印がみられる。

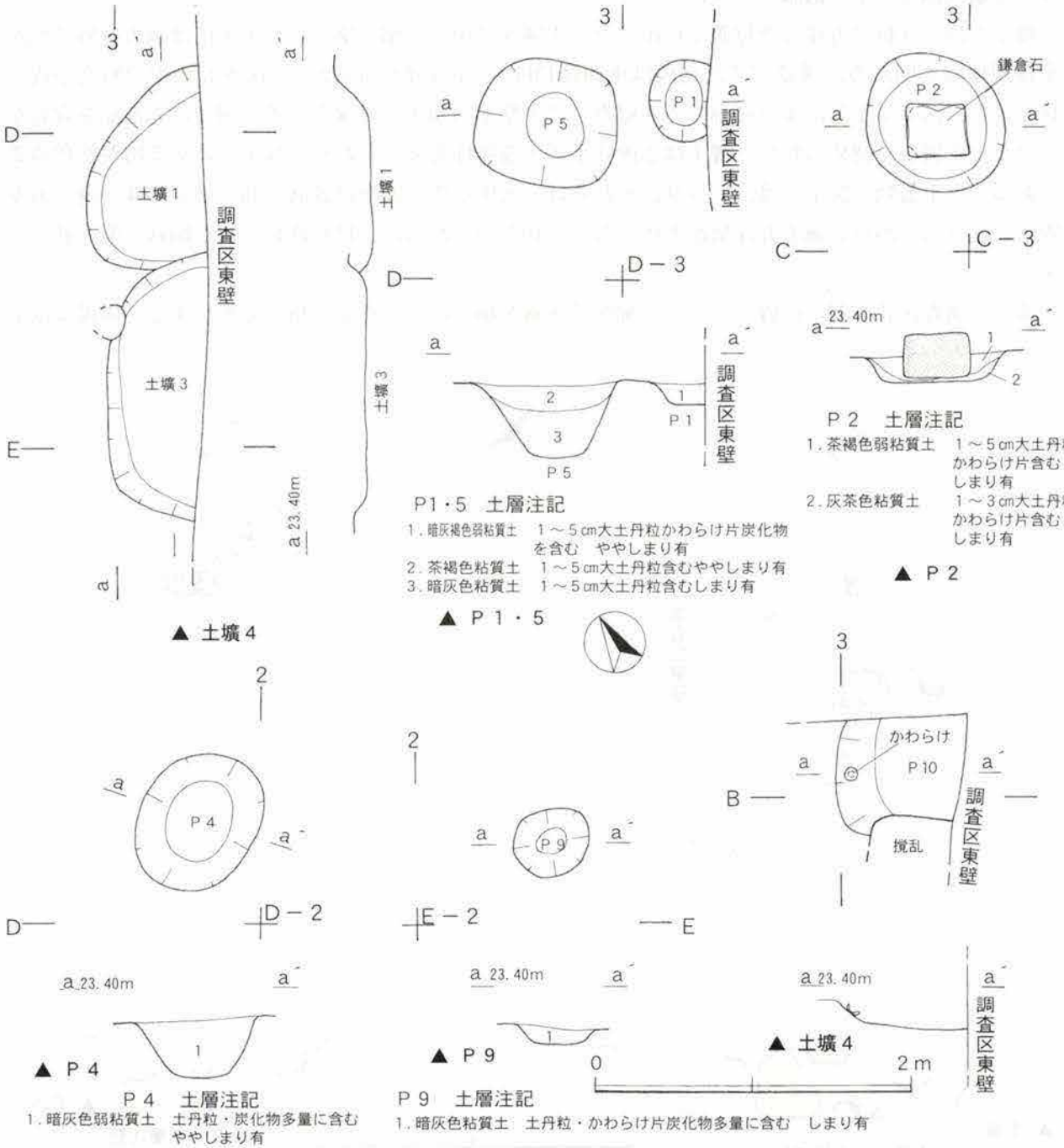


図６　土壙・ピット（２）

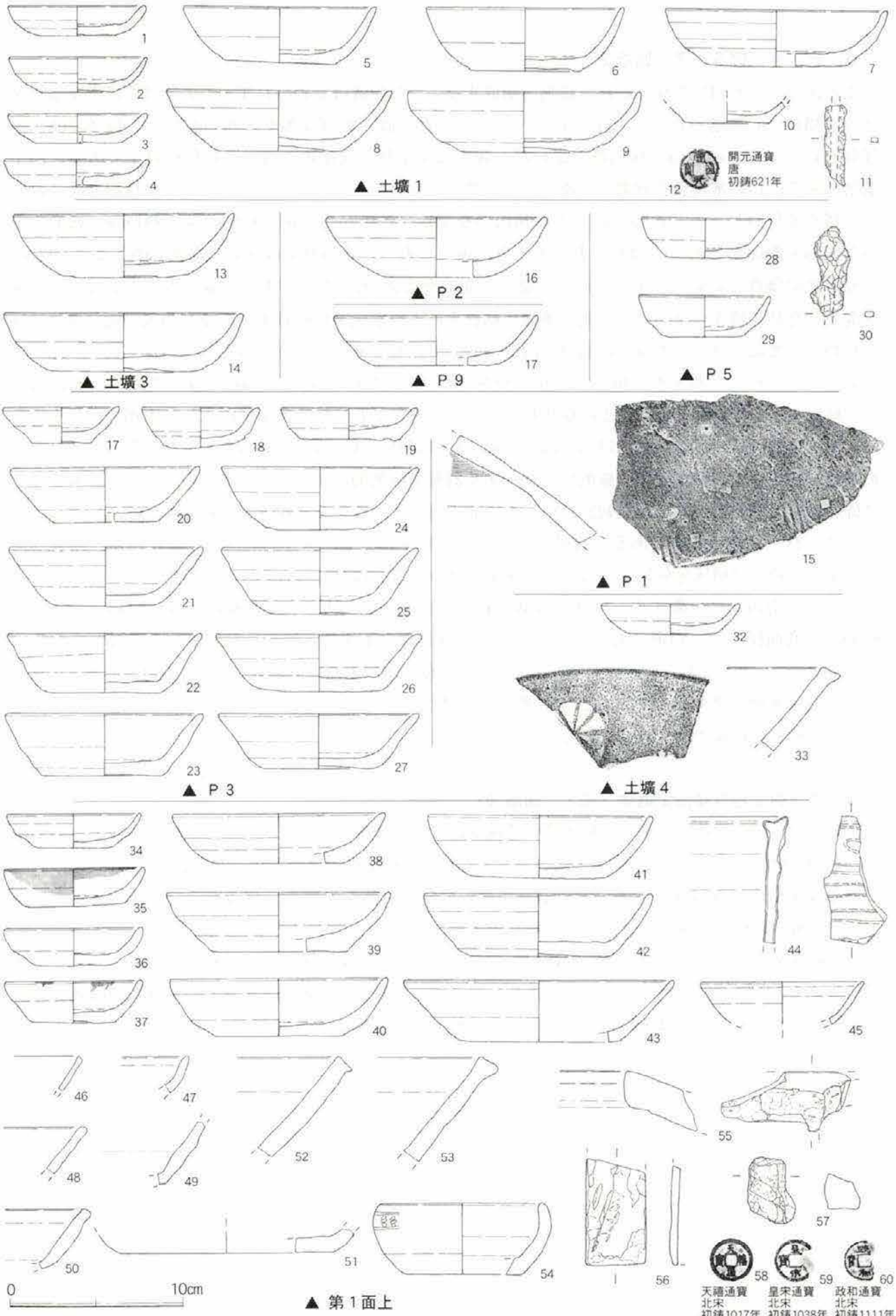


図 7　第 1 面各遺構・面上包含層出土遺物

b．ピット（図５～７、図版２・10）

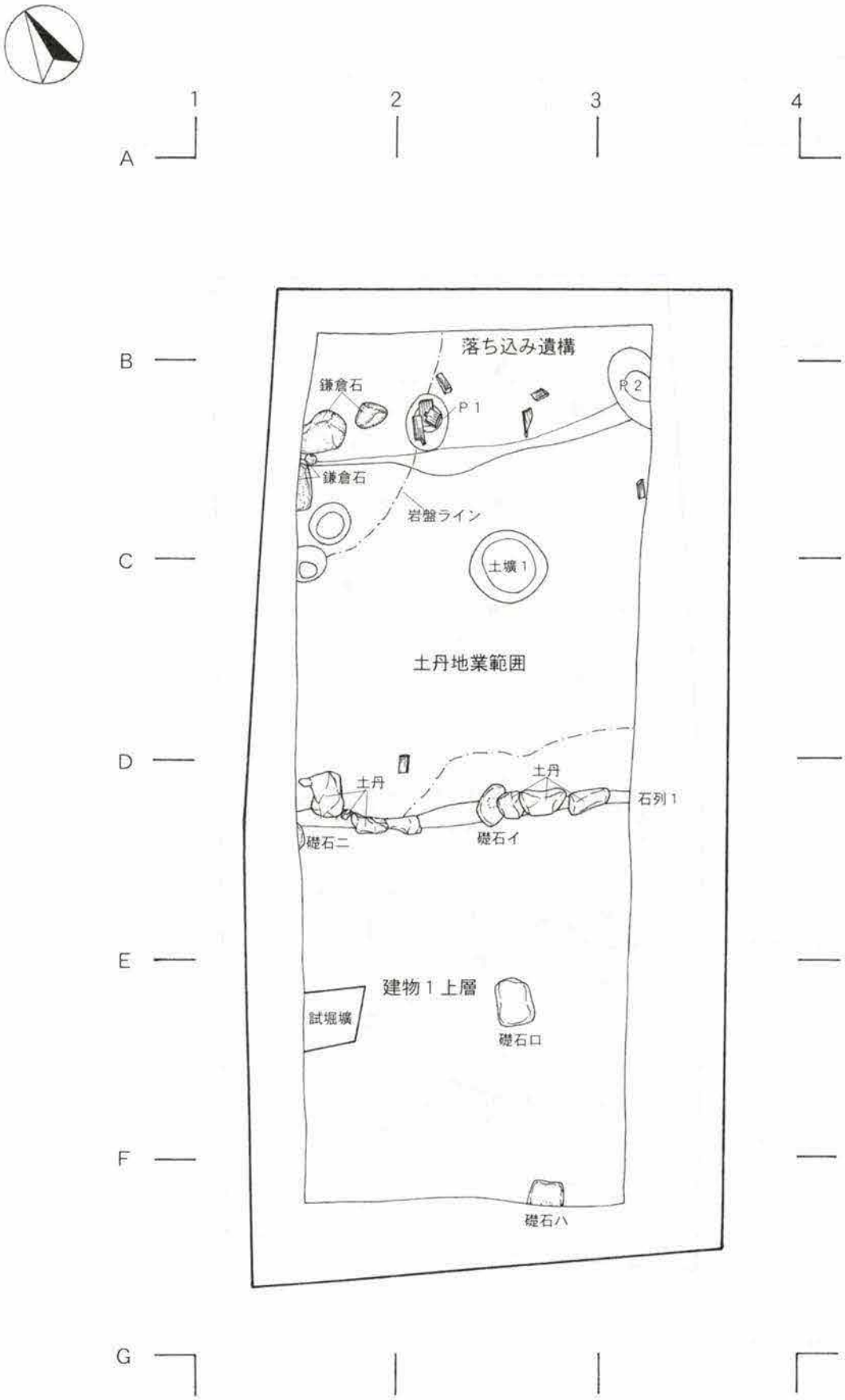
この面でピット14口を検出したが建物を構成するような配置は認められず、ここでは主に出土遺物を伴う遺構について触れたい。Ｐ１：Ｃ－３グリッドに位置し東側は調査区外に拡がる。長径53cm、短径40cm以上、深さ約18cmの楕円形と思われ、覆土は小土丹と炭化物を含む灰褐色粘質土である。出土遺物は図７－15の常滑甕の肩部片で連続した銭型の叩き目を施している。Ｐ２：Ｃ－３杭の北隣に位置し、礎石を伴うピットである。掘り方は楕円形を呈し、長径96cm、短径85cm、深さ約18cm、底面の平らな皿形の断面形である。礎石は掘り方中央に据えており、東西軸42cm・南北軸33cm程、高さ約28cmで長方形の鎌倉石の切石を用いており、礎石上面の海抜高約23.37mである。掘り方の土層は小土丹塊を混入した良く締まったもので上層が茶褐色粘質土、下層が灰茶色粘質土である。測図可能な遺物は16のかわらけ大皿だけ、やや厚手の器壁で内湾が弱めの器形である。組み合う礎石は発見されていない。Ｐ３：Ｃ－２杭に北隣する。掘り方は楕円形を呈し、長径80cm・短径70cm程、深さ約30cm、断面皿形ので底面の平らものである。覆土は炭化物と完形品を含むかわらけを多量に混入した暗褐色粘質土である。出土遺物は17～27のかわらけ大小皿である。19は器高の低い資料であるが、それ以外はいずれも高めの器高にやや厚手の器壁で直線的に大きく開く器形が特徴的で年代的に下るものであろう。本ピットに礎石はないが柱間（芯々距離約2.15m）や底面標高などからＰ２と組み合う可能性も考えられる。

Ｐ４：Ｄ－２杭の北隣である。規模は長径93cm、短径75cm程、深さ約40cmの平面楕円形、断面摺鉢形を呈し、覆土は暗灰色粘質土で炭化物を多量に含み、遺物はかわらけ小片だけの出土である。Ｐ５：Ｃ－３杭の南西隣に位置する。平面形は隅丸長方形状を呈し、大きさが長軸約90cm・短軸76cm、深さ約50cmで底面径の小さい掘り方で、覆土は小土丹塊を含む茶褐色・暗褐色粘質土の上下層からなる。出土遺物は28・29がかわらけ小皿で器高が高く薄い器壁で体部中位に稜をもつ、30は鉄釘である。Ｐ９：Ｅ－２杭の東側である。径約50cm、深さ約15cmの浅い円形を呈した窪みである。覆土は遺物片や炭化物を含む暗褐色粘質土で、31のかわらけが出土した。

c．第１面上包含層出土遺物（図７、図版10）

図７－34～60の遺物は、第１面検出時の遺構確認に伴う作業において出土した資料が主体を占めている。34～43はかわらけで小皿は器高の高い薄手の器壁で内湾気味の器形、38～42の大皿は38の低めの器高で器壁厚手の例以外は薄手のもので、器高が高い資料が主体を占める。43は推定口径15cmを超える大型資料で薄い器壁で直線的に大きく開く器形である。

44は龍泉窯系の青磁算木文香炉、45は白磁口兀皿、46～51は瀬戸入子・灰釉碗・天目碗・卸皿・折縁深皿である。52・53は常滑片口鉢　類である。41・42は瓦質の小型香炉・土風呂か火鉢、42は砥石で京都鳴滝産系の仕上砥、43は火打石、58～60は北宋銭の「天禧通寶」「皇宋通寶」「政和通寶」である。



0 2 m

図8　第2a面全測図

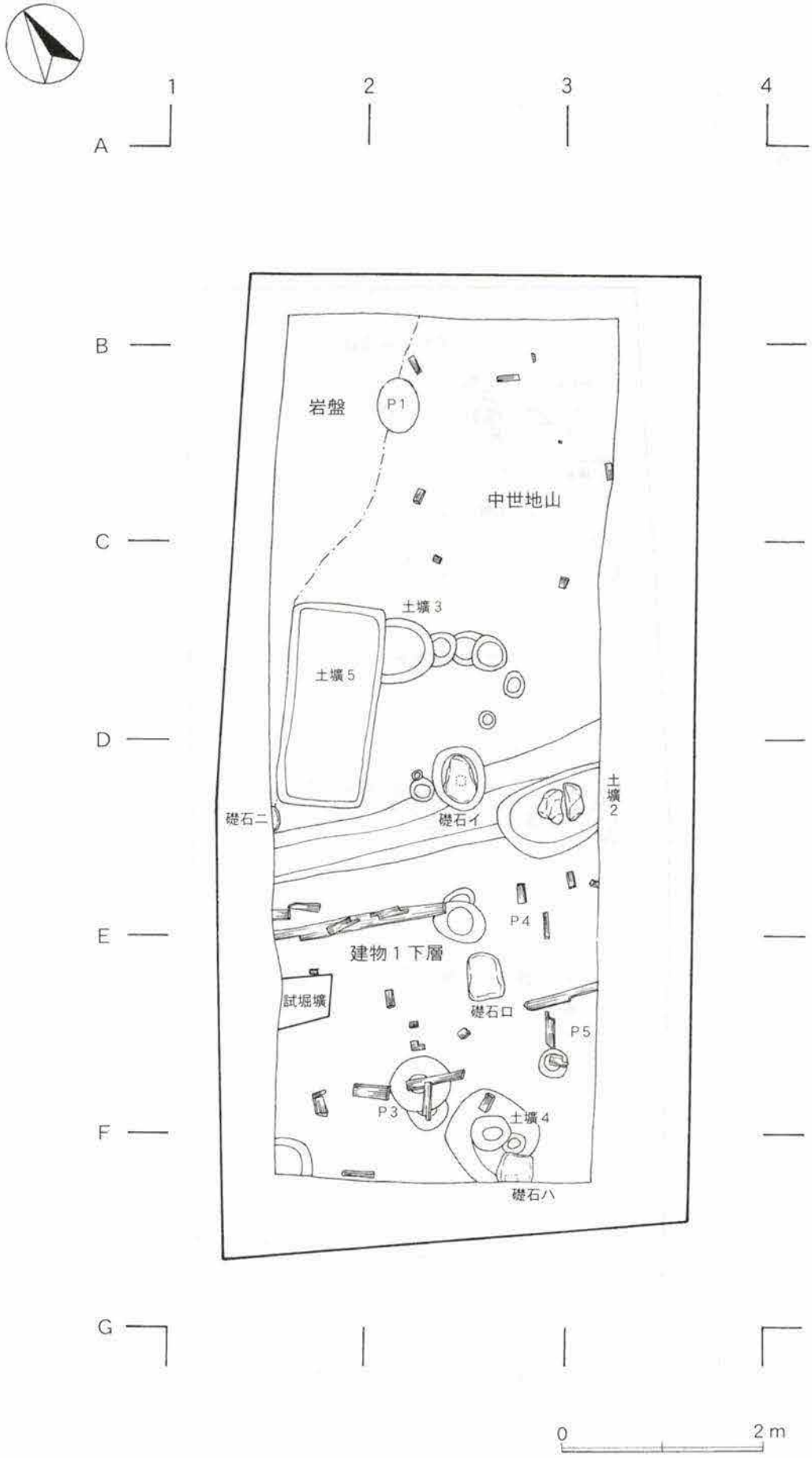

1
2
3
4
A
B
C
D
E
F
G
岩盤
P1
中世地山
土壙3
土壙5
礎石二
礎石イ
土壙2
P4
建物1下層
試堀壙
礎石ロ
P5
P3
土壙4
礎石ハ
0
2m

図9　第2b面全測図

2．第２面の遺構・遺物

第２面は、海抜標高22.7m前後で調査区の北西域の岩盤削平面やそれに続く強く締まった暗青灰色粘質の中世地山面（ｂ面）と、北側域を中心にして中世地山の上面を整地していた破砕土丹による地業層（ａ面）の上下面に分けて遺構検出を行なったが、土層堆積や出土遺物の観察から連続した生活面と見做した。両面に伴う遺構には石列、礎石建物、落ち込み遺構、土壙、ピットなどが検出された。出土遺物には落ち込み遺構や建物１に伴うかわらけ（ロクロ成形）・木製品をはじめ、舶載陶磁器、瀬戸・常滑窯、瓦類、金属製品、石製品、漆器などである。

ａ．石列（図８・10、図版３）

石列１：Ｄラインの南側に沿って並行して見つかった。検出したレベルは第１面構築時の大小土丹塊による整地層の真下で海抜高22.6mのところで確認した。調査区北側の第２ａ面造成による破砕土丹の整地層により石列上位まで埋め戻され地業面南端を形成しており、また建物１側へ浅く落ち込んでいく斜面に沿って土丹塊を据えて土留め的な様相を示していた。大きさは長径30～50cm程の大型土丹塊を用いており、調査区東西壁の土層観察から石列は両壁側外へ延びている。石列は建物１の礎石イに一部が被さった状態になり、礎石西側では石材が抜かれており、西端の土丹塊はずれて動された痕跡も伺えた。　なお、第２ａ面とした調査区北半部で建物跡は確認していないが、北端に近い西壁から落ち込み遺構にかけて鎌倉石（凝灰質砂岩）切石と切石破片が４個が見つかっている。このうち、落ち込み遺構の不整形の大小鎌倉石３個はいずれも原位置を動かされて整地の際に混入されたものと考えるが、調査区壁にかかるもう１個の切石は長辺50cm・短辺39cm・厚さ15cm程で丁寧に整形された長方形である。切石は掘り方などの窪みは見られないが削平岩盤面上に据えられた様子が伺える。

ｂ．落ち込み遺構（図10・15、図版４・14）

調査区北端で削平岩盤面が調査区北壁へ向かって緩やかに落ち込み、東側も第２ａ面の整地層が弱く遺物・木製品を含む締まりのない暗灰色砂層の薄い堆積が認められ、岩盤面も含めて浅い窪みとなっている。規模は東西355cm・南北150cm以上、深さ約20cmで底面の海抜高22.6mで、調査区壁にかかるため全形は不明である。本遺構は土層観察からＰ１・２の両ピットと同時期のものか、やや新しい時期の掘り込みと考えられた。石列で触れたように調査区西端の削平岩盤面上で鎌倉石切石、底面で検出したＰ１～Ｐ２の柱間寸法は203cm、Ｐ1～切石の間隔120cmほどでその主軸方位は建物１と近似しており、覆土中から主にかわらけや木製品なとが多く見つかっている。

調査区内で建物１以外に確認していないので推測の域をでないが、建物１が造られた頃に山裾側でも同じ軸線をもつ建物が存在した可能性も考えられよう。

出土遺物（図15）は１～29がかわらけである。１～12が小皿、13～15が中皿、16～28が大皿、29が15cmを超える特大型のもので、１～３の小皿や中・大皿は薄い器壁で内弯気味に立ち上がる深めの器形が主体を占めている。30は白色粉質精良土の白かわらけ。31・32は白磁で口兀碗と四耳壺の頸部、33は泉州窯系の緑釉盤であり、Ｐ１出土の資料と接合しないが同一個体と思われる。34・35は永福寺創建期の男・女瓦（Ａ類）と同類瓦である。36は無文の黒漆塗皿、37～44は木製品であり37が曲物の底板か蓋、その他は箸である。

Ｐ１（図10・15）の掘り方は西半部が岩盤・東半部が中世地山を掘削した楕円形を呈し、規模が長径58cm、短径45cm、深さ約40cmで柱穴内の中程に二段重ね三枚の礎板を据えたもの、底面の海抜高22.3mである。出土遺物は図15－45～47がかわらけ小皿、48・49が泉州窯系緑釉盤で接合しないが同一個体

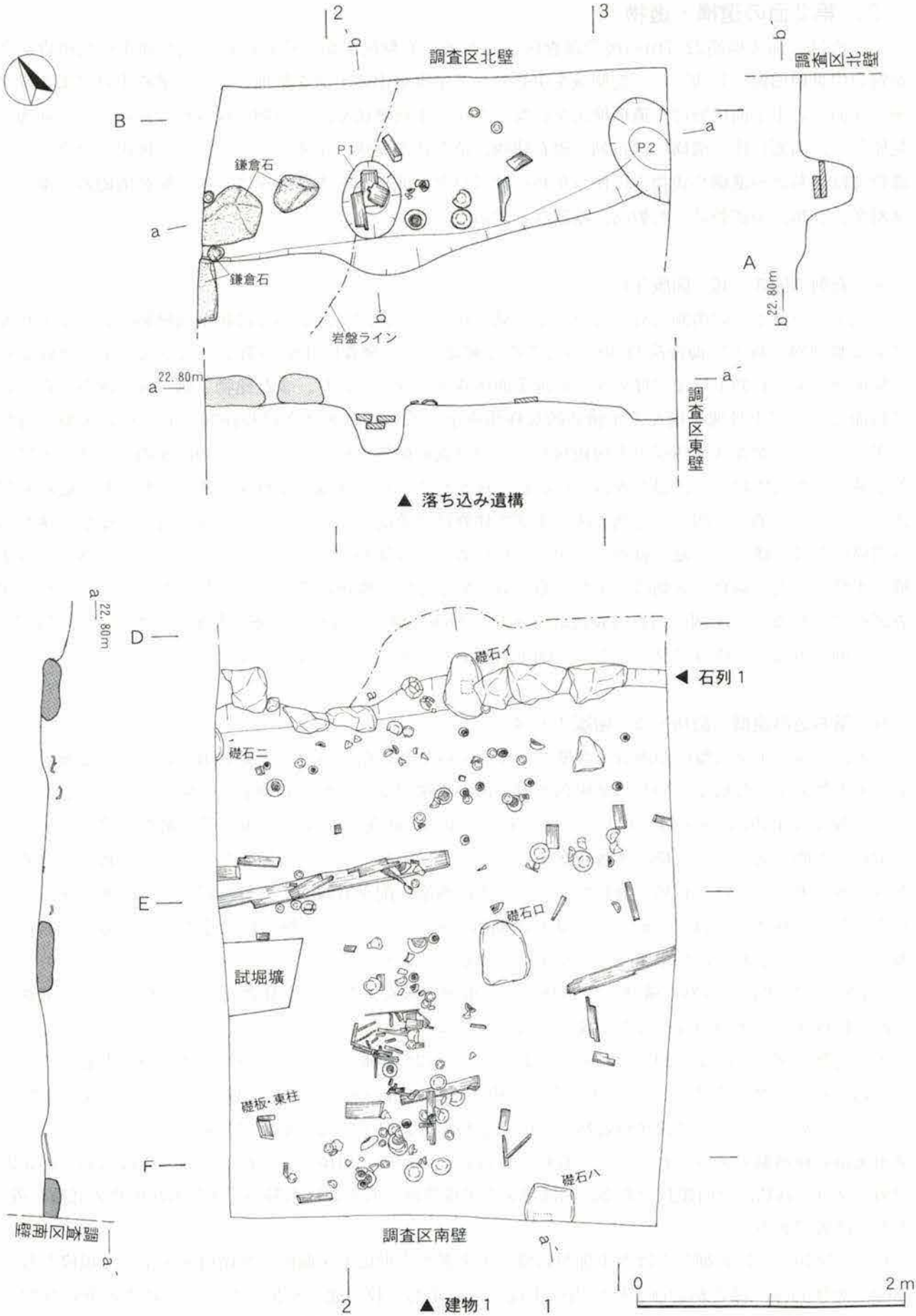


図10　建物1・落ち込み遺構

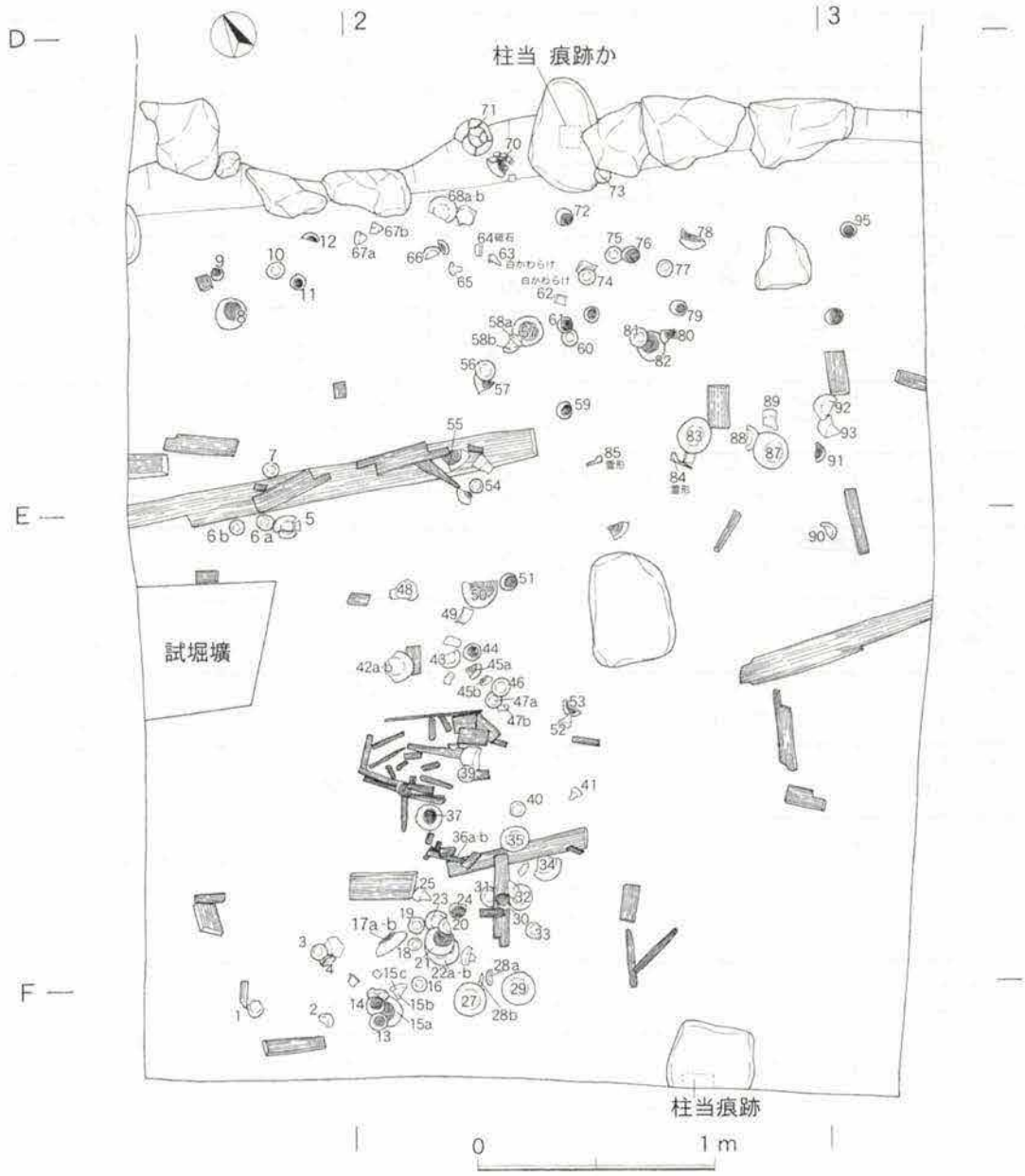


図11　建物１内遺物出土状況

と思われ、50・51が木製品の箸である。

c．建物１（図８～18、図版３～16）

調査区南半部で浅く掘り窪めた掘り方をもつ礎石建物である。上述したように土丹版築の整地面と繋がる石列が建物１の建つ空間の北の限界と考えられるが、それ以外は調査区外へと拡がっているために全容は不明である。建物は南北二間×東西一間以上の規模が確認でき、２個の礎石（礎石イ・ハ）には一辺11～13.5cm角になる柱の痕跡が残されている。礎石上の柱当痕から建物の柱間寸法を計算すると、礎石イ～礎石ハの南北二間分の芯々距離が406cm（約13.5尺）で一間が203cm、また東西一間分だけを検出した礎石イ～礎石ニの芯々距離について調査最終段階で壁面にトレンチを入れ確認した結果、南北一間分とほぼ同じ柱間寸法の数値を得ている。

礎石は長径40～50cm、短径35cn前後、厚さ10～15cmの偏平な伊豆石（川原石）を用いており、建物内を浅く掘り窪めた底面の粘性の強い土層上面に置かれた状況で検出されている。さらに底面からはこの建物に関わる建築材の一部と思われる土台材・板材・礎板などが礎石の柱通りと同じ軸方位で、柱間との配置もある一定の距離で出土している。礎板は礎石間の床束柱や地桁などを受けた位置にあたり底

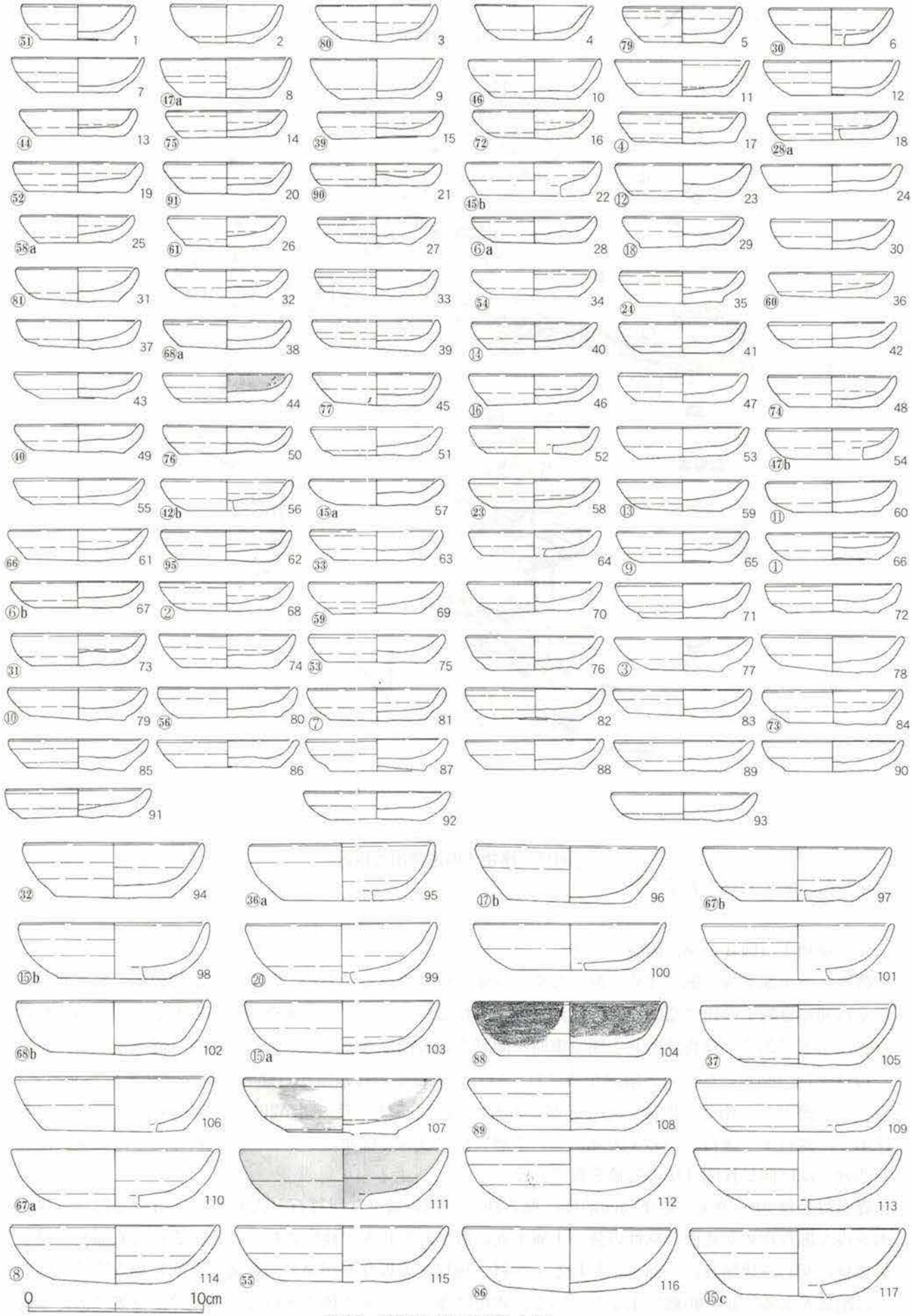


図12　建物１出土遺物（１）

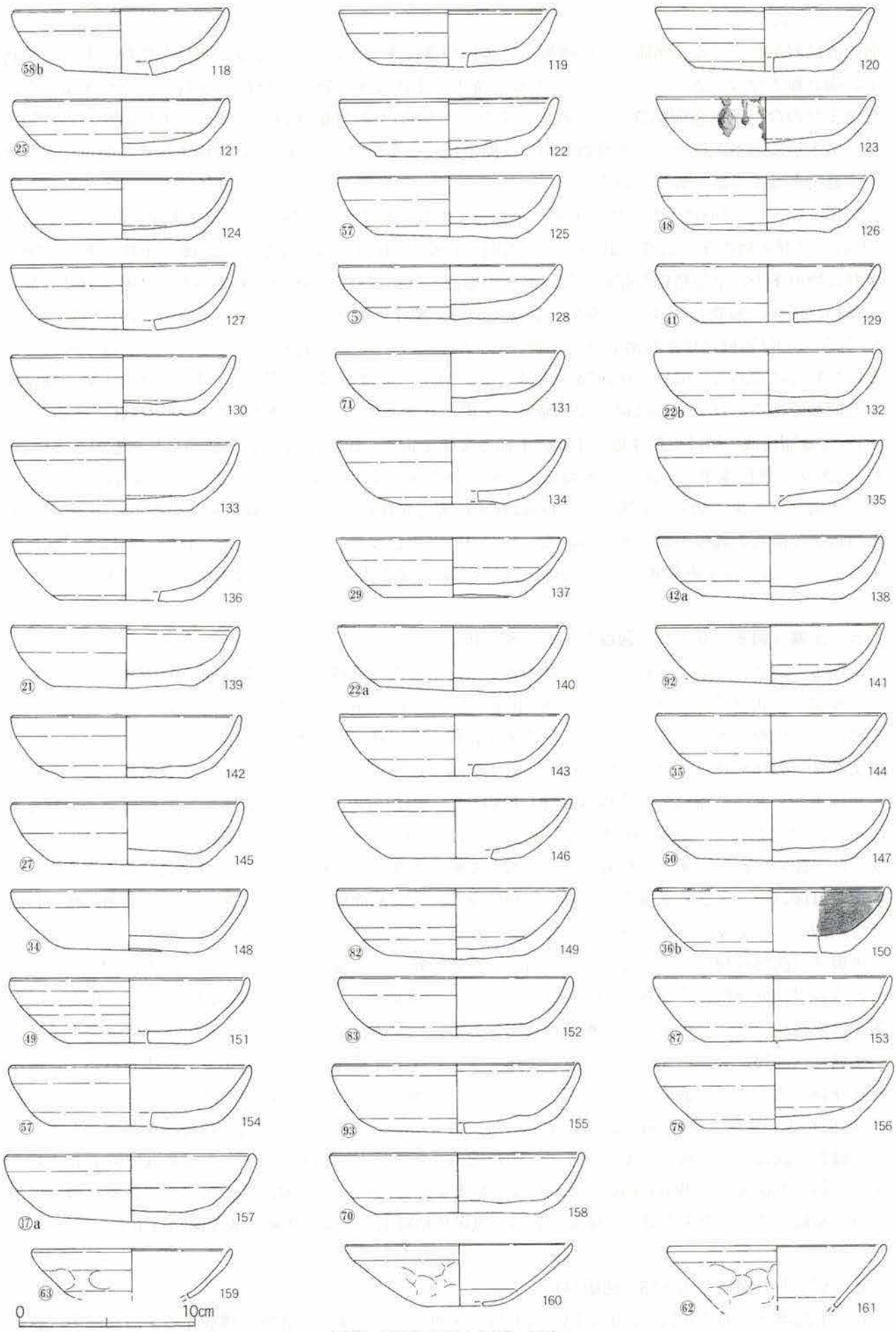


図13　建物１出土遺物（２）

面に直接置かれている。図版７ｂは礎板上に束柱が遺存するもので上部が焼け焦げた角柱である。建物１の南北軸方位は、Ｎ－23.5°－Ｅである。覆土の主体は炭化物・土丹粒・かわらけ片を多量に含んだ締まりのない茶褐色弱粘質土で、底面近くからかわらけ皿170個体以上、漆器、木製品などの遺物が多く出土している。以下、出土遺物について簡単に述べるが図12～14左下の丸囲番号と、図11に示した出土遺物とは番号が一致している。

図12・13－１～158はかわらけである。小皿は１～12の胎土が粉質精良の「薄手丸深」ものと、13～93の胎土に混入物の多く器高が低いものに大別される。94～108は口径が11cm前後の中皿である。胎土は混入物の多少による精粗が認められ、高めの器高で薄い器壁が主体を占めている。109～158は大皿で口径13cm前後、器高3.5cm以上と深めの器形であり、胎土に混入物の多くやや粗いのものが目立つ。104・123・150は器壁に煤が付着した灯明皿、157・158は14cmを超え資料である。159～161は手捏ね成形の白かわらけである。図14－162は瀬戸鉄釉小壺、163～165は常滑片口鉢　・　類、166は永福寺創建期瓦と同類である。167・168は砥石で鳴滝産仕上砥・産地不明の荒砥である。169～172は銭である。173～177は漆器椀皿、椀は黒色漆地に朱漆の手描き文様を施し、皿は176が見込に菖蒲らしきものを手描き、177が無文の黒色漆塗りである。木製品は178～188が両端を削り加工した長さ18～26cm程の箸、189が太く片端尖り気味に加工の菜箸でる。189は経木折敷で側縁近くの中央に縁木を留めた小穴がある。190は円板状で曲物の底板か蓋と考えられる。192～195は黒色漆塗りの雲形である。196～198はヘラ状に加工したもの。199は金剛草履の板芯。200・201は木製用途不明品、200が手押木に似る形である。

ｄ．土壙（図８・９・16、図版３～５・８・16）

土壙１（図８）：第２ａ面Ｃライン軸上の中央、落ち込み遺構南で土丹地業面の空閑地において位置し、確認した海抜高22.8mである。径約80cmの円形、深さ26cmで断面が逆台形を呈する。覆土はかわらけ片・炭化物を多く含む締まりのない暗褐色粘質土、掲載可能な遺物は出土していない。

土壙２（図16～18）：Ｄ－３杭南隣、建物１の落ち込み肩部に位置し、東側は調査区外に拡がるため全形は不明である。確認した規模は長径120cm以上、短径75cm、深さ30cm、平面が長楕円形で掘り方の断面が摺鉢状を呈し、底面海抜高は22.0mを計る。底面に長径30～40cm、厚さ15cm程の不整形な土丹塊２個が認められた。覆土は単層で小土丹塊と腐植土を多く含む締まりのない暗褐色粘質土である。出土遺物は図18－１・２の永福寺所用瓦と同類の女瓦、１は凸面縄目叩きのⅠ期瓦、２は凸面斜格子目叩きで凹面に「永福寺」寺銘を押印したⅡ期瓦（寛元～宝治年間修理）である。

土壙３（図16～18）：Ｃ－２杭南に位置し、西側は新しい土壙５に壊されて全形は不明である。確認した規模は南北径67cm、東西径60cm以上、深さ20cmの断面浅い皿状、底面の海抜高22.35m程である。覆土は土丹粒と木片を少量含む暗褐色粘質土である。出土遺物は図18－３～５の銭・木製品である。

土壙４（図16）：Ｆ－２杭南に位置し、建物１・ピットと重複する形で検出した。礎石八が上に置かれた建物１より古く、底面ピット２口よりも新しい土壙である。平面は隅丸方形、径約90cm、深さ20cmで断面が浅い皿状、底面海抜高22.17mである。覆土はかわらけ片を少量含む暗褐色粘質土である。

土壙５（図16）：土壙３と重複する形、中世地山を掘り込んで検出された。平面形状は隅丸長方形を呈し、長辺206cm、短辺93cm前後、深さ25cmで断面が逆台形状、底面海抜高は22.3mである。覆土は小土丹と腐植土ブロックを少量含む締まりをもつ黒褐色粘質土である。掲載可能な遺物は出土していない。

ｅ．ピット（図15・16・18、図版14）

ピットは第２ａ面で４口、ｂ面で13口の計17口を検出した。掘立柱建物を構成するような配置は認め

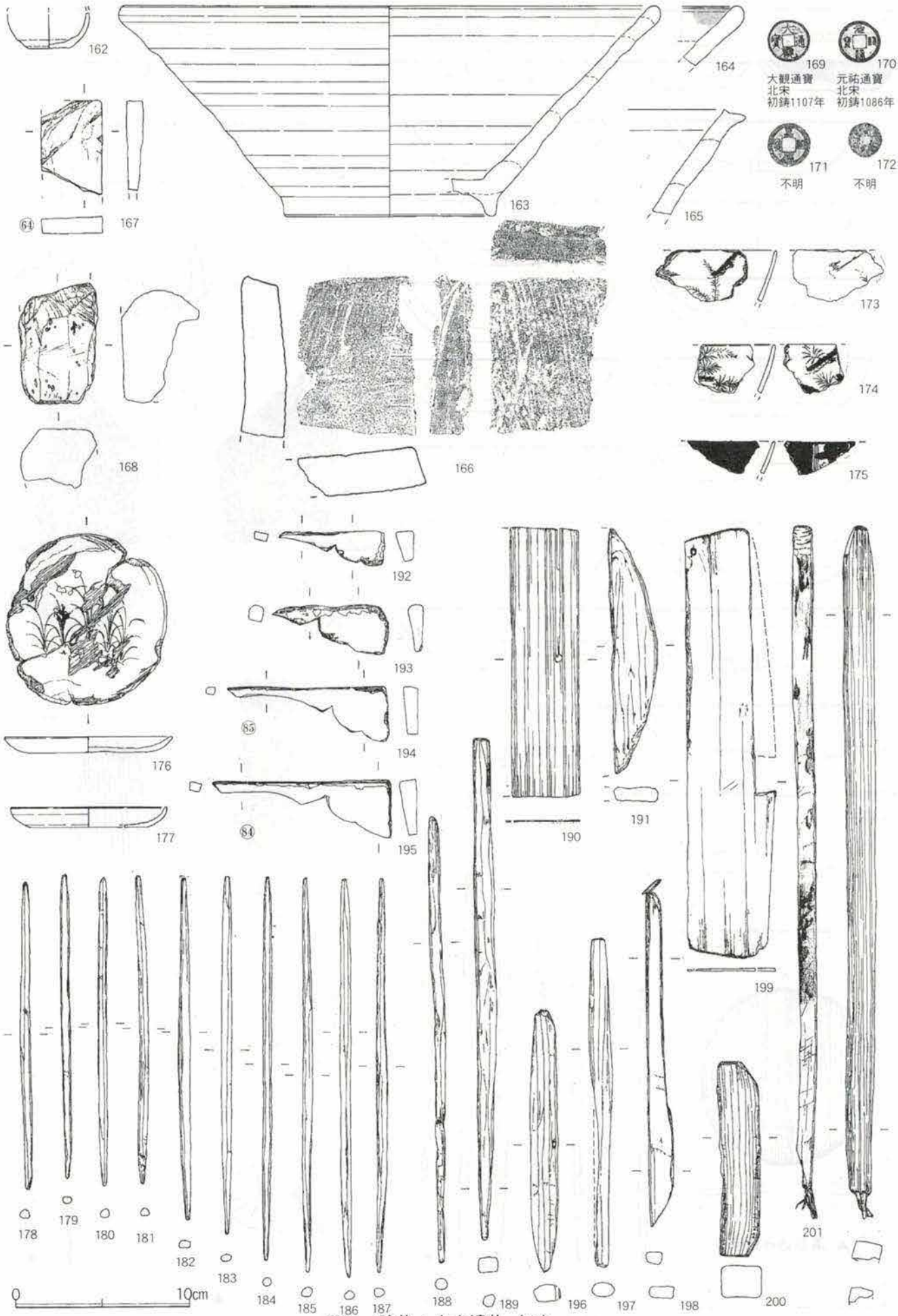


図14　建物１出土遺物（３）

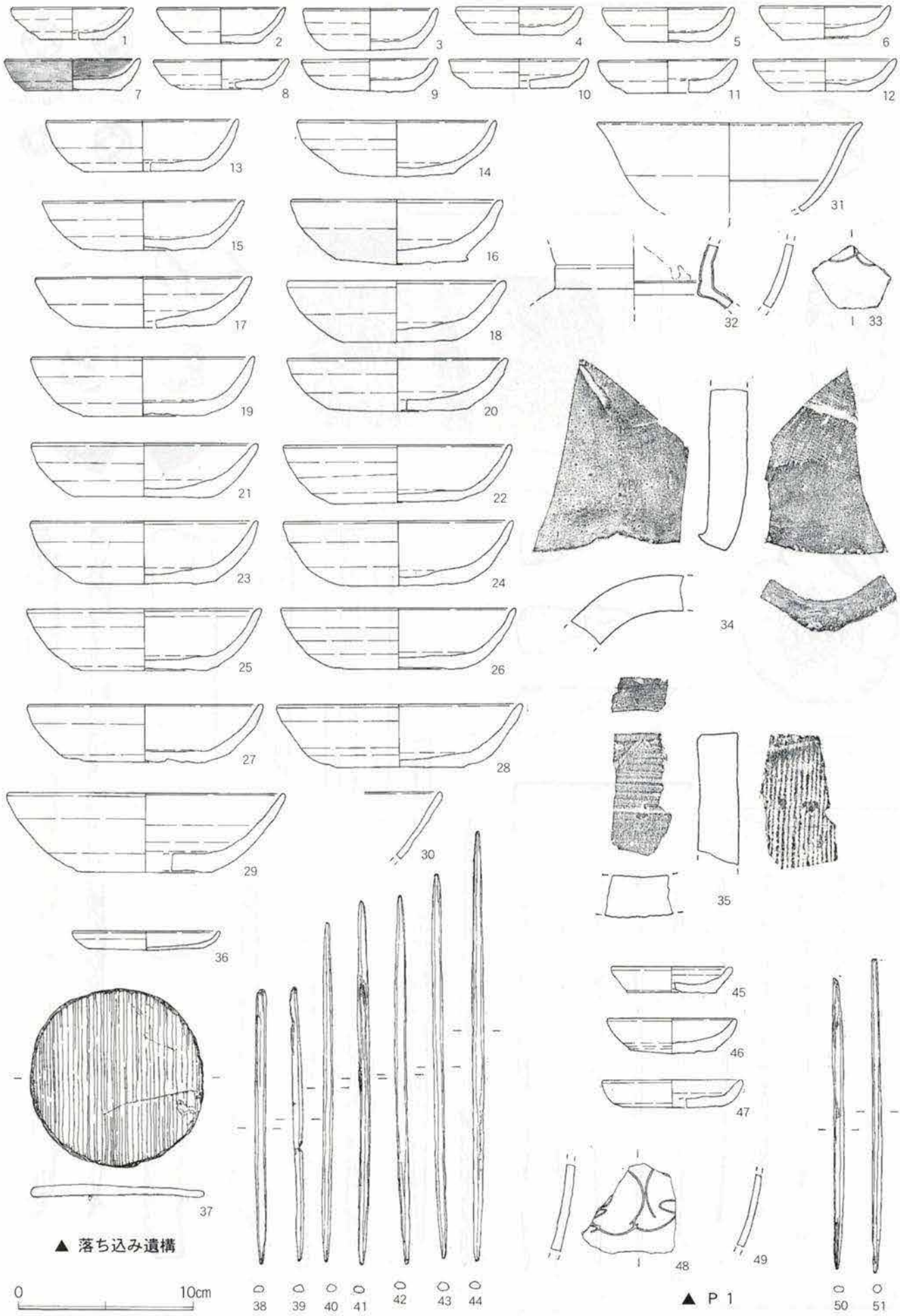


図15　落ち込み遺構・Ｐ１出土遺物

られなかったが、建物１内のＰ３～５は礎板や板材に伴うもので礎石間や軸線上で一定の距離に位置しており、建物に関わる可能性が考えられる。図18－６はＰ３から出土したロクロ成形のかわらけ片ある。

ｆ．遺構外出土遺物（図17・18、図版15・16）

第２面の遺構外出土遺物としては、第１面下から第２ａ面上の遺物（図17）と、第２ａ面下からｂ面上の遺物（図18）とがあり、遺構に伴うもの以外で生活面上の包含層や地業層から出土した資料を分けて図示する。

第１面下～第２ａ面上の出土遺物

図17－１～38はすべて底部糸切りかわらけである。小皿は１～３が薄手器壁で器高の高いものと、４～24が低めの器高をもち、内底面径が大きいものである。大皿は薄手器壁の高い器高をもち、器形が碗型に近い側面観のものと、厚手器壁で低め器高を呈したものとに大別される。

39は青白磁梅瓶で再火を受けるが外面に唐草文を配す。40は瀬戸灰釉水注で注口・把手を欠失、肩部

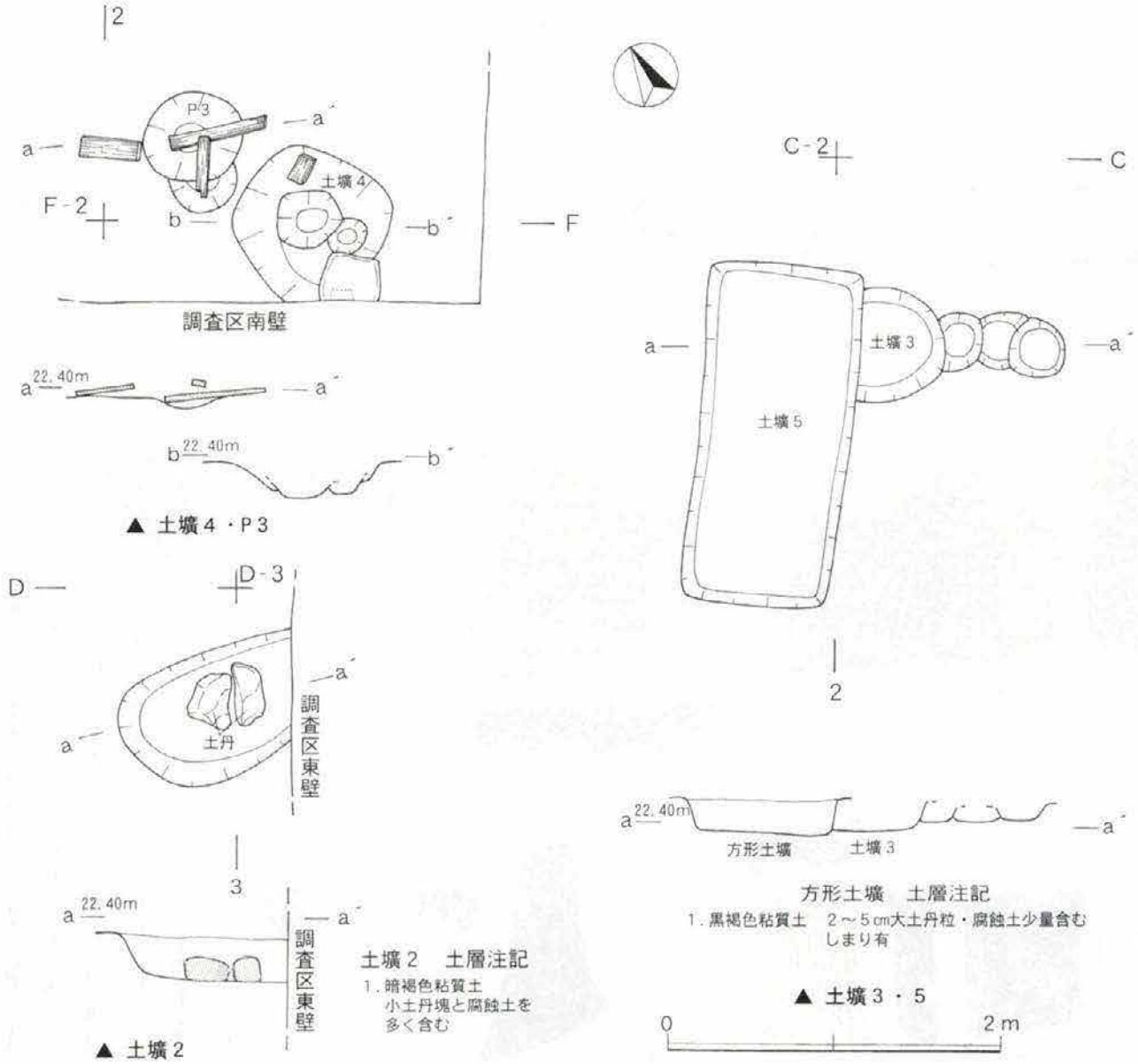


図16　土壙２～５・Ｐ３

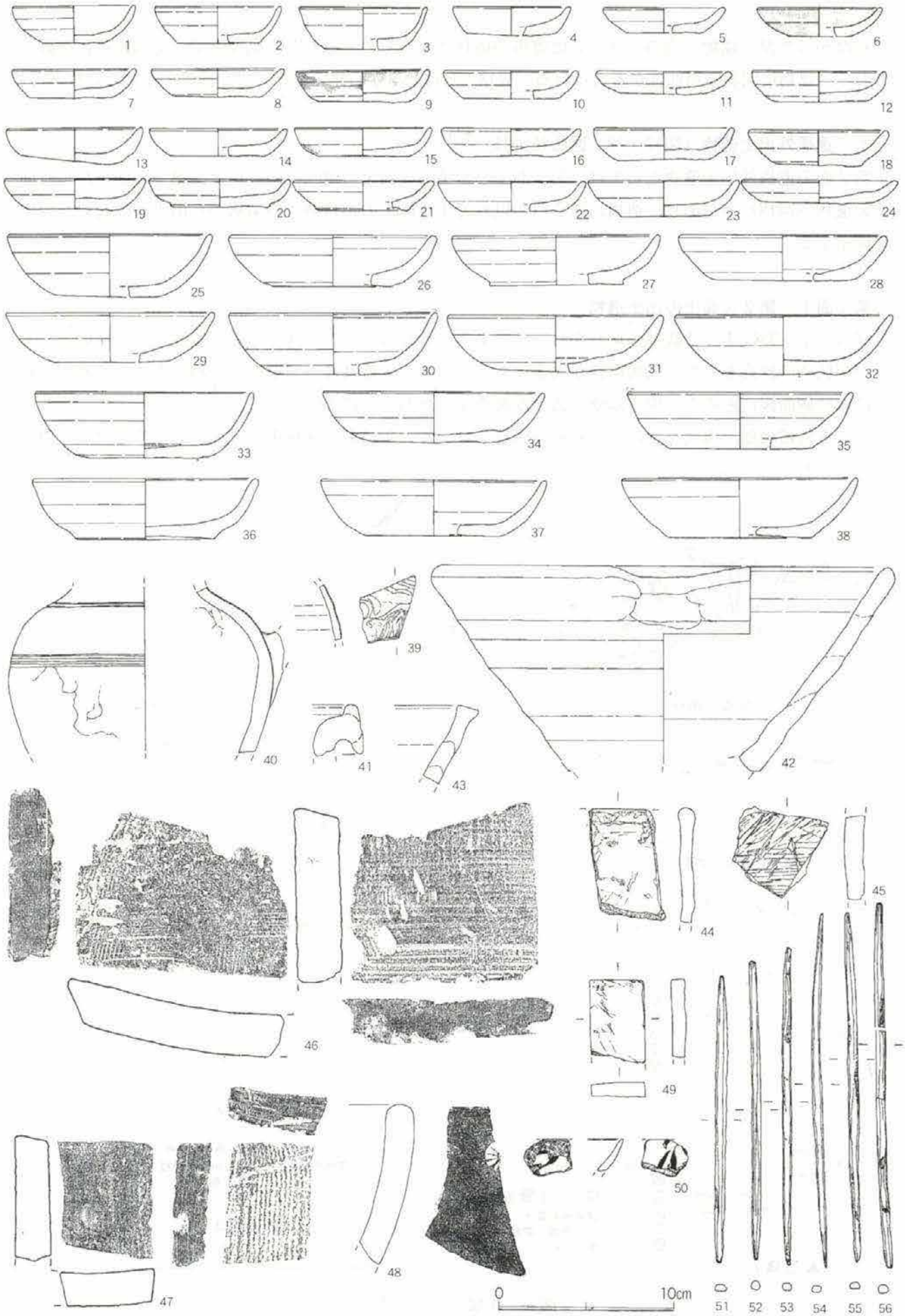


図17　第１面下～第２ａ面上出土遺物

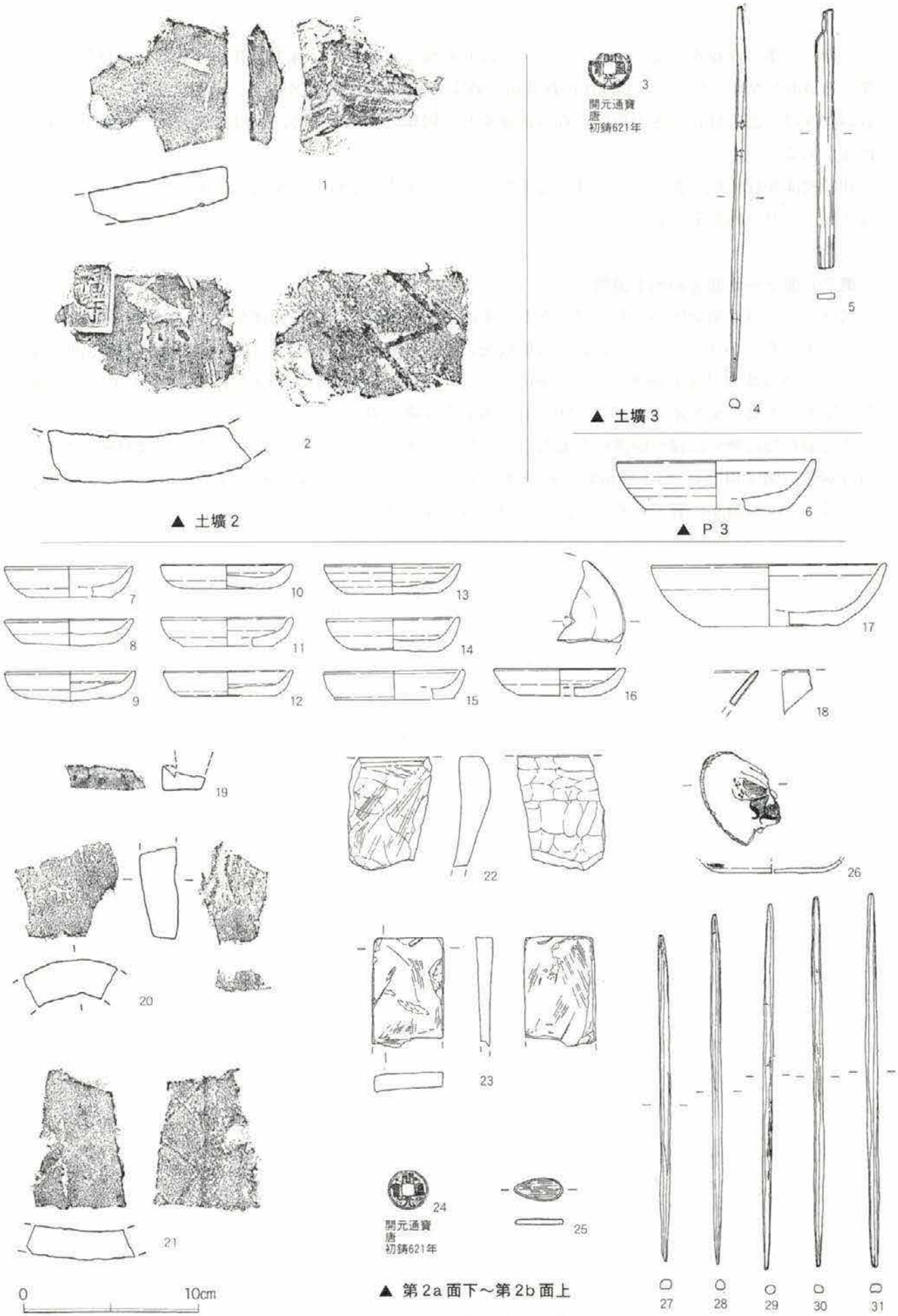


図18　各遺構・遺構外出土遺物

に二条と三条の沈線を施文している。42～45は常滑製品で甕、片口鉢Ⅰ・Ⅱ類であるが、44が片口鉢Ⅰ類片の破面が摩耗したもの、45は片口鉢Ⅱ類の破片で表面に刃物擦痕があり、砥石に使用している。46・47の女瓦は凸面に縄目叩きを施す永福寺創建期瓦と同類のものである。48は瓦質火鉢で口縁下に菊花文押印がある。

49は鳴滝産仕上砥である。50は漆器で黒色漆塗地に朱漆の手描きで施文すた椀と思われる。51～56は長さ16.6～21.1cmの箸である。

第２ａ面下～ｂ面上の出土遺物

図18－７～17は糸切底のかわらけである。小皿は器高が低く、内底面径が大きい内湾気味の器形のものが主体である。16のかわらけ底面には焼成後の穿孔がある。17の大皿は低めの器高で内湾気味の器形である。18は龍泉窯系青磁無文碗の口縁小片。19～21は瓦類である。19は宇瓦(軒平瓦)の下側周縁で名古屋市八事裏山窯系産の陶質瓦、20・21は永福寺Ⅱ期の男瓦・女瓦である。

22は滑石製石鍋の口縁～胴部片を温石などに削り再加工したものと考えられる。23は鳴滝産仕上砥。25は銅銭「開元通宝」。26は鹿角製の柿ノ種型状を呈した品で、刀装で鞘の　や柄の頭金にあたるものか。27～31は木製品の箸であるが、長さ18.9～21.8cmを計る。

表 1　出土遺物観察表(1)　(　) は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
7-1	第1面　土壙1	かわらけ	7.8	4.4	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 粗土 c. 黄橙色
7-2	第1面　土壙1	かわらけ	(7.8)	(4.2)	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-3	〃	かわらけ	(8.0)	(5.0)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-4	〃	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 小石粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色
7-5	〃	かわらけ	11.0	6.2	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-6	〃	かわらけ	11.3	6.4	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
7-7	〃	かわらけ	(12.7)	(8.1)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-8	〃	かわらけ	(12.3)	(7.2)	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-9	〃	かわらけ	(13.2)	(7.1)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-10	〃	白かわらけ	／	(5.0)	／	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 良土 c. 灰白色
7-11	〃	鉄製品　釘	残存長4.4 幅0.3～0.5 厚0.2～0.3			
7-12	〃	銅製品　銭	／	／	／	f. 開元通宝 唐 初鋳年621年
7-13	第1面　土壙3	かわらけ	(12.6)	(7.4)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-14	〃	かわらけ	(13.6)	(8.1)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
7-15	第1面　P 1	常滑　甕	肩部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 c. 褐色 f. 外面銭型叩き目
7-16	第1面　P 2	かわらけ	(12.5)	(6.3)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-17	第1面　P 3	かわらけ	6.6	3.4	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-18	〃	かわらけ	6.6	4.3	2.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-19	〃	かわらけ	7.8	5.7	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-20	〃	かわらけ	(10.7)	(6.2)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-21	〃	かわらけ	11.0	6.0	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-22	〃	かわらけ	11.0	6.5	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-23	〃	かわらけ	11.2	6.9	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-24	〃	かわらけ	(11.3)	(6.3)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-25	〃	かわらけ	(11.2)	(5.8)	3.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-26	〃	かわらけ	11.7	7.1	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-27	〃	かわらけ	(11.4)	(6.5)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-28	第1面　P 5	かわらけ	(7.4)	(4.5)	2.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-29	〃	かわらけ	(7.5)	(4.5)	2.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-30	〃	鉄製品　釘	残存長4.8 幅0.5 厚0.3			
7-31	第1面　P⑨	かわらけ	(11.6)	(7.2)	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-32	第1面　土壙④	かわらけ	7.7	5.0	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
7-33	〃	常滑　片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 少量 c. 褐色 降灰部茶褐色 f. 内面菊花文
7-34	第1面上	かわらけ	(7.7)	(4.4)	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
7-35	〃	かわらけ	(7.8)	(5.8)	2.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色 f. 灯明皿
7-36	〃	かわらけ	(7.8)	(4.4)	2.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-37	〃	かわらけ	(7.8)	(5.0)	2.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色 f. 灯明皿
7-38	〃	かわらけ	(12.1)	(7.6)	2.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-39	〃	かわらけ	(12.7)	(7.8)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-40	〃	かわらけ	(12.4)	(7.3)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-41	〃	かわらけ	12.8	7.6	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 黄橙色
7-42	〃	かわらけ	(13.0)	(8.0)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
7-43	〃	かわらけ	(15.4)			a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
7-44	〃	龍泉窯系 青磁 算木文香炉	口縁部小片			b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰緑色不透明 厚めの施釉
7-45	〃	白磁　口兀皿	(9.2)	〃	〃	b. 灰白色 精良堅緻 d. 灰白色透明 口唇部露胎
7-46	〃	瀬戸　入子	口縁部小片			b. 灰白色 微砂 精良土 c. 灰白色 e. 良好 硬質
7-47	〃	瀬戸　碗	口縁部小片			b. 浅黄橙色 微砂 良土 d. 黒色 e. 良好 硬質
7-48	〃	瀬戸　碗	口縁部小片			b. 灰白色 微砂 良土 d. 黄緑色 e. 良好 硬質
7-49	〃	瀬戸 天目茶碗	底部小片			b. 浅黄橙色 微砂 良土 d. 内面黒色 外面黒褐色～褐色 e. 良好 硬質
7-50	〃	瀬戸　卸皿	口縁部小片			b. 浅黄橙色 微砂 良土 d. 浅黄色 内外面薄い施釉 e. 良好 硬質

表 2　出土遺物観察表(2)　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
7-51	第1面上	瀬戸 折縁深皿	／	(12.4)	／	b. 浅黄橙色 微砂 良土 d. 灰褐色 e. 良好 硬質 f. 内底面、白濁し荒れている(二次焼成をうけた可能性あり)
7-52	〃	常滑　片口鉢 Ⅱ類	口縁部小片			b. 灰褐色 砂粒 白色粒 小石粒 少量 c. 褐色 d. 褐色 降灰部灰緑色
7-53	〃	常滑　片口鉢 Ⅱ類	口縁部小片			b. 黄褐色 砂粒 小石粒 少量 c. 褐色
7-54	〃	瓦質 香炉	(9.0)	(6.8)	4.2	b. 灰白色 砂粒 良土 軟質 c. 灰黒色 e. 良好 f. 菊花文スタンプ
7-55	〃	瓦質　土風炉か	口縁部小片			b. 灰白色 砂粒 黒色粒 c. 内面灰褐色 外面黒褐色
7-56	〃	石製品　砥石	残存長5.3～6.3 幅0.3～0.4　厚0.3～0.4			c. 明黄褐色 f. 砥面が1面 刃物による削痕、擦痕 泥岩製 仕上げ砥
7-57	〃	石製品　火打石	長3.8　幅2.7 厚2.0			c. 灰色 底部～立ち上がり中程まで灰白色 f. 石英
7-58	〃	銅製品　銭	／	／	／	f. 天禧通宝 北宋 初鋳年1017年
7-59	〃	銅製品　銭	／	／	／	f. 皇宋通宝 北宋 初鋳年1038年
7-60	〃	銅製品　銭	／	／	／	f. 政和通宝 北宋 初鋳年1111年
12-1	第2面　建物1	かわらけ	6.4	4.2	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 橙色
12-2	〃	かわらけ	(6.2)	(3.2)	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
12-3	〃	かわらけ	6.7	4.4	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
12-4	〃	かわらけ	6.7	3.7	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
12-5	〃	かわらけ	6.6	4.6	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
12-6	〃	かわらけ	(7.0)	(4.4)	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
12-7	〃	かわらけ	(7.5)	(4.6)	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 良土 c. 橙色
12-8	〃	かわらけ	7.4	4.9	2.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
12-9	〃	かわらけ	(7.4)	(4.1)	2.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
12-10	〃	かわらけ	7.4	4.7	2.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
12-11	〃	かわらけ	7.6	5.0	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄橙色
12-12	〃	かわらけ	(7.6)	(4.5)	2.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
12-13	〃	かわらけ	6.6	5.1	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 黄橙色
12-14	〃	かわらけ	6.7	51	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
12-15	〃	かわらけ	7.0	5.5	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄灰色
12-16	〃	かわらけ	6.6	4.5	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄灰色
12-17	〃	かわらけ	7.0	5.7	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
12-18	〃	かわらけ	(7.2)	(5.3)	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母赤色粒 白針 やや祖土 c. 橙色
12-19	〃	かわらけ	(7.2)	(5.8)	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 やや祖土 c. 黄橙色
12-20	〃	かわらけ	7.2	5.0	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c. 黄灰色
12-21	〃	かわらけ	(7.3)	(6.0)	1.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや祖土 c. 橙色
12-22	〃	かわらけ	(7.5)	(6.4)	1.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや祖土 c. 橙色
12-23	〃	かわらけ	(7.5)	(5.7)	1.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 祖土 c. 黄灰色
12-24	〃	かわらけ	7.8	5.8	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c. 黄灰色
12-25	〃	かわらけ	6.3	4.2	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや祖土 c. 黄橙色
12-26	〃	かわらけ	6.5	4.8	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 やや祖土 c. 黄橙色
12-27	〃	かわらけ	6.5	4.2	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c. 黄灰色
12-28	〃	かわらけ	7.1	5.0	1.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 祖土 c. 黄灰色
12-29	〃	かわらけ	6.8	4.9	1.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c. 橙色
12-30	〃	かわらけ	6.9	5.1	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c. 黄橙色
12-31	〃	かわらけ	6.7	4.7	2.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 祖土 c. 黄橙色
12-32	〃	かわらけ	6.8	4.5	1.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c. 黄橙色
12-33	〃	かわらけ	6.8	5.8	1.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや祖土 c. 黄橙色

表3　出土遺物観察表(3)　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形　b.胎土・素地　c.色調　d.釉薬　e.焼成　f.備考
12-34	第2面　建物1	かわらけ	6.8	4.9	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや祖土 c.黄橙色
12-35	〃	かわらけ	6.9	4.8	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c.黄橙色
12-36	〃	かわらけ	6.9	5.5	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c.黄灰色
12-37	〃	かわらけ	7.0	4.7	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c.黄橙色
12-38	〃	かわらけ	(7.0)	(5.1)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや祖土 c.黄橙色
12-39	〃	かわらけ	7.1	5.4	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c.黄灰色
12-40	〃	かわらけ	7.0	5.2	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや祖土 c.橙色
12-41	〃	かわらけ	7.2	4.8	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c.黄橙色
12-42	〃	かわらけ	(7.2)	(4.5)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや祖土 c.黄橙色
12-43	〃	かわらけ	(7.1)	(4.2)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.橙色
12-44	〃	かわらけ	7.2	5.2	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 小石粒 やや粗土 c.黄橙色 f.灯明皿
12-45	〃	かわらけ	7.1	5.1	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-46	〃	かわらけ	7.3	5.3	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-47	〃	かわらけ	7.1	5.4	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-48	〃	かわらけ	7.2	5.1	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 やや粗土 c.橙色
12-49	〃	かわらけ	7.2	5.1	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-50	〃	かわらけ	7.2	5.5	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-51	〃	かわらけ	(7.3)	(4.9)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-52	〃	かわらけ	(7.2)	(5.4)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c.黄橙色
12-53	〃	かわらけ	7.5	5.1	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-54	〃	かわらけ	(7.4)	(4.3)	1.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.橙色
12-55	〃	かわらけ	7.3	5.0	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-56	〃	かわらけ	(7.2)	(4.4)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-57	〃	かわらけ	(7.4)	(4.5)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c黄灰色
12-58	〃	かわらけ	7.2	4.7	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色
12-59	〃	かわらけ	7.4	4.6	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-60	〃	かわらけ	7.2	4.9	18	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-61	〃	かわらけ	(7.8)	(5.9)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-62	〃	かわらけ	7.3	5.4	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄灰色
12-63	〃	かわらけ	7.2	4.7	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色
12-64	〃	かわらけ	(7.3)	(5.9)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄灰色
12-65	〃	かわらけ	7.4	5.3	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-66	〃	かわらけ	(7.4)	(5.2)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-67	〃	かわらけ	(7.5)	(5.0)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-68	〃	かわらけ	(7.5)	(4.8)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄橙色
12-69	〃	かわらけ	7.5	5.0	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
12-70	〃	かわらけ	7.3	4.9	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c.黄橙色 f.灯明皿
12-71	〃	かわらけ	7.5	4.7	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄灰色

表4　出土遺物観察表(4)　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形　b.胎土・素地　c.色調　d.釉薬　e.焼成　f.備考
12-72	第2面　建物1	かわらけ	(7.5)	(5.3)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色 f.灯明皿
12-73	〃	かわらけ	7.5	5.3	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 粗土 c.黄橙色
12-74	〃	かわらけ	(7.6)	(4.9)	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c.黄灰色
12-75	〃	かわらけ	(7.6)	(5.5)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-76	〃	かわらけ	7.6	4.9	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-77	〃	かわらけ	7.8	4.2	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-78	〃	かわらけ	7.9	5.5	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-79	〃	かわらけ	7.8	5.4	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄橙色
12-80	〃	かわらけ	7.8	5.9	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄灰色
12-81	〃	かわらけ	7.7	5.6	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-82	〃	かわらけ	7.7	5.0	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c.黄灰色
12-83	〃	かわらけ	7.7	6.0	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-84	〃	かわらけ	7.7	5.6	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-85	〃	かわらけ	7.8	5.5	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-86	〃	かわらけ	(8.0)	(6.0)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄橙色
12-87	〃	かわらけ	(7.9)	(5.3)	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-88	〃	かわらけ	(7.8)	5.7	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-89	〃	かわらけ	7.7	4.6	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-90	〃	かわらけ	(7.9)	5.3	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-91	〃	かわらけ	8.2	6.1	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄灰色
12-92	〃	かわらけ	(8.2)	(5.4)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
12-93	〃	かわらけ	(8.2)	(5.5)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-94	〃	かわらけ	10.2	6.6	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-95	〃	かわらけ	(10.4)	(6.6)	3.2	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
12-96	〃	かわらけ	(10.6)	(7.0)	3.2	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.橙色
12-97	〃	かわらけ	(10.6)	(6.2)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
12-98	〃	かわらけ	(10.6)	(6.4)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-99	〃	かわらけ	(10.7)	(6.6)	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 白針 土丹粒 粗土 c.黄橙色
12-100	〃	かわらけ	(10.8)	(6.5)	2.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄橙色
12-101	〃	かわらけ	(10.8)	(5.2)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
12-102	〃	かわらけ	10.8	6.9	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
12-103	〃	かわらけ	11.0	7.0	3.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.橙色
12-104	〃	かわらけ	(10.7)	(8.0)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.橙色 f.灯明皿
12-105	〃	かわらけ	10.9	6.3	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
12-106	〃	かわらけ	(11.1)	(7.9)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c.黄灰色
12-107	〃	かわらけ	(11.1)	(6.4)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄灰色
12-108	〃	かわらけ	(11.4)	(6.2)	2.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
12-109	〃	かわらけ	(11.5)	(7.7)	2.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
12-110	〃	かわらけ	(11.6)	(6.3)	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.橙色

表5　出土遺物観察表(5)　(　) は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a. 成形　b. 胎土・素地　c. 色調　d. 釉薬　e. 焼成　f. 備考
12-111	第2面　建物1	かわらけ	(11.8)	(7.6)	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
12-112	〃	かわらけ	(11.6)	(7.0)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
12-113	〃	かわらけ	(11.7)	(5.1)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
12-114	〃	かわらけ	11.8	6.8	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
12-115	〃	かわらけ	(12.0)	(6.7)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色
12-116	〃	かわらけ	(12.0)	(7.2)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 黄橙色
12-117	〃	かわらけ	(12.0)	(6.4)	3.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c. 橙色
13-118	〃	かわらけ	(12.1)	(6.4)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
13-119	〃	かわらけ	(12.1)	(7.6)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色
13-120	〃	かわらけ	(12.1)	(7.9)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 黄橙色
13-121	〃	かわらけ	(12.0)	(7.5)	3.2	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
13-122	〃	かわらけ	(12.2)	(8.4)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
13-123	〃	かわらけ	12.2	7.7	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色 f. 灯明皿
13-124	〃	かわらけ	(12.5)	(7.6)	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
13-125	〃	かわらけ	12.5	7.9	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄橙色
13-126	〃	かわらけ	12.1	7.7	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
13-127	〃	かわらけ	(12.6)	(6.7)	3.8	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 白針 土丹粒 やや粗土 c. 黄灰色
13-128	〃	かわらけ	12.5	7.4	3.1	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
13-129	〃	かわらけ	(12.6)	(7.6)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c. 橙色
13-130	〃	かわらけ	12.6	7.6	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
13-131	〃	かわらけ	12.7	8.0	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄灰色
13-132	〃	かわらけ	12.6	8.1	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色
13-133	〃	かわらけ	(12.7)	(7.5)	3.9	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄橙色
13-134	〃	かわらけ	(12.7)	(6.0)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 黄灰色
13-135	〃	かわらけ	(12.8)	(6.9)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
13-136	〃	かわらけ	(12.8)	(7.6)	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 良土 c. 黄橙色
13-137	〃	かわらけ	12.8	7.4	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
13-138	〃	かわらけ	12.7	8.0	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c. 橙色
13-139	〃	かわらけ	12.7	8.0	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
13-140	〃	かわらけ	12.8	8.3	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 小石粒 やや粗土 c. 橙色
13-141	〃	かわらけ	12.8	7.8	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色
13-142	〃	かわらけ	(12.4)	(7.4)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 橙色
13-143	〃	かわらけ	(12.8)	(6.7)	3.6	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 良土 c. 橙色
13-144	〃	かわらけ	13.0	6.8	3.4	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
13-145	〃	かわらけ	13.0	7.9	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
13-146	〃	かわらけ	(13.1)	(7.4)	3.3	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 良土 c. 黄灰色
13-147	〃	かわらけ	13.3	8.3	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c. 橙色
13-148	〃	かわらけ	13.2	7.5	3.5	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂多し 雲母 小石粒 やや粗土 c. 黄橙色
13-149	〃	かわらけ	(13.2)	(7.8)	4.0	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色
13-150	〃	かわらけ	(13.2)	(8.9)	3.7	a. ロクロ 外底糸切痕 b. 微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c. 橙色 f. 灯明皿

表6　出土遺物観察表(6)　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形　b.胎土・素地　c.色調　d.釉薬　e.焼成　f.備考
13-151	第2面　建物1	かわらけ	(13.5)	(6.9)	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
13-152	〃	かわらけ	13.1	8.3	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.橙色
13-153	〃	かわらけ	13.4	8.0	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.橙色
13-154	〃	かわらけ	(13.6)	(8.9)	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色
13-155	〃	かわらけ	(13.8)	(8.6)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.橙色
13-156	〃	かわらけ	(13.4)	(7.8)	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
13-157	〃	かわらけ	14.0	8.9	4.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄橙色
13-158	〃	かわらけ	(14.2)	(9.3)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
13-159	〃	白かわらけ	(11.3)	／	／	a.手捏ね 指頭痕 b.微砂 雲母 良土 c.灰白色
13-160	〃	白かわらけ	(12.8)	(7.0)	3.5	a.手捏ね 指頭痕 b.微砂 雲母 良土 c.白色
13-161	〃	白かわらけ	(12.2)	／	／	a.手捏ね 指頭痕 b.微砂 雲母 良土 c.黄白色
14-162	〃	瀬戸 茶入小壺	／	(2.3)	／	a.外底糸切痕 b.黄灰色 砂粒 白色粒 精良土 d.赤褐色 薄い施釉 e.良好 硬質
14-163	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	(30.6)	(11.9)	12.1	a.貼付高台成形 b.灰色 砂粒 黒色粒 少量 白色粒 小石粒 多量 c.灰色 降灰部灰色
14-164	〃	常滑　捏鉢Ⅰ類	口縁部小片			b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 少量 c.灰色 f.口縁内部煤付着
14-165	〃	常滑　捏鉢Ⅱ類	口縁部小片			a.輪積み成形 b.灰色 砂粒 白色粒 少量 c.暗褐色
14-166	〃	女瓦(平瓦)	残存長9.1 残存幅6.9 厚2.4			a.凹面離れ砂 縦位のナデ　糸切り痕 凸面離れ砂 縄目の叩き 斜めと縦位のナデ b.明灰褐色 砂粒 白色粒 黒色粒 良土 c.橙色 e.良好 硬質
14-167	〃	石製品　砥石	残存長5.1 残存幅3.5 厚2.5			c.灰緑色 f.砥面が1面 側面削り出し痕あり 鳴滝産頁岩 仕上げ砥
14-168	〃	石製品　砥石	残存長6.5 残存幅4.3 厚4.4			c.灰白色 f.砥面が4面 凝灰岩質頁岩製 荒砥
14-169	〃	銅製品　銭	／	／	／	f.大観通宝 北宋 初鋳年1107年
14-170	〃	銅製品　銭	／	／	／	f.元祐通宝 北宋 初鋳年1086年
14-171	〃	銅製品　銭	／	／	／	f.不明
14-172	〃	銅製品　銭	／	／	／	f.不明
14-173	〃	漆器　碗	口縁部小片			f.内外面黒漆塗布後、朱漆で内外面に鶴・植物(笹)の手描き
14-174	〃	漆器　碗	口縁部小片			f.内外面黒漆塗布後、朱漆で内外面に笹の葉の手描き
14-175	〃	漆器　碗	口縁部小片			f.内外面黒漆塗布後、朱漆で外面手描き花模様、内面全体に朱漆塗布
14-176	〃	漆器　皿	(9.5)	(6.9)	(0.9)	f.内外面黒漆塗布後、内面に朱漆で植物(菖蒲？)の葉の手描き 変形が著しい
14-177	〃	漆器　皿	(8.8)	(6.6)	1.2	f.無紋 内外面黒漆塗布
14-178	〃	木製品　箸	長18 幅0.6 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工 先端尖る
14-179	〃	木製品　箸	長17.8 幅0.5 厚0.4			f.刃物で断面六角形に加工 両端尖り気味
14-180	〃	木製品　箸	長18 幅0.5 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工 先端尖り気味
14-181	〃	木製品　箸	長18 幅0.5 厚0.4			f.刃物で断面六角形に加工 先端尖り気味
14-182	〃	木製品　箸	長19.8 幅0.7 厚0.4			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
14-183	〃	木製品　箸	長20.7 幅0.6 厚0.4			f.刃物で断面六角形に加工 両端尖り気味
14-184	〃	木製品　箸	長22.2 幅0.5 厚0.4			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖る
14-185	〃	木製品　箸	長23 幅0.6 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖る
14-186	〃	木製品　箸	長23.2 幅0.6 厚0.5			f.刃物で断面六角形に加工 下端尖る
14-187	〃	木製品　箸	長22.9 幅0.5 厚0.5			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味
14-188	〃	木製品　箸	長26.1 幅0.7 厚0.6			f.刃物で断面多角形に加工 前端丸味をもち、下端尖り気味
14-189	〃	木製品　菜箸	長29.1 幅1.2 厚0.9			f.刃物で全体平らに加工 断面多角形～六角形に加工 先端尖り気味
14-190	〃	木製品　折敷	残存長15.5 残存幅3.8 厚0.08			f.中央に小孔あり
14-191	〃	木製品　曲物	直径(24.8) 厚0.8			f.底板 表面粗い削り
14-192	〃	木製品　雲形	長0.5～2.0 幅6.0 厚0.3～1.0			f.全体的に丁寧に加工 片側平らに面取り 接合部分以外黒漆塗布
14-193	〃	木製品　雲形	長0.5～2.8 幅6.6 厚0.3～0.9			f.全体的に丁寧に加工 片側平らに面取り 接合部分以外黒漆塗布
14-194	〃	木製品　雲形	長0.5～3.2 幅9.1 厚0.6～0.9			f.全体的に丁寧に加工 片側平らに面取り 接合部分以外黒漆塗布

表7　出土遺物観察表(7)　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形　b.胎土・素地　c.色調　d.釉薬　e.焼成　f.備考
14-195	第2面　建物1	木製品　雲形	長0.6～3.3 幅10.2 厚0.5～1.1			f.全体的に丁寧に加工 片側平らに面取り 接合部分以外黒漆塗布
14-196	〃	木製品　箆	残存長15.4 残存幅1.6 厚1.0			f.全体的に六角形に削り整える 中央の端に用途不明の小穴が貫通
14-197	〃	木製品　箆	残存長19.2 残存幅1.2 厚0.8			f.丸味をもった加工 下端が磨耗
14-198	〃	木製品　箆	残存長19.4 残存幅1.4 厚0.7			f.上端は平らに削り、下端は断面六角形に加工
14-199	〃	金剛草履板芯	残存長24.4 残存幅5.1 厚0.2			f.先端鼻緒の小孔痕　側縁方形の抉り
14-200	〃	用途不明木製品	長11.4 幅2.3 厚1.8			f.断面六角形の二辺は平らに加工 二辺は粗削り
14-201	〃	用途不明木製品	長40.0 幅1.6 厚(1.1)			f.全体的に丁寧に加工 刃物による切り傷が多数ある
15-1	第2面 落ち込み遺構	かわらけ	(6.9)	(3.8)	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-2	〃	かわらけ	(7.3)	(4.1)	2.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.橙色
15-3	〃	かわらけ	7.6	5.2	2.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色
15-4	〃	かわらけ	7.0	5.0	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-5	〃	かわらけ	7.4	5.0	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色
15-6	〃	かわらけ	7.4	4.9	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄橙色
15-7	〃	かわらけ	(7.6)	(5.6)	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色 f.灯明皿
15-8	〃	かわらけ	(7.6)	(4.6)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.橙色
15-9	〃	かわらけ	7.5	5.2	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.橙色
15-10	〃	かわらけ	(7.9)	(5.6)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色
15-11	〃	かわらけ	(7.8)	(4.8)	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色
15-12	〃	かわらけ	8.0	5.2	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 良土 c.黄灰色
15-13	〃	かわらけ	(10.8)	(6.7)	2.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-14	〃	かわらけ	(11.3)	(6.4)	3.2	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-15	〃	かわらけ	(10.8)	(6.7)	2.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-16	〃	かわらけ	12.0	7.6	3.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.黄灰色
15-17	〃	かわらけ	(12.3)	(8.0)	2.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄灰色
15-18	〃	かわらけ	12.3	6.6	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-19	〃	かわらけ	12.6	6.9	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.橙色
15-20	〃	かわらけ	(12.5)	(7.9)	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-21	〃	かわらけ	12.8	8.0	3.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-22	〃	かわらけ	12.9	7.3	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-23	〃	かわらけ	(12.8)	(8.1)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.橙色
15-24	〃	かわらけ	(13.1)	(7.6)	3.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.橙色
15-25	〃	かわらけ	(13.3)	(7.3)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-26	〃	かわらけ	(13.4)	(7.4)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.橙色
15-27	〃	かわらけ	13.4	7.0	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-28	〃	かわらけ	(13.9)	(7.3)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.黄橙色
15-29	〃	かわらけ	(15.8)	(7.7)	4.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 良土 c.橙色
15-30	〃	白かわらけ	口縁部小片			a.手捏ね b.微砂 良土 c.灰白色
15-31	〃	白磁　口兀碗	(15.2)	／	／	b.灰白色 精良堅緻 d.明緑灰白半透明　口唇部露胎
15-32	〃	白磁　四耳壺	頸径部(9.1)			b.灰白色 精良堅緻 d.明緑灰白半透明 貫入あり
15-33	〃	緑釉　盤	胴部小片			b.灰褐色 微砂 白色粒 褐色粒 良土 d.緑色 薄い e.良好 硬質 f.外面に草花状の文様を線彫り
15-34	〃	男瓦(丸瓦)	残存長11.0 残存幅8.0 厚1.6～2.2			a.凹面端面側ナデ 中央部布目痕 凸面縦位ナデ ヘラ傷痕あり b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 精良土 c.灰色 e.良好
15-35	〃	女瓦(平瓦)	残存長8.0 残存幅4.0 厚2.2～2.3			a.凹面横位のヘラナデ 凸面縄目痕 b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 精良土 c.灰色 e.良好
15-36	〃	漆器　皿	8.4	6.7	1.1	f.無文 内外面黒漆塗
15-37	〃	曲物	直径9.9 厚0.4～0.6			f.底板 側面削り加工
15-38	〃	木製品　箸	長15.9 幅0.6 厚0.3			f.刃物で断面六角形に加工 先端尖る
15-39	〃	木製品　箸	長15.9 幅0.6 厚0.4			f.刃物で断面六角形に加工 先端尖る
15-40	〃	木製品　箸	長19.6 幅0.5 厚0.4			f.刃物で断面六角形に加工 両端尖り気味
15-41	〃	木製品　箸	長21.1 幅0.6 厚0.4			f.刃物で断面多角形に加工 両端尖り気味

表8　出土遺物観察表(8)　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形　b.胎土・素地　c.色調　d.釉薬　e.焼成　f.備考
15-42	第2面 落ち込み遺構	木製品　箸	長21.3 幅0.6 厚0.4			f.刃物で断面六角形に加工 両端尖る
15-43	〃	木製品　箸	長22.3 幅0.6 厚0.5			f.刃物で断面六角形に加工 両端尖る
15-44	〃	木製品　箸	長25 幅0.6 厚0.4			f.刃物で断面六角形に加工 両端尖る
15-45	第2面P1	かわらけ	(6.8)	(5.2)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c.黄橙色
15-46	〃	かわらけ	(7.3)	(4.8)	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
15-47	〃	かわらけ	(7.8)	(5.7)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
15-48	〃	泉州窯系 緑釉 盤	胴部小片			b.黄褐色 微砂 白色粒 黒色粒 良土 d.黄緑色 薄い e.良好 硬質 f.内面露胎一部釉だれ 外面草花状の文様を線彫り
15-49	〃	泉州窯系 緑釉 盤	胴部小片			b.黄褐色 微砂 白色粒 黒色粒 良土 d.緑色 薄い e.良好 硬質 f.内面露胎一部釉だれ
15-50	〃	木製品　箸	長16.9 幅0.6 厚0.3			f.刃物で断面四角形に加工 両端尖り気味
15-51	〃	木製品　箸	長18.2 幅0.5 厚0.4			f.刃物で断面多角形に加工 先端尖り気味
17-1	第1面下 ～第2a面上	かわらけ	(7.0)	(3.5)	2.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄橙色
17-2	〃	かわらけ	(7.2)	(4.7)	2.1	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c.黄橙色
17-3	〃	かわらけ	(7.2)	(4.4)	2.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.橙色
17-4	〃	かわらけ	6.6	5.0	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色
17-5	〃	かわらけ	(6.8)	(4.3)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-6	〃	かわらけ	(7.0)	(3.5)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色　f.内外面煤付着 燈明皿
17-7	〃	かわらけ	7.0	4.7	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-8	〃	かわらけ	(7.4)	4.9	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄灰色
17-9	〃	かわらけ	7.5	5.1	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c.橙色 f.内外面煤付着 燈明皿
17-10	〃	かわらけ	(7.4)	(5.3)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
17-11	〃	かわらけ	(7.4)	5.0	1.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-12	〃	かわらけ	7.6	5.3	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄灰色
17-13	〃	かわらけ	7.6	5.9	1.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄灰色
17-14	〃	かわらけ	(7.8)	(5.4)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-15	〃	かわらけ	7.8	5.2	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色 f.外面煤付着 燈明皿か
17-16	〃	かわらけ	7.8	5.2	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 粗土 c.黄灰色 f.燈明皿
17-17	〃	かわらけ	7.9	5.3	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-18	〃	かわらけ	7.8	4.9	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 土丹粒 粗土 c.黄灰色
17-19	〃	かわらけ	(8.0)	5.3	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-20	〃	かわらけ	(7.9)	(5.5)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄橙色
17-21	〃	かわらけ	(7.9)	(5.0)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色
17-22	〃	かわらけ	(8.2)	(5.6)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄灰色
17-23	〃	かわらけ	8.45	5.0	2.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
17-24	〃	かわらけ	(8.8)	(6.5)	1.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-25	〃	かわらけ	(11.5)	(6.0)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 やや粗土 c.黄橙色
17-26	〃	かわらけ	(11.6)	(6.9)	3.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-27	〃	かわらけ	(11.7)	(7.7)	2.9	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
17-28	〃	かわらけ	(11.6)	(8.0)	2.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
17-29	〃	かわらけ	(11.8)	(6.5)	2.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色

表9　出土遺物観察表(9)　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形　b.胎土・素地　c.色調　d.釉薬　e.焼成　f.備考
17-30	第1面下～第2a面上	かわらけ	(11.8)	(6.5)	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
17-31	〃	かわらけ	(12.0)	(6.7)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 やや粗土 c.黄橙色
17-32	〃	かわらけ	(12.4)	(7.2)	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 粗土 c.黄橙色
17-33	〃	かわらけ	(12.4)	(6.3)	3.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 小石粒 やや粗土 c.橙色
17-34	〃	かわらけ	(12.5)	(7.1)	3.0	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.橙色
17-35	〃	かわらけ	(12.8)	(8.2)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
17-36	〃	かわらけ	(12.7)	(7.8)	3.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
17-37	〃	かわらけ	(12.7)	(7.8)	3.3	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
17-38	〃	かわらけ	(13.4)	(8.0)	3.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 やや粗土 c.橙色
17-39	〃	青白磁　梅瓶	肩部小片			b.灰白色 精良堅緻 d.青白色不透明 薄く施釉 f.再火のため気泡多い
17-40	〃	瀬戸　水注	胴部径(15.0)			b.灰白色 砂粒 白色粒 黒色粒 良土 d.灰釉 緑灰色半透明 薄く施釉 e.良好 硬質
17-41	〃	常滑　甕	縁帯幅2.9			b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 多量 c.褐色 降灰部暗赤褐色
17-42	〃	常滑　片口鉢Ⅰ類	(26.6)	(11.1)	11.8	b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 小石粒 やや多量 c.灰色 降灰部黒褐色
17-43	〃	常滑　片口鉢Ⅱ類	口縁部小片			b.明褐色 砂粒 白色粒 少量 c.暗赤褐色 降灰部緑灰色
17-44	〃	常滑　転用品(片口鉢Ⅰ類)	長6.8 幅3.3 厚0.8			b.灰色 砂粒 白色粒 少量 c.灰色 f.側面削り加工痕
17-45	〃	常滑 転用品？(捏鉢Ⅱ類)	長4.9 幅4.4 厚1.1			b.橙色 砂粒 白色粒 多量 c.黒褐色 f外面刃物による切り傷痕多数
17-46	〃	平瓦（女瓦）	残存長10.2 残存幅12.5 厚2.5			a.凹面：離れ砂 糸切痕・布目痕を縦位ナデ消し 凸面：平行状叩き目を横位・斜位ナデ消し b.灰色 砂粒 白色粒 黒色粒 精良土 c.暗灰色 e.良好
17-47	〃	平瓦（女瓦）	残存長7.3 残存幅5.4 厚2.0			a.凹面：離れ砂 縄目痕 横位ナデ 凸面：縦位・斜位ナデ b.灰褐色 砂粒 白色粒 精良土 c.褐灰色 e.良好
17-48	〃	瓦質　火鉢	口縁部小片			b.灰白色 砂粒 白色粒 小石粒 c.灰色 f.外面菊花文スタンプ
17-49	〃	石製品　砥石	残存長4.7 幅3.1 厚0.8			c.明灰緑色 f.粘板岩製 鳴滝産 仕上げ砥
17-50	〃	漆器　椀？	口縁部小片			a.全体に黒漆塗布 内外面朱漆手描き
17-51	〃	木製品　箸	長16.6 幅0.6 厚0.4			f.両端尖り気味 断面扁平削り加工
17-52	〃	木製品　箸	長17.3 幅0.5 厚0.5			f.先端尖り気味 断面丸く削り加工
17-53	〃	木製品　箸	長18.5 幅0.5 厚0.4			f.両端尖り気味 断面丸く削り加工
17-54	〃	木製品　箸	長20.5 幅0.6 厚0.4			f.先端尖る 断面丸く削り加工
17-55	〃	木製品　箸	長20.4 幅0.6 厚0.4			f.両端尖り気味 断面扁平削り加工
17-56	〃	木製品　箸	長21.1 幅0.5 厚0.5			f.両端角ばる 断面丸く削り加工
18-1	第2面　土壙2	平瓦（女瓦）	残存長7.5 残存幅8.0 厚1.8～2.2			a.凹面縄目叩き 離れ砂 糸切痕 凸面粗い離れ砂 b.灰色 砂粒 白色粒 良土 c.灰色 e.良好
18-2	〃	平瓦（女瓦）	残存長7.5 残存幅10.0 厚2.5～3.9			a.凹面斜格子叩き目 離れ砂 凸面布目痕 「□(永)福寺」のスタンプ b.灰色 砂粒 小石粒 土丹粒 粗土 c.黄灰色～灰黒色 e.良好
18-3	第2面　土壙3	銅製品　銭				f.開元通寶 初鋳年621年
18-4	〃	木製品　箸	長21.6 幅0.7 厚0.5			f.両端角ばる 断面丸く削り加工
18-5	〃	用途不明木製品	長14.9 幅1.0 厚0.3			f.全体平らに、断面四角く削り加工
18-6	第2面　P3	かわらけ	(11.3)	(8.2)	2.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
18-7	第2a面下～第2b面上	かわらけ	(7.3)	(4.8)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
18-8	〃	かわらけ	(7.2)	(5.4)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色
18-9	〃	かわらけ	(7.3)	4.8	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 小石粒 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
18-10	〃	かわらけ	(7.4)	(5.0)	1.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
18-11	〃	かわらけ	(7.4)	(5.1)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 良土 c.黄橙色 f.燈明皿
18-12	〃	かわらけ	(7.4)	(5.4)	1.5	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂多し 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
18-13	〃	かわらけ	(7.7)	5.2	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色
18-14	〃	かわらけ	7.8	5.0	1.8	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 良土 c.黄灰色
18-15	〃	かわらけ	(7.9)	(6.9)	1.7	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 土丹粒 やや粗土 c.黄橙色

表10　出土遺物観察表(10)　（　）は復元値

図番号	出土面・遺構	種　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	a.成形　b.胎土・素地　c.色調　d.釉薬　e.焼成　f.備考
18-16	第2面下～第3面上	穿孔かわらけ	(7.4)	(4.8)	1.6	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 土丹粒 やや粗土 c.黄灰色 f.内底～外底にかけ穿孔あり
18-17	〃	かわらけ	(13.4)	(7.8)	3.4	a.ロクロ 外底糸切痕 b.微砂 雲母 赤色粒 白針 小石粒 良土 c.橙色
18-18	〃	龍泉窯系青磁碗	口縁部小片			b.灰白色 精良堅緻 d.灰青色半透明 厚く施釉
18-19	〃	軒平瓦（宇瓦）	顎面幅1.4 残存長2.5 残存幅4.2			b.黄灰色 長石粒 良土 d.自然灰釉 淡灰緑色半透明 顎面施釉 e.良好 硬質
18-20	〃	丸瓦（男瓦）	残存長5.3 残存幅5.3 厚1.7～2.1			a.凸面縄目叩き 微砂粒の離れ砂 縦・横位ナデ 凸面布目痕 横位ナデ 微砂粒の離れ砂 端面ヘラ削り b.灰色 砂粒 白色粒 小石粒 やや粗土 c.灰色 e.良好
18-21	〃	平瓦（女瓦）	残存長8.0 残存幅5.3 厚1.6～1.8			a.凹面離れ砂 縦位ナデ 凸面斜格子叩き目（×状を縦位連ねた施文） b.灰色 砂粒 小石粒 砂質 良土 c.灰黒色 e.良好 f.再火を受けている
18-22	〃	滑石鍋転用品	口縁部片			a.ノミ状工具による削り加工 擦痕 c.灰白色～灰黒色 f.滑石鍋の縁部を転用 内外面煤付着
18-23	〃	石製品　砥石	残存長6.3 残存幅4.0 厚0.5～1.0			c.黄灰色 f.粘版板岩製 鳴滝産 仕上げ砥
18-24	〃	銅製品　銭				f.開元通寶 初鋳年621年
18-25	〃	骨製品　こじり	長2.7 幅1.3 厚0.3			c.淡茶灰色 f.鹿角製 表面を丁寧に研磨
18-26	〃	漆器　皿	／	(6.0)	／	a.全体に黒漆塗布 内外面朱漆手描き 内面蝶 外面不明
18-27	〃	木製品　箸	長18.9 幅0.6 厚0.5			f.両端尖り気味 断面丸く削り加工
18-28	〃	木製品　箸	長20.3 幅0.6 厚0.5			f.両端尖り気味 断面丸く削り加工
18-29	〃	木製品　箸	長21.3 幅0.5 厚0.5			f.両端尖り気味 断面丸く削り加工
18-30	〃	木製品　箸	長21.5 幅0.5 厚0.4			f.両端尖り気味 断面丸く削り加工
18-31	〃	木製品　箸	長21.8 幅0.6 厚0.5			f.両端尖り気味 断面丸く削り加工

第4章　まとめ

今回の調査地点は、紅葉ヶ谷小支谷の開口部に近い場所に位置した限られた範囲での調査であったので残念ながら中世当時、この場どのような空間の拡がりを見せていたのが、発見した遺構・遺物からその様相や傾向を明確な形で読み取ることはできなかった。以下、第１面～第２ａｂ面において検出した遺構を整理し、出土遺物の組成や特徴なども含めて概ね二時期に分けて概要を述べてまとめにかえたい

第２面の様相は、無遺物層で暗青灰色粘質土の中世基盤層上面と削平岩盤面から構成されたｂ面と、その上に薄い炭化物層を挟み整地された弱い土丹版築によるａ面が検出された。検出した礎石建物の遺構内には建築材の一部や多くの遺物に混じって脆弱な有機物腐植土の堆積が認められ、建物廃棄の段階でゴミ穴的に埋められた可能性が高い。ａ・ｂ両面は堆積土層・出土遺物の観察から連続した生活面の建物と考えられる。常滑・瀬戸窯製品やかわらけなどの年代観から鎌倉時代後期、13世紀末葉～14世紀前半の要素をもつ資料が主体みて大過ないと思われる。

第１面は、第２面からこの面までの間の時期に谷戸開発に伴う大造成で発生した大小土丹塊を多量に投機したような厚く荒い整地が認められたが、面上からは調査区全体で土坑３基とピット14口などだけで遺稿密度が低く判然としない。この時期の土地利用は不明であるが、瀬戸・常滑・かわらけなどの遺物組成からみて概ね14世紀後半から15世紀前半までを主体とした年代様相が伺えよう。なお調査地点は足利公方の離反に呼応するかのように15世紀半ば以降からは人の営みが衰えたようである。

遺物の分類別出土量と出土比率について表11に示しておく。出土した遺物の総数は個体数にして604点である。そのうち、かわらけの占める割合がもっとも高く480点＝79％、続いて常滑・瀬戸などの国産陶器が60点＝10％であり、さらに貿易陶磁器は僅かに12点＝２％と少量であった。かわらけは手捏成形の資料は１点の出土もなく全て底部糸切ロクロ成形で占められていた。このことは、この地点が鎌倉時代後期からの土地開発の利用という年代的なものに由来するのであろう。また瓦類12点はすべて永福寺所用瓦の創建期（

期瓦）と、　期（寛元・宝治年観修理瓦）だけであり、　期以降（弘安年間）の瓦類は含まれていないことが注目される。

［参考文献］

宗臺秀明　2002「鎌倉出土の14世紀代かわらけ」『かながわの中世～鎌倉から小田原～　－土器様相を中心として－』神奈川考古学会

宗臺富貴子　1996「鎌倉・今小路西遺跡（御成小学校内）の瀬戸窯製品について－古瀬戸前期から後期までの出土様相－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第４輯

中野晴久　2005「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会　発表要旨・論考編』菊川シンポジウム実行委員会

藤澤良祐　1994「東海地方における窯業生産の転換期について」『土器からみた中世社会』シンポジウム実行委員会

馬淵和雄　1997「中世食器の地域性　鎌倉」『国立歴史民族博物館研究報告』第71集

横田賢次郎・森田　勉　1978「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４（のち1995年『太宰府陶磁研究－森田勉氏遺稿集－』森田勉氏遺稿集追悼集刊行会 所収）

	1　面			2ａ面			2ｂ面			総　数
	1面上	1面遺構	小　計	2面上	2面遺構	小　計	2ｂ面上	2ｂ面遺構	小　計	
ロクロかわらけ	大106 小97	大43中36 小51	149	大110 小28	大202中9 小165	312	大14小10	大5	19	480
白かわらけ		1	1		1	1				2
青磁	1		1	1	1	2	1		1	4
白磁	1		1		2	2				3
青白磁				1		1				1
緑釉					3	3				3
黄釉				1		1				1
常滑	12	4	16	18	15	33				49
瀬戸	6	1	7	1	1	2				9
山茶碗	1		1	1		1				2
瓦質製品	4		4							4
瓦				2	4	6	3	2	5	11
火鉢				2		2				2
砥石	4		4	1	3	4	1		1	9
滑石							1		1	1
銭	1	1	2		4	4	1	1	2	8
鉄製品	1	2	3							3
骨製品							1		1	1
自然遺物	1		1	2	8	10				11
									合　計	604

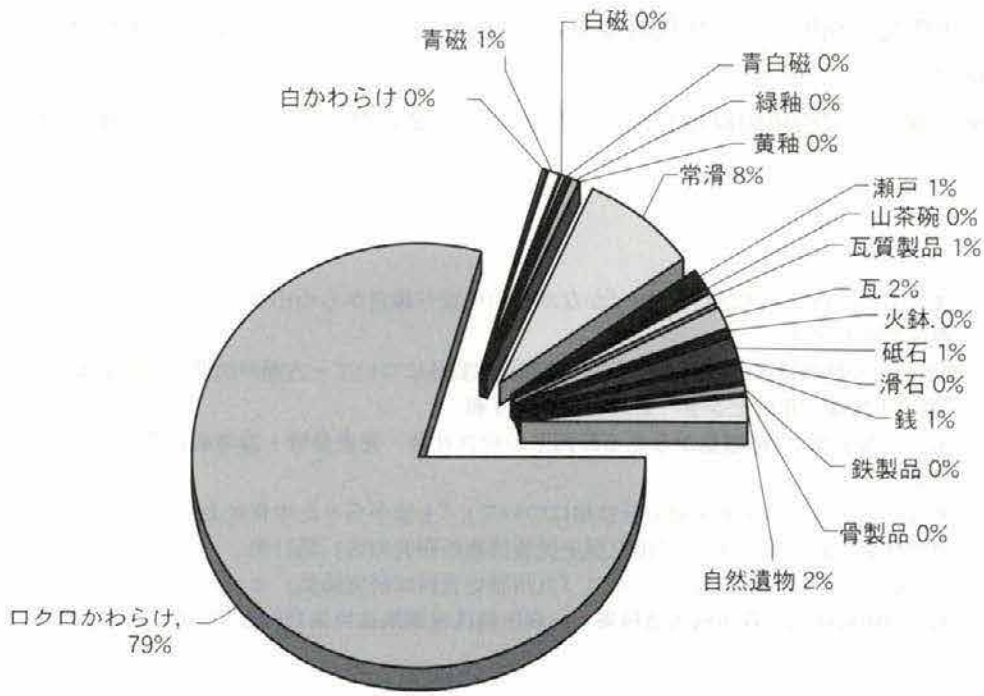
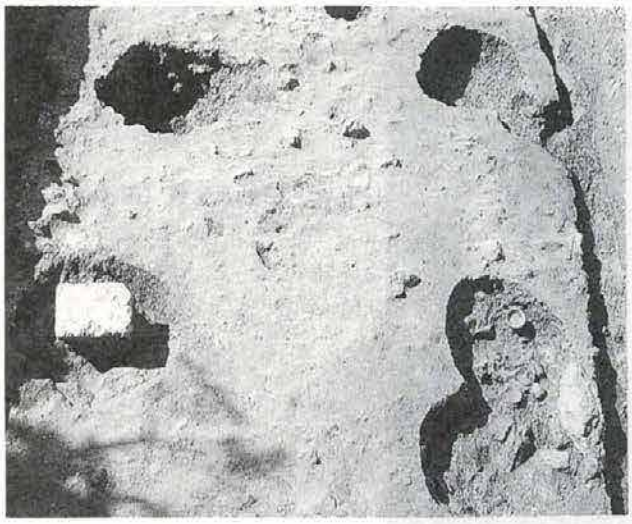


表11　遺物分類別出土数量・比率表

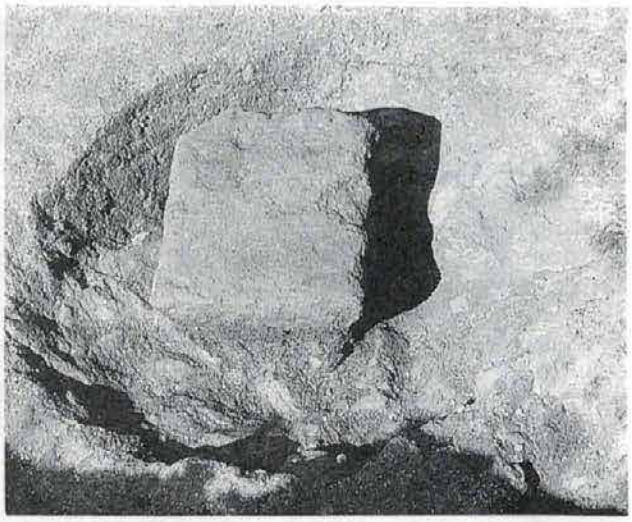
◀ a．第１面全景（南より）

b．土壙１ ▶
（東より）

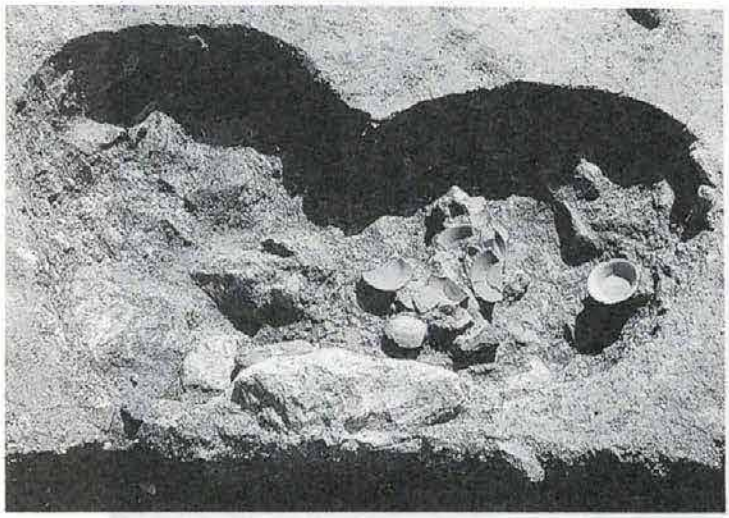
図版２



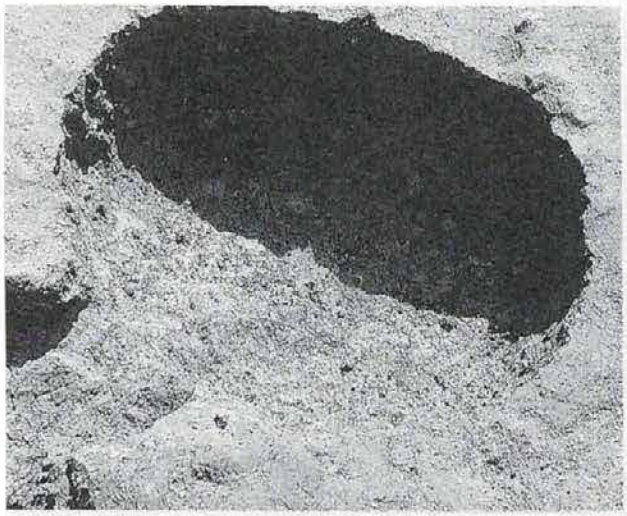
▲ a．第１面調査区北端域（北より）



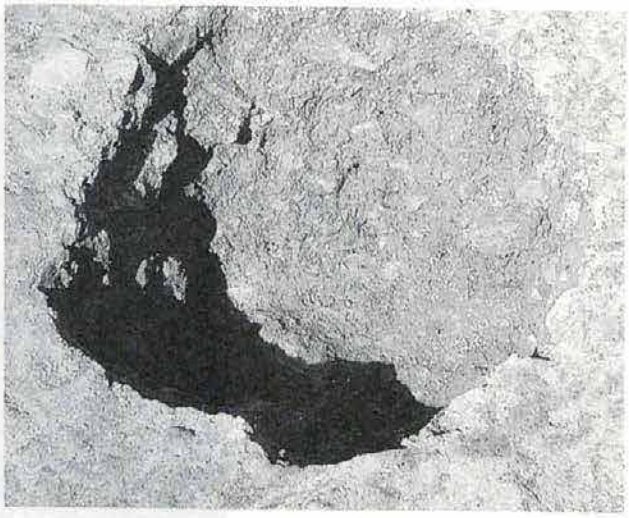
▲ b．Ｐ２（東より）



▲ C．土壙２・Ｐ３（西より）



▲ d．Ｐ４（西より）

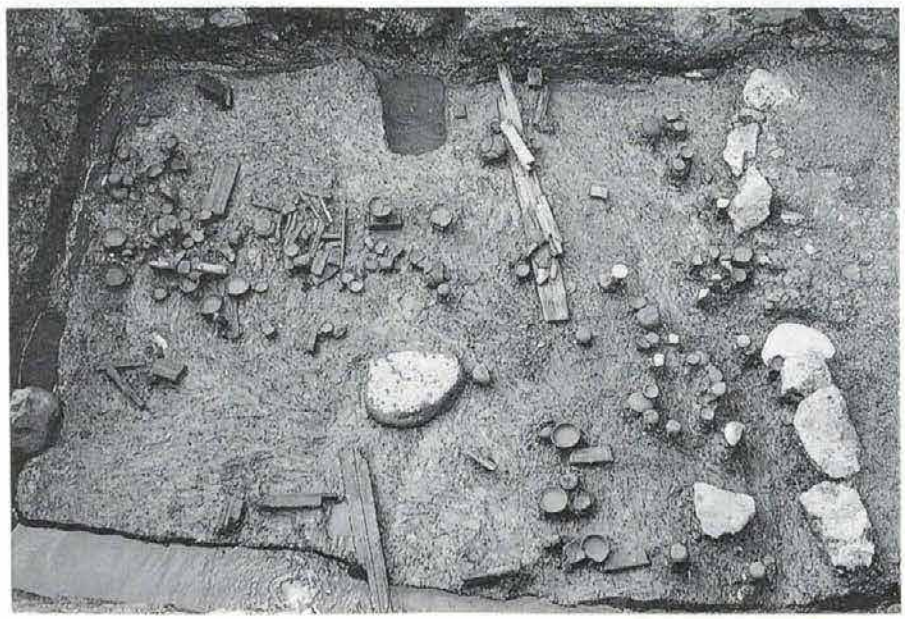


▲ e．Ｐ５（東より）

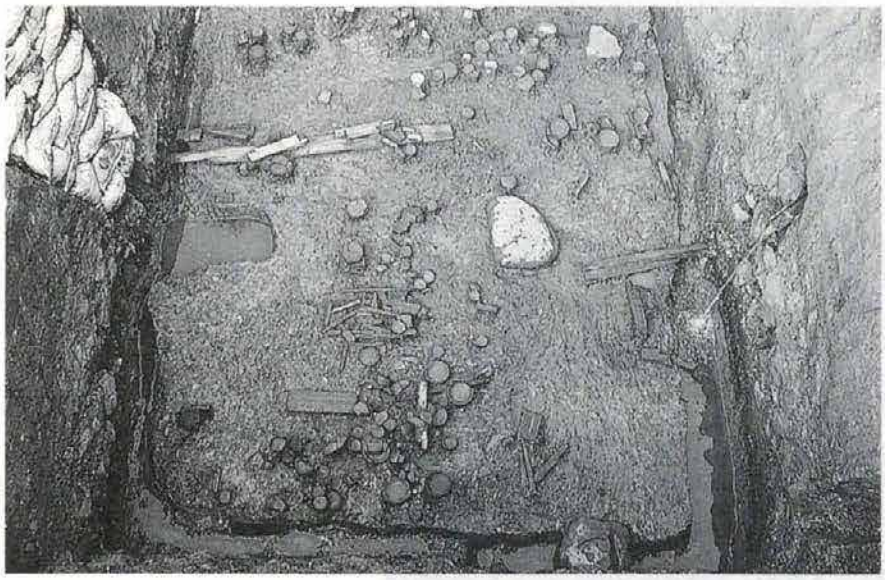
◀ a．第２ａ面全景（南より）
中央石列を境に上方が土丹地業面、下方が建物１になる。

建物１下層の検出状況 b．▶
（東より）

建物床下から建築材や遺物が出土した。

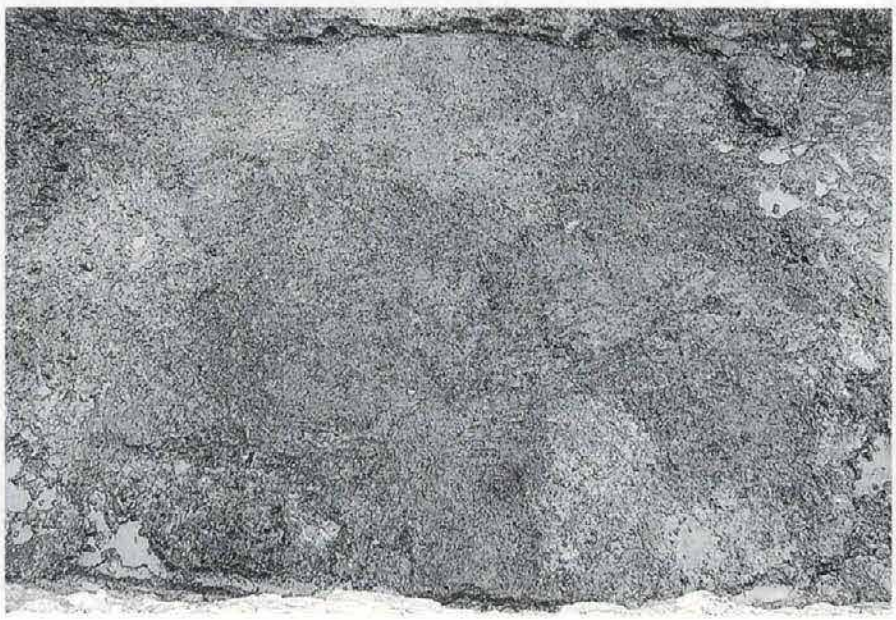


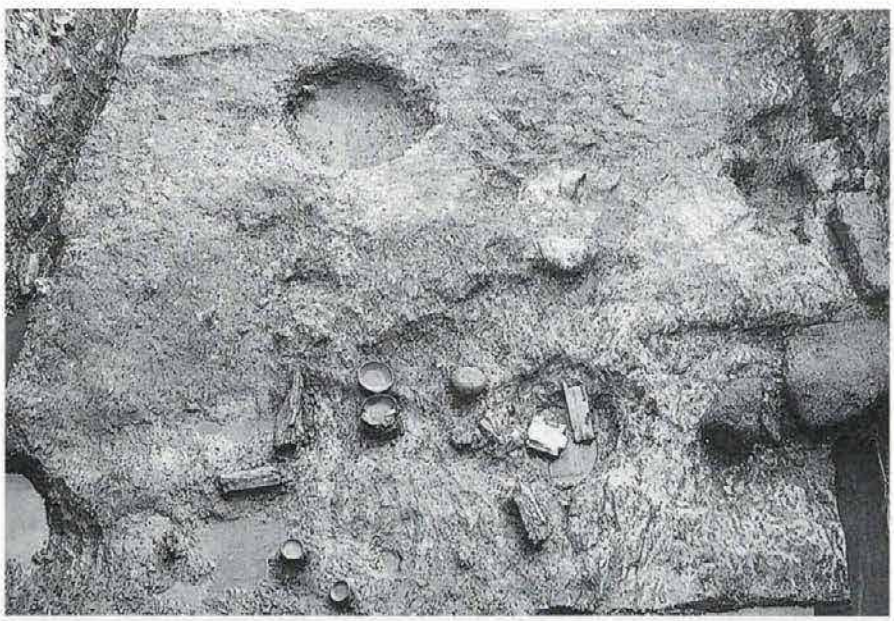
図版 4



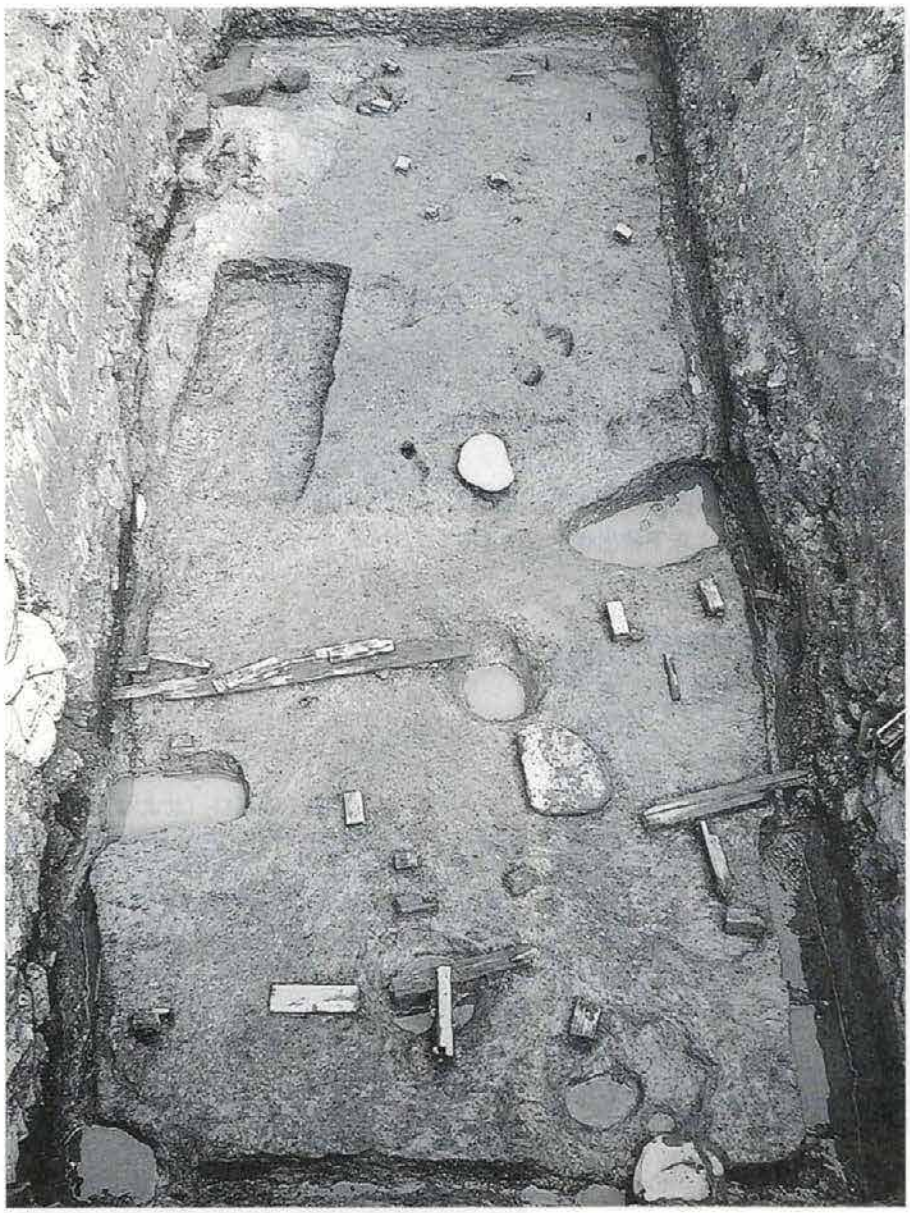
◀ a．建物１下層の検出状況
（南より）

第２ａ面上 b．▶
炭・焼土層範囲
（南より）



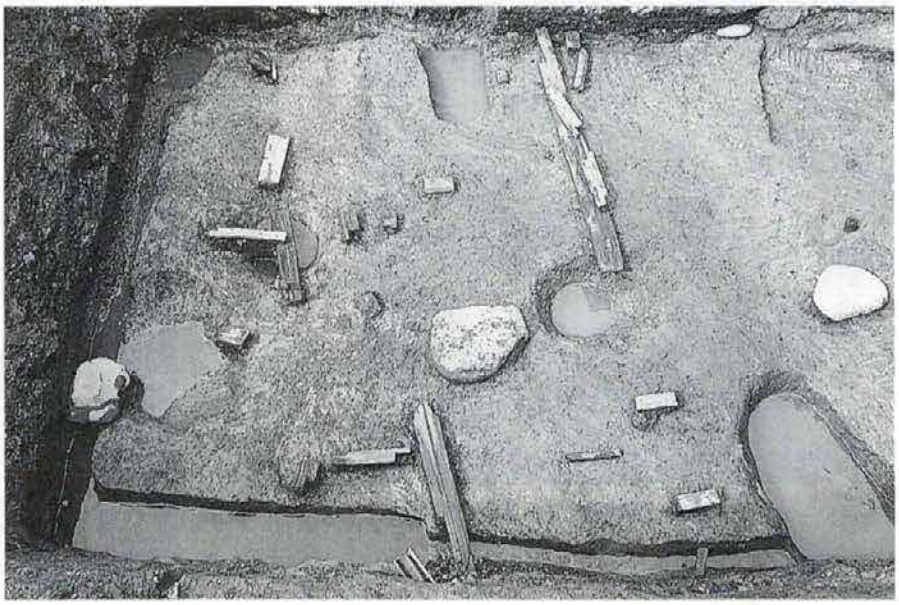


◀ c．第２ａ面落ち込み遺構
遺物出土状況
（北より）

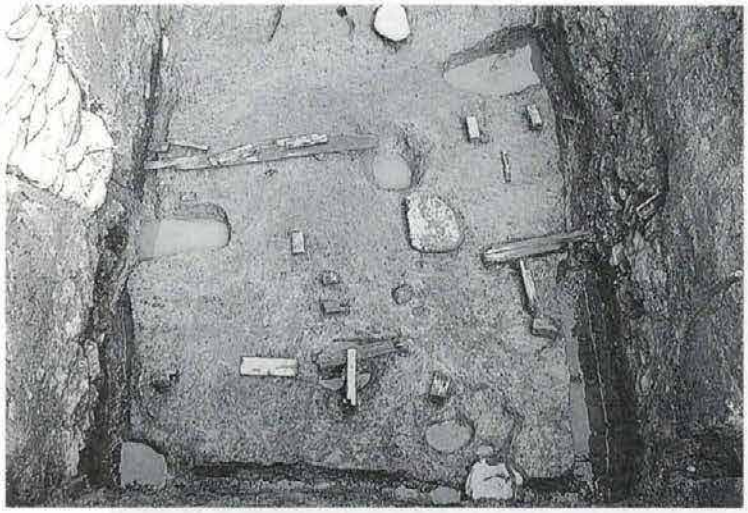


◀ a．第２ｂ面全景
（南より）

建物１床下検出状況 b．▶



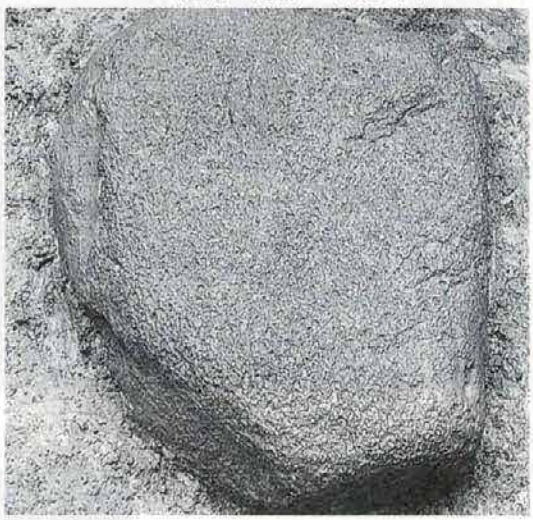
図版 6

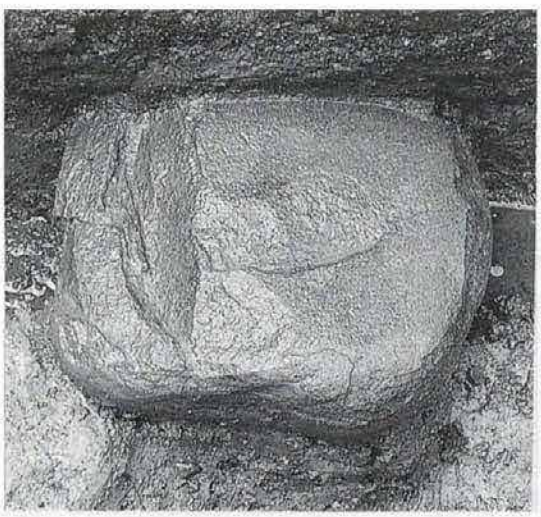


▲ a．建物１床下検出状況（南より）

▲ b．建物１礎石イ（北より）

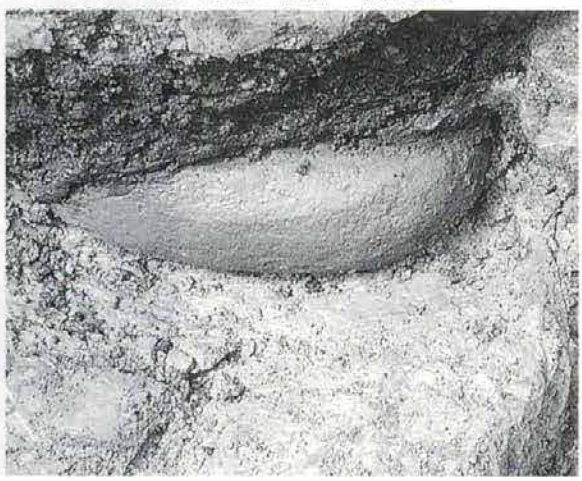
▼ c．建物１礎石ロ（北より）

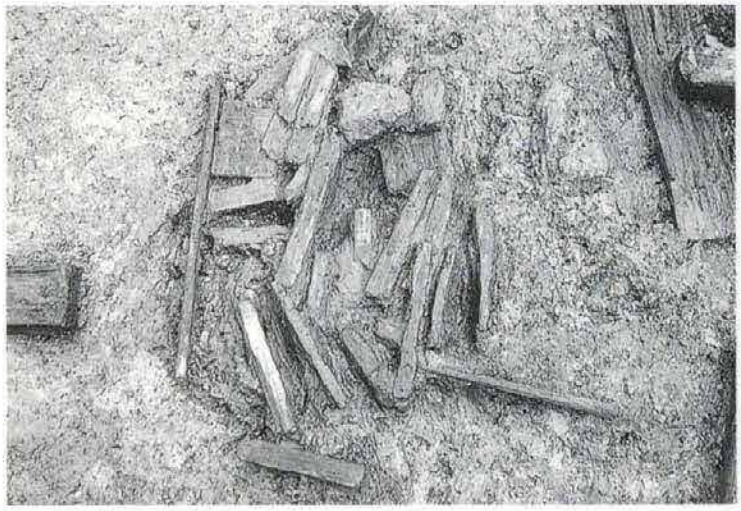




▲ d．建物１礎石ハ（北より）

▼ e．建物１礎石ニ（東より）

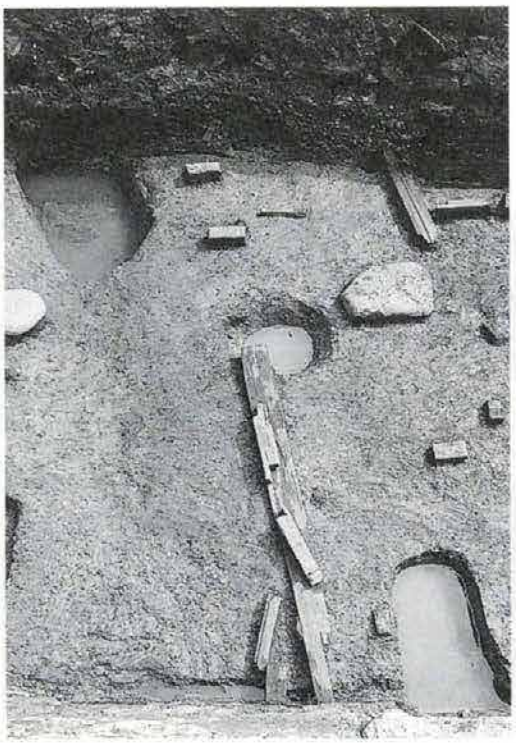




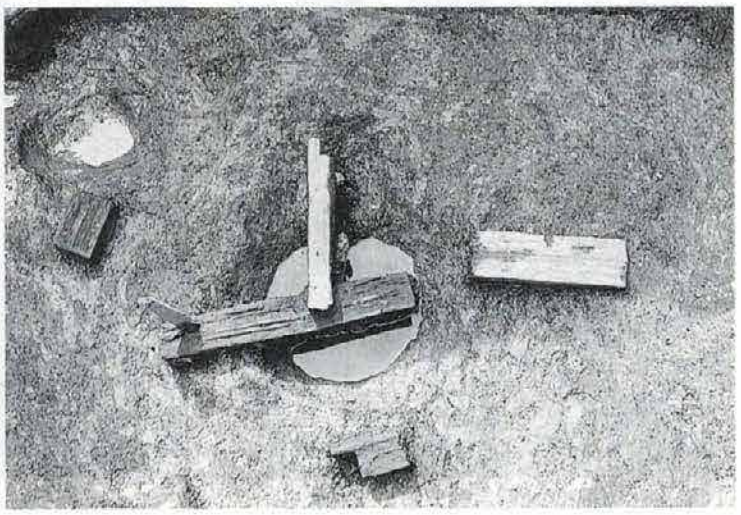
◀ a．建物１下層出土木材（西より）

建物１床下 b．▶
各柱・礎石（北より）

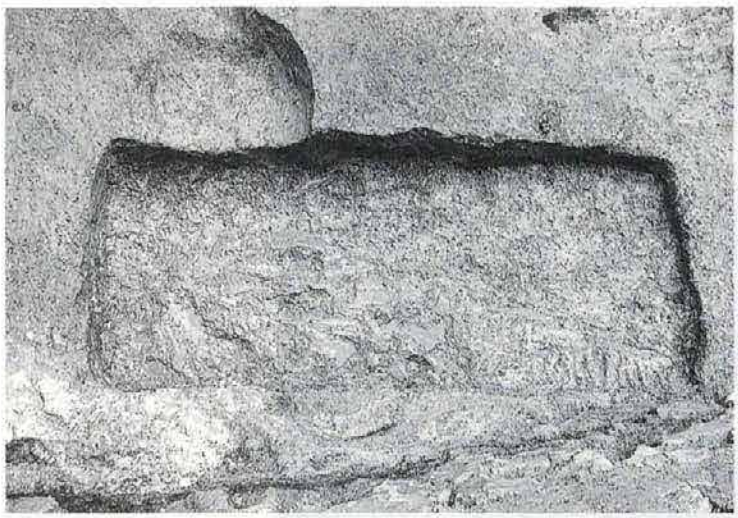
▼ c．建築材・礎石（西より）



▼ d．Ｐ１周辺（北より）



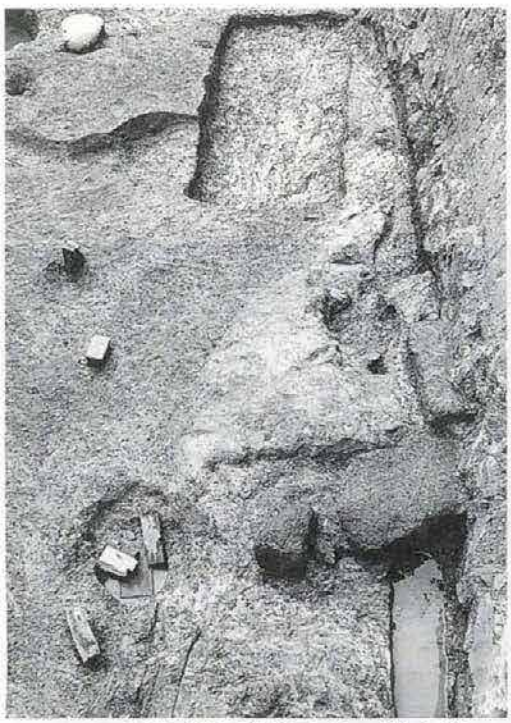
図版8



▲ a．第2b面 方形土壙（西より）

▲ b．土壙2（東より）

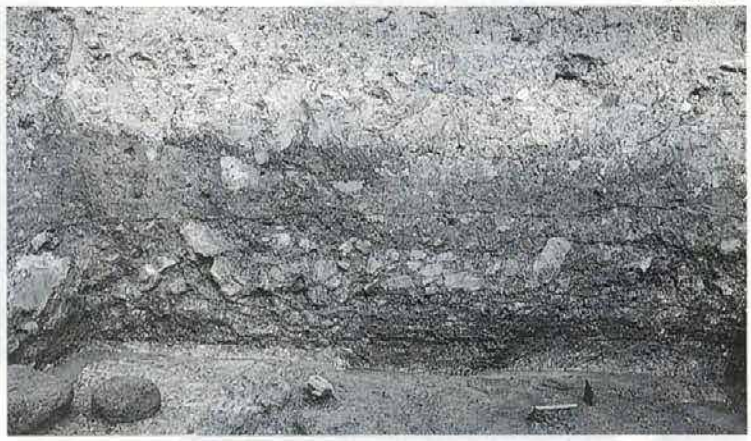
▲ c．第2a面 P1礎板出土状況（東より）

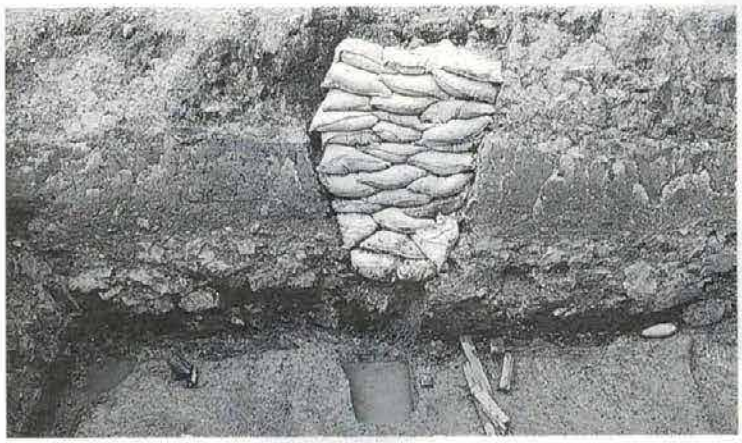


▲ d．調査区北西岩盤ライン（北より）

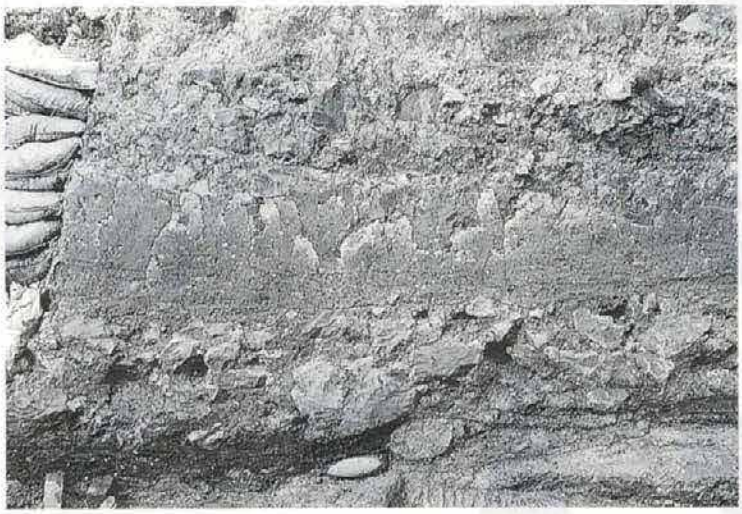
▲ e．調査区北西岩盤ライン（東より）

調査区北壁土層堆積 a. ▶





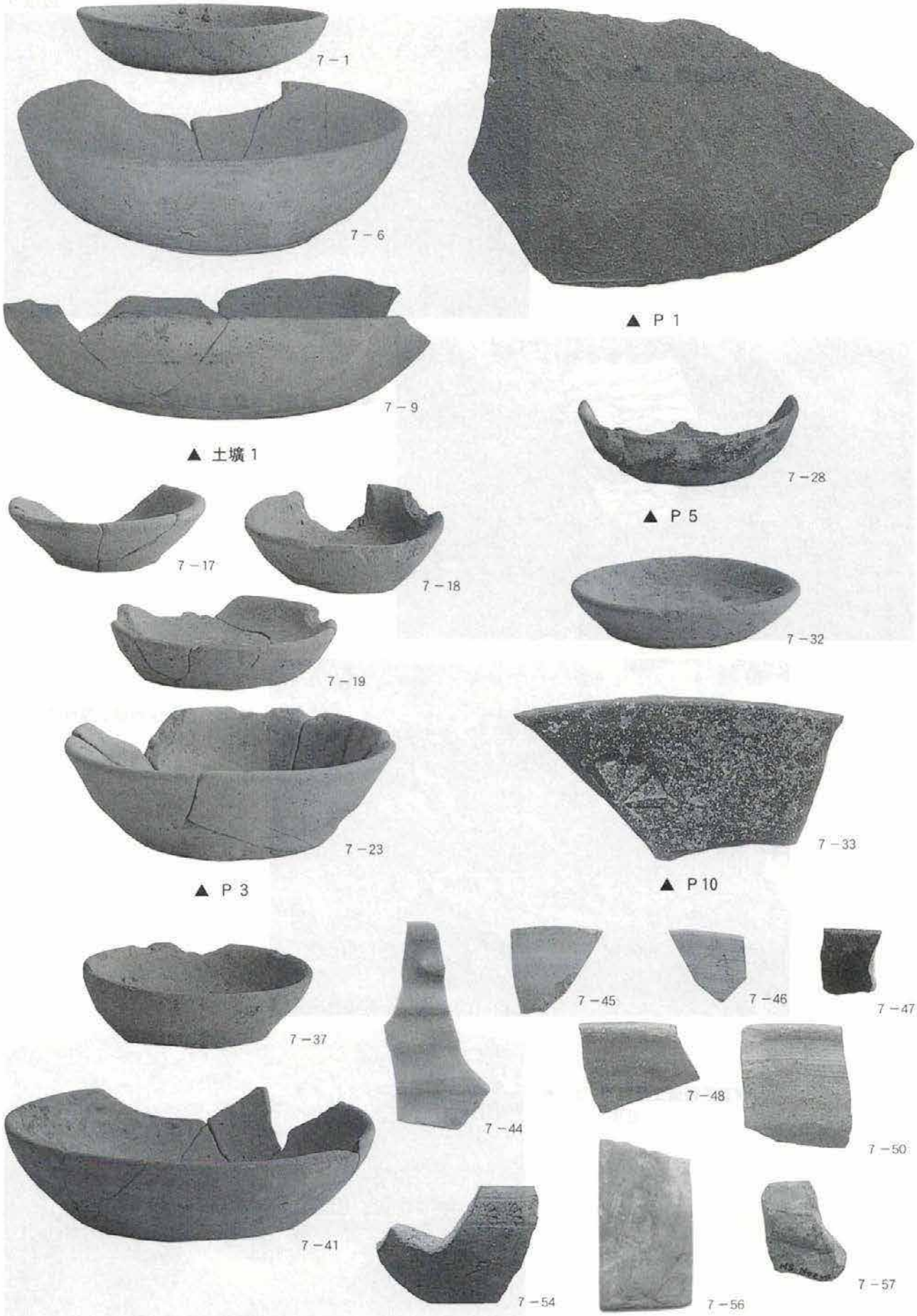
◀ b. 調査区西壁土層堆積（南側）



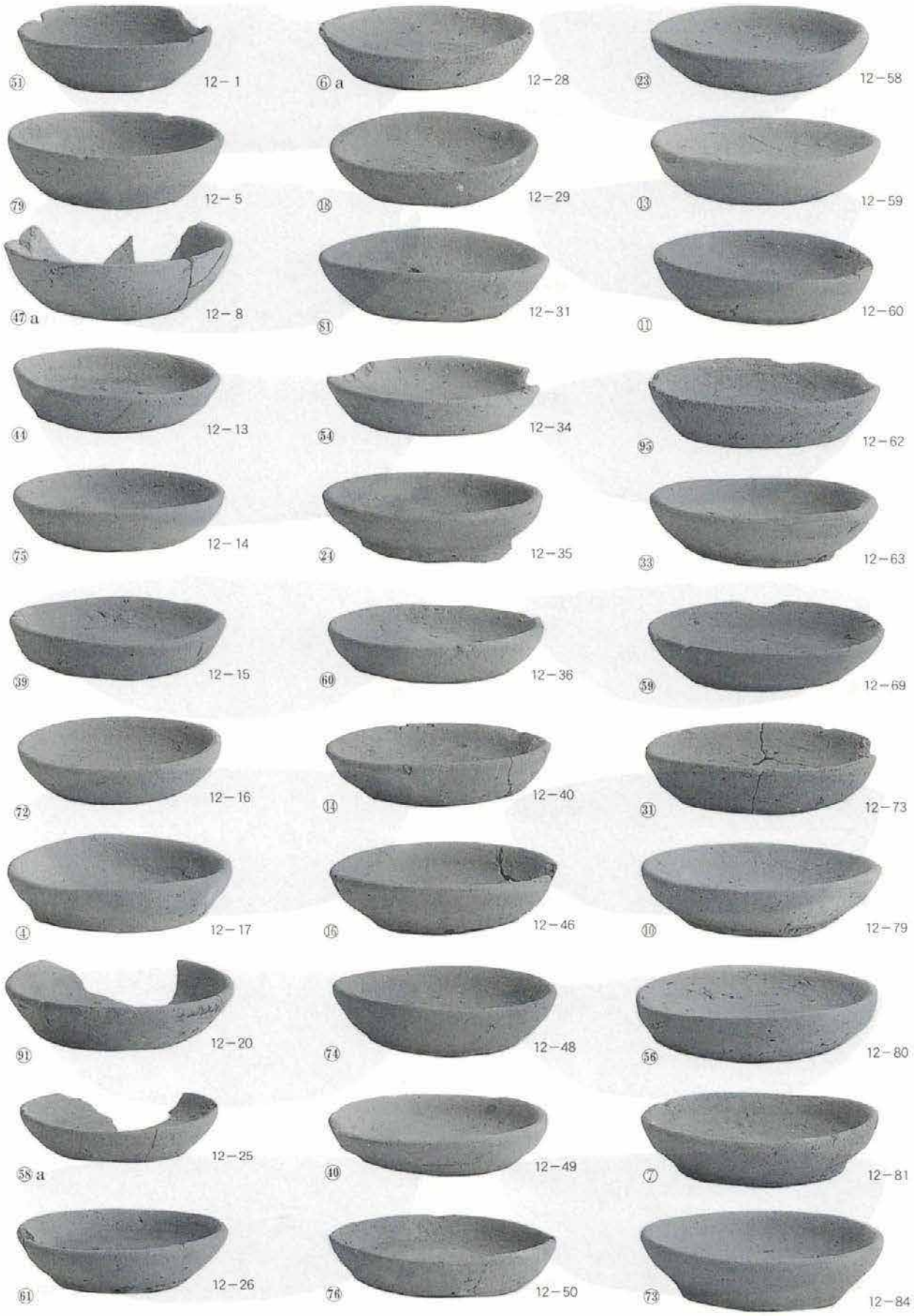
◀ c. 調査区西壁土層堆積
（中央）

調査区西壁土層堆積 d. ▶
（北側）

図版10

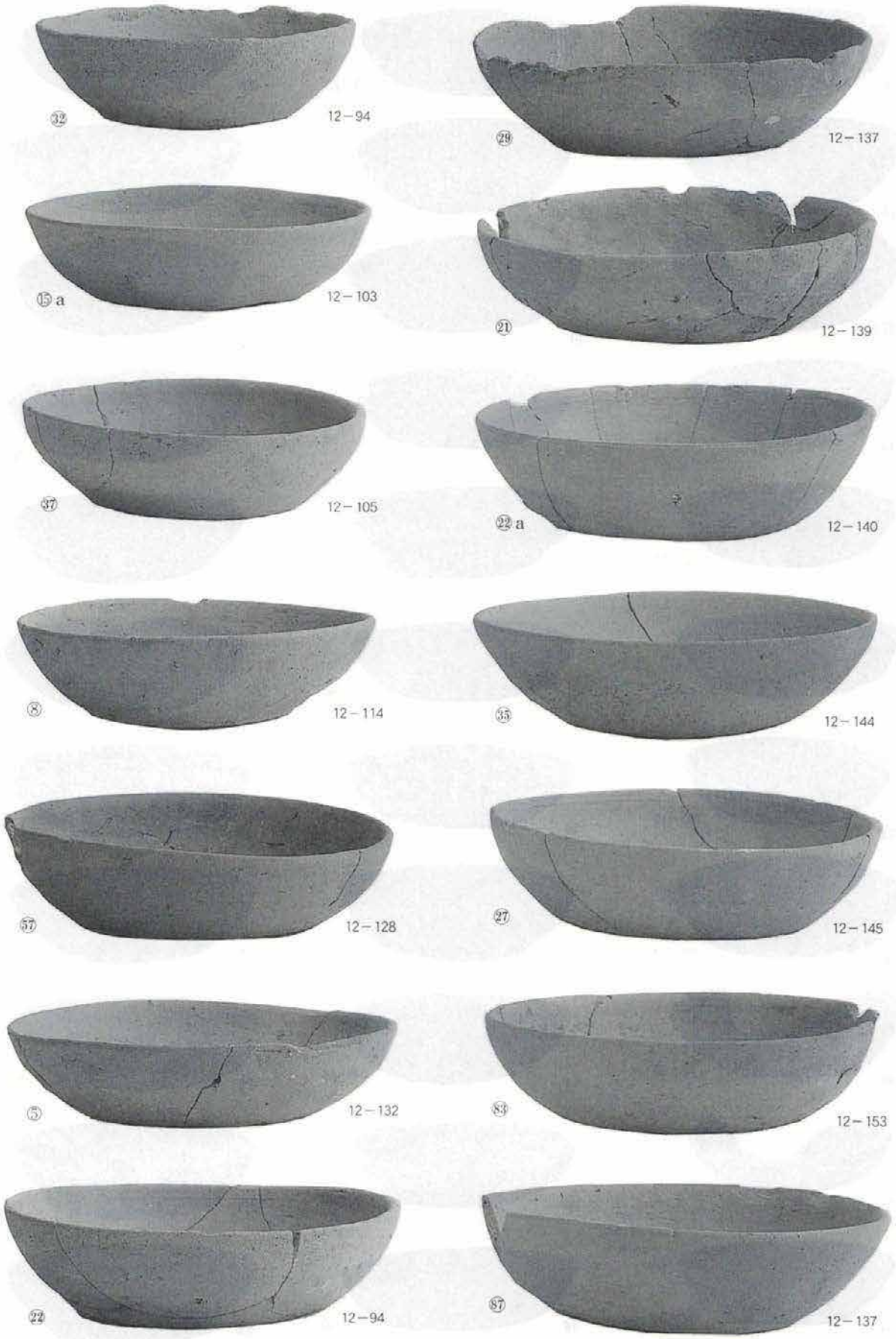


a、第１面土壙１、Ｐ１・３・５・10面上及び包含層出土遺物

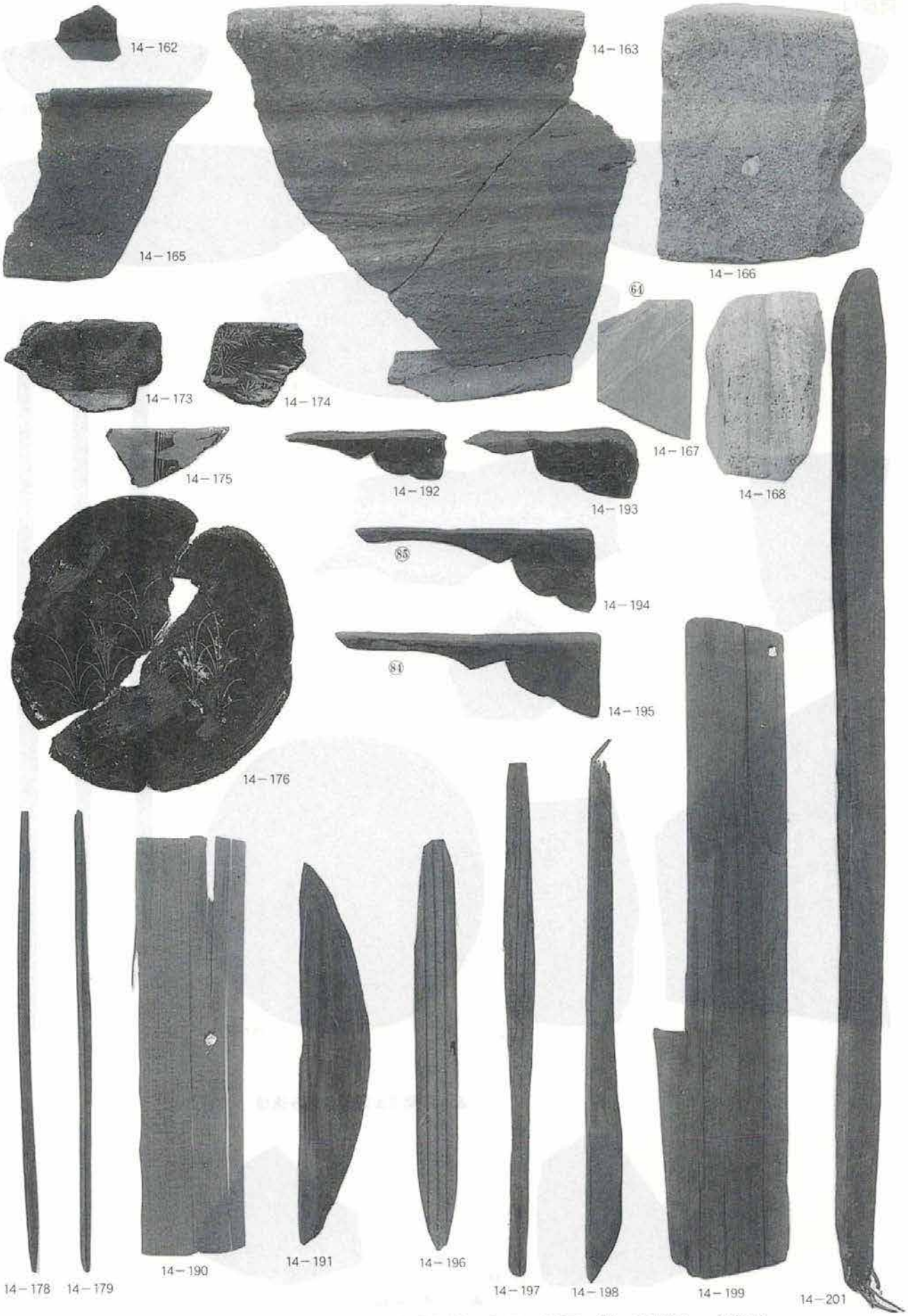


a、第２面建物１(1)かわらけ小皿

図版12



a、第２面建物１(2)かわらけ大皿



a、第２面建物１(3)瀬戸小壺、常滑捏鉢、女瓦、砥石、銭、漆製品、木製品

図版14

15－4

15－5

15－9

15－19

15－21

15－27

15－31

15－32

15－33

42

43

44

15－34

15－35

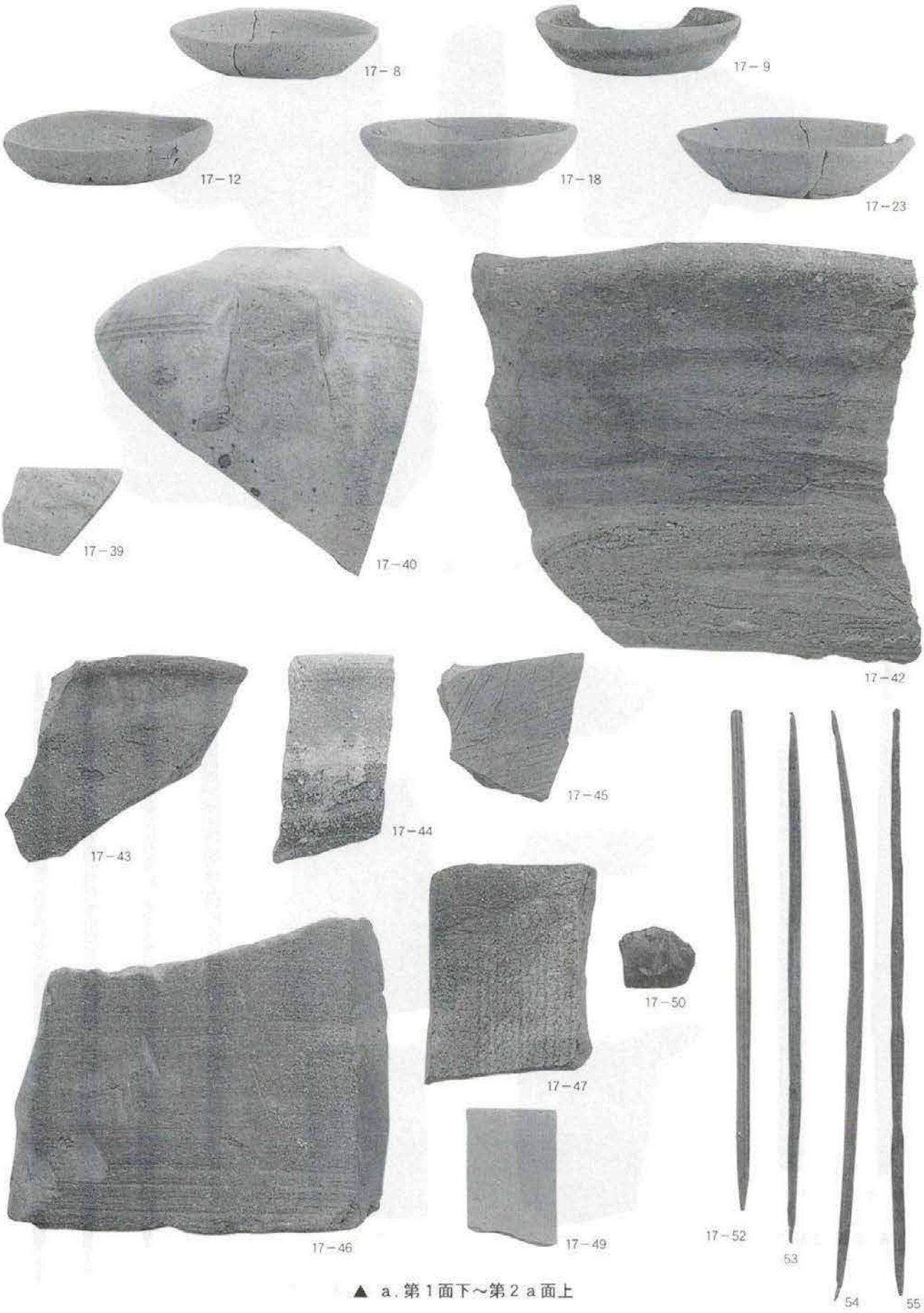
15－37

▲a．第２a面落ち込み遺構

15－34

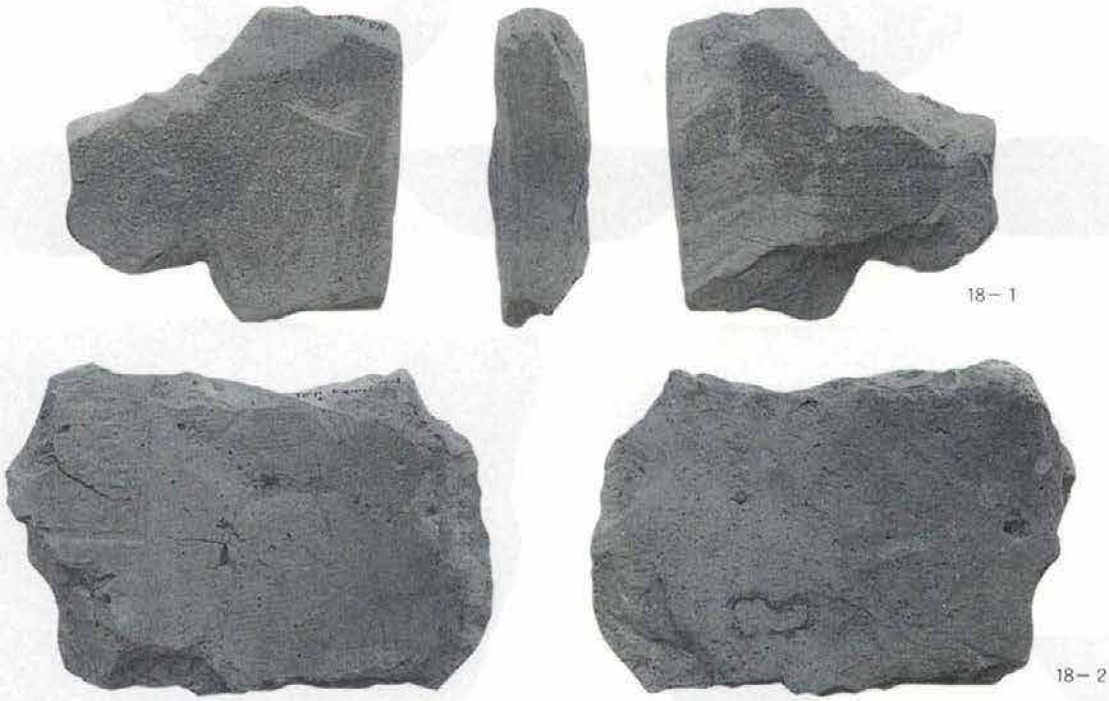
15－49

▲b．第2a面 P 1

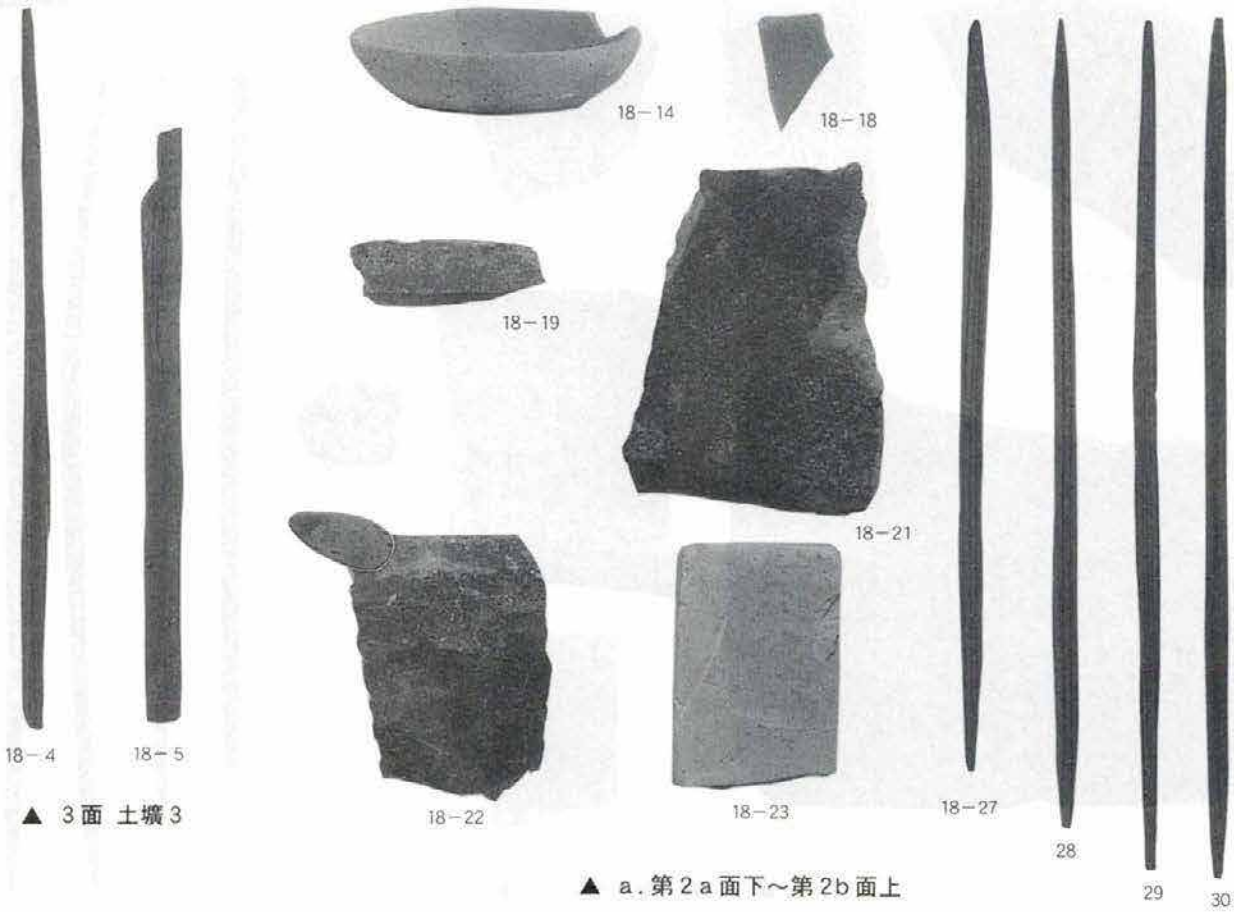

17－8
17－9
17－12
17－18
17－23
17－39
17－40
17－42
17－43
17－44
17－45
17－46
17－47
17－49
17－50
17－52
53
54
55

▲ a. 第１面下～第２ａ面上

図版16



▲ a. 第2b面 土壙2



▲ 3面 土壙3

▲ a. 第2a面下～第2b面上

佐助ヶ谷遺跡（No. 203）

佐助一丁目496番5

例　言

1．本書は鎌倉市佐助一丁目496番５に所在する佐助ケ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳：鎌倉市No.203遺跡）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、個人専用住宅建設に伴う緊急調査として実施した。調査面積は56.00㎡である。
3．現地調査は平成17年３月７日から平成17年５月28日にかけて実施した。
4．現地調査及び資料整理の体制は次のとおりである。

（現地調査）

調査担当者	齋木秀雄
調　査　員	三ツ橋正夫、鯉渕義紀
調査補助員	伊藤博邦、森山千加、
調査作業員	（社）鎌倉市シルバー人材センター

（資料整理）

担　当　者	斎木秀雄、降矢順子
調　査　員	三ツ橋正夫、伊藤博邦、加藤千尋、岡田慶子、村松彩美、三浦　恵、

5．本書に使用した写真は、現地写真は主に調査員が、遺物写真は三ツ橋が撮影した。
6．本書に使用した挿図の縮尺は以下のとおりである。

遺構全体図	1/300
個別遺構/図	1/60
遺物実測図	1/3

7．本報告にかかわる出土遺物と記録類は鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第１章　遺跡概観……63
　第１節　調査地点と歴史的環境……63
　第２節　周辺の調査……65
　第３節　調査の経過……65
　第４節　堆積土層と調査軸設定……66
第２章　検出された遺構と遺物……68
　第１節　１期の遺構と遺物……68
　第２節　２期の遺構と遺物……68
　第３節　３期の遺構と遺物……73
　第４節　４期の遺構と遺物……74
　第５節　５期の遺構と遺物……78
　第６節　６期の遺構と遺物……82
　第７節　７期の遺構と遺物……85
第３章　まとめ……88
　第１節　遺構の年代と性格……88
　第２節　佐助川について……88

図目次

図１　周辺の調査地点……64
図２　堆積土層……66
図３　調査配置図……67
図４　１期遺構全体図……69
図５　１期遺構・面出土遺物……70
図６　２期遺構全体図……70
図７　２期遺構・面出土遺物……71
図８　３期遺構全体図……72
図９　３期遺構（土丹列）……73
図10　３期遺構（常滑溜り）……73
図11　３期出土遺物……74
図12　４期遺構全体図……75
図13　４期遺構（1）……75
図14　４期遺構（2）……76
図15　Ⅲ区（かわらけ溜り）出土遺物……76
図16　４期出土遺物……77
図17　５期遺構全体図……78
図18　５期遺構（1）……79
図19　５期遺構（2）……79
図20　５期遺構（3）……79
図21　５期遺構出土遺物……80
図22　６期遺構全体図……81
図23　６期遺構（1）……81
図24　６期遺構（2）……82
図25　６期出土遺物（1）……83
図26　６期出土遺物（2）……84
図27　７期遺構全体図……86

表　目　次

表１　遺物観察表（1）……89
表２　遺物観察表（2）……90

図　版　目　次

図版１　１．Ⅰ区１期（東から）……91
２．Ⅱ区１期遺構2(南から)……91
３．Ⅱ区２期(南から)……91
４．Ⅱ区２期……91
５．Ⅰ区２期全景（南から）……91
６．Ⅰ区３期遺構13……91
図版２　１．Ⅱ区２期……92
２．Ⅱ区２期……92
３．Ⅰ区３期(南から)……92
４．Ⅰ区３期遺構14（南から）……92
５．Ⅰ区３期遺構14（西から）……92
６．Ⅰ区６期（南から）……92
図版３　１．Ⅰ区４期全景(南から)……93
２．Ⅱ区５期全景(南から)……93
３．Ⅰ区５期全景(南から)……93
４．Ⅰ区６期(南から)……93
５．Ⅰ区６期土坑遺構40(西から)……93
６．Ⅰ区２期……93
図版４　１．Ⅰ区６期全景(南から)……94
２．Ⅱ区６期全景（西から）……94
３．Ⅱ区５期遺構50……94
４．Ⅱ区６期建物遺構59･58(北から)……94
５．Ⅱ区６期(南から)……94
６．Ⅱ区５期遺構50板壁（北西から）……94
図版５　１．Ⅱ区６期遺構57(東から)……95
２．Ⅱ区６期遺構57板壁検出状況(東から)……95
３．Ⅱ区６期遺構58礎板検出状況（南から）……95
４．Ⅱ区６期遺構59礎板アップ(東から)……95
５．Ⅱ区６期遺構54……95
６．Ⅱ区６期遺構54（西から）……95
図版６　１．Ⅱ区６期遺構57板壁(南から)……96
２．Ⅰ区６期全景(北から)……96
３．Ⅲ区かわらけ溜り(北から)……96
４．Ⅲ区（東から）……96
５．Ⅱ区６期木杓子、形代(鳥形)……96
６．Ⅱ区６期形代(鳥形)……96
図版７　出土遺物（１）……97
図版８　出土遺物（２）……98

第１章　遺跡概観

第１節　調査地点と歴史的環境

JR鎌倉駅西口から西へ直線距離300mほどで、丘陵に達する。この丘陵は源氏山山系から南に連なる丘陵で、ここから稲村ガ崎にかけていくつもの谷が形成されている。最初に形成されるのが佐助ケ谷（さすけがやつ）で、谷は南北に長く南に開口している。谷の中はさらに幾つもの支谷が形成され、これらの支谷にも、いかにも鎌倉らしく名称がついている。谷の奥には佐助稲荷と銭洗い弁天があり、他に奥からそのまま山頂に登ると、梶原方面から鎌倉に入る化粧坂（けはいざか）の南側面に出る。谷奥からは、佐助稲荷辺りを源流として佐助川が流れでる。この川の、中世での流路は明確でないが、現在の流れは谷の西側山裾に沿って流れ、開口部付近で急激に東に向きを変えて、鎌倉中央図書館脇から裁許橋下を抜けて、蛇行しながら下馬の近くで滑川に合流している。

本調査地点は、佐助ケ谷内の西側丘陵に形成された一つの支谷内に位置している。この支谷は西側の開口部から数えて二つ目の支谷である。現況に即して説明すると、佐助ケ谷の開口部は東が鎌倉中央図書館辺り、西が鎌倉市立御成中学校の南辺りになる。佐助川が流れを東に変えるのは、鎌倉市立御成中学校下の十字路辺で、調査地点は鎌倉税務署の背後の支谷開口部左、佐助川沿いに位置する。

「佐助ケ谷」の谷名の由来は判然としないが、『吾妻鏡』には単に佐助という地名で現れる。この佐助が現在の佐助ケ谷を言っているかは確かではない。佐助稲荷神社は、社伝によれば佐助稲荷の神霊が翁の姿で現れて佐殿源頼朝に旗挙げを勧めて助けたので佐助になったという。これが谷名になったという説もある。しかし、一般的には佐助ケ谷と文献に書かれる佐助は同一との解釈のようだ。その初見は寛元四年(1246)６月27日条で「入道大納言家頼家、越後守時盛佐助第に渡御し給ふ。」とあり、さらに寛元五年(1247)正月30日条では「越後入道勝圓佐助亭の後山に光物飛行す。」とある。このことから、13世紀中頃には、佐助に北条越後守時盛の屋敷があり、なにやら光を発する物体が裏山に飛んできたようだ。

また、『鎌倉大草子』には応永二十三年（1416)10月２日条に「犬懸入道上杉禅秀氏憲管領源持氏の伯父満隆をかたらひ反逆の時、持氏は、大倉御所より、上杉憲基の佐助亭に遁れ来り、満隆禅秀が兵を防ぎ戦はる。終に不叶して、持氏も憲基も極楽寺口へかかり、片瀬・腰越を打過、伊豆の国清寺へ落行給ふ。」とある。これは、いわゆる上杉禅秀の乱の記事であるが、これによって15世紀初頭に佐助に上杉憲基の屋敷が在ったことがわかる。

国清寺はもと高雄の文覚の居所であったが上杉憲顕によって禅寺に改められたという。『鎌倉大草紙』などでは上杉憲顕の建立で、亡父憲房の菩提のためと考えられる。『新編鎌倉誌』では佐助ケ谷内の「寺脳伊豆の韮山に同名の寺があり、この寺は康安年間（1361）に畠山国清が創建し、応永年間（1368）に上杉憲顕が亡父の菩提のために中興したといわれる。佐助ケ谷国清寺は、前出の上杉禅秀の乱の時禅秀の放火により消失している。ちなみに上杉憲基（山内上杉家）は上杉憲顕の子孫にあたる。

このように、本地点の位置する佐助ケ谷は13世紀中頃には記録に登場し、それを裏付ける遺構や遺物も出土している。

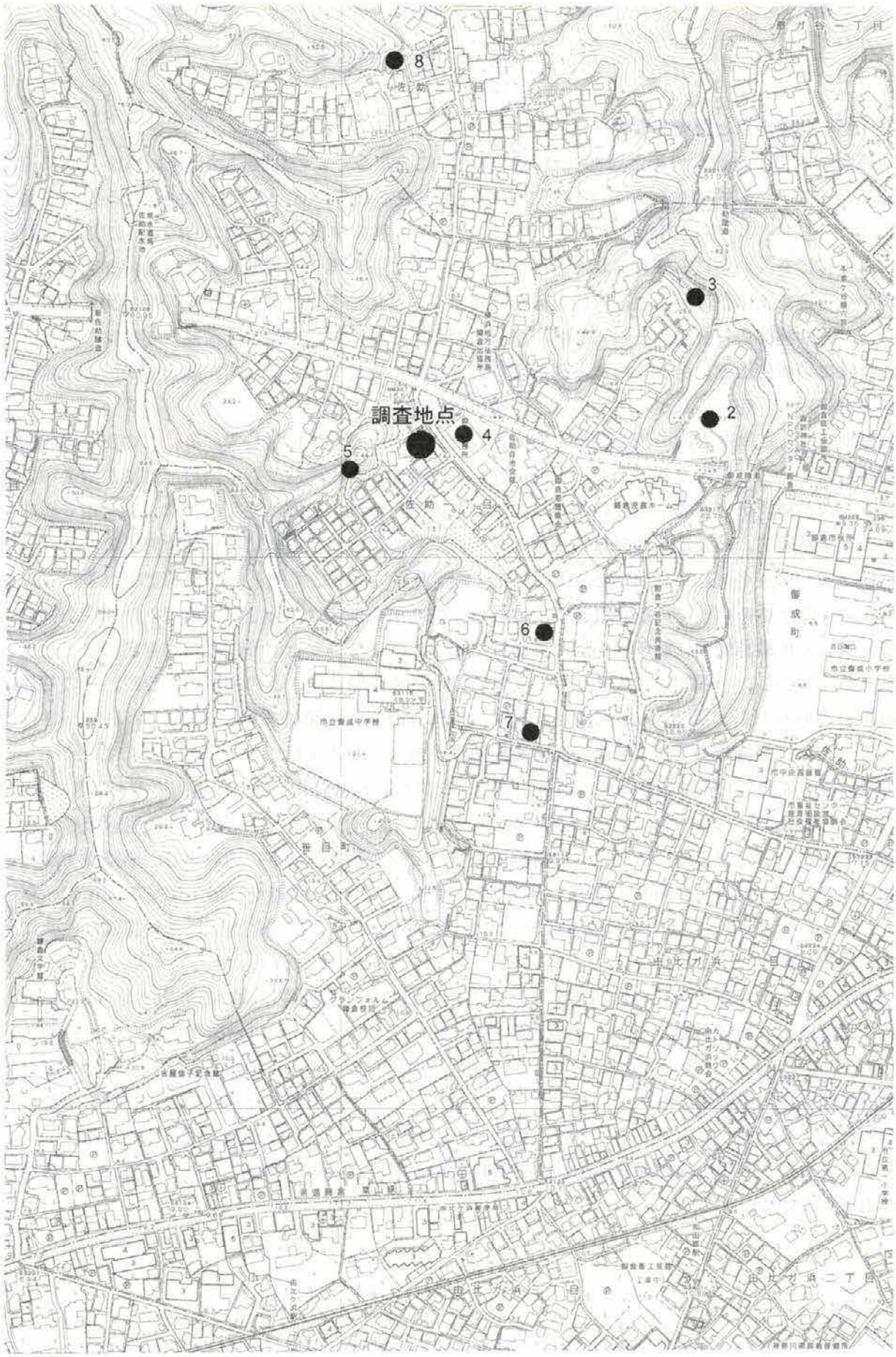


図１　周辺の調査地点

第２節　周辺の調査

本地点は、佐助ケ谷の西側山稜が形成している、開口部から二番目の支谷内に位置している。この支谷は多くの木製品や板壁建物が確認された『佐助ケ谷遺跡』（註１）の真後ろにあたり、強い関係が推測される地域であるが、鎌倉中央図書館前から銭洗い弁財天に向かう市道とその山側に沿って流れる佐助川で分断されている。調査地点は支谷の開口部左側山裾部分に当たり、調査対象地は佐助川に面している。

佐助ケ谷内の調査は近年増加している。山裾に残されたやぐらを除いても、1990年には本地点と佐助川と市道を挟んだ前面に位置している鎌倉税務署用地で発掘調査が行われ、寺院の一角と推定される空間が確認され、板壁建物群と多量の木製品が確認されている。（註３）この調査では、現在鎌倉税務署の背後を流れている佐助川は中世では鎌倉税務署の北側を流れていることが確認されている。佐助川については、鎌倉税務署の100m南の調査（註４）と平成18年の確認調査の結果から、流域の最大幅が20m前後であったことが判明している。

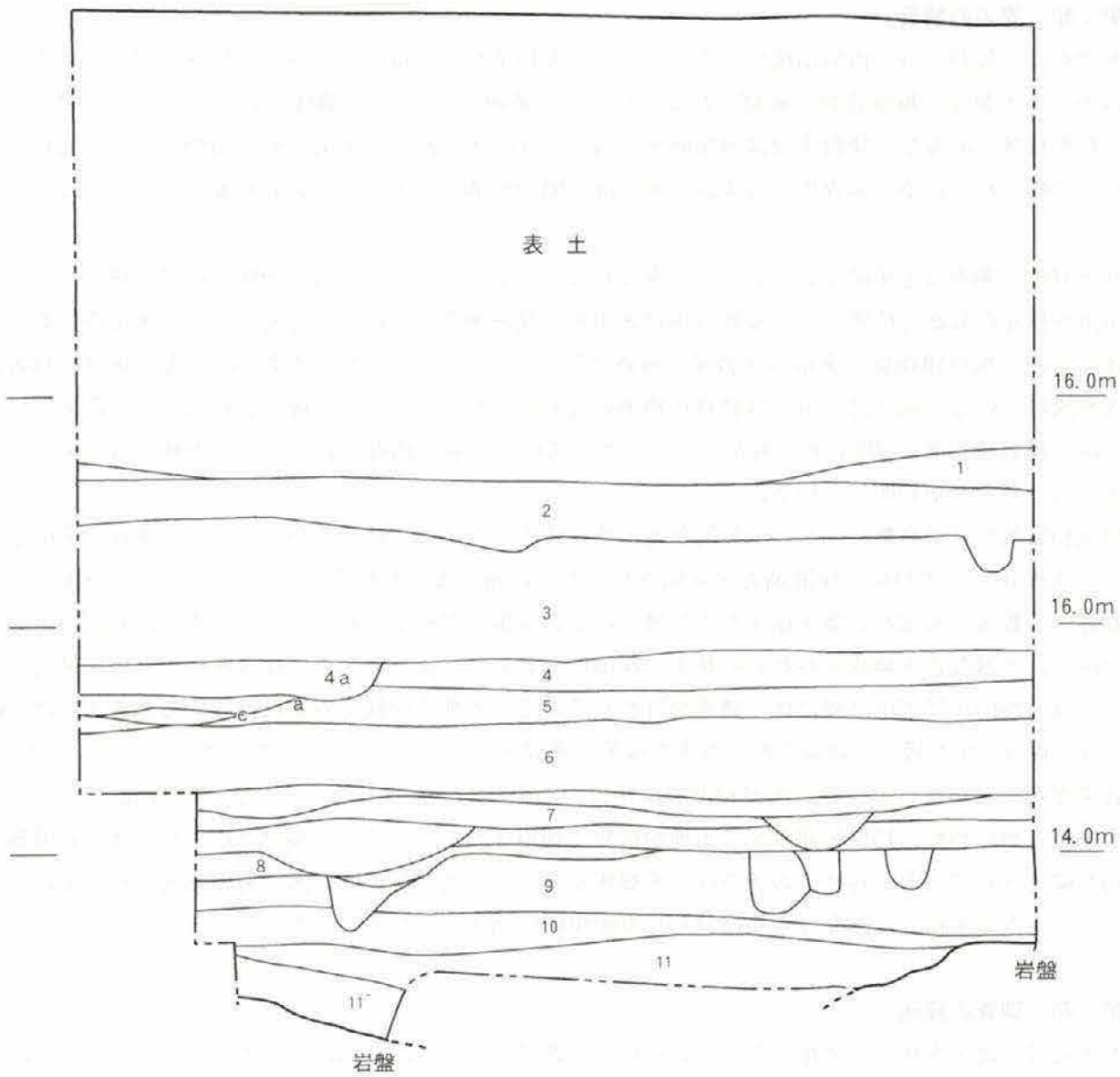
鎌倉税務署前から鎌倉駅に向かい、佐助ケ谷の東丘陵をトンネルで抜けるが、このトンネルの手前左側の支谷は1986年と2003年に発掘調査が実施され、すでに報告書が刊行されている。（註１）谷奥の削平岩盤面から数多くの常滑の甕を据えた土坑群と粘土の採掘坑が検出されている。谷奥の開発は13世紀中頃以降に、土器などを焼成するための粘土の採掘から始まったようだ。この地点西側の尾根を越えた支谷内では、2004年に宅地造成に伴う調査が行われている。本地点同様に谷奥に位置する調査区では、雛壇造成に伴う石垣が幾つも確認され、谷内が頻繁に造成・活用されていたことが判明している。しかし、調査深度に制約があって、谷の開発初期の様相はつかめなかった。（註２）また、開口部近くではいくつかの調査が行われ、13世紀前半から土地が活発に利用されていたことを裏付けるように多くの遺構や遺物が確認されている。各地点の調査成果を概観すると、佐助ケ谷の開口部一帯の開発が13世紀前半に行われ、谷内の本格的な開発はやや遅れた13世紀中頃に始まっているようだ。

第３節　調査の経過

本地点は佐助川を挟んで宅地になっているが、実際は市道とは約３mの比高差があり、市道からは佐助川を越えると階段を上って宅地に入るようになっていた。市道とほぼ平坦なのは隣地に接して作られた駐車場だけである。対象地北の市道から見ると、駐車場の床が道路と平坦で海抜14.70m前後、宅地は17.70m前後で道路から３mほど高くなっている。

確認調査は、宅地部分と駐車場部分で行った。駐車場部分では床のコンクリートを壊して調査を行った。その結果、宅地部分では地表下約２mで包含層を確認し、駐車場部分ではコンクリートの下から包含層とかわらけ集中遺構を確認した。

調査は切り土部分を対象としたが、駐車場の屋根と側壁が隣地の石垣やブロック塀と接して構築され、これを壊すことは危険な状態であった。そのため調査では宅地部分の造成土約２mを機械で取り除いて調査を行ったが、発生土を仮置きするために半分ずつの調査になった。これは調査順にⅠ区、Ⅱ区とした。また、堆積土層が隔絶している駐車場部分はⅢ区として個別に扱った。しかし、床は壊せたものの天井や側壁は存在したままで、十分な調査はできなかった。



1、 近世土　断面セクション所々確認されている。
2、 明褐色土　土丹粒を主体とし、1～3cm大の土丹をやや多く含む、上位に5cm大の土丹多い。
3、 明褐色土　10～40cm大の黄色土丹塊を充填する、下位に大型目立つ。
4、 明褐色土　5～15cm大の黄色土丹塊　を30%含む、所々上位に炭土。
4a. 暗褐色土　土丹粒を多く含み、炭化物かわらけも多く含む、きめ粗い。
b. 暗褐色土　土丹粒を多く含み、炭化物かわらけも多く含む、きめ粗い。
c. 暗褐色土　土丹粒を多く含み、土丹角を少量含む。
5、 暗黄褐色土　5～15cm大の黄色土丹塊を50%含む、土丹粒多く含む。
6、 黄褐色土　5～15cm大の黄色土丹塊を30%に破砕土丹を多く含む。やや崩れやすい。
7、 黒褐色土　黄色土丹粒を微量、混在する。粘質土でしまりあり。
8、 黒褐色土　黄色土丹粒を微量、混在する。粘質土でしまりあり。
9、 青灰色土　5cm大の青色土丹60%と破砕土丹で充填する。
10、 青灰色土　青色土丹粒、土丹角が敷きつめられている面である。
11、 灰色褐色土　青色土丹（3cm大）10%と少々、きめ細かくしまりあり。
11'、 青灰色土　青色土丹（10cm大）60%含む。

図2　堆積土層

第4節　堆積土層と調査軸設定

発掘調査で確認された堆積土層は、中世の版築面などを一括して一つの層（3層・13.5m～15.4m）として捉えれば、大まかには5層である。最上層は現代造成土（1層）でその下に15cmほどの厚さに近世耕作土（2層・15.4m～15.6m）が堆積している。最も下はⅠ区西側で確認された岩盤で、その斜面に5cm大の青灰色土丹粒を多く含む青灰色粘土層（5層）、5cm大の青灰色土丹を密に含む青灰褐色粘土層（4層）が堆積する。この二つの層は自然堆積で出土遺物はまったく見られない。本地点で最初に

図３　調査配置図

生活面が築かれるのは4層上面（７面・13.5m）である。この時に、岩盤の削平とそれに合わせた版築面が造られている。

調査で使用したグリッドは、国家座標軸に沿った1m方眼を敷地全体に掛けたもので、x軸（南北方向）は南から北に、y軸（東西方向）は西から東に算用数字をｘ１、ｙ１のように附した。したがって、x軸は真北を示している。

測量基準点の移設に当たっては、調査地北側の道路に所在する三級基準点1A796（X-72747.434, Y-31043.903）と10E30（X-72723.469, Y-31157.983）の２点間関係を基にトラバース測量によって座標値を算出した。グリッドラインに当てた国家座標値は、世界測地系（日本測地系2000）第Ⅸ系に準じている。

註１　大三輪龍彦・手塚直樹・田畑佐和子『佐助ケ谷遺跡-佐助一丁目620番地点-』1989年　佐助ケ谷遺跡発掘調査団
註２　瀬田哲夫『佐助ケ谷遺跡』年　有限会社鎌倉遺跡調査会
註３　大三輪龍彦・齋木秀雄他『佐助ケ谷遺跡-鎌倉税務署用地-』1993年　佐助ケ谷遺跡発掘調査団
註４　齋木秀雄・三橋勝「佐助ケ谷遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告』　鎌倉市教育委員会

第２章　検出された遺構と遺物

本地点では、前章で触れたようにⅠ～Ⅲ区に区分した調査区で確認した遺構や遺物について説明を加える。Ⅰ区とⅡ区の検出面は合成して示したが、合成に当たっては検出順に付した名称に従ったが、確認レベルや堆積土などを考慮して、若干の帰属面変更を行った。当然のように、調査区間にベルトを残して調査をするため、掘り下げ時にレベルに注意しても版築面が確認されないこともあり、検出面にレベル差が生じてしまったこともある。Ⅲ区の駐車場内は土層が明確に把握できないため、遺構のレベルでⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区と合致させた。

合成した各期（面）は夫々に示した。両調査区間に残されたわずかな幅のベルトと調査する季節の差が、木片の残り難いⅠ区とⅡ区との堆積土の微妙な違いに加味されて、検出される遺構に反映した。結果として、調査区間のベルトを挟んで検出できない遺構が生じてしまった。

第１節　１期の遺構と遺物

Ⅰ区の２面とⅡ区の１面及び２面を1期の遺構として集めた。海抜はⅠ区で15,40m前後、Ⅱ区で15,30m前後を測る。Ⅰ区の１面は、厚さ約２mの現代造成土、厚さ25cmの近世耕作土を除いた面で、部分的な確認にとどまり遺構は確認されていない。そのため図示はしていない。

検出した遺構はⅠ区で柱穴12口、南西隅で検出した横板周辺のかわらけ集中（遺構13）、Ⅱ区で柱穴２口のみで、配置も規則的でなく、建物も復元できなかった。

遺構13

Ⅰ区の南西隅で確認された横板とその周辺に見られた版築面を本名称で扱った。板壁建物の可能性もある。板は火災に遭ったようで炭化している。幅４cm、厚さ３mmほどで、調査区内で30cm弱検出され調査区外に延びている。これ以外に、杭などは確認できなかった。一応、遺構として扱っているが、面上に廃棄された板と版築面である可能性も残る。

９点が図化できた。１から10は糸切りかわらけ大皿。１，４，５の口縁部には煤が付着し、灯明皿として使用。８と９は口縁部を打ち欠き、９の内底面には漆が付着している。10は鉄製品の野杳である。

１期出土遺物

遺物は６点が図化できた。図５－１は糸切りかわらけ小皿、２は糸切りかわらけ大皿。３は常滑片口鉢の口縁部、４は鍔釜の口縁部、５と６は鉄製品の釘である。

第２節　２期の遺構と遺物

Ⅰ区とⅡ区の３面を２期遺構群として扱った。海抜はⅠ区・Ⅱ区ともに14,80m前後。Ⅰ区は東側四分の一ほどを除き良好な版築面が広がり、検出遺構は無い。Ⅱ区では土丹列Ａと土丹列Ｂが平行し、その間が溝状に窪んでいる。Ⅰ区の調査では、版築面が見られない東壁近くでは大型土丹が並んでいるようにも見えた。結果として、これがⅡ区の土丹列Ａの延長部分であった可能性が高い。

土丹列

Ⅱ区で確認された２列の土丹列を溝として扱った。土丹列Ａは方形に切り出した鎌倉石を並べ、その間に土丹で埋めた構造で160cmの長さが確認できた。土丹列ＢはＡから40cm～50cm離れ、Ａと並行関係にある。用材は大型の土丹で粗雑である。170cmの長さに確認され、24cm離れた調査区北西隅の土丹まで続くと思われる。両土丹列の間は16cmほど深くなり、部分的に横板の痕跡が確認できた。土丹の内側に横板が配され、溝として使用されていた可能性がある。溝幅は30cmほどと思われる。軸方向はN-50°-E。

底面は明確ではないが、南に向かって流れていたと考えられる。図化できる出土遺物はない。

2期出土遺物

33点が図化できた。図7－11は常滑壺の頸部から胴部、12と13は瓦質手焙りの口縁部から胴部、14から35はかわらけ皿。14から24は小皿で15、16、21は口縁部に煤が付着し、灯明皿としての使用痕あり。22、23は穿孔のある皿で22は底面中央に1孔、23は底面中央に2孔ある。24は比較的器高が高く、口縁部に向かって丸みをおびる。

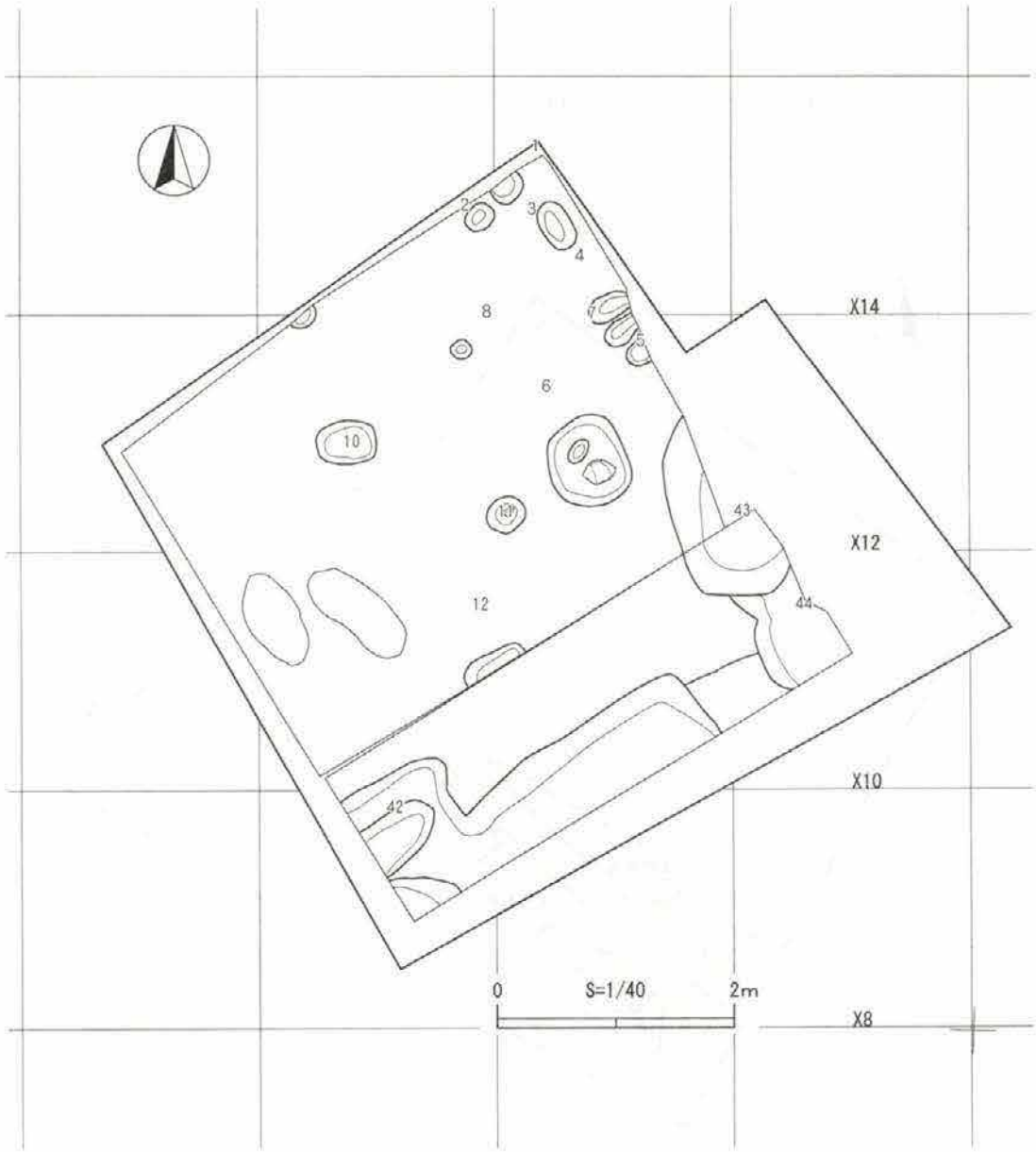


図4　1期遺構全体図

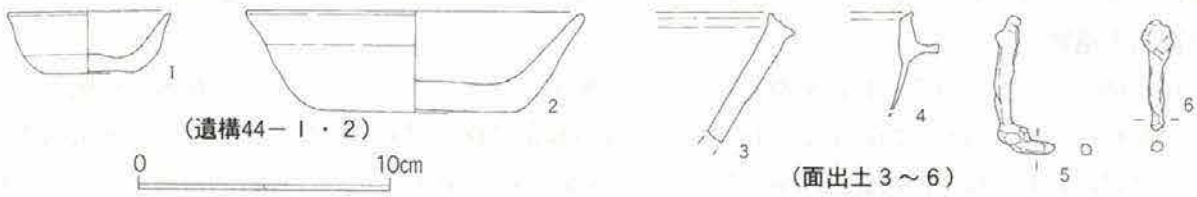


図5　1期遺構・面出土遺物

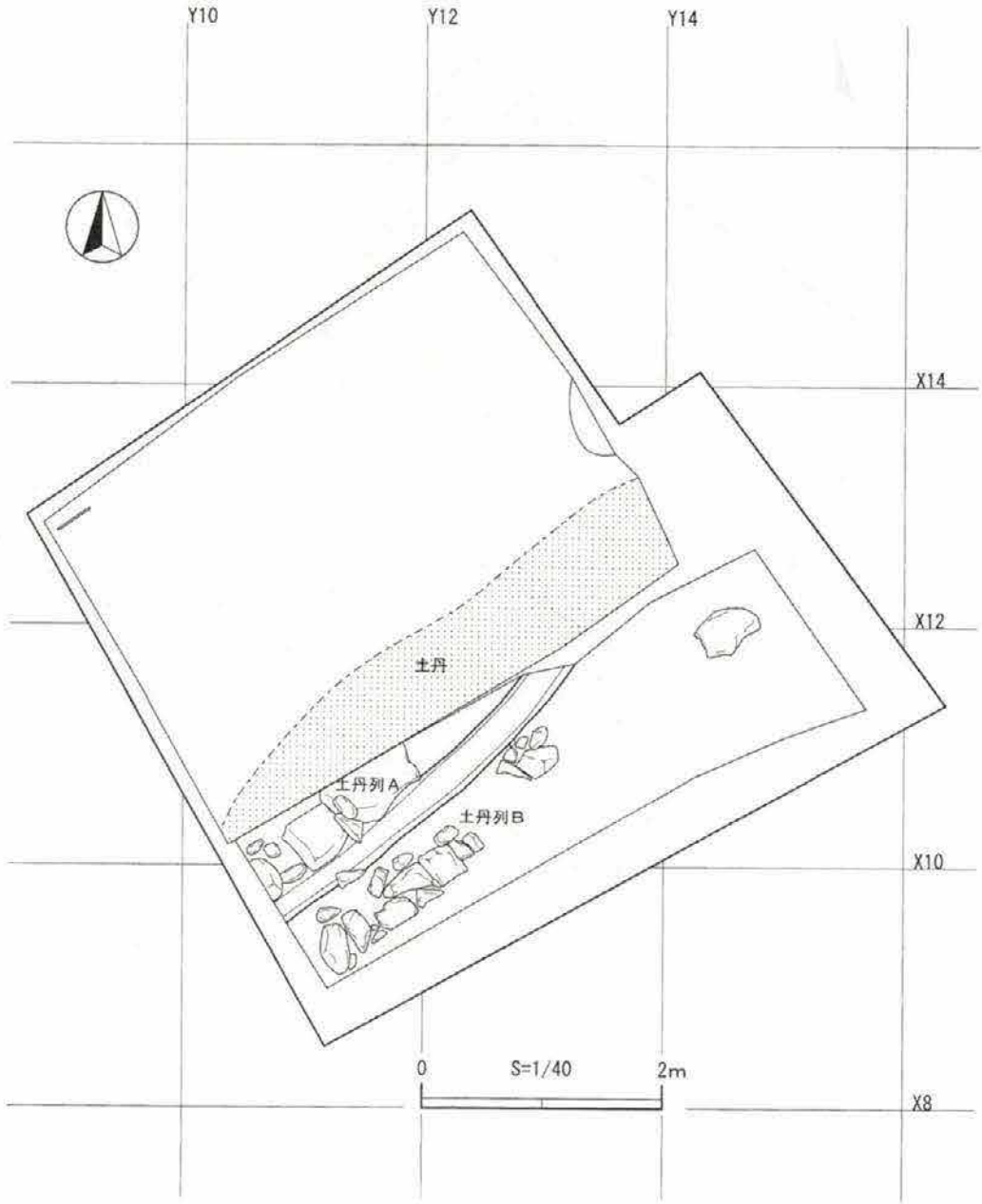


図6　2期遺構全体図

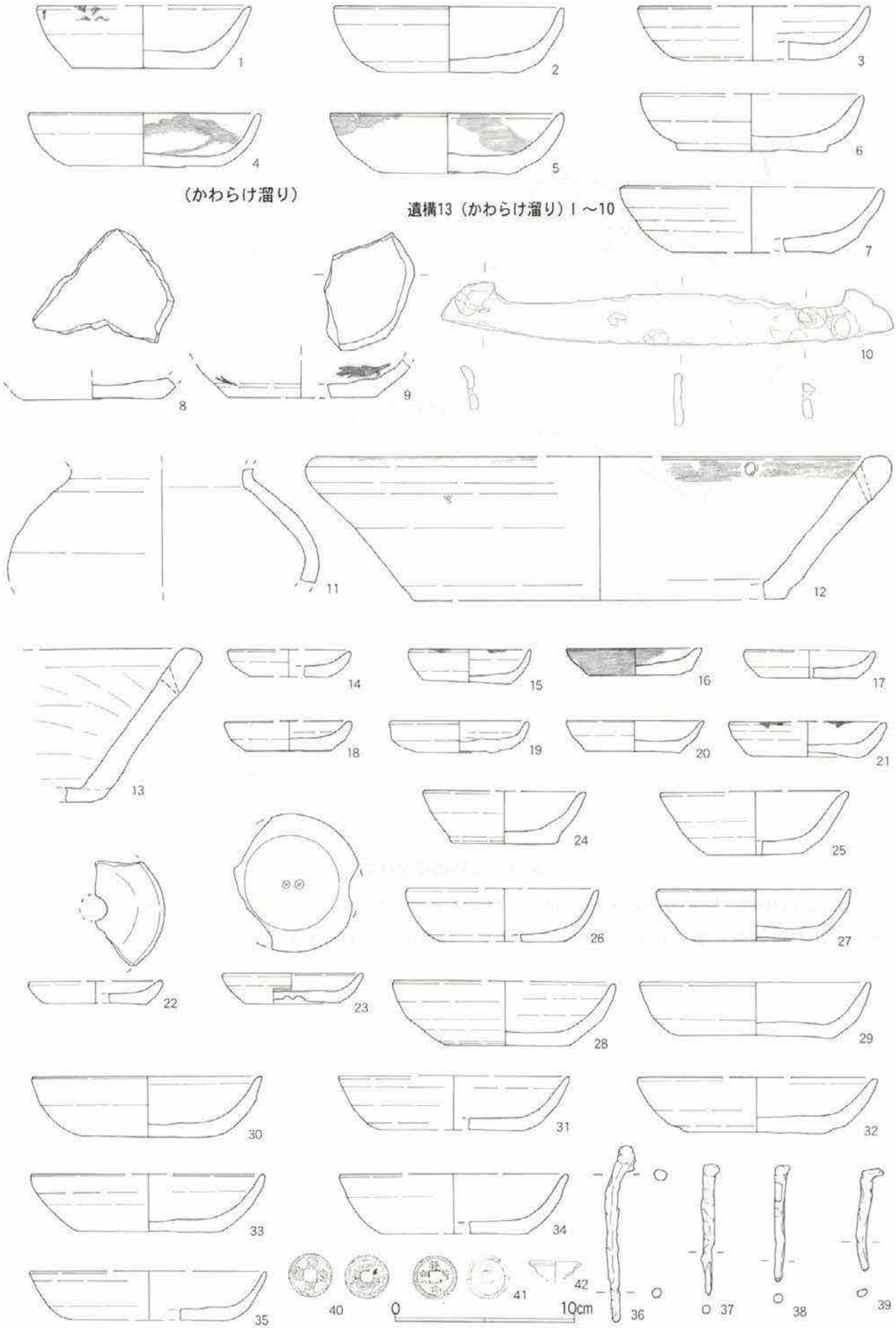


図７　２期遺構・面出土遺物

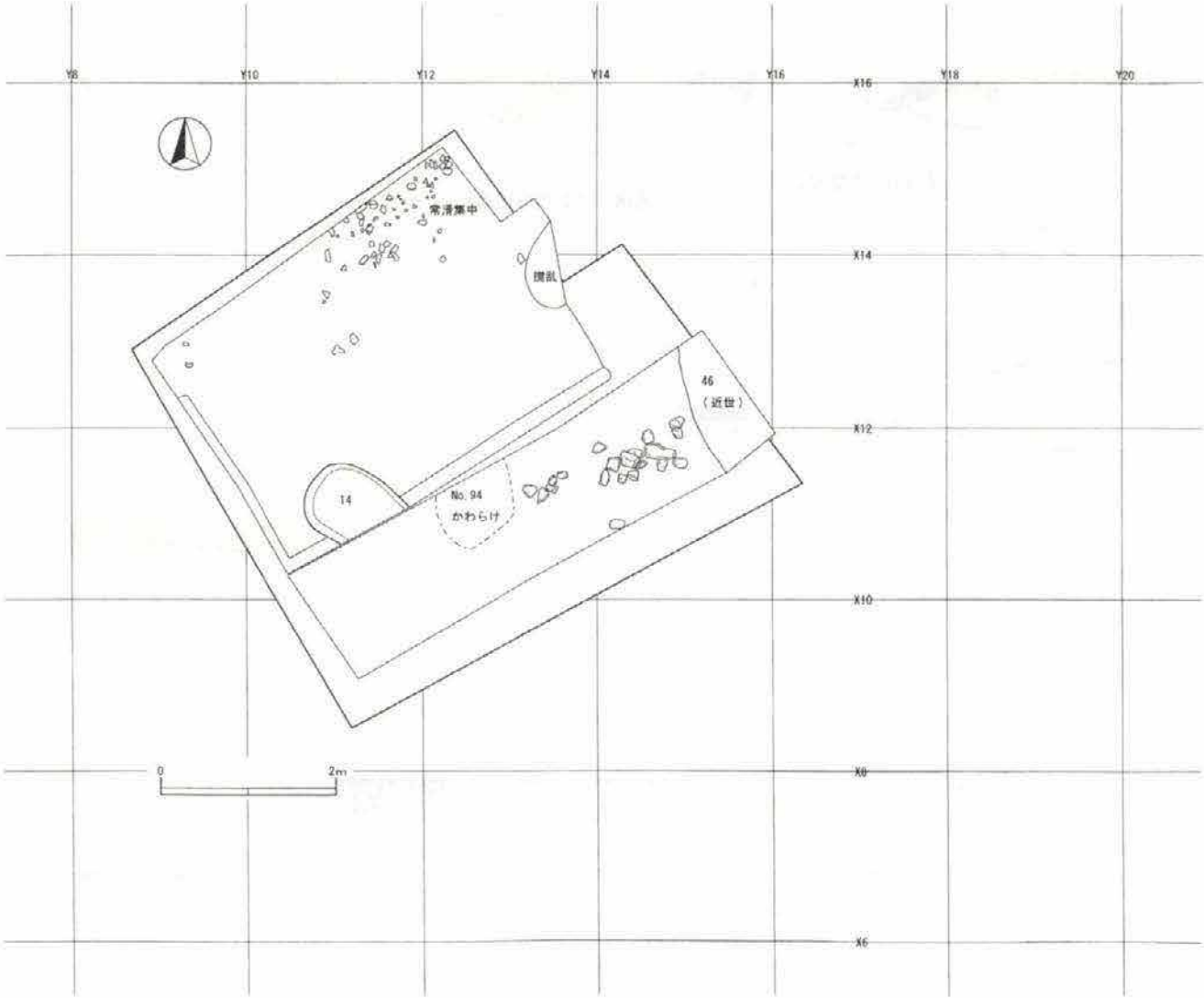


図８　３期遺構全体図

25から27は中皿。28から35は大皿、36から39は鉄製品の釘、40と41は銅銭で、40は熙寧元寶（北宋・1068年）、41は祥符元寶（北宋・1009年）である。42は用途不明の木製品。

第３節　３期の遺構と遺物

Ⅰ区とⅡ区の4面を３期遺構群として扱った。細かな土丹を使った良好な版築面が広がり、Ⅰ区の常滑片集中と土坑、Ⅱ区のかわらけ集中が見られるだけである。海抜はⅠ区が14.70m、Ⅱ区が14.60m前後。

遺構はⅠ区の北東部面上に常滑甕片が散乱する状況が確認できた。これを常滑片集中としたが、面上に散乱している状況なので、名称は適切ではないかもしれない。また、Ⅱ区でも少量のかわらけが集まっているような箇所もあったが、遺構名は付していない。

常滑片集中

Ⅰ区北西部で確認された。常滑甕片とかわらけ皿が南北180cm、東西80cmの範囲に確認された遺構である。あえて集中遺構にするほどではないが、他に面上遺物が少ないこともあり、集中しているように見える。破片は全て平坦に出土し、夫々の比高差は4cm以内に収まる。調査区外西に延びているため全体の様相は不明。出土レベル14.74m前後。

出土した常滑甕片とかわらけ片は図化できなかった。

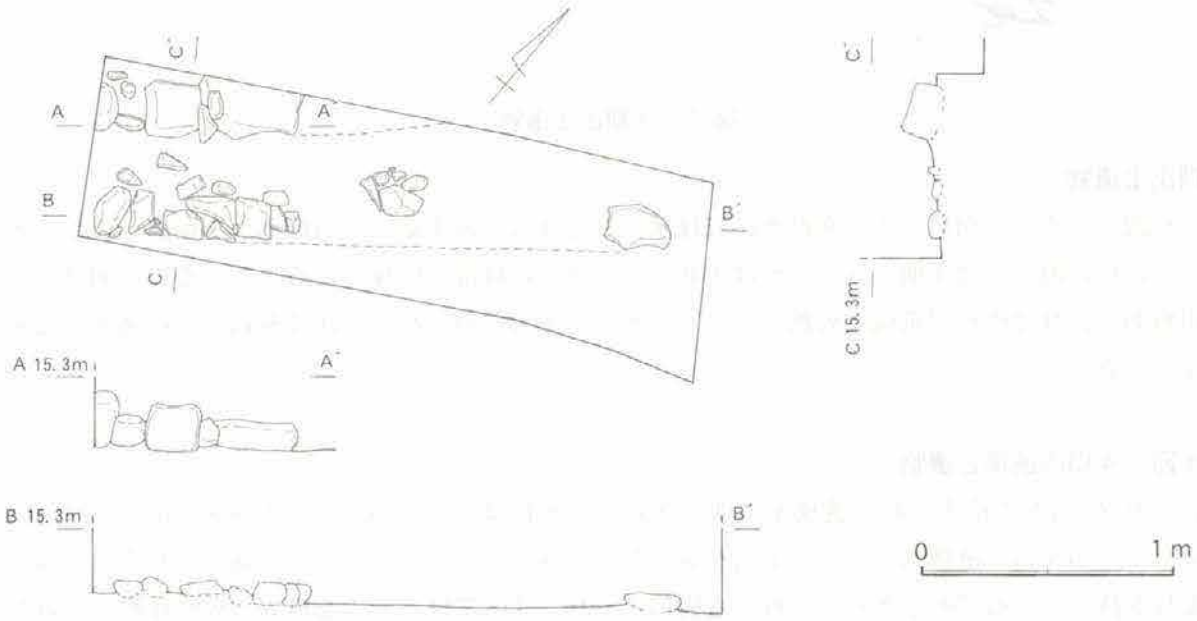


図９　３期遺構（土丹列）

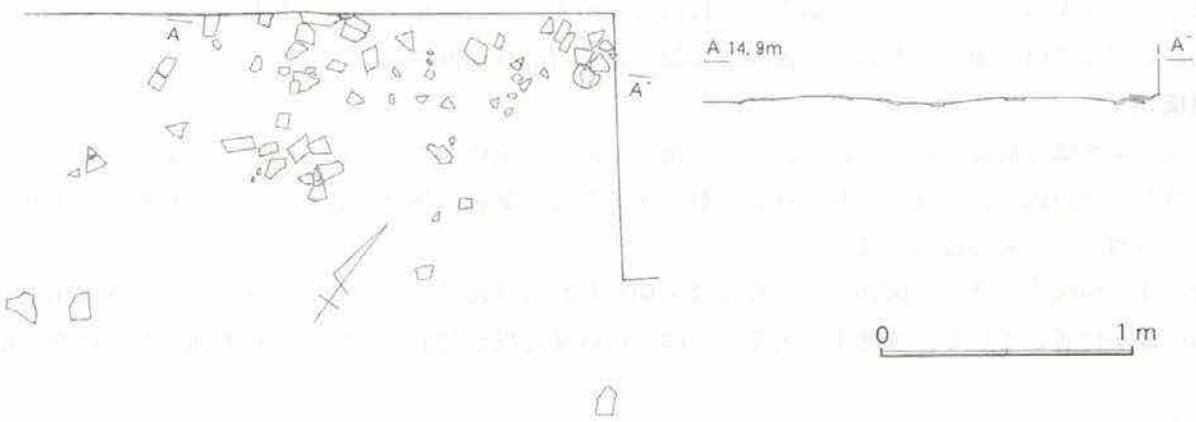


図10　３期遺構（常滑溜り）

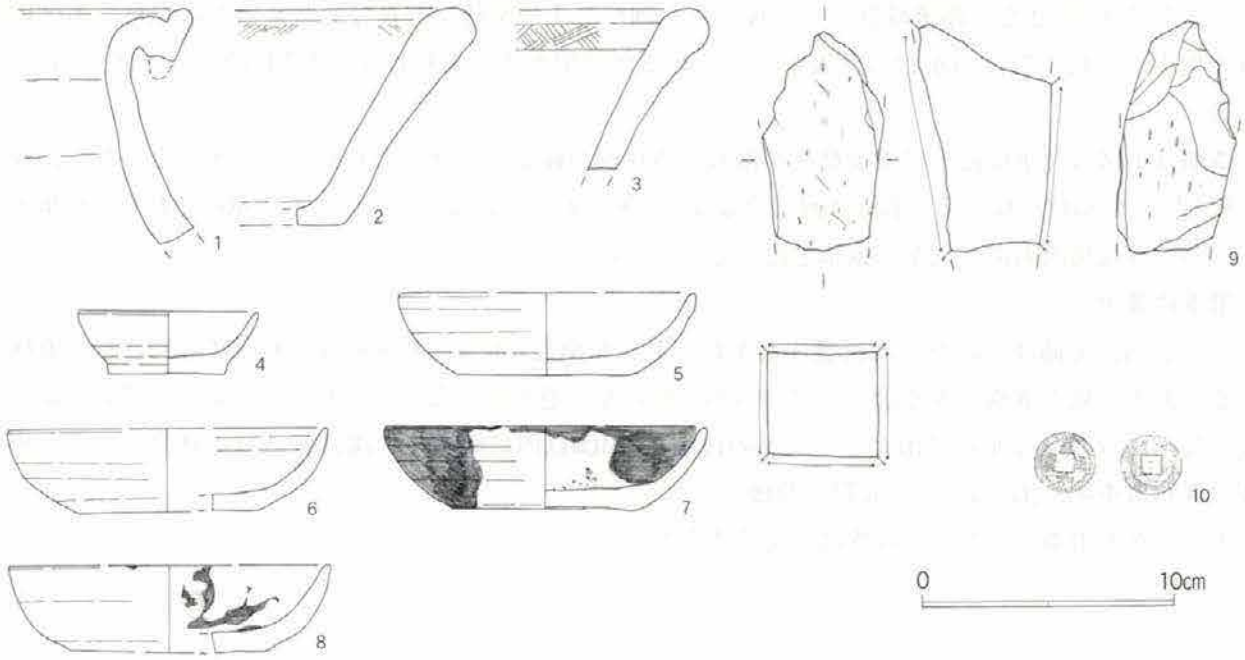


図11　３期出土遺物

３期出土遺物

８点が図化できた。図11－１は常滑甕の口縁部、２と３は瓦質手焙りの口縁部から胴部、４から８は糸切りかわらけ皿。４は小皿、５から８は大皿で７と８の口縁部には煤が付着している。灯明皿としての使用痕あり。９は砥石で荒砥。火熱を受けて赤化した部分がみられる。10は銅銭で至和通寶（北宋・1054年）である。

第４節　４期の遺構と遺物

Ⅰ区とⅡ区の5面で検出された遺構を本期に含めた。海抜はⅠ区が14.50～14.60m、Ⅱ区が14.40m前後でややⅠ区が高い。遺構はピットと土坑が見られるのみであるが、Ⅰ区の南西隅にかわらけが面上にまとまりを持っている箇所があり、これを遺構15とした。Ⅱ区では５期の遺構50（板壁建物）を窺わせるような版築面の切れが確認できた。遺構50は、本来本期に属していたのかもしれない。また、南東隅近くで長さ70cm、幅40cm、厚さ10cmほどの鎌倉石がほぼ平坦に確認できた。この石の南壁近くでは径25cmほどの穴があけられている。上層からの柱穴によるものか石の加工なのか判断できなかった。

確認レベルでは、Ⅲ区のかわらけ溜りは本期に属す可能性が高い。

遺構15

Ⅰ区の南西隅で確認されたかわらけの面上散乱である。南壁から120cm、西壁から130cmの範囲に広がりを持ち、南西隅に近いほどかわらけの点数が多くなる。調査区外に中心があると思われる。現状ではかわらけ溜りといえるほどではない。

遺物は４点が図化できた。図16－１から４は糸切りかわらけ皿で、１はコースター、２と３は小皿で口縁部に煤が付着している。４薄手の大皿でやはり口縁部に煤が付着している。灯明皿としての使用痕あり。

遺構18

x13、y11で検出された平面不整形の小型土坑である。長軸48cm、短軸40cm、深さ28cm、底面レベル1

図12　4期遺構全体図

4.23mを測る。かわらけがややまとまった状況で出土しているが、埋納遺構といえるような状況は認められなかった。覆土は上部が炭化物を多く含む締りのない暗褐色粘質土で、下部が土丹小塊を多く含む暗灰色粘質土である。

遺物は3点が図化できた。図16－5から8は糸切りかわらけ皿で、5から7は小皿、8は中皿で口縁部に煤が付着し灯明皿としての使用痕跡ある。

遺構47

x11、y13で検出された柱穴状の遺構である。平面形は三角形をつぶしたような不整形で長軸36cm、短軸23cm、深さ17cm、底面レベル14.29mを測る。覆土は締りのない暗褐色土で土丹小塊を含んでいる。かわらけが比較的多く出土しているが、埋納遺構とは考えられない。

遺物は3点が図化できた。図16－9から11は糸切りかわらけ小皿。

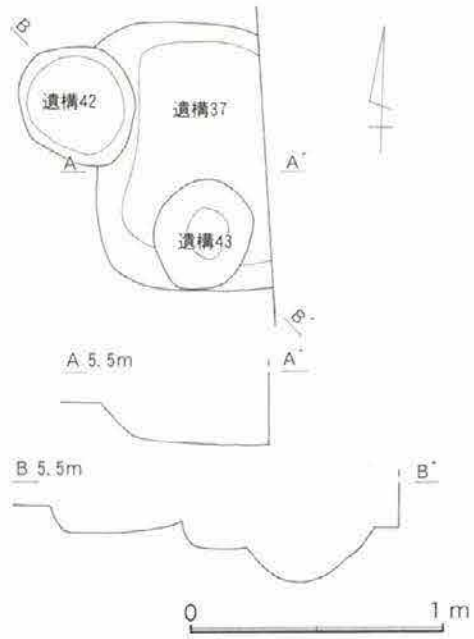


図13　4期遺構（1）

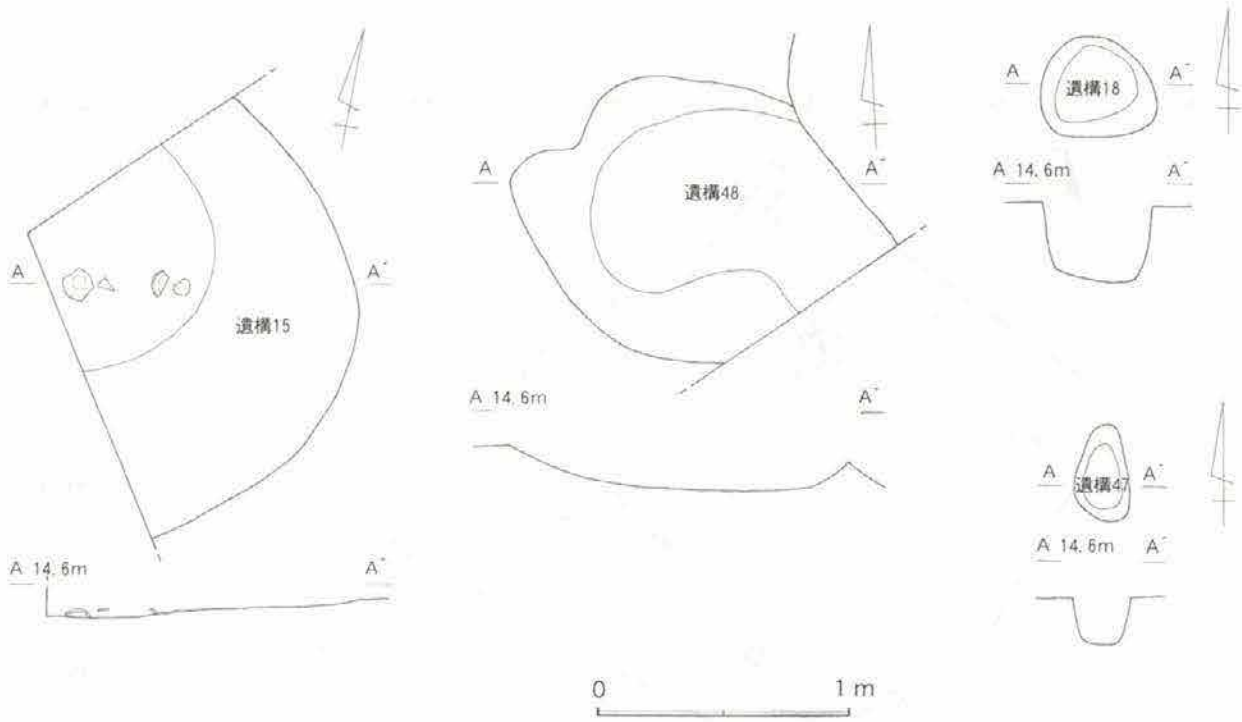


図14　4期遺構（2）

遺構48

x11、y14で検出された不整形の浅い土坑である。北側は現在の佐助川の護岸工事などで失われている。規模は長軸（120cm）、短軸110cm、深さ15cm、底面レベル14.32mを測る。覆土は土丹小塊を含む暗褐色土でしまりは無い。かわらけ片が多く出土している。

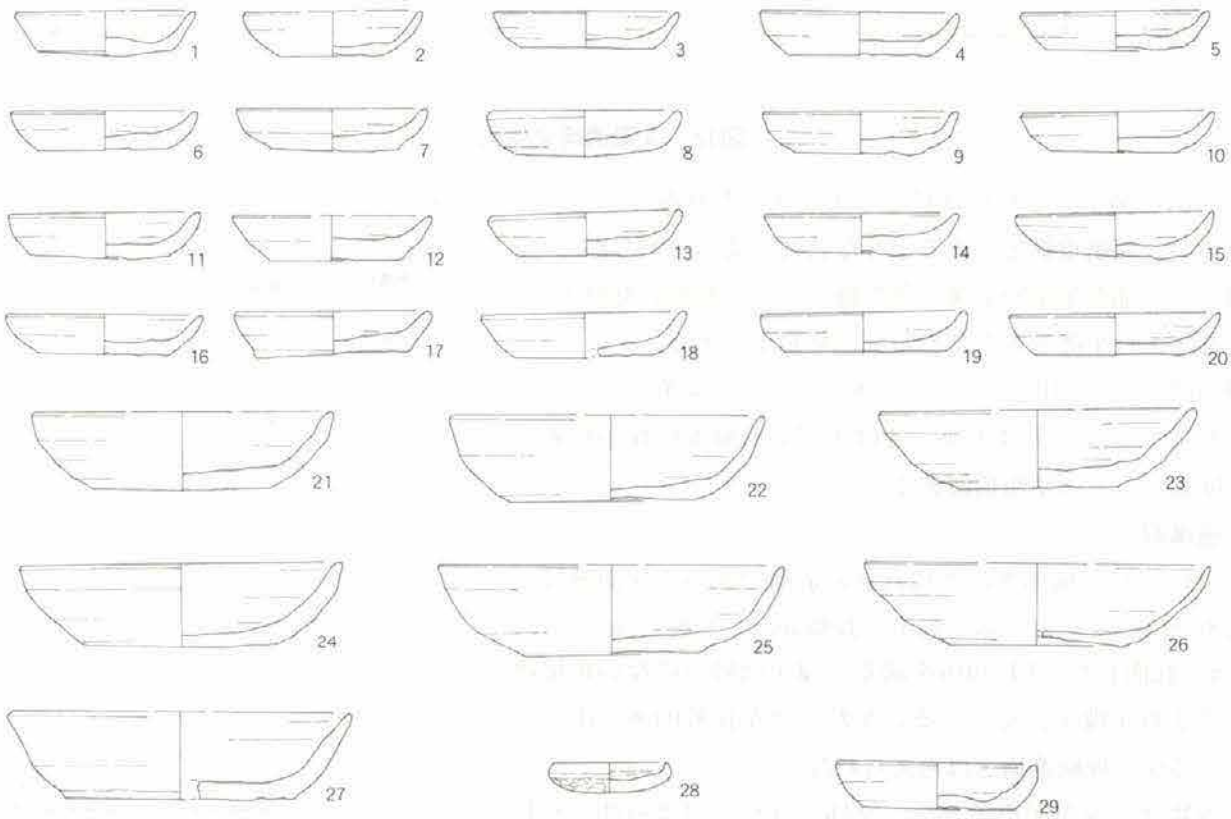


図15　Ⅲ区（かわらけ溜り）出土遺物

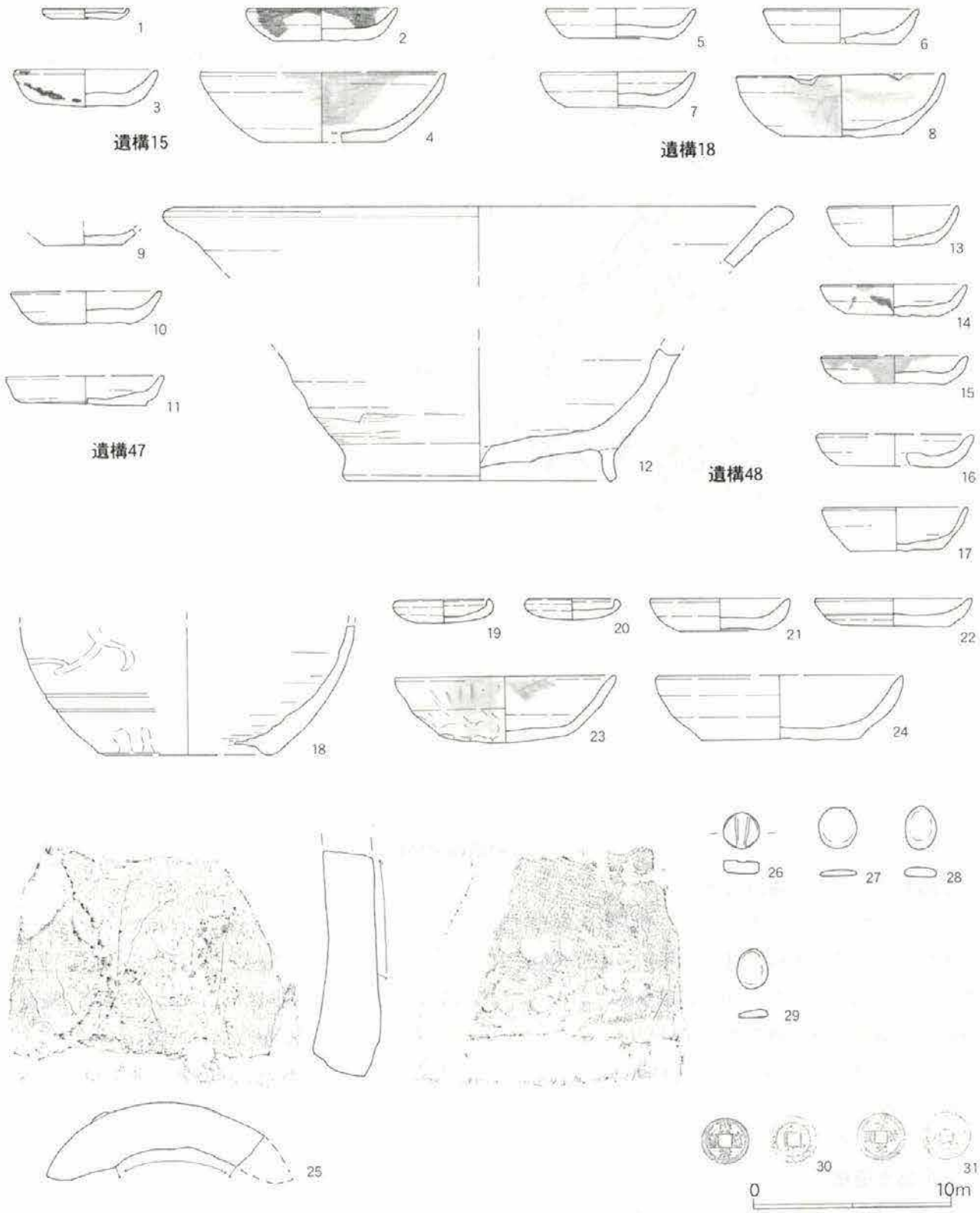


図16　4期出土遺物

遺物は、破片が多かったため7点が図化できたにとどまる。図16-12は山茶碗窯系片口鉢Ⅰ類の口縁から底部。13から18は糸切りかわらけ小皿で、14と15は口縁部に煤が付着して灯明皿の痕跡が残る。

Ⅲ区かわらけ溜り

かわらけ溜りとしたが、これはⅢ区の調査区一面にかわらけが散乱している状況を称した名称で、一般的な「溜り」では無い可能性もある。全体規模は不明。検出レベルで、4期遺構群に含めた。調査地

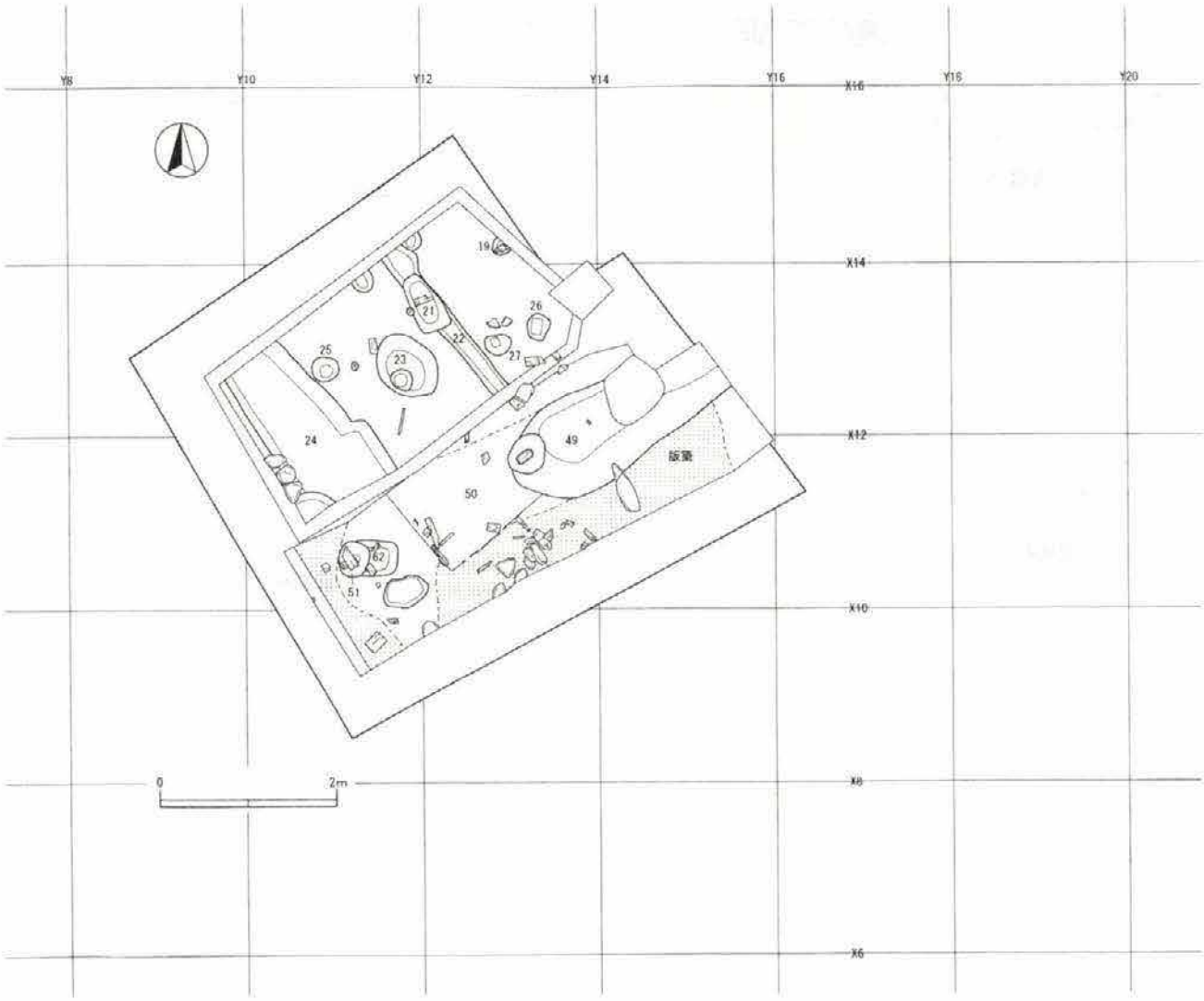


図17　５期遺構全体図

点が離れているため確証は無い。

多量のかわらけ片が出土した。そのうち図15に29点が図化できた。26は白かわらけ皿で、器肉が薄く白灰色を呈して、焼成は良い。回転糸切り成型。28は手づくねのコースター皿で口径は小さい。他は所謂かわらけ皿で、１から20と29は小皿、21から25と27は大皿である。小皿は口径7cmから８cm、器高１cm以内で器肉の薄い皿も若干混じるが、ほとんどは器肉が厚い。すべて回転糸切り成型。

大皿は口径12cmから14.2cm、器高3cmから4cmで、小皿と同じように器肉の薄い皿も混じるが、多くは器肉が厚い。大皿もすべて回転糸切り成型。他には白磁口兀皿片、常滑甕片、銅銭の破片（判読不能）が出土している。

４期出土遺物

33点が図化できた。図16-18は舶載白磁花瓶の胴部。19と20は白かわらけのコースター。21、22、24は糸切りかわらけ皿で、21と22は小皿。23と24は大皿で、23は手づくね白かわらけで口縁部に煤が付着している。灯明皿としての使用痕跡あり。25は平瓦、26から29は碁石で、26は骨製である。30と31は銅銭で、30は熙寧元寶（北宋・1068年）、31は景祐元寶（北宋・1034年）である。

第５節　５期の遺構と遺物

Ⅰ区の５面下で確認された２枚の生活面とⅡ区の5面下で検出された遺構を本期に含めた。海抜はⅠ

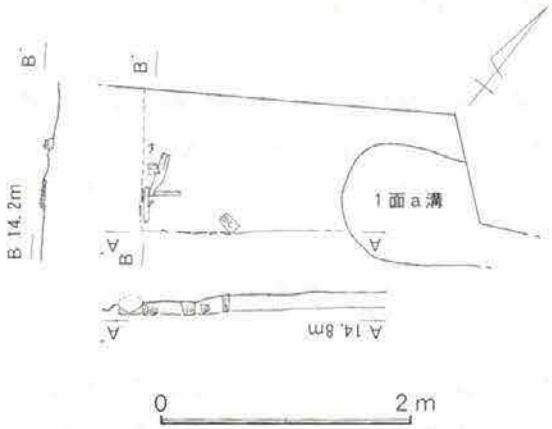
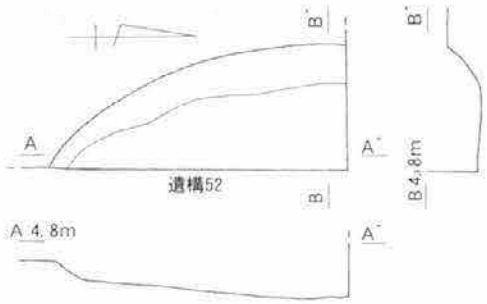


図18　5期遺構（1）



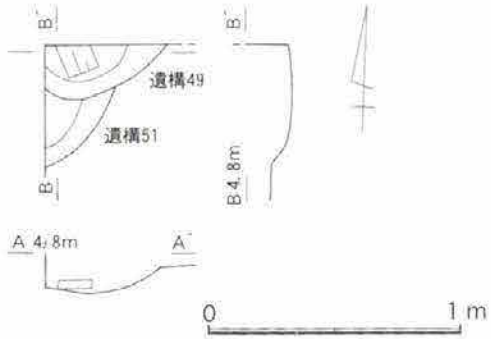


図20　5期遺構（3）

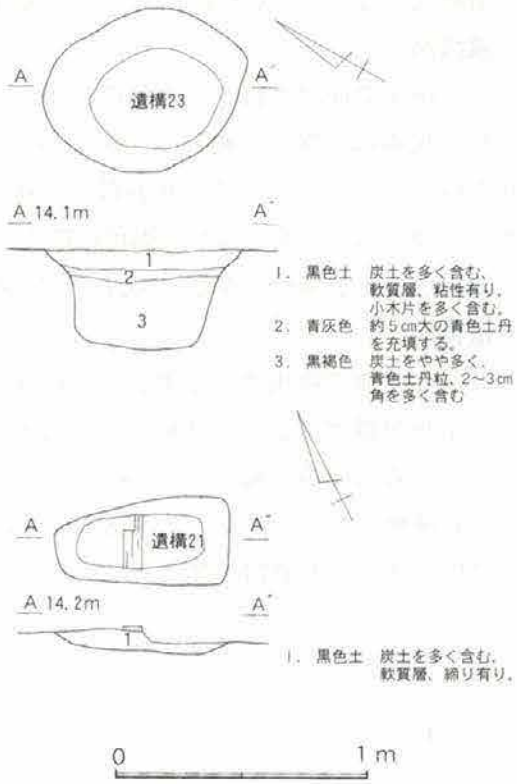


図19　5期遺構（2）

区が14.20m～14.30m、Ⅱ区が14.0m前後でやはりⅠ区が高い。遺構はⅡ区に板壁建物（遺構50）の壁板が部分的に確認され、これがⅠ区側に延びるが、Ⅰ区では溝状の遺構が確認されたものの板壁は確認できなかった。Ⅰ区の遺構23と24は板壁の据え方で遺構23は囲炉裏の痕跡と考えたいところである。

遺構21

x13、y12で検出された不整形な礎板を持つ柱穴である。長軸70cm、短軸35cm、深さ9cm、底面レベル14.05mを測る。礎板は1枚で穴の長軸に対して直角方向に長軸がある。長さ23cm、幅7cm、厚さ1.5cmを測る。

遺物は1点が図化できた。図21－1は糸切りかわらけ小Ⅲ。

遺構22

Ⅰ区北側で検出された。西端を別遺構に壊される溝状の土坑でⅡ区では延長部分が確認できなかった。調査中の所見では東端は別遺構と重なっている可能性がある。規模は西壁近くで上幅25cm、深さ11cm、東壁近くで上幅22cm、深さ5cmを測る。北壁はN-37°-Wの方向を持っている。覆土は炭化物を多く含む黒褐色粘質土。

図化できる遺物はない。

遺構23

遺構22の南、調査区のほぼ中央で検出された円形の土坑である。覆土は炭化物を多く含む黒褐色粘質土で木片が多く含まれ、桃の種子が数点出土している。底面で確認した小ピットは炭化物を含まない覆土で、本址より新しい可能性がある。規模は東西83cm、南北54cm、深さ9cm。

遺物は少なく、１点が図化できた。図21－２は滑石製鍋の口縁部から胴部。

遺構24

Ⅰ区南側で検出された。不整形な溝状の落ち込みで、調査区を横断するように190cmの長さが確認された。規模は西端で上幅75cm、深さ14cm、東端で上幅115cm、深さ21cmを測り、南壁でN-30°－Wの方向を持っている。Ⅱ区では延長部分が確認されなかったので、複数の土坑が切り合っていた可能性がある。覆土は土丹塊を含む黒褐色粘質土。

遺物は３点が図化できた。図21－３は常滑甕の口縁部、４・５は仕上げ砥石で天草産である。

遺構49

Ⅱ区の北側で検出された細長い土坑状の落ち込みである。調査区外に延びる。覆土は、20cm～40cm大の土丹が投げ込まれた状態で、ところどころに空洞が見られた。しかし、近・現代遺物は出土していない。確認規模は幅110cm、深さ28cm、長さ270cm、底面レベル13.92mを測る。埋土を見る限り、佐助ケ谷遺跡（１-615地点）で確認されている粘土採掘坑に似ているが、土坑の形状は大きく異なる。

図化できる出土遺物はない。

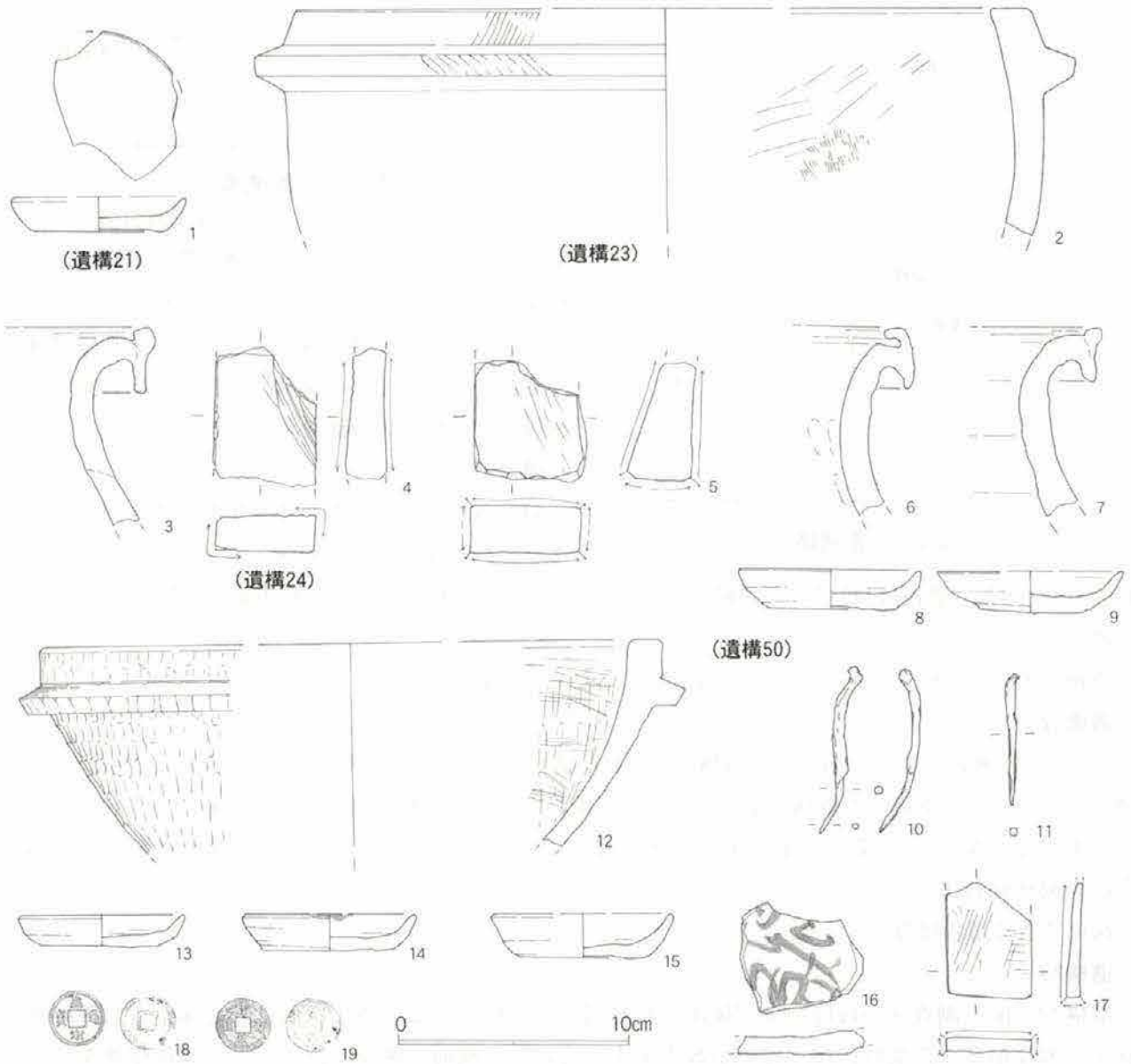


図21　５期遺構出土遺物

図22　6期遺構全体図

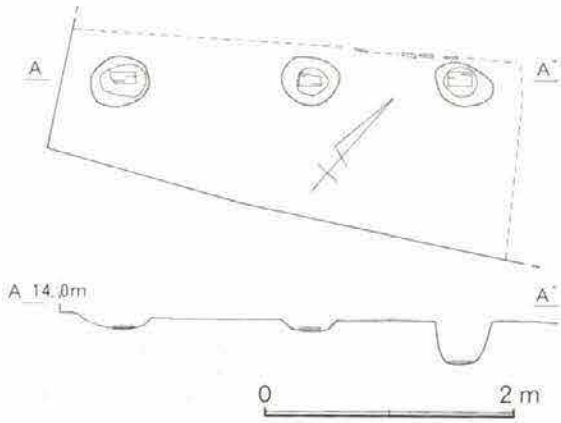


図23　6期遺構(1)

遺構50

Ⅱ区で検出された板壁建物である。X10、y12に南東のコーナーを持ち、北東方向に150cm、北西方向に60cmの長さに板壁が断続的に遺存している。板壁の南東、南西は比較的良好な土丹版築が見られるが、これと検出した板壁との関係は明確ではない。版築面は「土間」あるいは通路の可能性が考えられる。礎板らしき板材が２箇所で確認できた。また、北東に延びる板壁のコーナーから90cm程の位置で、壁に直角方向に連なる角杭３本が確認されている。何らかの施設と考えられるが、調査区内でこれにつながる遺構が確認されていないので、判断できない。壁の軸方向はN-50°-Eで、板壁の確認レベル14.18mを測る。

先に調査したⅠ区では、木材が遺存し難い土質であったため、本址につながる板壁は確認されていない。

遺物は少なく、６点が図化できたにとどまった。図21－６と７は常滑甕の口縁部、８と９は糸切りかわらけ小皿。10と11は鉄製品の釘である。

５期出土遺物

８点が図化できた。図21－12は滑石製鍋の口縁部から胴部。13から16は糸切りかわらけ皿。13から15は小皿で、14の口縁部には煤が付着している。灯明皿としての使用痕跡あり。16は大皿で、内底面に墨書があるが判読不能。17は鳴滝産仕上げ砥石。18と19は銅銭で、共に皇宗通寶（北宋・1038年）である。

レベルでは、Ⅲ区の柱穴は本期に属す可能性が高い。

第６節　６期の遺構と遺物

Ⅰ区とⅡ区の６面で検出された遺構を本期に含めた。海抜はⅠ区が14.0m、Ⅱ区が13.80m前後で、Ⅰ区がやや高い。遺構はⅠ区で柱穴14基、土坑1基が検出され、Ⅱ区で板壁建物とやや特殊な土坑（遺構54）が検出されている。Ⅰ区の柱穴は散在し建物を復元するには至らなかった。また、図化できる出土遺物はない。

遺構31

Ⅰ区の南西隅で検出された不整形の土坑である。長軸90cm、短軸60cm、深さ22cm、底面レベル13.73mを測る。覆土は土丹塊を含む暗褐色土でしまりは無い。

図化できる遺物はない。

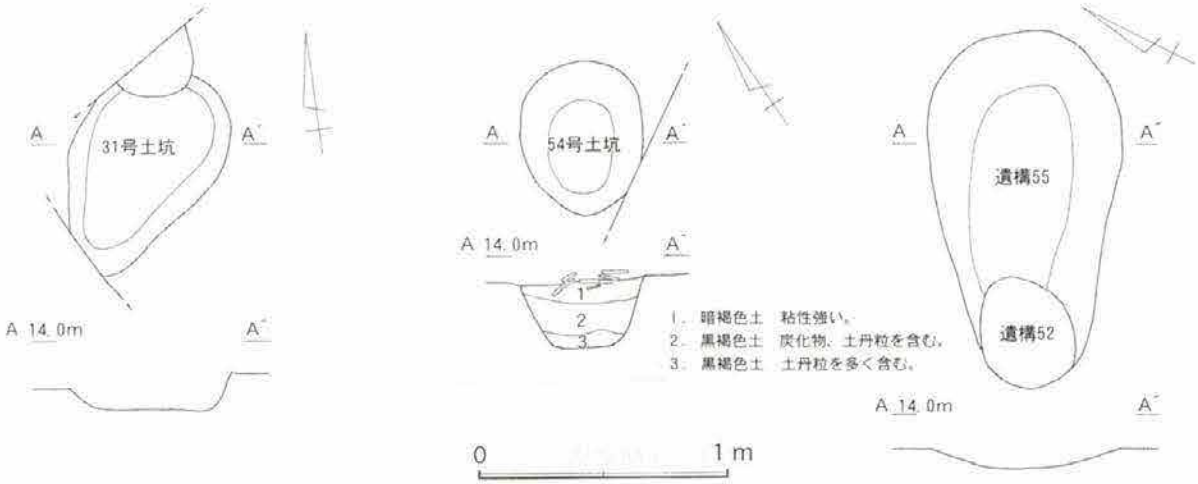


図24　６期遺構(2)

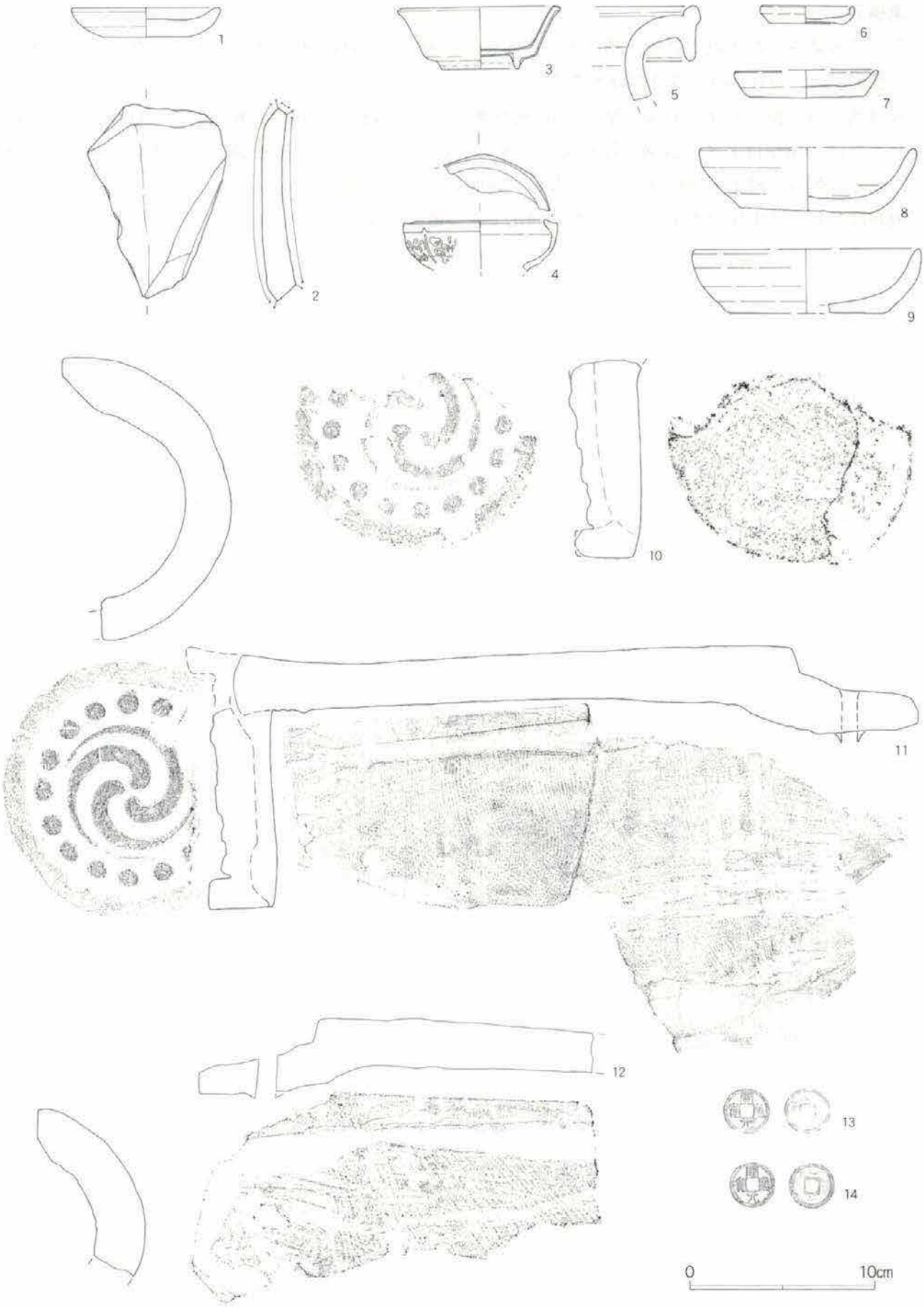


図25　6期出土遺物（1）

遺構54

Ⅱ区で確認された土坑である。楕円形の平面を呈し最上部に7枚の板が集められていた。土坑は楕円形で長径64cm、短径50cm、深さ27cmを測る。

板は幅12cm、長さ45cm～50cm、厚さ2cm前後を測る。板の長軸は土坑の長軸方向に一致している。調査時点では、本址はトイレ遺構で埋め戻した後に、使用していた踏み板を最上部に埋めたとも考えたが、確証は無い。覆土の分析は行っていない。底面レベル15.51m。

遺物はかわらけ小片が出土しているが、図化できる遺物はない。

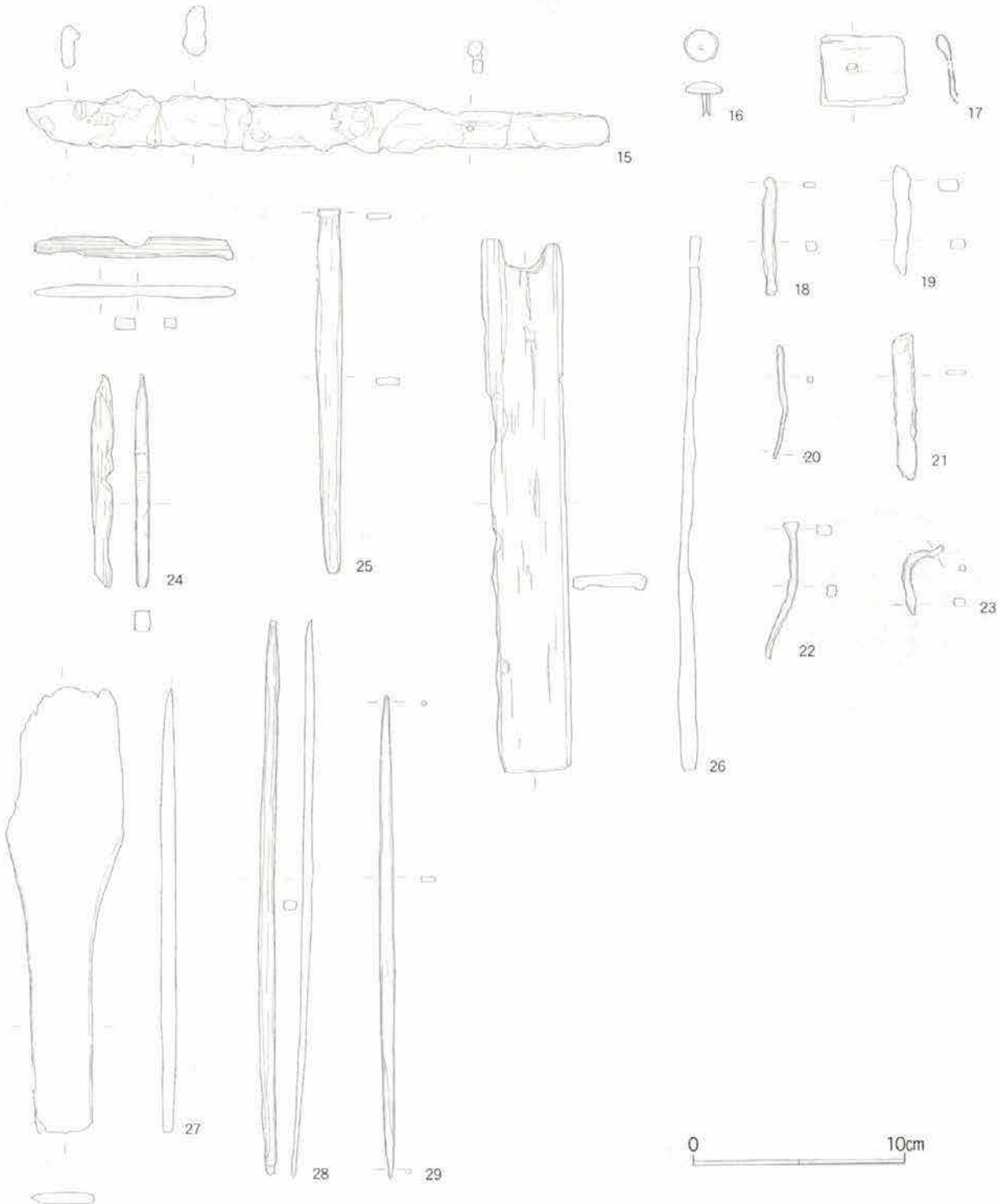


図26　6期出土遺物（2）

遺構55

遺構54の南で確認された柱穴である。平面形は円形で、確認規模は長径25cm、短径22cm、深さ20cm、13.63mを測る。

図化できた遺物は１点である。図21－１は糸切りかわらけ小皿。

遺構57

Ⅱ区で確認された板壁建物である。北西コーナーと南東に延びる壁、南西に延びる壁が確認できた。いずれも調査区外に延びて、建物はコーナーから南東に広がる。壁は幅13cmの板材を縦に並べた構造で、南西に延びる壁のコーナー寄りで部分的に確認されただけで、他は板の痕跡を平面的に確認したにとどまる。壁の軸方向はN-54°-Eで、壁の確認レベル13.73m、確認面積約5.25㎡を測る。

建物内では南北120cm、東西（110cm）の規模で幅２から３mm、厚さ1mmほどの薄板が重なるように広がっていた。建物の網代壁が崩落しているようにもみえた。礎板は南東に延びる壁から250cmで２枚が確認できた。ここに間仕切りがあった可能性も考えられる。また、南西に延びる壁沿いに礎板を伴う２口の柱穴が確認できたが、これは下層の遺構として捉えた。建物の西側は大きな土丹塊があつまり、上面は平坦ではなかった。

図化できた遺物は1点である。２は常滑甕片転用の磨常滑で２平面に磨面がある。

Ⅲ区の遺構

Ⅲ区では、海抜14.26mから14.30mでかわらけ溜りを、13.90m前後で柱穴を確認している。それぞれ４期、６期と同一遺構群であった可能性が高い。そのため、かわらけ溜りは４期の遺構に含めて説明を加えた。

本調査区は、既存駐車場内の調査で、灯りが無く排土の処理も困難であったため、海抜13.90m以下の調査はできなかった。しかし、湧水処理の排水溝の断面で堆積土を見る限り、柱穴の確認面（６期相当）の下で含まれる土丹が青灰色に変化し、以下は粘土層になる。しかし、若干の遺物を含んでいるためまだ地山ではない。この堆積土の色は、ライトで検察したため定かでは無いが、締りのある黒色粘土層である。

６期相当の柱穴は４口確認できたが配置などはすべて不明。柱穴は大きいもので径40cm、小さいもので30cm、深さは30cmから50cmほどである。底面に礎板らしき痕跡も確認できたが、木質が軟弱で形状・寸法は掴めなかった。

遺物はかわらけ片などが少量出土しているが、図化できる遺物はない。かわらけには手づくね皿は含まれていない。

６期出土遺物

28点が図化できた。図26－３は竜泉窯青磁碗、４は青白磁合子の身。５は常滑甕の口縁部、６から９は糸切りかわらけ皿で、６はコースター、７は小皿、８と９は大皿。10から12は瓦。10と11は左巴文の軒丸瓦で10は乳10個、11は乳12個。12は軒丸瓦。13と14は銅銭で共に開元通寶（唐・960年）、15は鉄製品の刀子、16は銅製品の鋲、17は銅製品の飾り金具、18から23は鉄製品の釘。24から30は木製品で、24は形代の鳥、25は棒状木製品、26は刀子の鞘、27は板杓子、28と29は箸である。

この他に、実測できなかったが漆器皿６点、梅、桃、胡桃などの種子が出土している。

第７節　７期の遺構と遺物

Ⅰ区とⅡ区の７面で検出された遺構を本期に含めた。Ⅰ区は西側が削平岩盤面でこの面にあわせて

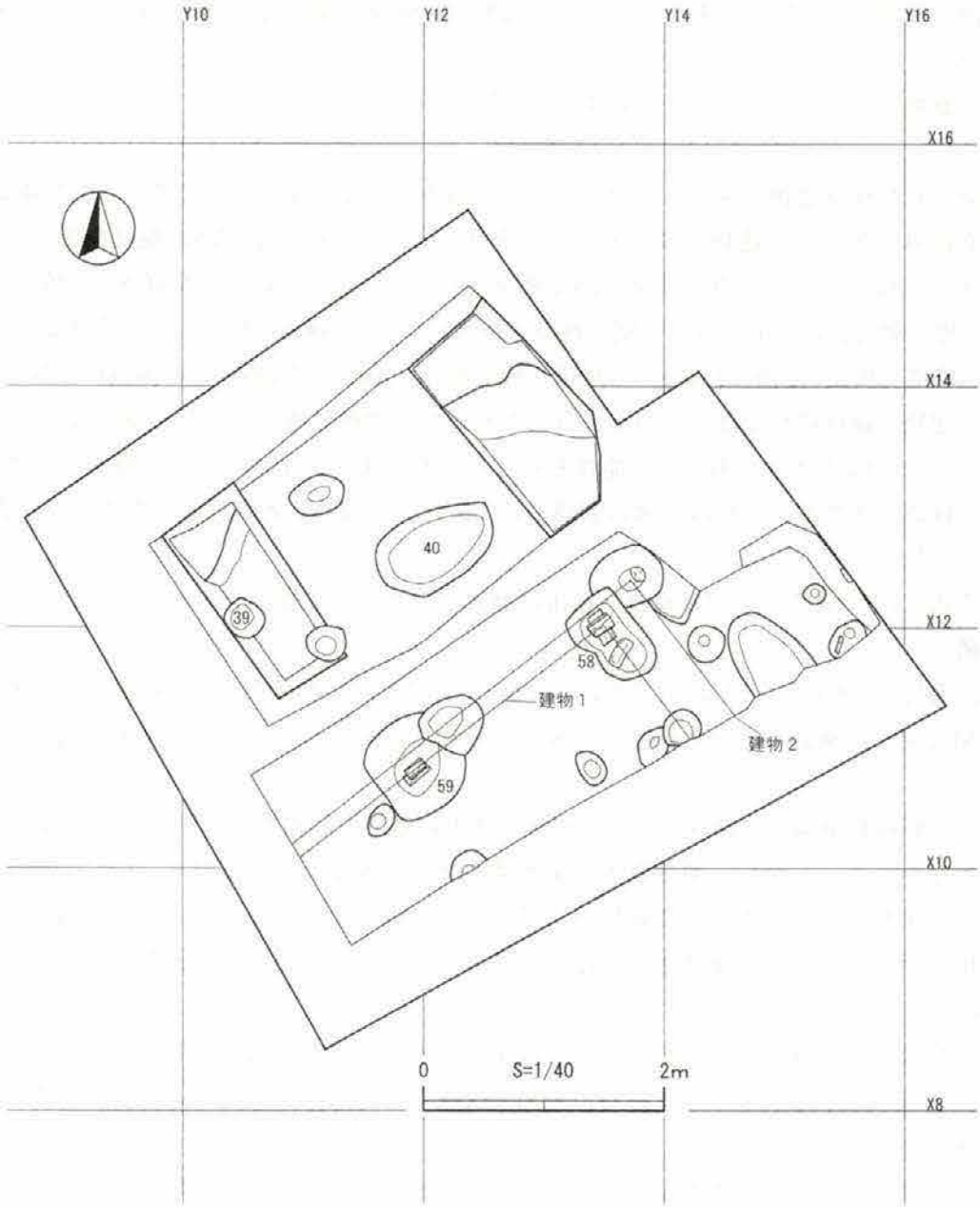


図27　7期遺構全体図

版築面が作られ、海抜は13.60m前後。岩盤はⅠ区西壁から70cm前後で東に向かってなだらかに落ち込んでいる。これは自然傾斜である。Ⅱ区は同様の版築面が13.50m前後で確認されている。版築面の下は茶褐色粘土層、淡灰褐色粘土層と続きこれらの土層には中世遺物が含まれていない。土層確認の最も下は海抜13.10mである。遺構は、Ⅰ区で削平岩盤面と土坑、Ⅱ区で土坑1、柱穴1が確認できた。

遺構40（Ⅰ区）

Ⅰ区の中央東寄りで検出された土坑である。平面形は南北に長い楕円形で、規模は東西62cm、南北105cm、深さ33cm、底面レベル13.48mを測る。覆土は15cm大の土丹を密に含む暗褐色土。

図化できる遺物はない。

建物1

6期の遺構57の西壁に沿って確認された、南北に並ぶ柱穴2口を本期の掘立柱建物とした。建物2の柱穴を壊して作られている。南側の柱穴（遺構59）は南北78cm、東西cm、深さ38cmで3枚の礎板が、21cmの高さに据えられている。礎板上面レベル13.41m。上下2枚の礎板は板であるが、2段目の礎板はホゾ穴のあいた角材を使用している。柱の転用と思われる。

北側の柱穴（遺構58）は南北48cm、東西36cmの楕円形で深さ23cmを測り、3枚の礎板が14cmの高さに据えられている。礎板上面レベル13.53m。礎板は遺構59と同じに上下2枚が板で、2段目が角材を使用している。

礎板上面のレベルは12cm異なるが、これは柱の長短を礎板で調節した結果と考えている。また、南側の礎板最上面には10cm×6cmの柱の痕跡が薄く確認できた。礎板の端にかかっているので、3寸角の柱でこの建物が建てられていたようだ。建物の軸方向はN-53°-Eで、6期の板壁建物の方向に近い。

建物2

建物1の柱穴に壊されている、南北に並ぶ柱穴2口を掘立柱建物とした。南側の柱穴（遺構51）は長軸40cm、短軸34cmの不整形で、深さ16cm、底面レベル13.99mを測り、礎板は10×26cmほどの板が2枚使用されている。北側の柱穴は長軸47cm、短軸40cmの不整形で深さ19cm、底面レベル13.98mを測る。礎板は8×20cmの板が1枚使用されている。

礎板上面レベルは南側が14.13m、北側が14.03mで南が高い。軸方向はN-60°-Eで、建物1よりわずかに東に振れるが、近い数値である。

第3章　まとめ

調査の結果、幾つかの事実が得られたが、その結果を持って直ちに周辺の調査結果を含めた考察を加える事はできない。したがってここでは敷地に接する検出された遺構の年代・性格、佐助川について、簡単にまとめを加える。

第1節　遺構の年代と性格

本地点で最も古い7期の遺構群は、調査区西側の岩盤斜面を削平して造られている。これは本地点の含まれる支谷内の山際の開発行為であり、当然のように支谷内の中央部の開発はもっと古いと考えるべきであろう。遺構は掘立柱建物で遺物は少ない。年代は、周辺の谷開発と同じ13世紀中頃を考えたい。

6期と5期は板壁建物を主体とする空間で、6期ではトイレとも考えられるやや特殊な土坑（遺構54）が検出されている。全体様相は佐助川を挟んだ鎌倉税務署用地の検出遺構群と類似点が多く認められる。細かく年代を設定することは困難であるが、13世紀後半のどこかであろう。

4期ではピットと土坑が見られるのみであるが、かわらけが面上にまとまりを持っている箇所と板壁建物を窺わせるような版築面の切れが確認できた。版築面が良好であるために、板壁建物は少なく、柱穴も建物を復元するほどには確認できていない。6期や5期と同じ13世紀後半を考えておきたい。

3期で良好な版築面上で常滑甕片が散乱する状況が確認できた。遺構は土坑と柱穴でやはり建物が復元できる配置は確認されていない。2期と1期も良好な版築面が主体で、柱穴は少ない。3期から1期の年代は非常に曖昧になるが、14世紀代と考えておきたい。15世紀のかわらけ皿が出土していない事に拠る。

性格は、開発当初から鎌倉税務署と同じ寺院の一画であった可能性が高い。寺院の中心部は判らないが、佐助川が鎌倉税務署の北側を流れていたとすれば、本調査地点の位置する谷は非常に良い立地である。

第2節　佐助川について

佐助川については、鎌倉税務署の報告書では現在の鎌倉法務局の辺りを流れていたと推測している。本地点でのかかわりを見ると、本地点前から上流の部分（信号手前まで）は川底が岩盤であり、鎌倉税務署用地内の中世遺跡面より海抜が高い。この点だけでも、やはり中世の佐助川は鎌倉法務局と鎌倉税務署の間を流れていたほうが理解し易い。現在の流路は、近世以降にこの谷が開発されたときに山際に寄せられたのだろう。当然そのときに、現在の河川に沿った道路も作られたのだろう。現在の佐助川は、御成中学校下の交差点脇で東に向かって曲がっている。この場所で流れが変わるのが何時なのか興味は残る。

表1　遺物観察表(1)

図・遺物No.	遺構	種別		計測値 単位：cm 口径	底径	器高
1期						
1	遺44	土器	かわらけ皿	6.4	3.8	2.5
2	遺44	土器	かわらけ皿	13.5	8.0	4.0
3	-	常滑	片口鉢	-	-	(5.2)
4	-		鍔釜	-	-	-
5	-	鉄製品	釘	長5.4		
6	-	鉄製品	釘	長4.3		
2期						
1	遺13A	土器	かわらけ皿	(11.9)	8.0	3.45
2	遺13A	土器	かわらけ皿	12.8	9.8	3.6
3	遺13A	土器	かわらけ皿	(12.9)	(7.0)	3.0
4	-	土器	かわらけ皿	(12.9)	(8.7)	3.0
5	遺13A	土器	かわらけ皿	13.1	7.6	3.4
6	-	土器	かわらけ皿	(12.4)	(8.9)	3.25
7	-	土器	かわらけ皿	(14.6)	(9.0)	3.6
8	遺13A	土器	打ち欠き	-	(7.6)	(1.5)
9	遺13A	土器	打ち欠き	-	(8.3)	(2.2)
10	遺13	鉄製品	野斧	長25.3	巾3.0	厚0.4
11	-	常滑	壷	-	-	(6.7)
12	-	瓦質	手焙り	(32.0)	(20.8)	(8.1)
13	-	瓦質	火鉢	-	-	-
14	-	土器	かわらけ皿	(6.7)	(4.3)	1.5
15	-	土器	かわらけ皿	6.8	5.0	1.8
16	-	土器	かわらけ皿	7.5	5.1	1.5
17	-	土器	かわらけ皿	(7.1)	(5.4)	1.5
18	-	土器	かわらけ皿	(6.9)	(4.9)	1.7
19	-	土器	かわらけ皿	7.8	5.2	1.8
20	-	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.2)	1.8
21	-	土器	かわらけ皿	(8.8)	(6.1)	2.0
22	-	土器	打ち欠き	(7.4)	(5.7)	1.3
23	-	土器	打ち欠き	(7.7)	5.1	1.75
24	-	土器	かわらけ皿	(8.9)	5.95	3.0
25	-	土器	かわらけ皿	(10.5)	(5.1)	3.6
26	-	土器	かわらけ皿	(10.6)	(7.0)	3.0
27	-	土器	かわらけ皿	(10.8)	6.5	2.9
28	-	土器	かわらけ皿	(12.4)	(6.9)	3.7
29	-	土器	かわらけ皿	(12.8)	(8.6)	3.15
30	-	土器	かわらけ皿	(12.8)	(8.1)	3.35
31	-	土器	かわらけ皿	(12.9)	(8.1)	3.0
32	-	土器	かわらけ皿	(13.3)	(8.0)	3.1
33	-	土器	かわらけ皿	(13.1)	(8.0)	3.3
34	-	土器	かわらけ皿	(12.7)	(8.2)	3.4
35	-	土器	かわらけ皿	(13.1)	(8.2)	2.75
36	-	鉄製品	釘	長10.0		厚0.6
37	-	鉄製品	釘	長7.4		厚0.4
38	-	鉄製品	釘	長6.1		厚0.5
39	-	鉄製品	釘	長5.8		厚0.5
40	-	銅製品	熙寧元寶1068年(北宋)	-	-	-
41	-	銅製品	祥符元寶1008年(北宋)	-	-	-
42	-	木製品		-	-	-
3期						
1	-	常滑	甕	-	-	(9.4)
2	-	土器質	手焙り	-	-	(8.6)
3	-	土器質	手焙り	-	-	(6.3)
4	-	土器	かわらけ皿	7.1	4.7	2.5
5	-	土器	かわらけ皿	(11.6)	(7.1)	3.3
6	-	土器	かわらけ皿	(12.7)	(7.2)	3.35
7	-	土器	かわらけ皿	(12.7)	(7.25)	3.3
8	-	土器	かわらけ皿	(12.8)	(8.0)	3.4
9	-	石製品	砥石	長(9.0)	巾4.3	厚4.9
10	-	銅製品	至和通寶1054年	-	-	-
4期						
1	遺15	土器	かわらけ皿(コースター)	(4.4)	(3.3)	0.6
2	遺15	土器	かわらけ皿	7.6	4.9	1.75
3	遺15	土器	かわらけ皿	7.1	4.6	1.9
4	遺15	土器	かわらけ皿	(12.4)	(6.8)	3.5
5	遺18	土器	かわらけ皿	(7.5)	5.2	1.5
6	遺18	土器	かわらけ皿	7.9	5.8	1.8
7	遺18	土器	かわらけ皿	7.7	5.2	1.8
8	遺18	土器	かわらけ皿	10.7	6.15	3.1
9	遺47	-	-	-	4.0	0.7
10	遺47	土器	かわらけ皿	7.7	4.3	1.65
11	遺47	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.2)	2.0
12	遺48	山茶碗窯	片口鉢	(31.1)	13.4	(14.0)
13	遺48	土器	かわらけ皿	6.8	4.2	2.1
14	遺48	土器	かわらけ皿	7.5	5.6	1.6
15	遺48	土器	かわらけ皿	(7.5)	5.2	1.4
16	遺48	土器	かわらけ皿	8.0	5.7	1.7
17	遺48	土器	かわらけ皿	7.5	4.7	2.2
18	-	白磁	花瓶	-	(8.4)	(6.6)
19	-	土器	かわらけ皿(コースター)	4.6	-	1.2
20	-	土器	かわらけ皿(コースター)	4.5	-	1.1
21	-	土器	かわらけ皿	7.0	4.3	1.7
22	-	土器	かわらけ皿	7.9	5.6	1.5
23	-	土器	白かわらけ皿	15.8	-	3.35
24	-	土器	かわらけ皿	(12.4)	(8.0)	3.3
25	-	瓦		長(11.4)	巾(11.1)	厚3.3
26	-	石製品	碁石	縦2.1	横1.9	厚0.3
27	-	骨製品	碁石	縦1.8	横1.8	厚0.6
28	-	石製品	碁石	縦2.2	横1.6	厚4.5

表2　遺物観察表(2)

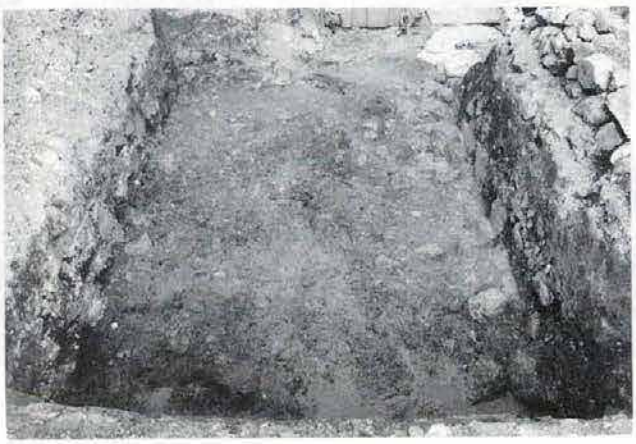
図・遺物No.	遺構	種別		計測値 単位：cm 口径	底径	器高
29	-	石製品	碁石	縦2.0	横1.6	厚0.35
30	-	銅製品	熙寧元寶1068年(北宋)	-	-	-
31	-	銅製品	景祐元寶1034年(北宋)	-	-	-
5期						
1	遺21	土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.7)	1.5
2	遺23	石製品	滑石鍋	(32.3)	-	(9.9)
3	遺24	常滑	甕	-	-	-
4	遺24	石製品	天草砥石	長(5.8)	巾4.5	厚1.6
5	遺24	石製品	砥石	長(5.2)	巾4.95	厚2.7
6	遺50	常滑	甕	-	-	-
7	遺50	常滑	甕	-	-	-
8	-	土器	かわらけ皿	8.0	5.5	1.75
9	-	土器	かわらけ皿	(8.2)	4.6	1.8
10	-	鉄製品	釘	長7.4		厚0.3
11	-	鉄製品	釘	長5.9		厚0.3
12	-	石製品	滑石鍋	-	-	-
13	-	土器	かわらけ皿	7.3	5.0	1.4
14	-	土器	かわらけ皿	(7.5)	5.8	1.6
15	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	5.4	1.9
16	-	土器	かわらけ皿(墨書)	-	-	-
17	-	石製品	砥石	長5.1	巾3.7	厚0.6
18	-	銅製品	皇栄通寶1038年(北宋)	-	-	-
19	-	銅製品	皇栄通寶1038年(北宋)	-	-	-
6期						
1	遺55	土器	かわらけ皿	(7.9)	(4.7)	1.6
2	遺57	-	-	長10.6	巾7.5	厚1.6
3	-	青磁	碗	8.8	4.15	3.3
4	-	青白磁	合子蓋	(6.8)	-	(2.8)
5	-	常滑	甕	-	-	-
6	-	土器	かわらけ皿(コースター)	5.0	4.0	1.0
7	-	土器	かわらけ皿	(3.8)	(6.2)	1.5
8	-	土器	かわらけ皿	(11.7)	7.05	3.55
9	-	土器	かわらけ皿	(12.1)	(8.5)	3.5
10	-	瓦	軒丸瓦	-	-	-
11	-	瓦	軒丸瓦	-	-	-
12	-	瓦		-	-	-
13	-	銅製品	開元通寶960年(南唐)	-	-	-
14	-	銅製品	開元通寶960年(南唐)	-	-	-
15	-	鉄製品	刀子	長27.8	巾2.3	厚0.9
16	-	銅製品	鈴	径1.6		
17	-	銅製品		縦3.4	横3.9	厚0.3
18	-	鉄製品	釘	長5.6	巾0.4	
19	-	鉄製品	釘	長5.2	巾0.9	
20	-	鉄製品	釘	長5.4	巾0.3	
21	-	鉄製品	釘	長7.0	巾0.9	

図・遺物No.	遺構	種別		計測値 単位：cm 口径	底径	器高
22	-	鉄製品	釘	長7.6	巾0.4	
23	-	鉄製品	釘	長3.5	巾0.5	
24	-	木製品	鳥形	長9.4	巾0.9	厚0.6
25	-	木製品	鳥形	長10.2	巾1.0	厚0.6
26	-	木製品	棒状	長17.5	巾1.2	厚0.3
27	-	木製品	刃子鎖	長25.6	巾3.6	厚0.5
28	-	木製品	杓子	長21.4	巾5.6	厚0.5
29	-	木製品	棒状	長26.7	巾0.6	厚0.45
30	-	木製品	箸	長23.2	巾0.7	厚0.2

▲1　Ⅰ区　1期（東から）

▲2　Ⅱ区　1期 遺構2（南から）

▲3　Ⅱ区　2期（南から）



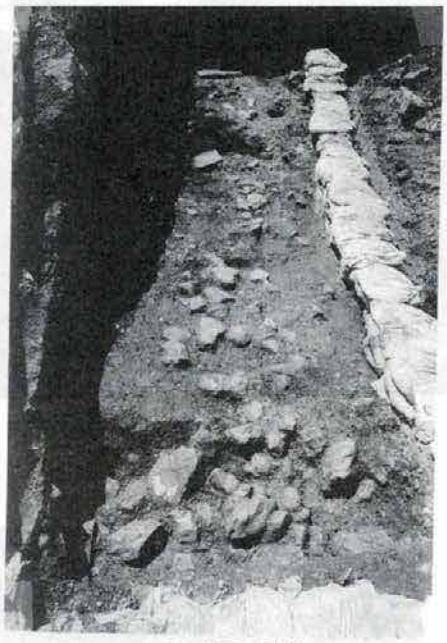
▲5　Ⅰ区　2期 全景（南から）

▲4　Ⅱ区　2期

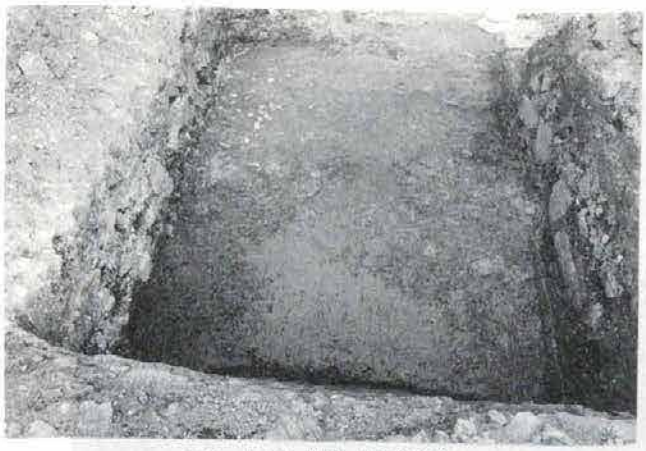
▲6　Ⅰ区　3期 遺構13

図版 2

▲1　II区　2期

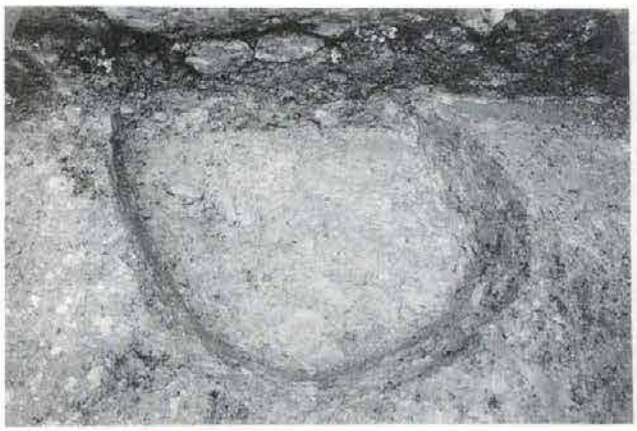


▲2　II区　2期



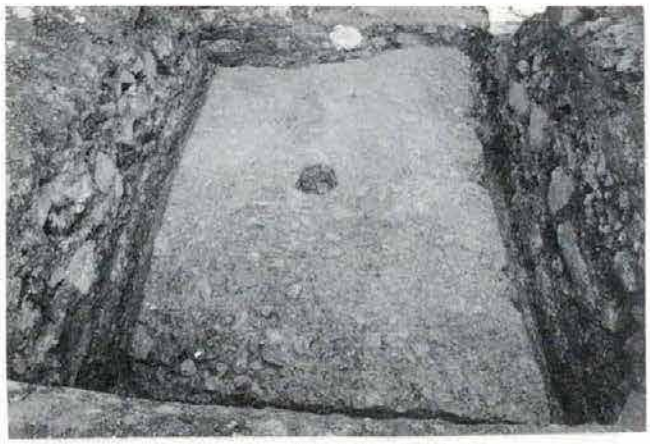
▲3　I区　3期（南から）

▲4　I区　3期 遺構14（南から）



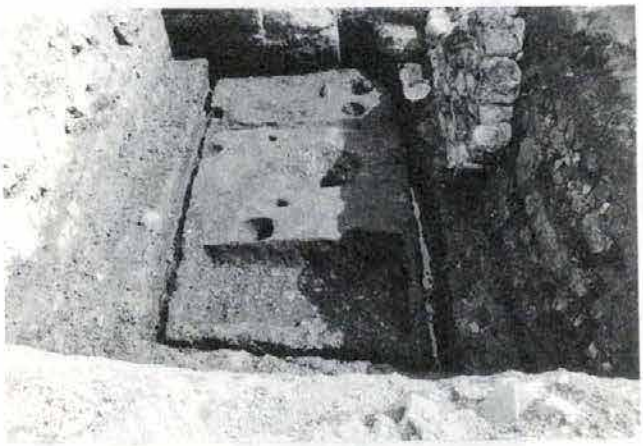
▲5　I区　3期 遺構14（西から）

▲6　I区　6期（南から）



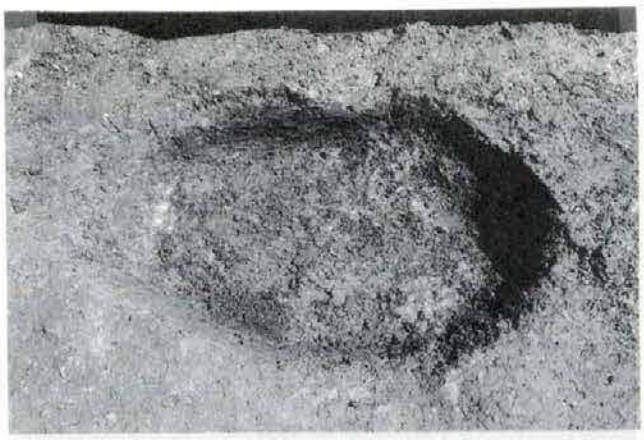
▲1　I区　4期　全景（南から）

▲2　II区　5期　全景（南から）



▲3　I区　5期　全景（南から）

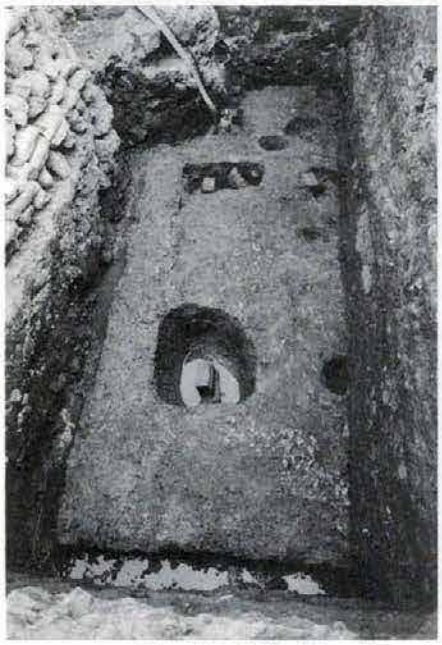
▲4　6期（南から）



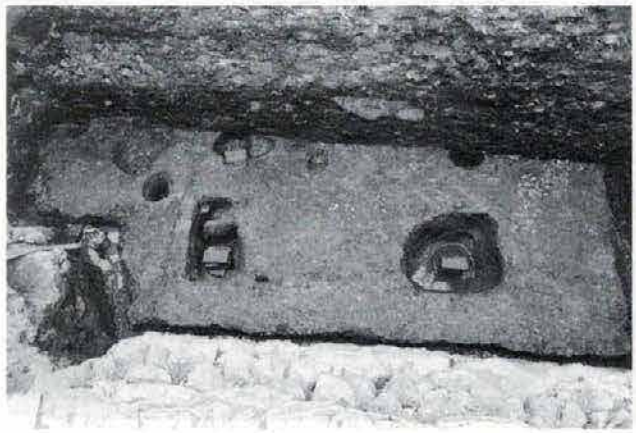
▲5　I区　6期　土坑遺構40（西から）

▲6　I区　2期

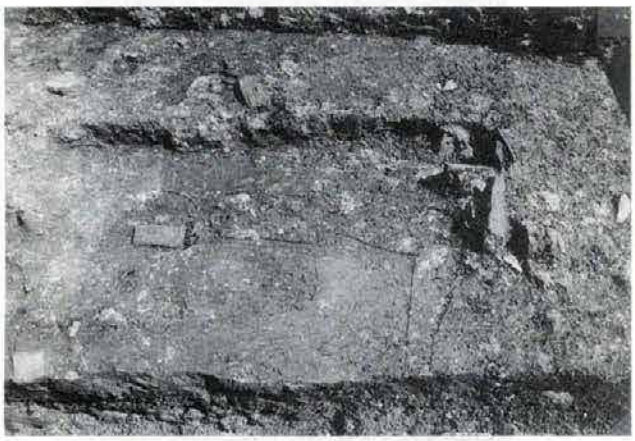
図版4



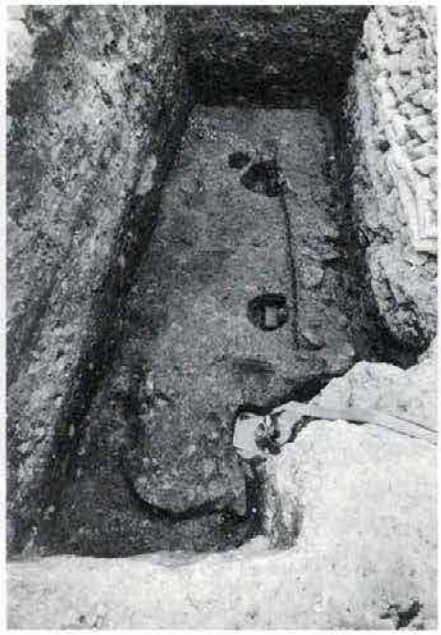
▲1　I区　6期　全景（南から）



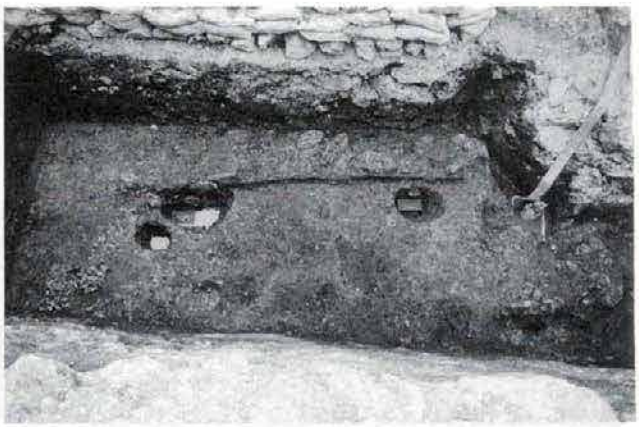
▲2　II区　6期　全景（西から）



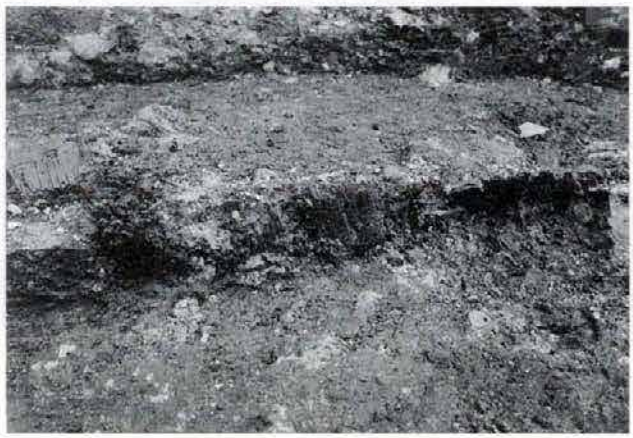
▲3　II区　5期　遺構50



▲4　II区　6期　建物　遺構59・58（北から）



▲5　II区　6期（南から）

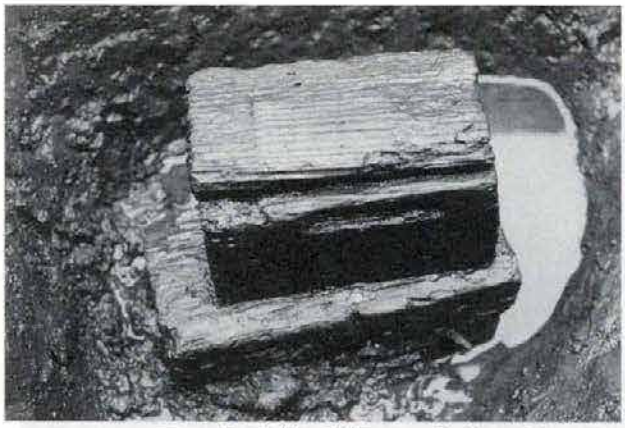


▲6　II区　5期　遺構50板壁（北西から）

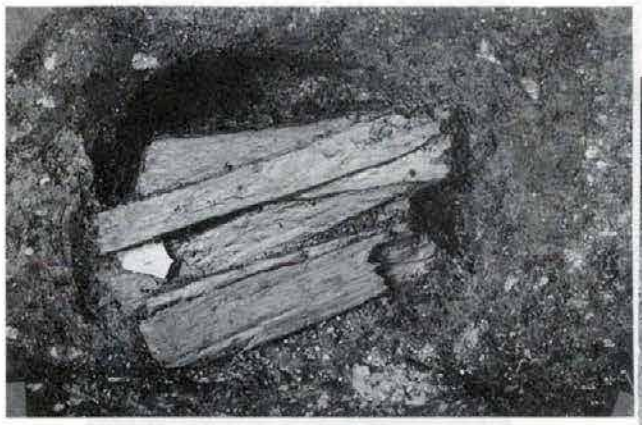
▲1　II区　6期　遺構57（東から）

▲2　II区　6期　遺構57板壁検出状況（東から）

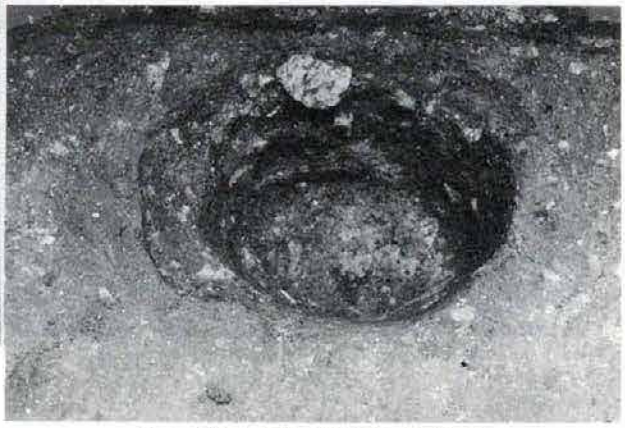
▲3　II区　6期　遺構58礎板検出状況（南から）



▲4　II区　6期　遺構59礎板アップ（東から）

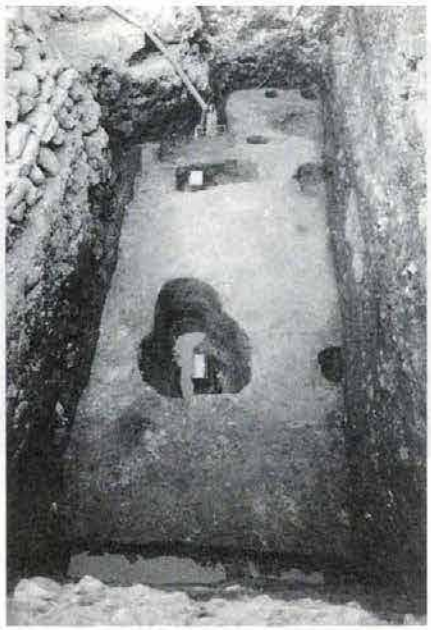


▲5　II区　6期　遺構54



▲6　II区　6期　遺構54（西から）

図版6

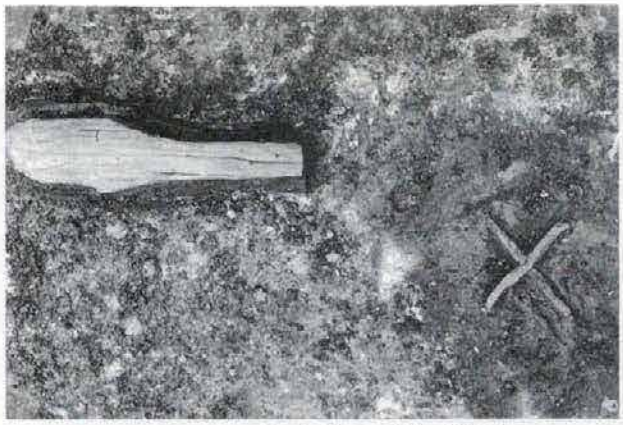


▲1　II区　6期 遺構57板壁（南から）

▲2　I区　6期全景（北から）

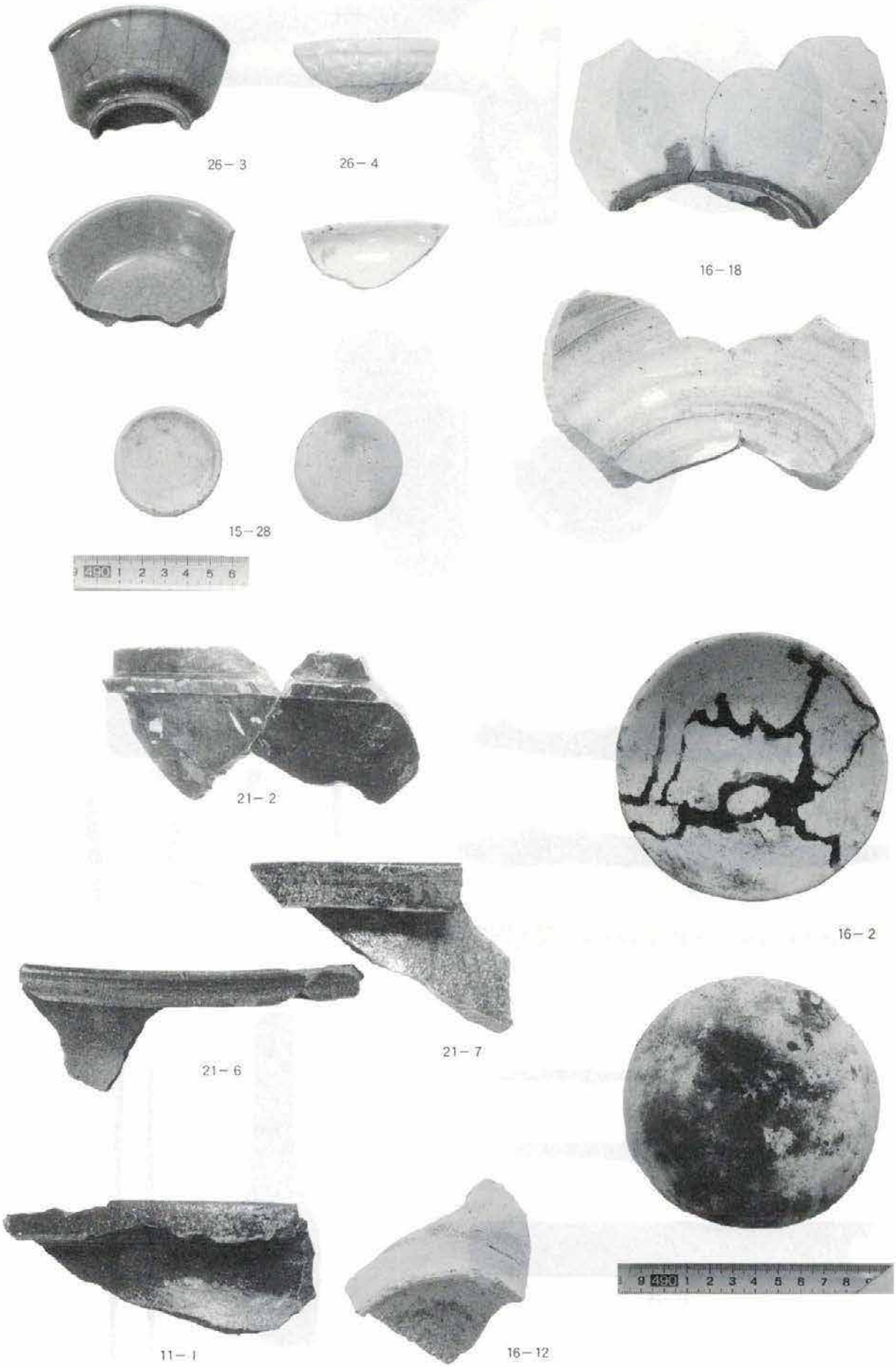
▲3　III区 かわらけ溜り（北から）

▲4　III区（東から）



▲5　II区　6期 木杓子、形代（鳥形）

▲6　II区　6期 形代（鳥形）



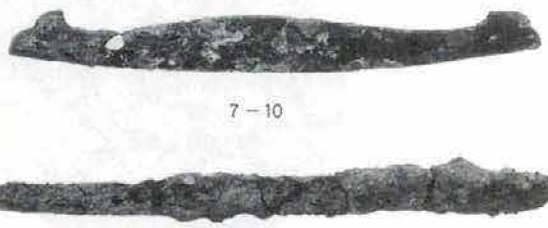
出土遺物（1）

図版 8

26－11

26－10

26－12



7－10

27－15

27－16

27－17

21－11　21－10

27－23

27－19

27－24

27－25

27－26

27－27

27－29

27－28

出土遺物（2）

弁ヶ谷遺跡（No. 249）

材木座六丁目643番3

例　言

1．本報は鎌倉市材木座六丁目643番３に所在する弁ヶ谷遺跡（鎌倉市№249）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．発掘調査期間は、平成16年９月25日から平成16年11月11日までである。
3．調査体制は次のとおりである。
　担　当　者　　齋木秀雄
　調　査　員　　鯉渕義紀，押木弘己
　調査補助員　　伊藤博邦、根元睦子、八木沼ひとみ、森山千加
　調査作業員　　（社）鎌倉市シルバー人材センター
4．本報告に関る資料整理は以下の体制で行った。
　担　当　者　　降矢順子
　調　査　員　　加藤千尋、伊藤博邦、岡田慶子、三浦恵、村松彩美
5．本報告の執筆は、調査に関った齋木、鯉渕の協力、資料提供を受けて降矢順子がおこない、齋木が補助した。
6．本書に使用した遺構、遺物図版の縮尺は以下の通りである。
　遺構全体図　1/300　個別遺構　1/60
　遺構図の水糸高は、海抜を示す。
　遺物実測は1/3、銭は1/1
7．出土品、図面等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

第１章　調査概観 ……103
　第１節　遺跡の位置と歴史的環境 ……103
　第２節　周辺の調査 ……105
　第３節　調査の経過と堆積土層 ……106
　第４節　調査軸の設定 ……107
第２章　検出された遺構と出土遺物 ……108
　第１節　１期の遺構と遺物 ……108
　第２節　２期の遺構と遺物 ……112
　第３節　３期の遺構と遺物 ……116
　第４節　４期の遺構と遺物 ……117
　第５節　５期の遺構と遺物 ……121
第３章　まとめ ……127
　第１節　遺構の変化と年代 ……127
　第２節　検出遺構の性格 ……127

表　目　次

表１　遺物観察表（１） ……128
表２　遺物観察表（２） ……129
表３　遺物観察表（３） ……130

図　目　次

図１　周辺の調査地点 ……104
図２　グリット設定図 ……105
図３　堆積土層 ……106
図４　１期遺構全体図 ……108
図５　１期遺構 ……109
図６　１期遺構 ……109
図７　１期遺構出土遺物 ……110
図８　１期出土遺物 ……111
図９　２期遺構全体図 ……112
図10　２期遺構（1） ……113
図11　２期遺構（2） ……113
図12　２期出土遺物（1） ……114
図13　２期出土遺物（2） ……115
図14　３期遺構全体図 ……116
図15　３期遺構 ……117
図16　３期遺構出土遺物（1） ……118
図17　３期遺構出土遺物（2） ……118
図18　３期出土遺物 ……119
図19　４期遺構全体図 ……120
図20　４期遺構 ……121
図21　４期遺構出土遺物（1） ……121
図22　４期遺構出土遺物（2） ……122
図23　４期遺構出土遺物（3） ……123
図24　５期遺構全体図 ……124
図25　５期遺構 ……124
図26　５期遺構出土遺物（1） ……125
図27　５期遺構出土遺物（2） ……125
図28　５期面出土遺物（1） ……125
図29　５期遺構出土遺物（2） ……126

図 版 目 次

図版１　１．Ⅰ区１期全景(南から)……131
　　２．Ⅱ区１期全景(西から)……131
　　３．Ⅰ区１期全景(北から)……131
　　４．Ⅰ区１期遺構24焼土範囲・礎石(北から)　131
　　５．Ⅰ区１期遺構24土丹検出状況……131
　　６．Ⅰ区２期遺構25全景(東から)……131
図版２　１．Ⅰ区２期全景(北から)……132
　　２．Ⅰ区２期全景(南から)……132
　　３．Ⅱ区２期全景(東から)……132
　　４．Ⅱ区２期礫検出状況(北から)……132
　　５．Ⅰ区３期瓦出土状況(南から)……132
　　６．Ⅱ区２期遺構102検出状況(北から)……132
図版３　１．Ⅰ区３期全景(北から)……133
　　２．Ⅰ区３期全景(南から)……133
　　３．Ⅱ区３期全景(東から)……133
　　４．Ⅰ区３期遺構33(東から)……133
　　５．Ⅰ区３期礎石(西から)……133
　　６．Ⅱ区３期石臼転用礎石検出状況(南から)…133
図版４　１．Ⅱ区２期礎石(北から)……134
図版４　２．Ⅰ区３期遺構34(かわらけ溜り)……134
　　３．Ⅰ区４期全景(西から)……134
　　４．Ⅱ区４期全景(東から)……134
　　５．Ⅱ区５期全景(西から)……134
　　６．Ⅰ区５期トレンチ……134
図版５　１．Ⅰ区５期トレンチ全景(北から)……135
　　２．Ⅰ区トレンチ遺構52(西から)……135
　　３．Ⅰ区遺物出土状況……135
　　４．Ⅰ区５期トレンチ杭検出状況(西から)……135
　　５．Ⅰ区５期トレンチ遺構50(西から)……135
　　６．Ⅰ区５期トレンチ全景(西から)……135
図版６　１．Ⅱ区５期漆皿出土状況(東から)……136
　　２．Ⅱ区４期遺構38かわらけ出土状況(東から)……136
　　３．Ⅱ区３期遺物出土状況(西から)……136
　　４．Ⅱ区東壁セクション(西から)……136
　　５．北壁セクション(南から)……136
　　６．Ⅱ区西壁セクション(東から)……136
図版７　出土遺物(1)……137
図版８　出土遺物(2)……138

第１章　調査概観

第１節　遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は鎌倉市材木座六丁目643番３に所在し、弁ヶ谷遺跡（鎌倉市№249遺跡）の範囲内に含まれる。弁ヶ谷遺跡の範囲は、材木座三丁目に広がる谷全体で、旧道を挟んだ南側は材木座町屋遺跡（鎌倉市№291遺跡）になる。

現況に沿って調査地点を説明する。材木座光明寺門前、材木座海岸入り口を経て鎌倉駅に向かうバス通りがある。この道路が、光明寺門前から西に向かって曲がる辺りから豆腐川に沿って北上する道路がある。この道路は材木座の山裾を辿って水道路脇の能蔵寺跡にでる。ここで名越方向と大町方向に道路は分岐する。豆腐側から北上する道路は、調査地点の南で西に曲がる。この道路が、本地点の含まれる弁ヶ谷遺跡と材木座町屋遺跡の境となっている。道路の北が弁ヶ谷遺跡、南が材木座町屋遺跡である。調査地点はこの敷地の一角にあたる。調査地の地表面レベルは弁ヶ谷遺跡が18m、材木座町屋遺跡が15mとなる。

調査地の遺跡名となっている弁ヶ谷は鎌倉時代初めからたびたび記録に登場している。『吾妻鏡』承久元年（1219）には「高御蔵小路」の記事があり、これは高御蔵があったことから小路の名称になったと考えられている。高御蔵は「高い」「御蔵」なので幕府関係の高床式の蔵と考えられている。最寶寺文書には「弁ヶ谷高御倉」と書かれているので、高御蔵は弁ヶ谷にあったことになる。『鎌倉廃寺事典』（以下、「事典」という）によれば最寶寺の他に現三浦市三崎にある浄土真宗最福寺、新善光寺、北条高時創建の崇寿寺（禅宗）が弁ヶ谷にあった。

崇寿寺は元享元年（1321）に北条高時が開創した禅宗寺院で、応永31年（1424）までは存在していた。また、『新編相模国風土記稿』（以下、「風土記稿」という）の乱橋村項に崇寿寺旧蹟の辺りを観音寺谷というと記されている。これが正しければ崇寿寺に前後して「観音寺」が弁ヶ谷にあった可能性もある。

新善光寺は名越にあったとする説もあるが、「事典」には古老の話として弁ヶ谷の奥・名越長勝寺の背後にあったという話が載っている。創建時期や宗旨は不明であるが、仁治元年（1242）には記事（『北条九代記』）があるのでそれ以前に創建されていたと思われる。新善光寺が葉山町の上山口に移転したのは天正十八年（1590）と伝わる。

最寶寺は「弁ヶ谷高御蔵」にあった寺院で寺伝には、源頼朝が扇ヵ谷に創建した浄土真宗の寺院が建久六年（1195）に弁ヶ谷に移り天台宗に変わったとある。現在は横須賀市野比にある。創建については曖昧であるが、寺所有の文書では貞治３年（1364）、応安３年（1370）の寄進状の記事が見えるので、これ以前には弁ヶ谷にあったようだ。「事典」では大永元年（1521）に野比に移った記事が正しいとしているので、それまでは弁ヶ谷に存在した。

南に接する材木座町屋遺跡では、調査地点の南西100mに源頼朝の祈願所として養和元年（1181）に創建された補陀落寺（ほだらくじ）があり、南東100mには鎌倉の貿易港である和賀江島がある。和賀江島は貞永元年（1232）に往阿弥陀仏が発心し、北条泰時らの助力により翌貞永二年（1233）に完成している。和賀江島の辺りは西浜と呼ばれていたようで『吾妻鏡』承元元年（1209）に「西浜（飯島と号す）の辺騒動す」の記事がある。また、飯島には頼朝の愛妾である「亀前」が北条政子に隠れて住んでいたことが寿永元年（1182）の記事に書かれている。ちなみに、亀前は政子に居住が発覚して鎧摺に移り住んだ後に小坪に戻っている。

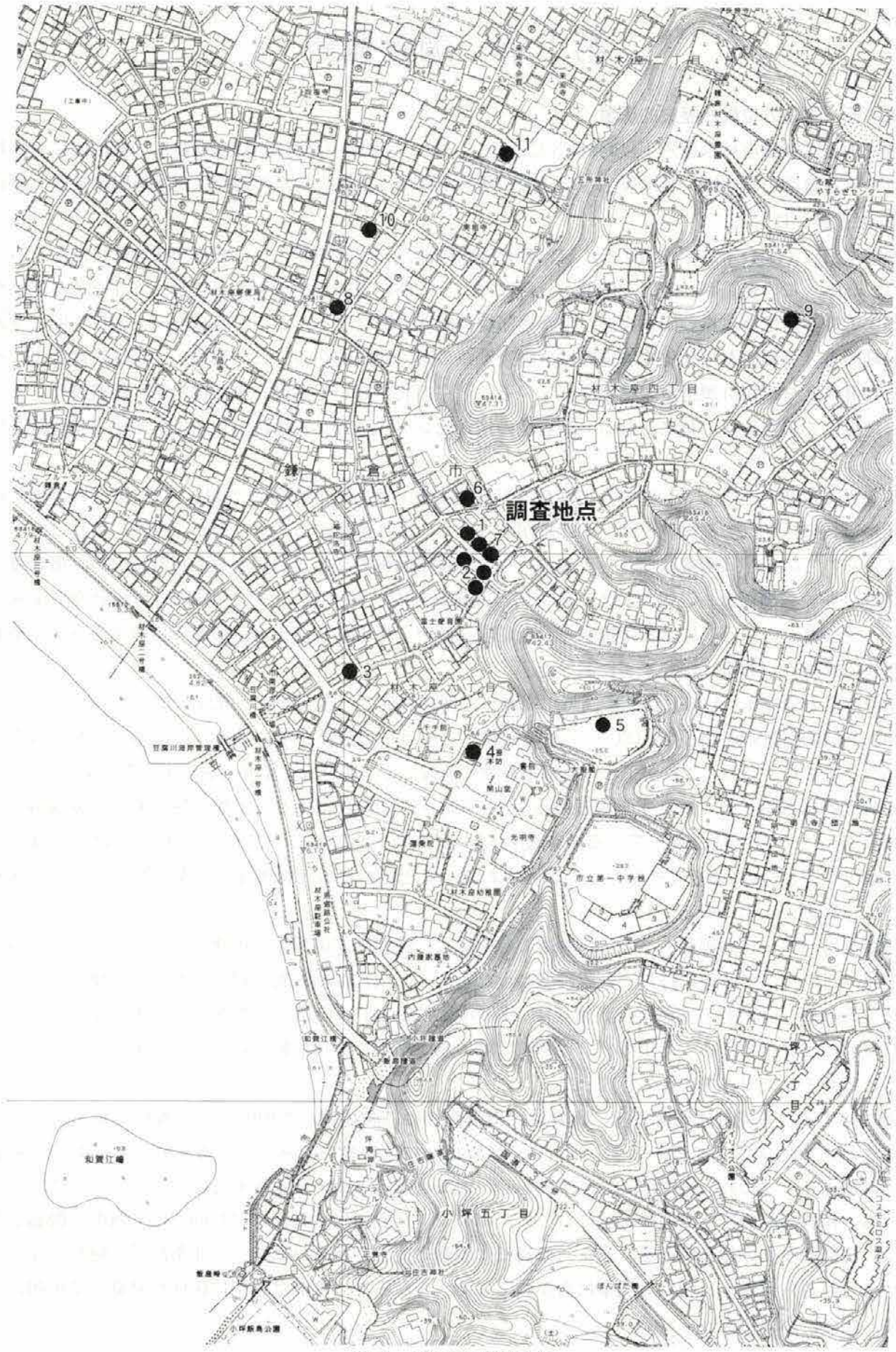

調査地点
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
鎌倉市
材木座一丁目
材木座二丁目
材木座三丁目
材木座四丁目
材木座六丁目
小坪五丁目
和賀江嶋

図１　周辺の調査地点

第２節　周辺の調査

本地点周辺では比較的多くの調査が実施され、材木座町屋遺跡内の特に補陀洛寺から弁ヶ谷周辺の様相が明らかになりつつある。ここでは、広い本遺跡内の様相変化はおいて、弁ヶ谷開口部周辺の様相に限って周辺の調査をみる。

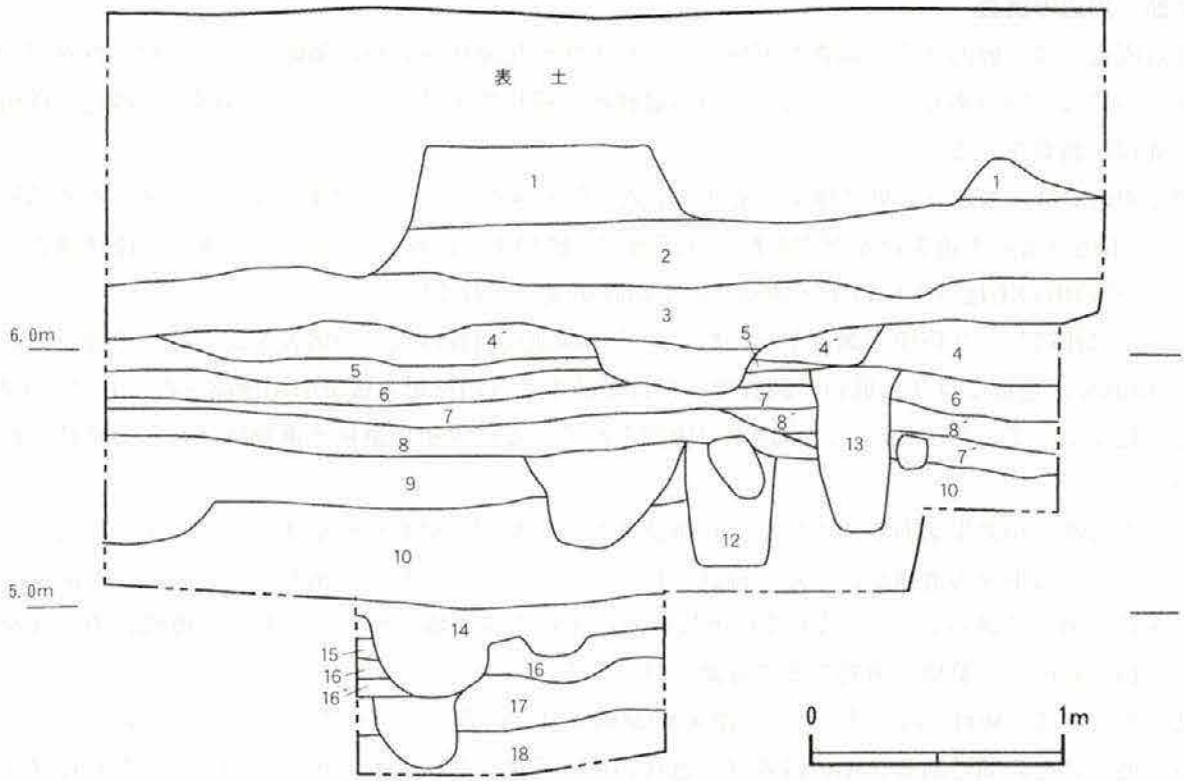
本地点周辺では、本地点の東に接する宅地（平成15年・地点１）、さらに東に接する宅地（平成15年・地点７）、本地点南の市道を挟んだ宅地群で３箇所（平成14年・地点２）、富士愛育園内で確認調査（平成15年）、その南の宅地（平成11年・地点３）で調査が実施されている。

地点２では連続して３箇所の調査が行われている。本地点調査時点での地表を比べると市道が本地点より1.5m低く、地点２は２m低い。調査では13世紀前半から14世紀の版築面が確認されて井戸、土坑、溝などが見つかっている。しかし、本地点で確認されている15世紀の遺構や遺物はほとんど確認されていない。

地点３では幾つかの生活面から土坑などが確認されて15世紀の遺物がややまとまって出土している。地点３より南では中世の遺構がほとんど確認されていないので、これより南が砂丘の可能性が高い。本地点の東に位置する地点６・７では上部が近代の池などによって壊されているものの遺構の遺存状況は良好で、13世紀前半の遺構や遺物も多く確認されている。

本地点周辺では、鎌倉にはめずらしく15世紀の遺構が良好に残っていることが明らかになりつつある。本地点と地点２との間にある２mの段差は、近代の造成で造られたもので地点２周辺の15世紀に属する遺構群はこの時に削平されて何処かへ運ばれてしまったと考えられる。

図２　グリット設定図



1．近世土
2．暗褐色土　小土丹（1～3㎝）を少量含む。中世遺物包あり。
3．〃　小土丹（1～3㎝）を多く含む。しまりあり。
4．〃　3層に似る。
4'．〃　焼土粒子、炭化物、小土丹（焼けた）を多く含む。
5．褐色土　灰あるいは、焼けた砂粒状のもの、炭化物を多く含む。
6．土丹版築
7．暗褐色　炭化物層、きめ細かく木炭はほとんど含まれない。
7'．暗褐色土　炭化物層、7層と同じであるが、柱穴をはさんでレベルが異なる。
8．暗褐色土　暗褐色の粘土ブロックを密に含む。土丹（2～3㎝）も多く含む。
8'．暗褐土　8層に似るが粘土ブロックをまったく含まない。
9．暗褐色土　土丹（5～15㎝）を多く含む。ややしまりがない。
10．暗褐色土　9層に似るが、土丹をより多く含む。
11．暗褐色土　土坑覆土、炭化物少量と小土丹を多く含む、やや黒みが強い。
12．暗褐色土　土坑覆土、焼けた鎌倉石、小土丹を多く含む。
13．暗褐色土　土坑覆土、土丹（3～5㎝）を多く含む。
14．暗褐色土　木炭片を多く含む。小土丹、木炭を少量含んでいる。
15．褐色土　細かい土丹とくずれた泥岩の版築。
16．褐色土　左の一部に版築があるが、右側は褐色の粘土質。
17．暗灰色粘土層　青灰色、小土丹をわずかに含む。
18．暗灰色粘土層　青灰色をわずかに含み、やや砂質である。

図3　堆積土層

第3節　調査の経過と堆積土層

調査は個人住宅の建設に伴う事前調査として、調査を行った。調査では現地表から80㎝前後を重機によって掘削し、以下を人力で掘り下げて遺構確認を行った。

調査にあたっては、表土・調査発生土を敷地内で処理するため、対象面積を1回で掘削する事が困難であった。そのため、対象面積を2分割して調査を行わざるを得なかった。また、調査深度が2mにも及ぶため1回目の調査区を埋めた発生土が崩落する危険性も考えられたので2分割した。調査区間にはベルト状の未調査区を残した。そのため土層図には若干整合しない部分が生じてしまった。調査では最初に調査した部分をⅠ区、次いで調査した部分をⅡ区としている。

本地点で確認した堆積土層は、中世遺物の集中する遺構面・包含層を一つの層にまとめると、およそ7層に区分できる。堆積土遺存状態はきわめて良好で、道路を挟んだ南側では削平されて失われている15世紀の堆積土も残っている。

第5層が鎌倉市街地で中世地山とされている土層に類似しているが、本地点ではその下、第5層上面を7面、第6層上面を8面として捉えている。したがって、本地点で確認された暗褐色粘質土は市街地のものとは堆積年代が異なる。また、第7層からは中世以前の土器片ともみえる細片がわずかに出土している。遺構の存在を裏付けるほどの量ではないが、7層の堆積は中世以前の可能性がある。中世遺構

の最初は第６層上面である。

第１層　表土・造成土

第２層　近世耕作土。

第３層　遺構覆土・版築面。１面から５面。

第４層　暗褐色粘質土。細かい土丹と少量の炭化物を含む。軟質である。遺物をほとんど不含まない。下面が６面。

第５層　褐色粘土層。細かい土丹と炭化物を少量含む。面上には土丹版築部分的見られる。上面が７面。

第５層　褐色粘土層。細かい土丹と若干の炭化物を含む。上面が８面。

第７層　暗灰色粘土層。青灰色小土丹をわずかに含む。下層はやや砂質で分層可能。

第４節　調査軸の設定

調査測量に当たっては、調査区の形状に沿って任意の測量基準点KBM①・②を設定し、この二点間の関係を基に、主として光波測距儀を用いて平面図の作図に当たった。KBM①・②の任意座標値は、（ｘ0，y0）と（ｘ8，ｙ0）となる。その後、鎌倉市4級基準点C019－C020間の関係を基に開放トラバース測量を行い、KBM①・②に国土座標値を与えることで同座標系への合成を図るものとした。この結果に基づいて、図３に国家座標系と任意座標系・調査区との位置関係を示した。

また、標高基準値は国道134号線沿いに設置された鎌倉市３級基準点No. 53418（標高5. 100m）を起点に移設を行い、KBM①に7. 479mを、②に7. 547mをそれぞれ算出・付与して調査に用いた。

第２章　検出された遺構と出土遺物

本章では、調査で検出された遺構と遺物について説明を加える。なお、遺構の説明にあたっては遺物が出土している遺構を優先したが、図示できる遺物の出土している遺構が少ないため、形状のわかる遺構については幾つか説明を加えた。

第１節　１期の遺構と遺物

１期には表土（7.30m）下約120cm、標高6.10m前後で検出されたＩ区の１面と２面の一部、標高6.10m～6.25mで検出されたⅡ区の１面を含めた。本期は第２層に削平された面であり、明確な版築面（生活面）は確認できなかったが、焼土・炭化物、小土丹（１～３cm）を多く含む、締りのある暗褐色粘質土で、炭化物の下に薄くて弱い版築面が部分的に確認されている。Ⅱ区は、Ｉ区の版築面などは確認できなかった。Ⅱ区は南東部で近代の池遺構が確認されており、現代遺物は確認できなかったが、１面自体が攪拌されている可能性がある。

遺構はＩ区で土坑・柱穴が21基、安山岩礎石２石と周辺の焼土・炭化物の広がり（遺構24）、Ⅱ区で柱穴１基と散乱する土丹塊が確認されている。かわらけだまり１基、土坑２基、ピット1基である。

遺構１

x６、ｙ１の調査区北西隅で確認した細長い土坑で、北の調査区外に延びる。確認規模は南北（115）cm、東西70cm、深さ14cm、底面レベル5.97mを測る。覆土は小土丹を含む暗褐色土で出土遺物は少ない。

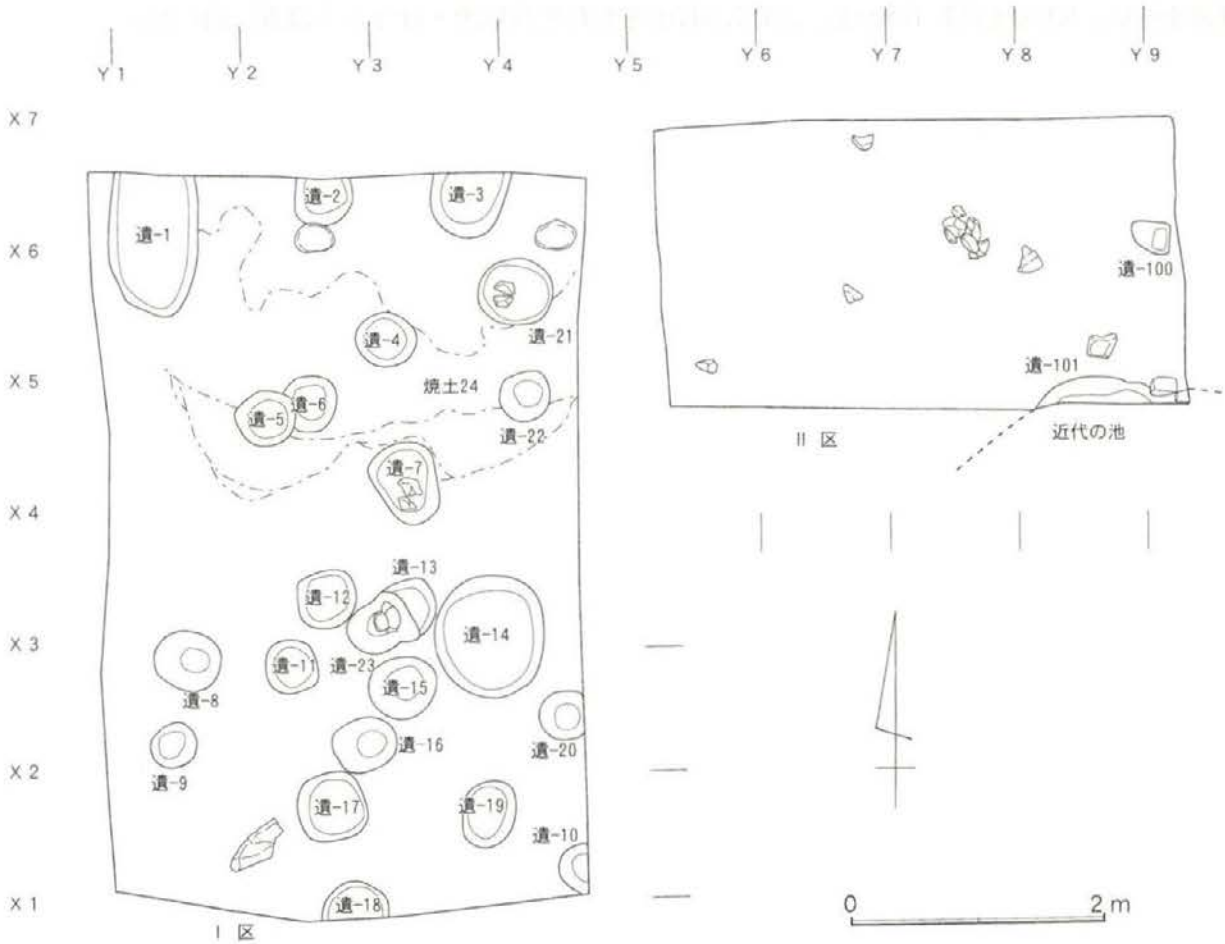


図４　１期遺構全体図

出土遺物は1点が図化できた。図７－１は糸切りかわらけ大皿。

遺構２

ｘ６、ｙ２の調査区北壁際で確認した小土坑で、北の調査区外に延びる。平面円形で、確認規模は南北（36)cm、東西55cm、深さ38cm、底面レベル5.74mを測る。覆土は炭化物の多い暗褐色土で遺物は少ない。

出土遺物は3点が図化できた。図７－２は糸切りかわらけ小皿。３と４は瓦質手焙り脚部。

遺構４

x5、y3の焼土範囲内で確認した柱穴である。炭化物の堆積に近い時期の遺構である。平面円形で、確認規模は南北43cm、東西45cm、深さ13cm、底面レベル5.95mを測る。覆土は炭化物の多い暗褐色土で遺物は少ない。

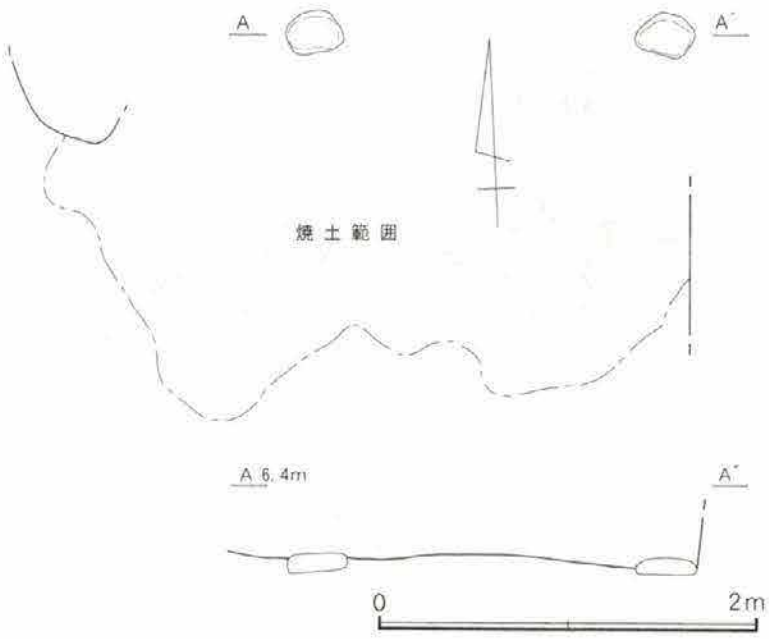


図５　１期遺構

出土遺物は1点が図化できた。図７－５は瓦質土風炉の口頸部で、口縁部から肩部にかけてスタンプ文が一周巡る。

建物１

ｘ６ラインの北30cm程で、東西に並ぶ２石の安山岩礎石を建物1とした。礎石建物で礎石周辺に薄い

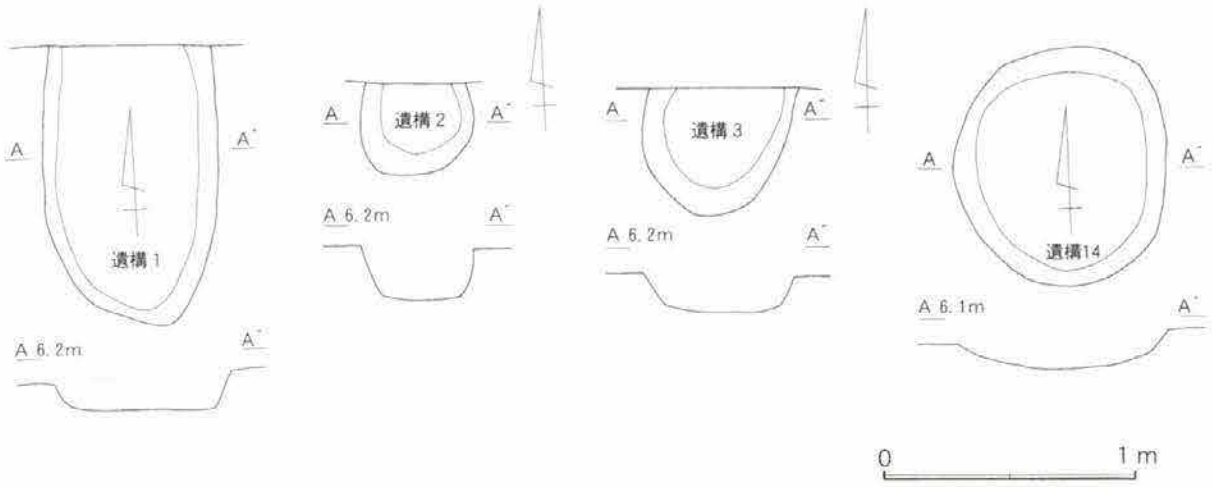


図６　１期遺構

土丹版築があり、その外側に焼土、次いで炭化物層が広がっている。礎石は長軸34cm、短軸23cmほどで、長軸は２石共東西方向にある。上面レベルは6.05m前後で、礎石間の芯芯距離は190cmを測る。この礎石はⅡ区で確認できなかったので、西・北に展開する建物と思われる。

本址に伴う遺物は確認できなかったが、焼土範囲（遺構24）の遺物が本址の年代に近いと考えている。

遺構24（焼土範囲）

建物1の南側に広がる焼土・炭化物範囲の出土遺物をここに含めた。遺構番号は、本来必要では無いが、遺物の取り上げ上24を附した。範囲はおおよそ南北2.2m、東西3.6mである。かわらけの出土が多い

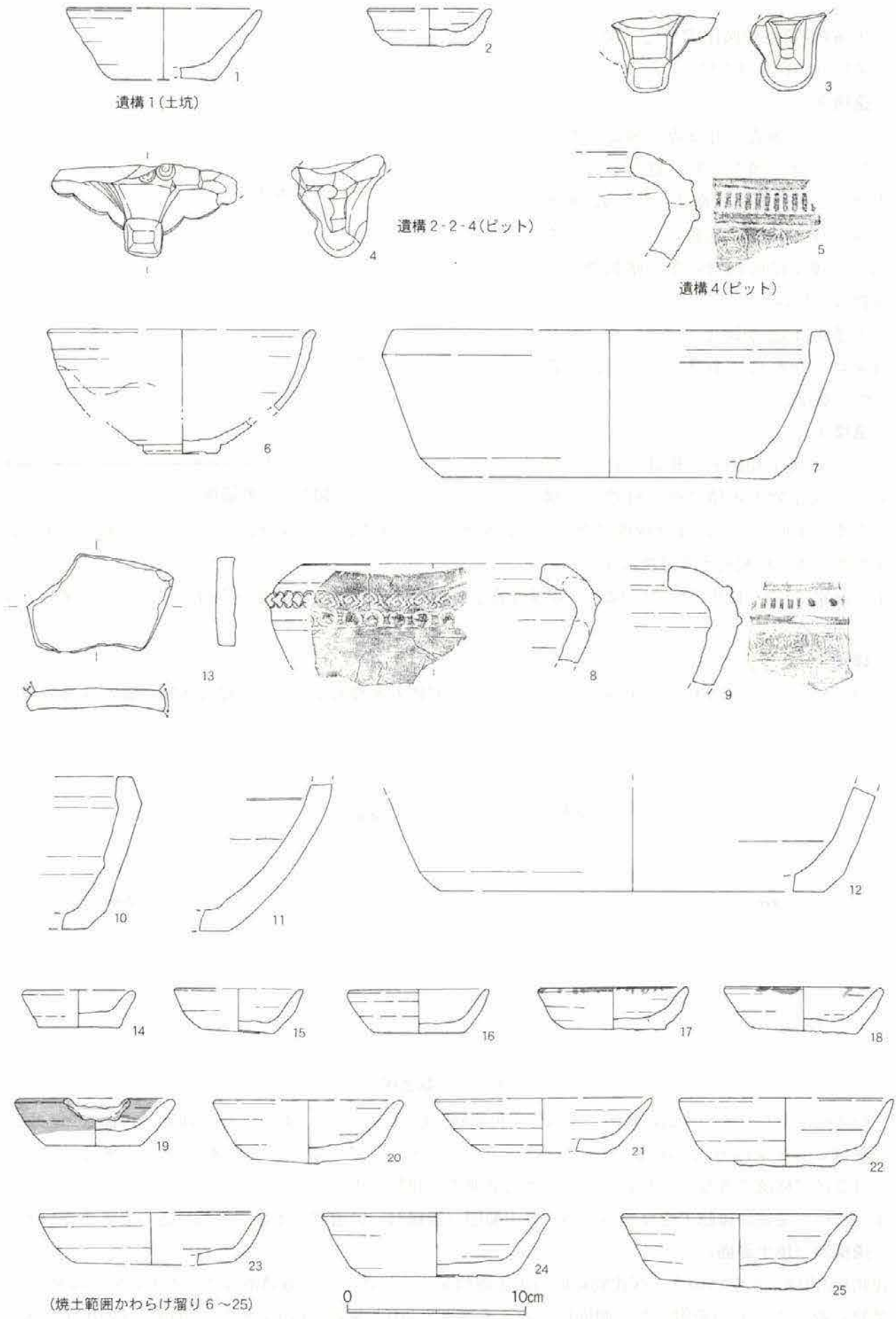


図7　1期遺構出土遺物

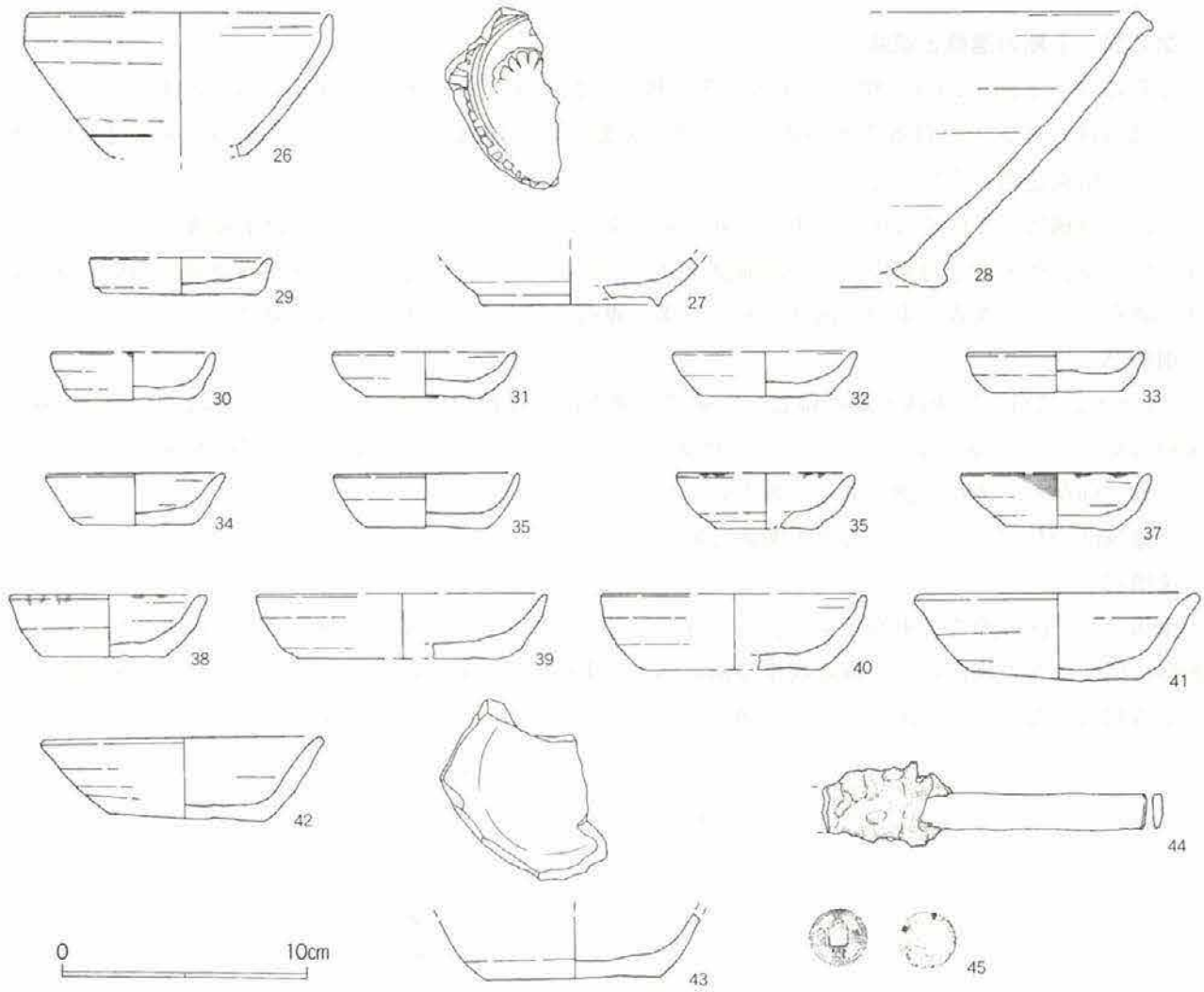


図８　１期出土遺物

が、かわらけ溜りというほどのまとまりは無い。

出土遺物は20点が図化できた。最も多く出土したかわらけは大皿1.770ｇ、小皿700ｇを測る。図７－６は瀬戸灰釉碗の口縁部から底部で、体部の一部が欠損。７から12は瓦質の手焙り類で、８は香炉の口縁部から頚部で肩部にスタンプ文が一周巡る。９と10は肩部にスタンプ文が一周巡る。13は常滑甕片で磨面が一面ある。14から19は糸切りかわらけ小皿で、14は極小で15世紀代。17から19は口縁部に煤が付着して灯明皿の使用痕跡がある。また、19は口縁の一部を意図的に打ち欠いている。20は糸切りかわらけ中皿。21から25は糸切りかわらけ大皿である。

遺構14

ｘ３、ｙ４辺りを中心として確認した土坑である。平面は円形で南北94cm、東西85cm、深さ16cm、底面レベル5.89mを測る。覆土は小土丹塊を含む暗褐色土。

出土遺物は少なく、図化できた遺物は無い。

１期出土遺物

１期の遺構を確認する際に出土した遺物をここに含めた。20点が図化できた。図８-26は瀬戸天目碗の口縁部から体部、27は瀬戸灰釉菊皿の底部、28は山茶碗窯系捏鉢の口縁部から体部、29から38は糸切りかわらけ小皿で、36から38は煤が付着して灯明皿としての使用痕がある。39から43は糸切りかわらけ大皿で口縁部を意図的に打ち欠いている。44は刀子で両端を欠損、45は銭で皇宗通寶（北宋・1038年）

である。

第２節　２期の遺構と遺物

２期には、１面下20cm、標高5.90m前後で検出されたＩ区の２面と３面の一部、Ⅱ区の３面を含めた。ほぼ同じ高さで土丹版築面が確認できた。基盤とする層は、小土丹（１～３cm）を密に含む、締りのある暗褐色粘質土である。

２期の遺構は、Ｉ区では中央に東西方向の細い溝があり、これを境に北側では版築面がある。土坑・柱穴が13基、頭大の土丹集中が１箇所確認できたが建物は復元できない。Ⅱ区では調査区西側で南北に並ぶ礎石が２列、調査区東端で南北に伸びる溝、礎石２石、土坑・柱穴が３基確認できた。

遺構25

ｘ４ラインに沿って東西方向に確認した溝で、調査区の東西に延びている。断面形は逆台形で、確認規模は幅24cm～23cm、深さ５cm～６cmで底面レベルは西端で5.89m、東端で5.87mを測り、数値で言えば東に向かって流れる溝である。軸方向はN-92°-Wである。

出土遺物は少なく、図化できる出土遺物は無い。

遺構26

遺構25とＩ区の調査区東端で切り合って確認した土坑である。遺構25を壊し、調査区外に延びる。平面形は南北に長い楕円形で、確認規模は南北84cm、東西（40)cm、深さ25cm、底面レベル5.69mを測る。出土遺物は少なく１点が図化できた。図13－47は糸切りかわらけの小皿である。

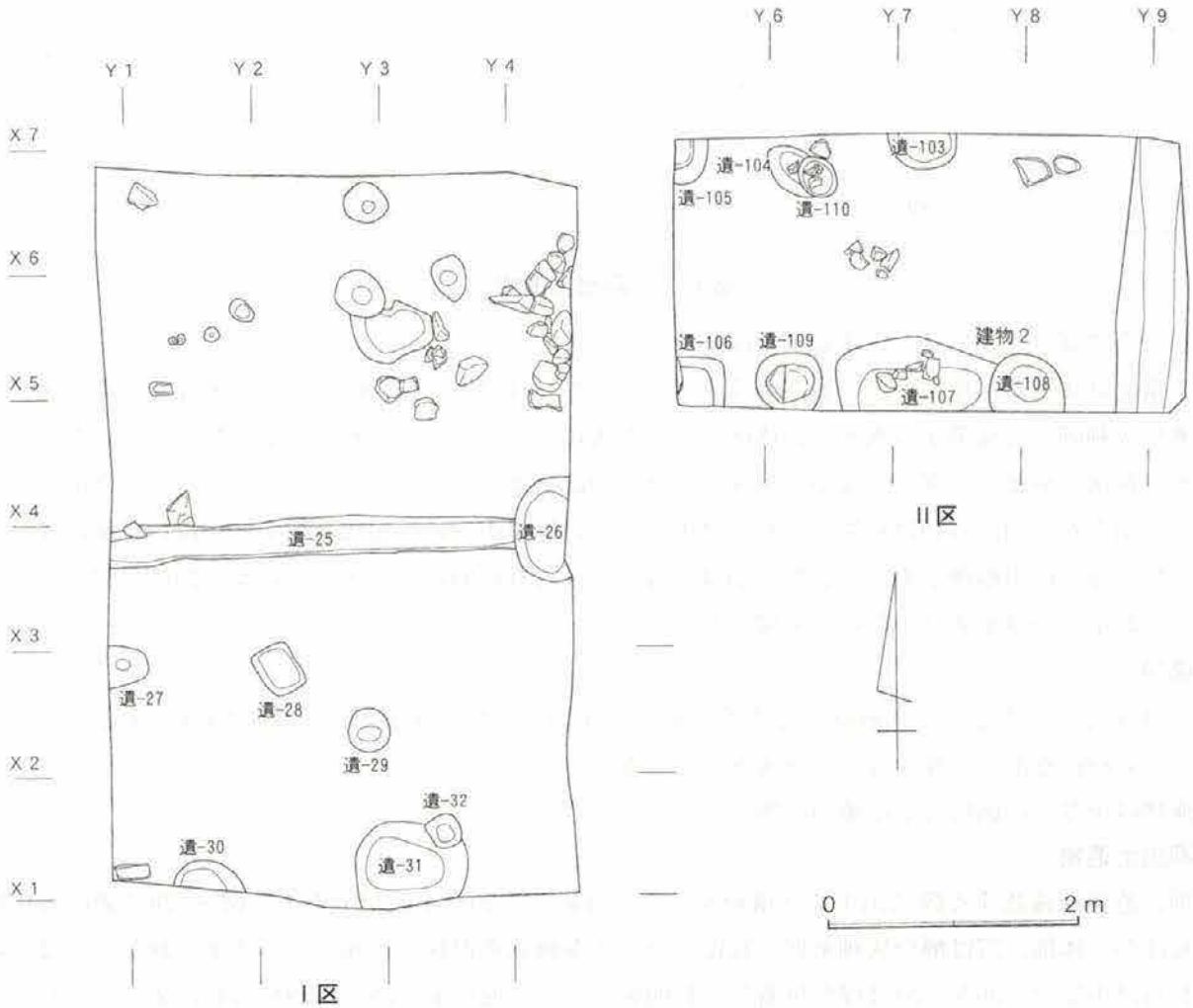


図９　２期遺構全体図

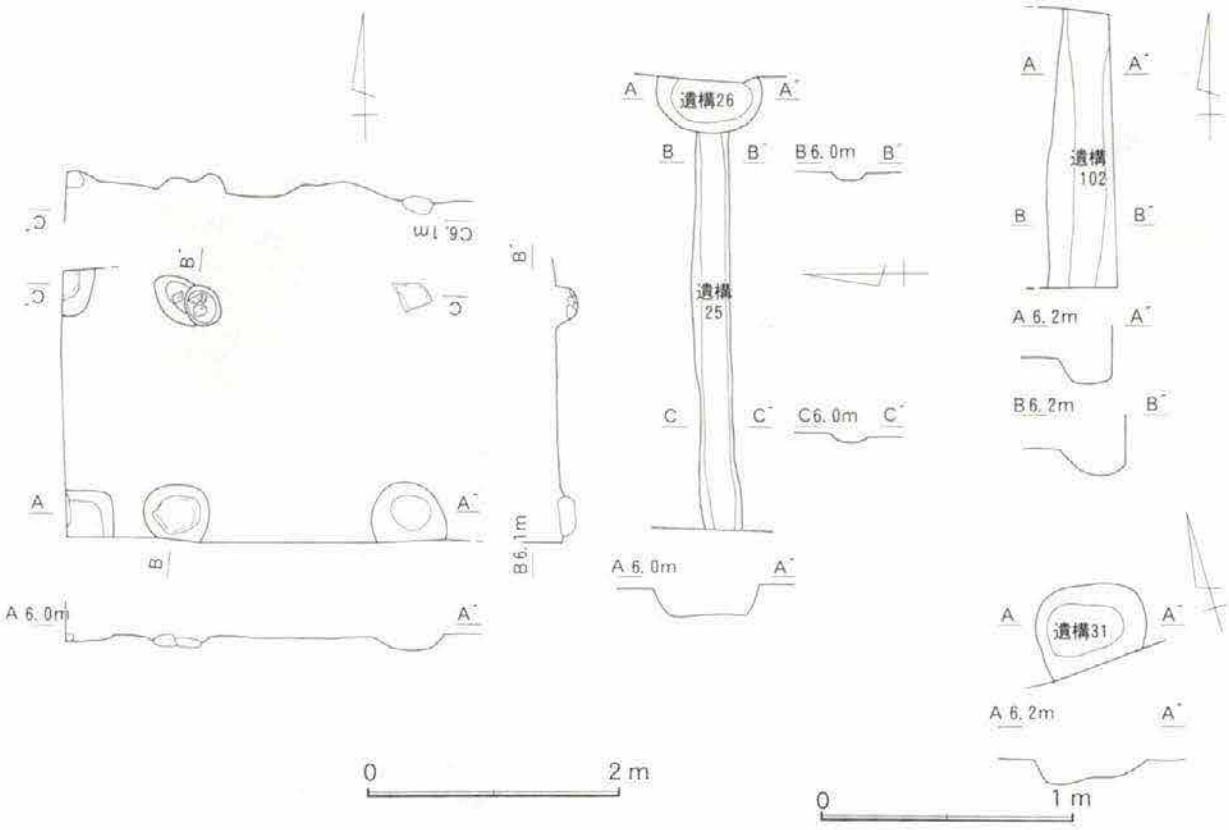


図10　2期遺構（1）

遺構31

Ⅰ区南側のx1、y3を中心に確認した土坑である。一部が調査区南側に延びる。平面形は不整形で、確認規模は東西75cm、南北（68）cm、深さ21cm、底面レベル5.76mを測る。覆土は土丹小塊を含む暗褐色土で遺物は少ない。

小片が多く、図化できる遺物は無い。

遺構102

Ⅱ区の東端で南北方向に確認した溝で、南北の調査区外に延びる。確認規模は幅（56）cm、深さ13cm～18cm、底面レベルは北端で5.81m、南端で5.75mを測る。数値で言えば南に向かって流れる溝である。軸方向はN-2°-Eで、遺構25とはほぼ直角になる。両遺構が交わるとすれば、この北西部に建物があった可能性がある。

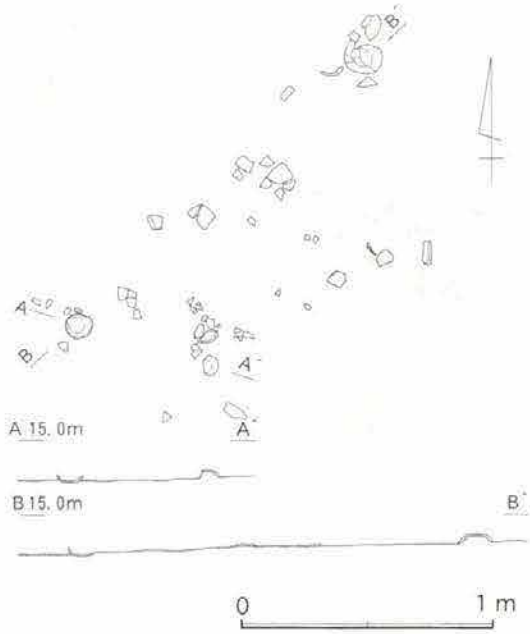


図11　2期遺構（2）

出土遺物は少なく、1点が図化できた。図13－46は常滑甕の口縁部である。

建物2

Ⅱ区の西側で確認した3石の安山岩礎石と1箇所の土丹を持つ柱穴を礎石建物と考えた。これと調査区東側の安山岩礎石と遺構108は同一建物を構成する可能性がある。礎石は全て掘り方内に据えられている。ほぼ全体を検出した遺構109では掘り方は径50cm程の不整円形で、礎石は40cm×30cmの大きさで

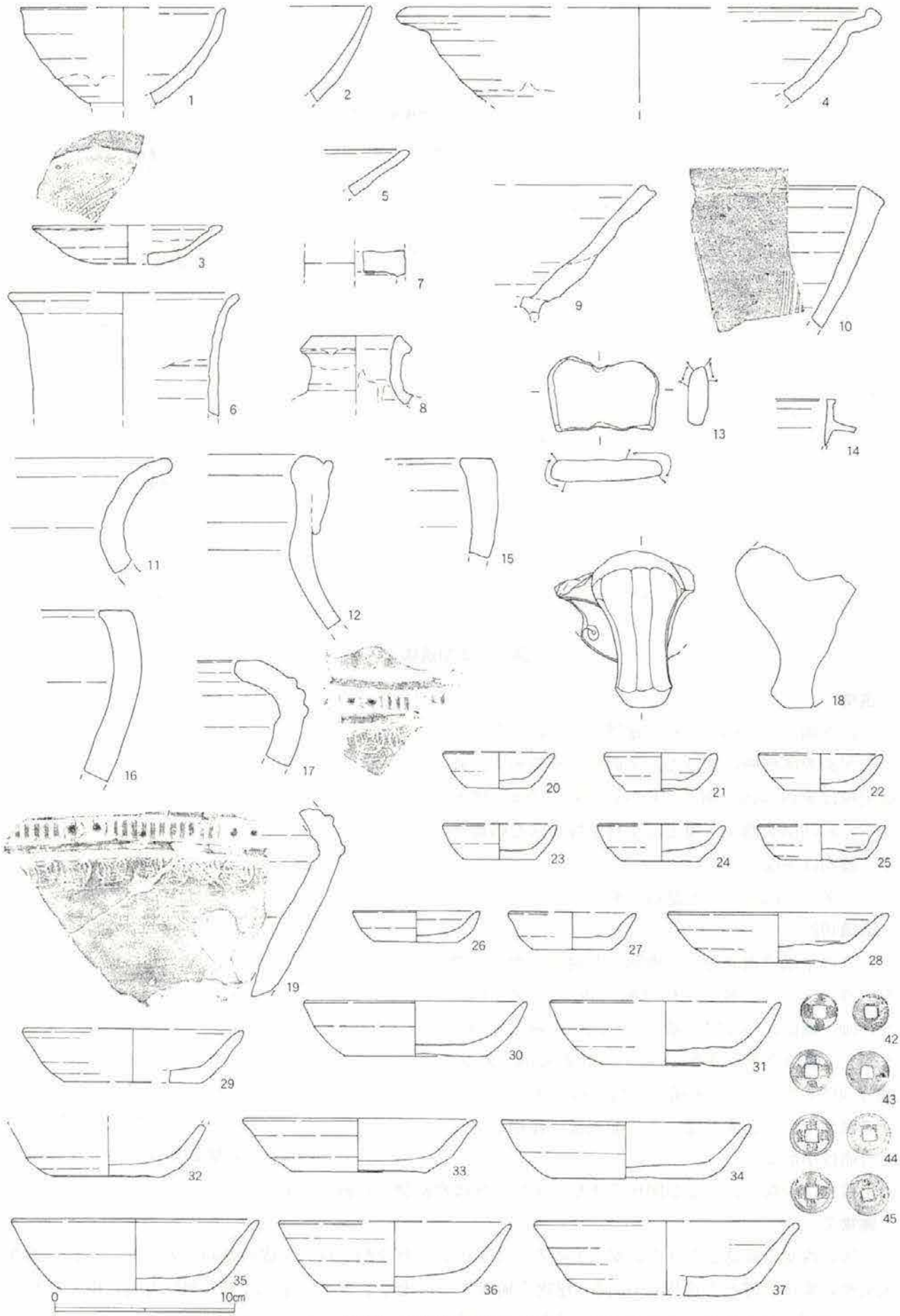

1
2
4
5
3
7
9
10
6
8
13
14
11
12
15
16
17
18
20
21
22
23
24
25
19
26
27
28
29
30
31
42
43
44
45
32
33
34
35
36
37
0
10cm

図12　2期出土遺物（1）

ある。礎石間の距離は東西方向が90cm～100cm、南北方向が190cm前後と推定できる。Ⅱ区南端で礎石と遺構108の芯芯距離は190cmを測る。軸方向はN-3°-Eで建物1とあまり変わらない。
強引に建物を復元すれば、西端の２列が縁で、建物は遺構102を超えて東に展開する。本址に伴う図化できる遺物は無い。

２期出土遺物

２期の遺構群を調査中に出土した遺物をここに含めた。45点が図化できた。１は瀬戸褐釉天目碗の口縁部から体部。２は瀬戸灰釉碗の口縁部から体部、３は瀬戸卸皿の口縁部から体部で中期Ⅲ形式。４は瀬戸灰釉折縁大皿の口縁部から体部、５は瀬戸直縁大皿口縁部、６は瀬戸花瓶（Ⅲ類）。７は瀬戸花瓶高台部分、８は瀬戸鉄釉小壺口縁部、９は瀬戸片口鉢口縁部から体部（Ⅰ類）。10は常滑擂鉢口縁部から体部。11は渥美壺の口縁部、12は常滑甕口縁部、13は磨り常滑、14は鍔釜、15から19は瓦質の手焙りで、17と19は口縁部から肩部にかけてスタンプ文が一周巡る。18は脚部。20から27は糸切りかわらけ小皿。

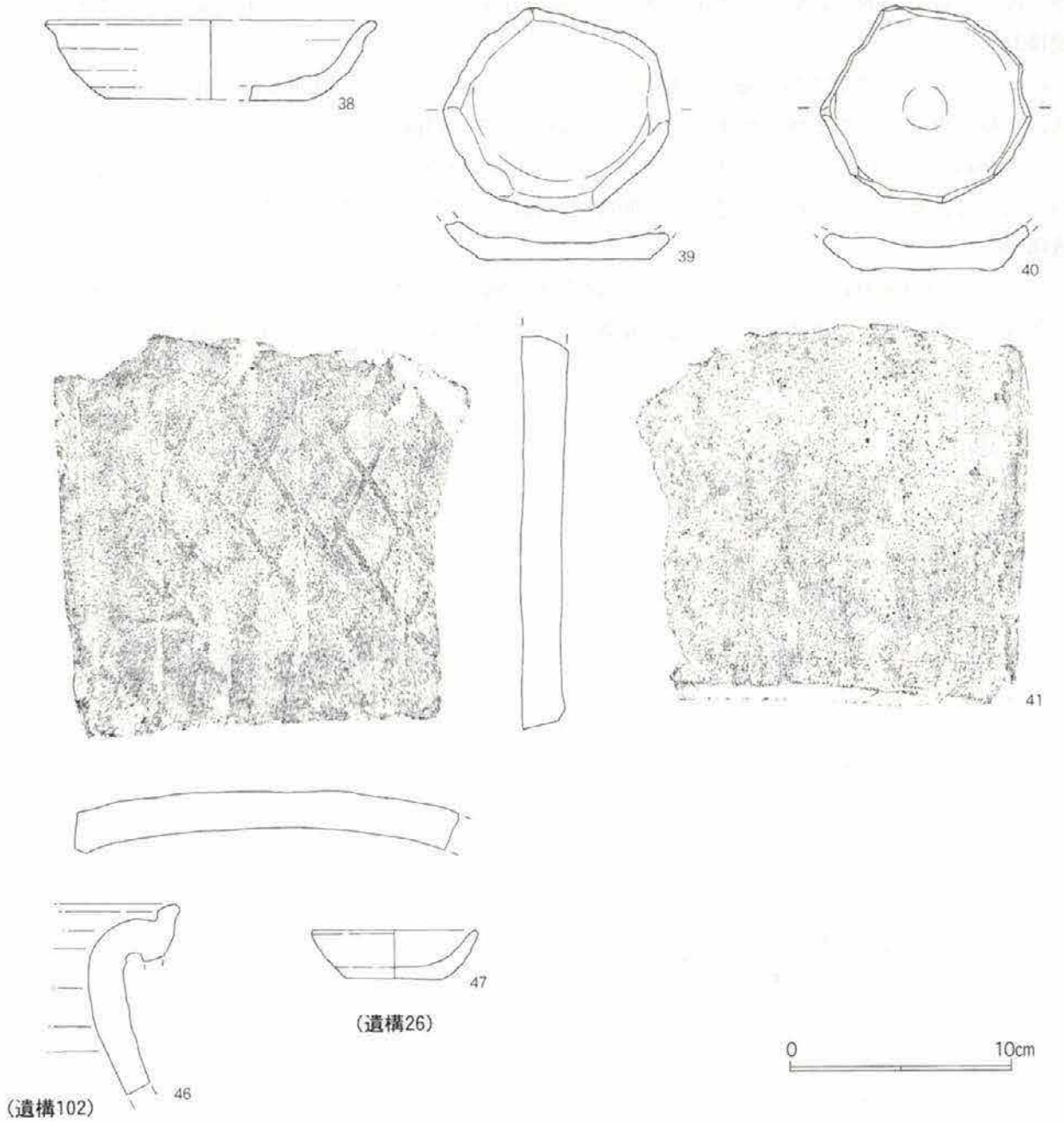


図13　２期出土遺物（2）

28から40は糸切りかわらけの大皿で、39と40は口縁部全部を打ち欠いている。41は平瓦、42から45は銅銭で、順に嘉祐通寶（北宋・1054年）、皇宗通寶（北宋・1038年）、元祐通寶（北宋・1086年）、元豊通寶（北宋・1078年）である。

第３節　３期の遺構と遺物

３期は２期下10～15cm、標高約5.67m～5.80mで検出されたＩ区の３．４面と標高5.60m前後で検出したⅡ区の４面を含めた。Ｉ区の３面は土丹厚さ10cm前後の良好な版築面で、４面はその下に堆積する厚さ４～10cmの炭化物層を除いた面である。４面は土丹版築面ではないが、小土丹（２～６cm）を密に含んだ暗褐色粘土層である。Ⅱ区の４面はＩ区の４面と同じ土層。

遺構はＩ区で散在する人頭大の土丹塊、安山岩礎石２石、調査区南を東西に区切る土丹列、かわらけ溜り（遺構34）が、Ⅱ区で石臼転用の礎石1石と散在する人頭大の土丹塊が検出された。Ｉ区で検出した土丹の幾つかは部分的に赤変し、火災に遭った可能性があるが、面にはその痕跡は認められなかった。

遺構34

ｘ４、ｙ２を中心に南北方向に細長く検出したかわらけ溜りである。範囲は南北60cm、東西25cmで、大皿は７枚が重なったまま倒れたような状況が確認できた。明確な掘り込みは確認できなかった。

出土したかわらけは19点が図化できた。図17－１から19は糸切りかわらけ皿で、１から12は小皿、13から19は大皿である。全ての皿が、逆台形の側面で口縁部が外方に引かれている。

遺構33

ｘ２ラインの北40cm程で、ｘラインに沿って調査区を横断する土丹列である。人頭大から35×35cm大の土丹塊を一列に並べた遺構で、並べ方は粗雑である。簡便な土留めあるいは区画施設と思われる。最

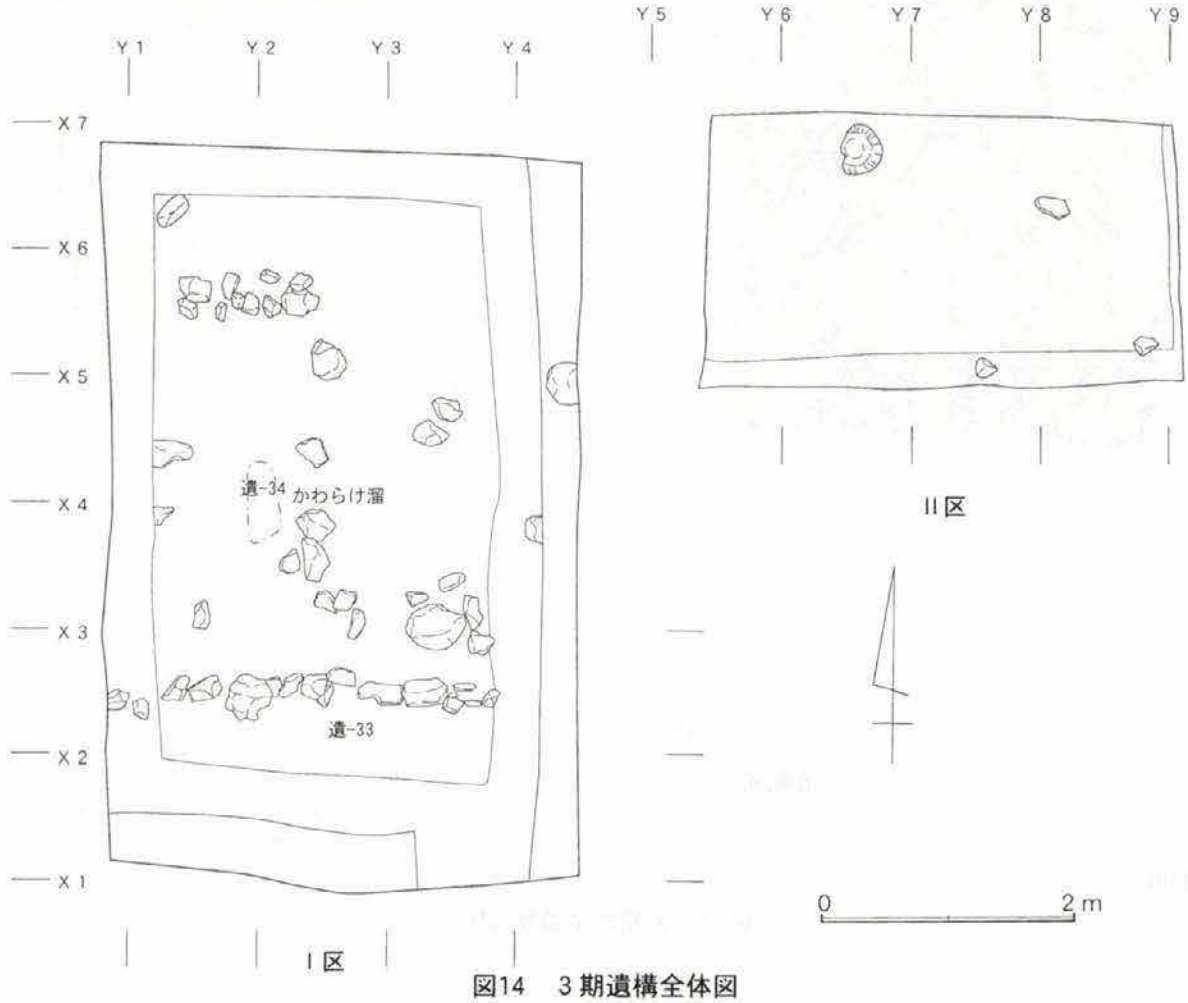


図14　３期遺構全体図

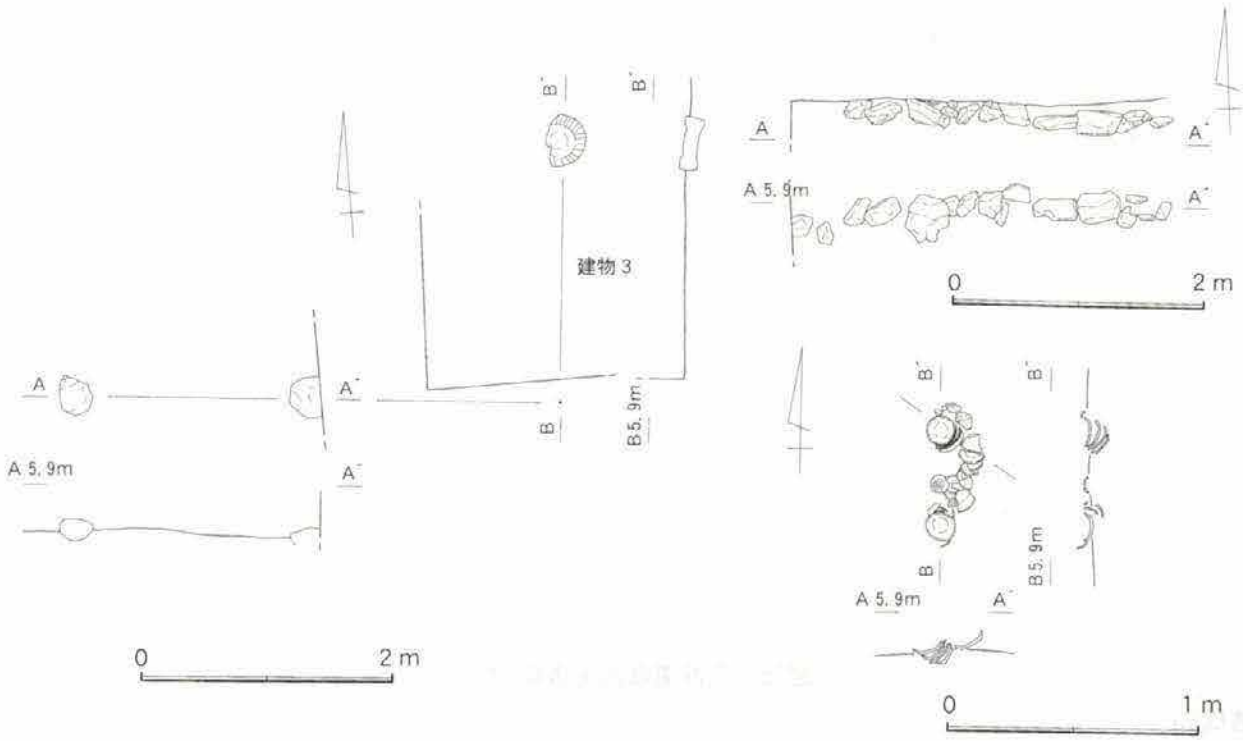


図15　３期遺構

大高20cmで、土丹列南側はその分低くなっている。幾つかの土丹は部分的に赤変しており、火災に遭った可能性がある。土丹上面レベル5.83m、南側レベル5.60mで、軸方向はN-91°-Wを測る。

建物３

Ⅰ区で検出した２石の安山岩礎石とⅡ区で検出した石臼を転用礎石と判断して、建物3と判断した。確認規模は、東西２間、南北1間で北西に向かって展開する建物であろう。礎石上面レベルは5.52m～5.62mで西端と東端では10cm西端が高い。礎石間距離は西から190cm、(200)cmを測り、本来の距離は190cmと推測できる。軸方向はN-85°-Wで他の建物とは少し異なる。

本址に伴う遺物は確認できなかった。面上出土遺物が本址の年代に近いと考えられる。

３期出土遺物

３期遺構群を検出中に出土した遺物をここに含めた。35点が図化できた。図-１は舶載白磁碗高台部分、２は青磁盤底部、３は瀬戸入子。４は瀬戸灰釉皿底部、５は常滑擂鉢口縁部から体部、６は瀬戸鉄釉瓶子胴部から底部。７は常滑甕口縁部、８は磨り常滑で３面に磨面あり、９は瓦質土風呂で肩部から頚部にかけてスタンプ文が一周巡る。10は瓦質の手焙りの口縁部から胴部、11から20は糸切りかわらけ小皿で、16は口縁部に煤が付着し灯明皿として使用した痕跡がある。21は中皿、23から29は大皿で、26から28は口縁の一部を打ち欠いている。29は管状土錘、30は平瓦。31から34は銅銭で、順に熙元通寶（北宋・1068年）、開元通寶（唐・960年）、皇宗通寶（北宋・1038年）、景祐元寶（北宋・1034年）である。35は石臼で建物３の礎石に使用されていた。

第４節　４期の遺構と遺物

４期には３期下20～40cm、標高5.40m前後で検出したⅠ区の５面、標高5.35m前後で検出したⅡ区の5面を含めた。基盤となる層は小土丹（５～15cm）を多く含む暗褐色粘質土で、土丹版築面とは言い難い。

遺構は、Ⅰ区で方形竪穴建築址1、土坑３、柱穴３を、Ⅱ区で散在する大型土丹塊を検出した。３期までと遺構の様相は大きく変化している。

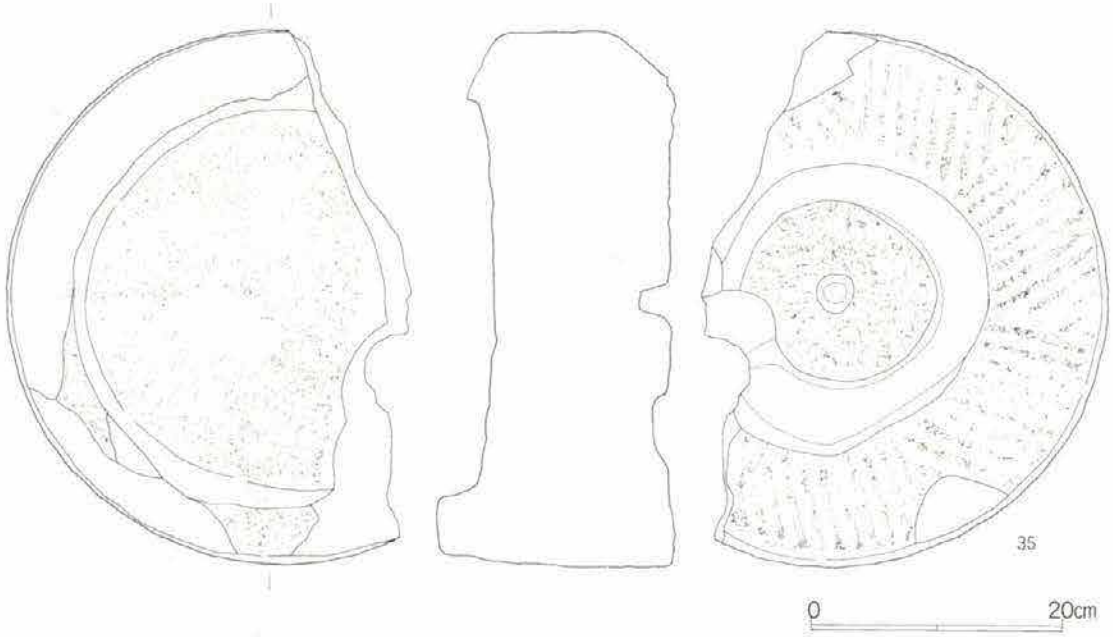


図16　3期遺構出土遺物（1）

遺構35

Ⅰ区の西側で検出した方形の遺構であり、形状から方形竪穴建築址と考えられる。確認規模は東辺(270)cm、北辺(97)cm、深さ20cmを測る。掘り込みは比較的垂直に近く、底面は平坦で海抜5.16m前後を測る。東壁の底面で土丹塊1個を確認したが、その他に上部構造を窺い知る遺構は確認できなかった。遺物は少なく、9点が図化できたにとどまった。図21－1は瀬戸灰釉折縁大皿口縁部から体部。2から9は糸切りかわらけ皿で、2から7は小皿、2、5、6は口縁部に煤が付着して灯明皿の使用痕跡がある。8と9は大皿である。

遺構40

Ⅰ区北東隅で確認した土坑で、調査区外に延びる。確認規模は南北(55)cm、東西(55)cm、深さ24cm、底面レベル5.16mを測る。調査区外に延びているため全体形はつかめないが、底面が平坦であり方形土坑あるいは方形竪穴建築址の可能性がある。

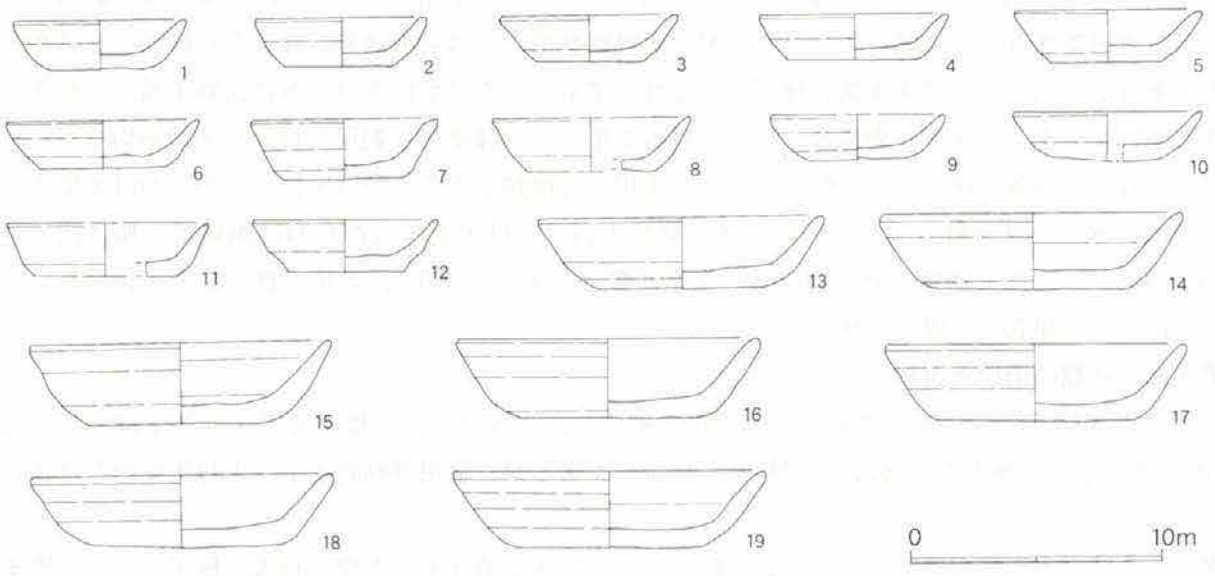


図17　3期遺構出土遺物（2）

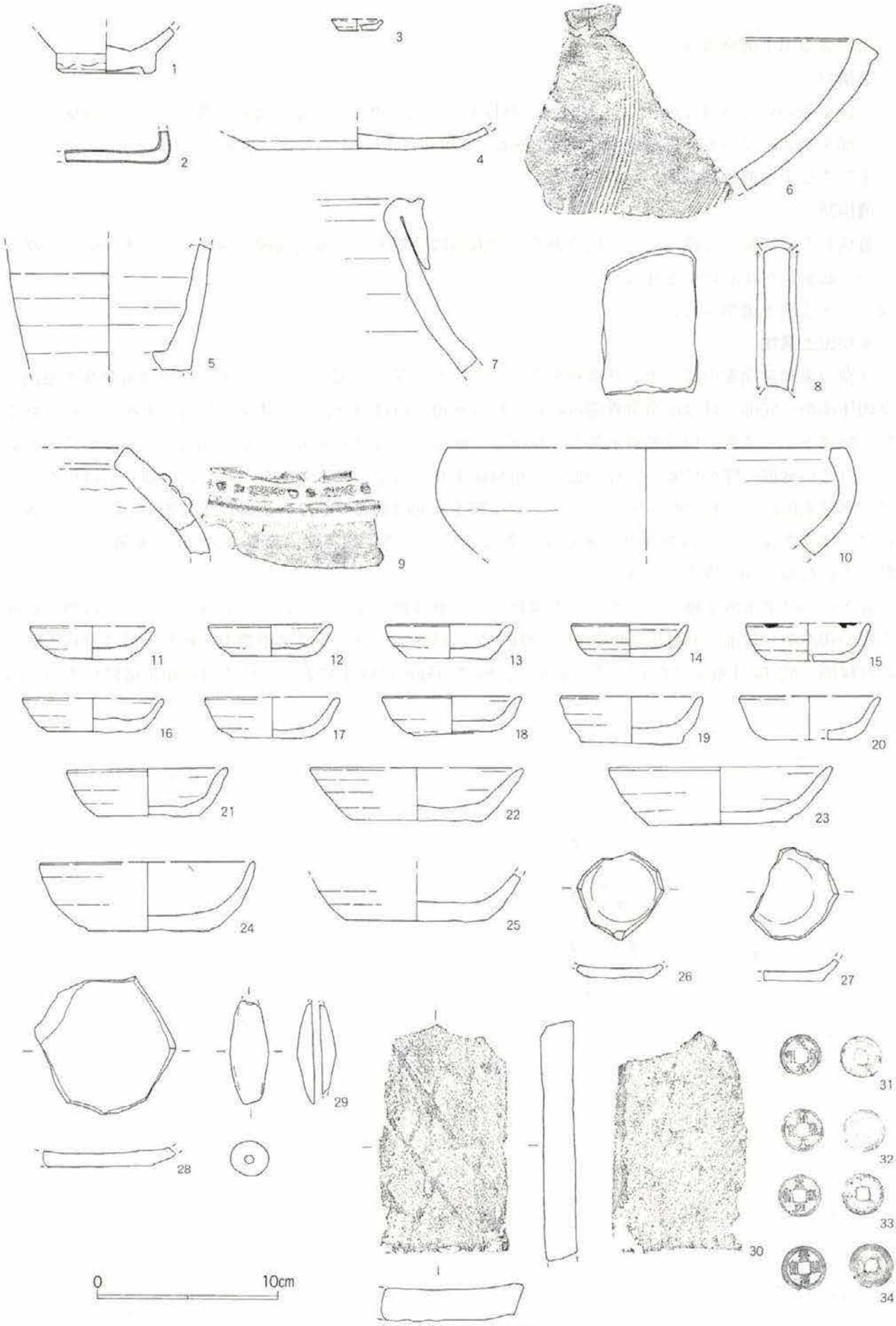

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
0
10cm

図18　3期出土遺物

図化できる出土遺物はない。

遺構37

Ⅰ区東側のx５、ｙ３で検出した方形の小型長方形土坑である。一部が調査区外に延びる。遺構42と43に一部を壊されている。確認規模は南北106cm、東西(67)cm、深さ13cm、底面レベル5.25mを測る。
図化できる出土遺物はない。

遺構36

遺構37の南に接して確認した土坑である。平面形は不整形で、確認規模は南北62cm、東西67cm、深さ23cm、底面レベル5.12mを測る。
図化できる出土遺物はない。

４期出土遺物

４期の遺構を調査中に出土した遺物をここに含めた。70点が図化できた。図22－14は竜泉窯青磁劃花文碗体部から底部。11は竜泉窯青磁折縁鉢。12は常滑片口鉢口縁部から体部。13は山茶碗窯系片口鉢Ⅰ類の胴部下から底部、14は常滑無頸壺の胴部から底部。15は磨り常滑、16から36は糸切りかわらけ小皿で、31は口縁部に煤が付着して灯明皿の使用痕跡あり。37から46は糸切りかわらけ大皿。47は白かわらけ、48は底部のみで他は打ち欠いている。49は鍔釜。50は瓦質手焙りの口縁部から胴部で、外面全体にスタンプ文が巡る。51は軒平瓦で剣頭文がある。52から55は砥石で、産地は52,53が鳴滝、53,55が上野と思われる。56は骨製品の笄。

57から70は排水溝を掘ったときの出土遺物で、下層遺物が混入している可能性がある。57は瀬戸鉄釉小壺の頸部から肩部。58は山茶碗窯系片口鉢Ⅰ類の口縁部。59、60は常滑甕の口縁部。61は瓦質手焙りの口縁部。62,63は糸切りかわらけの小皿で、63は口縁部に煤が付着して灯明皿の使用痕跡がある。64

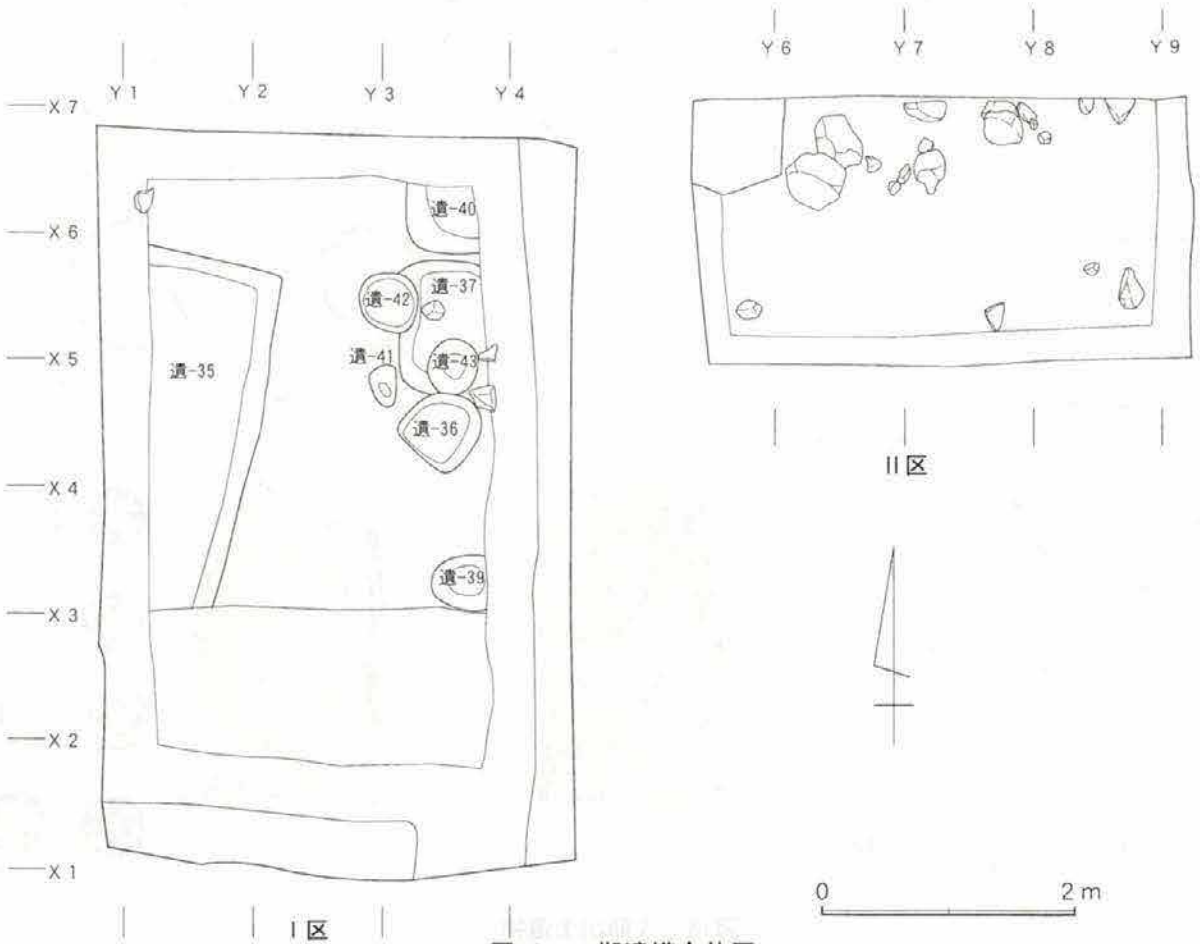


図19　４期遺構全体図

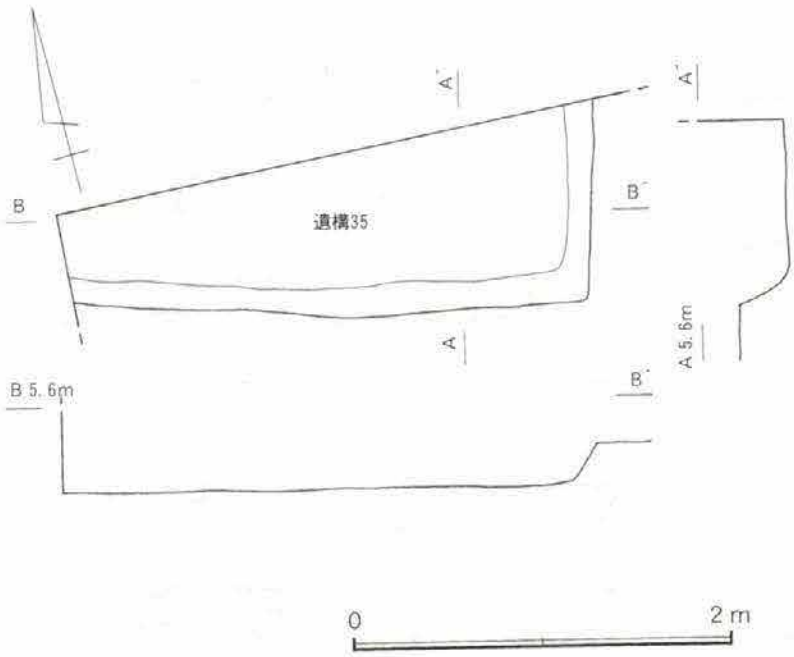


図20　4期遺構

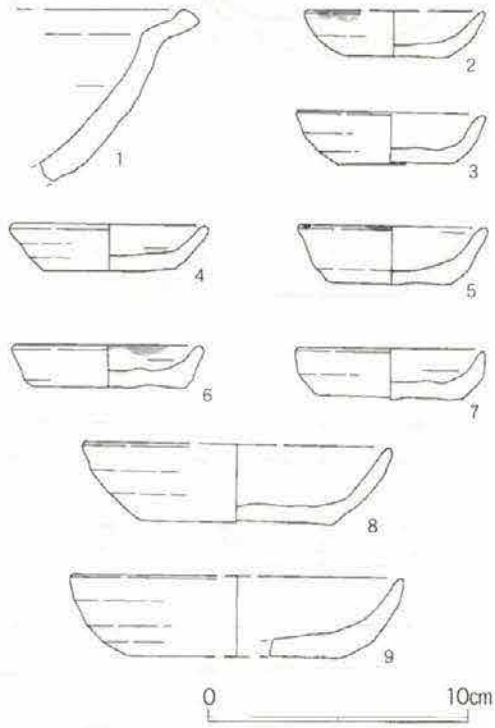


図21　4期遺構出土遺物（1）

から70は糸切りかわらけ大皿である。

遺構38

10は糸切りかわらけ小皿、11は大皿である。

遺構44

12、13は糸切りかわらけ小皿である。

第5節　5期の遺構と遺物

5期には4面下30～45cm、標高4.9～5.0m前後で検出されたⅠ区・Ⅱ区の6面から8面を含めた。6面から8面は、下層の遺構を確認するための調査で、Ⅰ区は東西150cm、南北200cmのトレンチ、Ⅱ区は東西100cm、南北100cmのトレンチを調査区中央に設定して行った。そのため、検出遺構は部分的で、湧水のため遺構の帰属が曖昧になってしまった結果である。

遺構はⅠ区で安山岩礎石1、土坑1、柱穴5が、Ⅱ区で東西方向の溝1、人頭大の土丹3が確認できた。柱穴のうち2穴は礎板が確認できた。

遺構45

Ⅰ区トレンチ北東隅で確認した土坑である。調査区外に延びて、全体形は不明。7面から掘り込まれている。確認規模は南北(112)cm、東西(52)cm、深さ26cm、底面レベル4.58mを測る。覆土は木片や小土丹を含む暗褐色土で締まりは無い。

遺物は比較的多く、7点が図化できた。図◎－1から7は糸切りかわらけ小皿。3，4は口縁部に煤が付着して灯明皿の使用痕跡がある。8は糸切りかわらけ大皿である。

※11は糸切りかわらけ小皿である。

遺構49

Ⅰ区トレンチ北西隅で確認した礎板を伴う柱穴で、調査区外に延びている。8面から掘り込まれてい

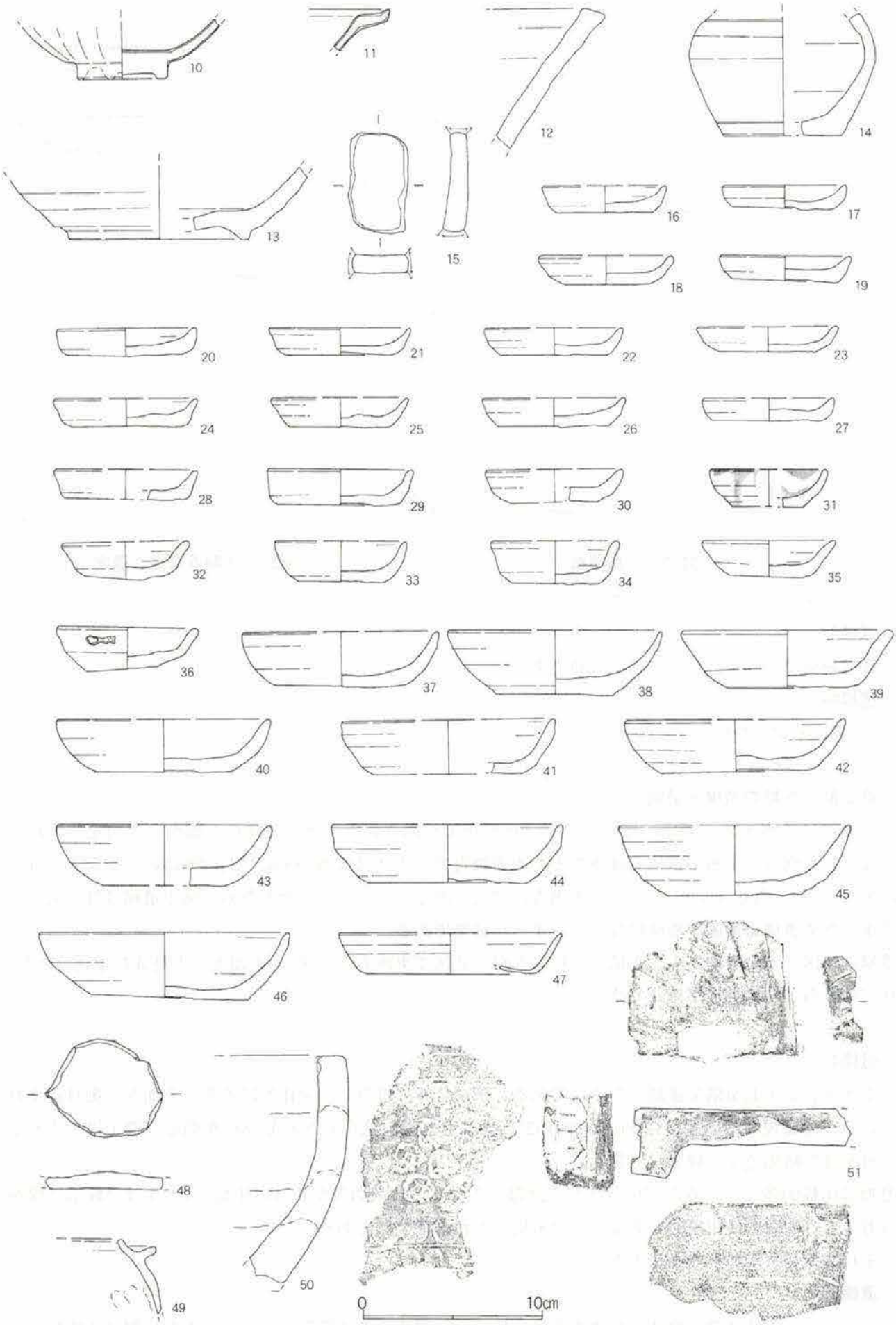


図22　4期遺構出土遺物 (2)

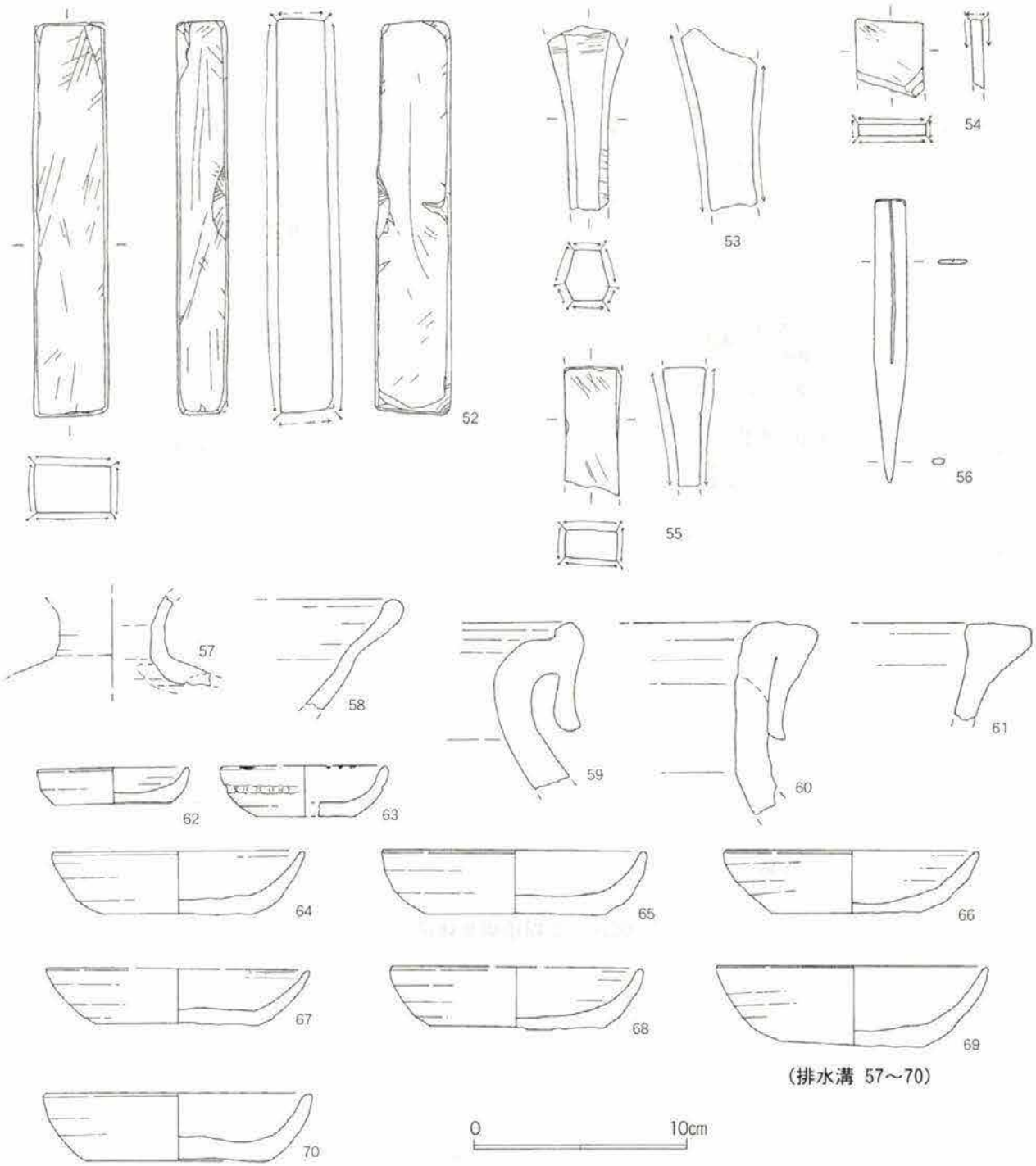


図23　4期遺構出土遺物 (3)

る。堆積土層を確認したところ、上部に6面から掘り込まれた柱穴があり、南に接して別遺構が確認されている。確認規模は、南北(30)cm、東西(27)cm、深さ18cm、底面レベル4.64mを測る。礎板は5枚確認されたが、上の2枚は上層からの柱穴に属す可能性がある。

出土遺物は3点が図化できたが、別遺構のものが混じっている可能性がある。図25－9は糸切りかわらけ小皿。10,11は糸切りかわらけ大皿で、10は口唇部が内側に強く内湾する。

遺構111

x6ラインに沿ってⅡ区で検出した溝で、調査区東西に延びている。断面形はU字形で、幅 (48)cm、深さ23cm、底面レベル4.90m、軸方向N-90°-Wを測る。規模から、屋敷内部の区画溝と考えられる。

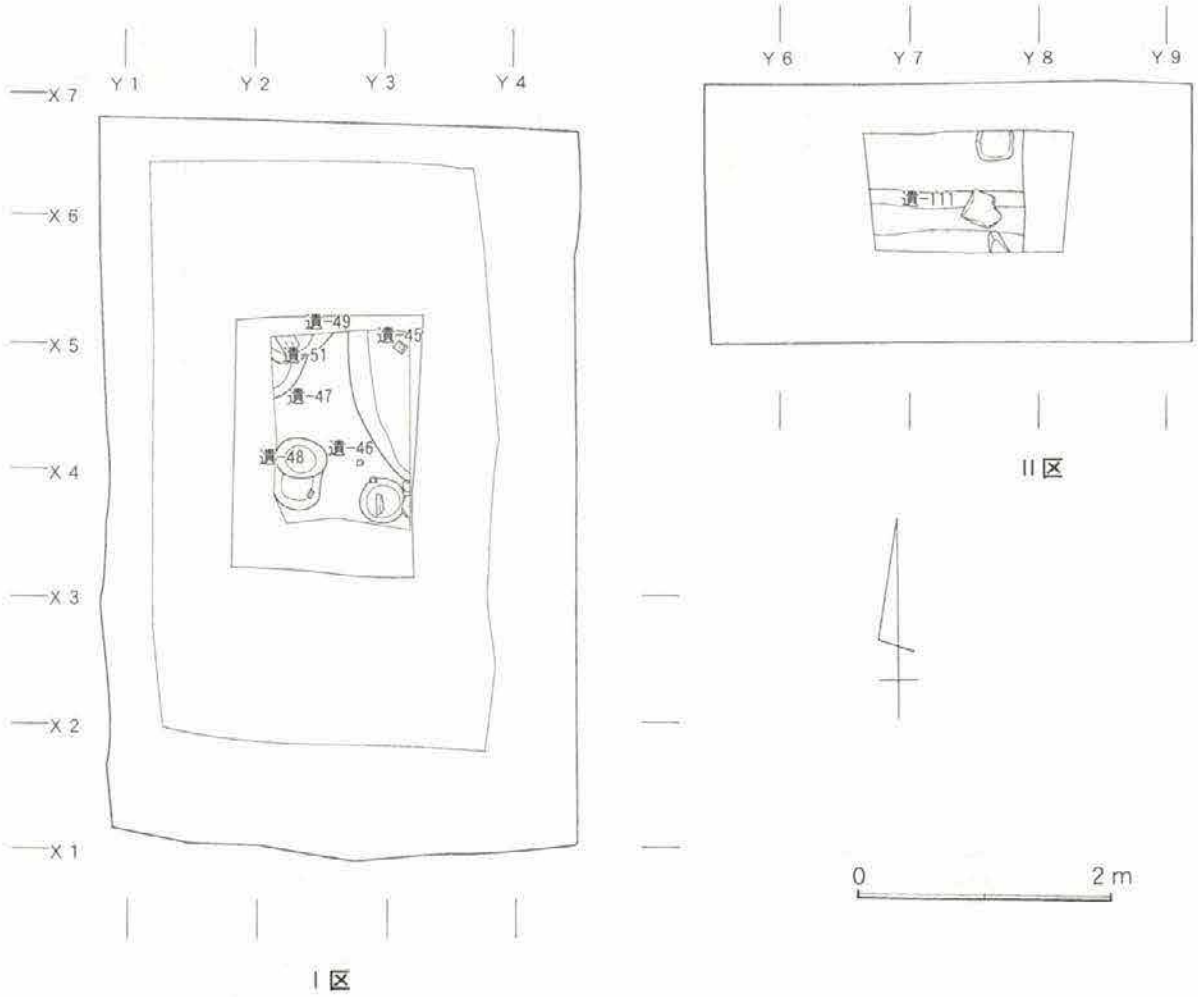
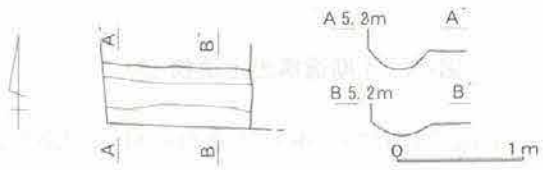


図24　5期遺構全体図



遺構111

図25　5期遺構

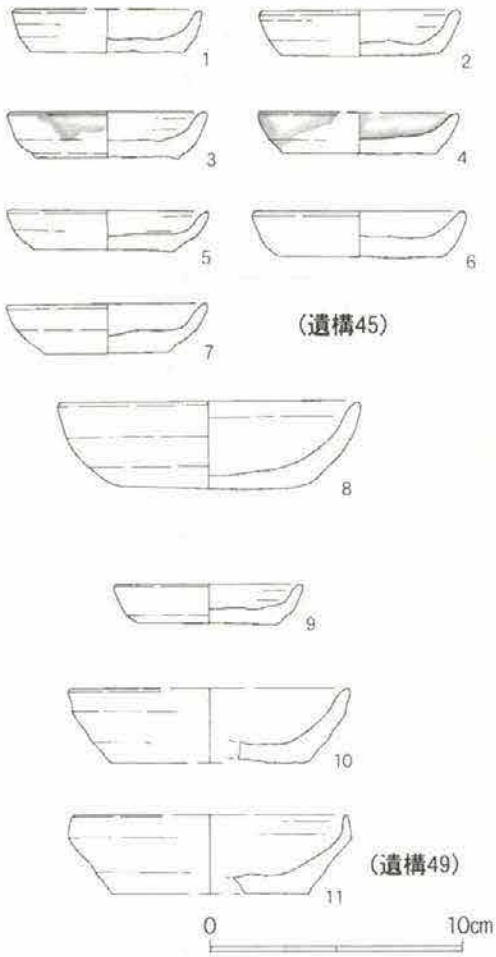


図26　5期遺構出土遺物(1)

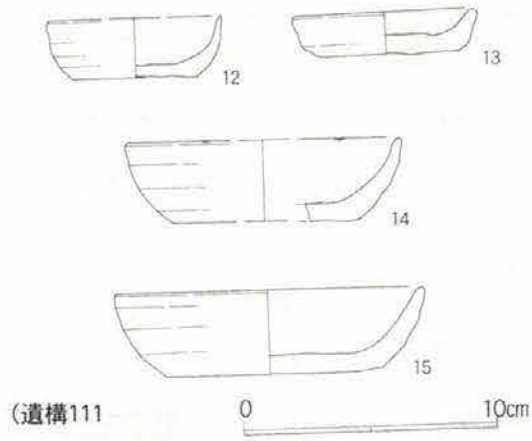


図27　5期遺構出土遺物(2)

出土遺物は4点が図化できた。図27－12、13は糸切りかわらけ小皿。14, 15は糸切りかわらけ大皿である。

5期出土遺物

6面から8面の遺構を調査中に出土した遺物をここに含めた。図29－20から23は糸切りかわらけ小皿、24と25は糸切りかわらけ中皿、26から33は糸切りかわらけ大皿で、31は口縁部に煤が付着して灯明皿の使用痕跡が残る。8面から出土。55から59は糸切りかわらけ大皿で排水溝からの出土。60と61は漆器小皿で共に菊が赤色系漆で描かれている。60は7面から、61は8面からの出土。62は円形状の銅製品、飾り金具と思われる。63は鉄製品の釘、64は骨製品の笄、65は石製品の砥石で、鳴滝産の仕上げ砥石と思われる。16から19は木製品で、16は握手、17と18は杭、19は棒状製品である。

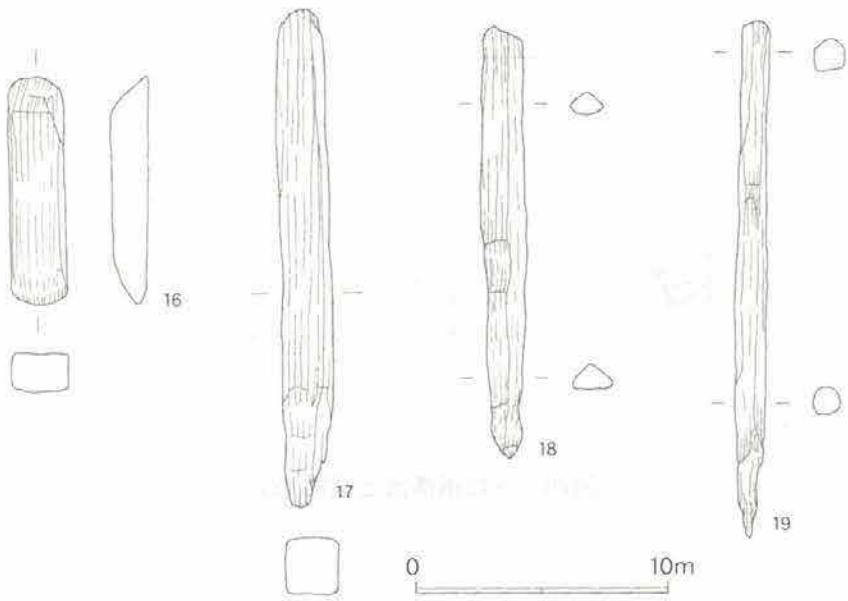


図28　5期面出土遺物(1)

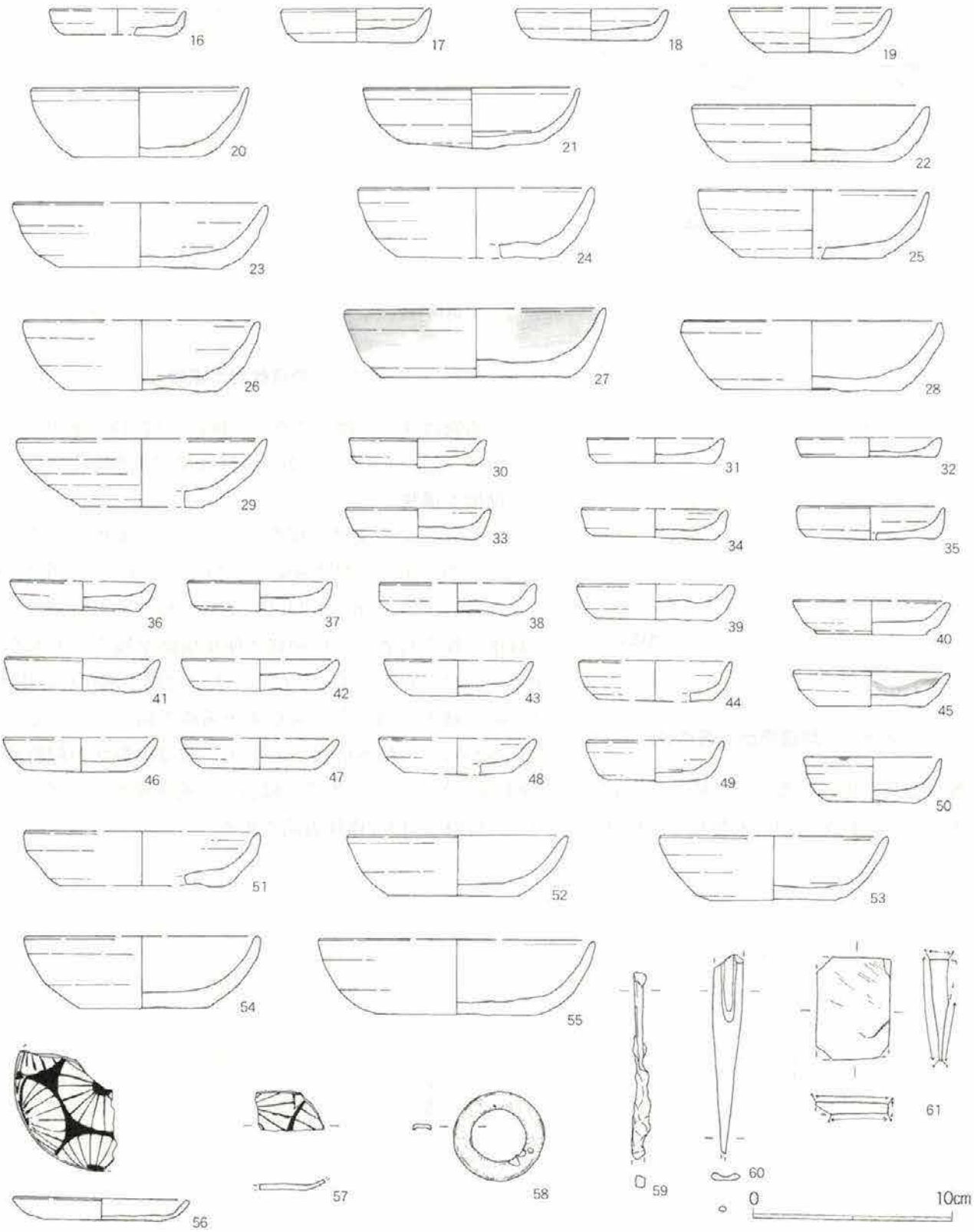


図29　5期遺構出土遺物 (2)

第3章　まとめ

第1節　遺構の変化と年代

本地点の調査で検出した1期から5期の遺構群では大きな変化が3回確認できた。1回目の変化は遺構の成立した5期で、次いでの変化は第4層の堆積時点、そして3期遺構群の成立期である。

遺跡の成立した5期は褐色粘土層（ベージュ色）の上に遺構が営まれている。この土層は、周辺の調査では中世基盤層の暗褐色粘質土の下に堆積が確認されている土層で、本地点ではその暗褐色粘質土が確認できなかった。この土地を利用するにあたって、本来の中世基盤層を削平しているか、この土を運んできた可能性がある。遺構は、安山岩礎石はあるものの、土坑と柱穴が主で、遺物は施文漆器碗・皿と糸切りかわらけで、手づくねかわらけは極小破片しか出土していない。このことから、本地点の遺構は13世紀中頃に成立したと考えたい。

2番目の変化は第4層の堆積である。第4層は軟弱な暗褐色粘土層で遺物をほとんど含んでいない。調査箇所で見る限り、遺構もなく自然堆積のように思える。とすれば、5期の遺構が廃絶した後、調査地点周辺が「軟弱な粘土層」が堆積する空間であったと考えることができる。この状況が、例えば池のような空間内部なのか、あるいは谷全体に広がるのかは言及できない。年代は13世紀後半から14世紀にかけてのある時期というしかない。

3番目の変化は3期の遺構群が成立する頃である。3期以降は逆台形の側面を持ち口縁部が外側に引かれるかわらけが主体となる。遺構も礎石建物や内部の区画溝が多く検出され、何らかの大きな空間に含まれた可能性が高い。3期の成立は15世紀頃と考えられる。

第2節　検出遺構の性格

5期の遺構は土坑と柱穴が主で、武士や寺院などの敷地内と考えることは、一応ここでは、やめておく。町屋空間の一画と考えるのが妥当であろう。その後、第4層が堆積した頃から、周辺の様相が不明瞭になる。しかし、この頃の遺構は周辺の調査で密度濃く確認されているので、たまたま本地点の様相が不明瞭というしかない。

15世紀になると、礎石建物が多く建てられ、手焙りや土風呂の出土が多い。この頃に本地点は一般的な居住区域から寺院の一画に含まれたと考えたい。第4層の堆積が寺院の一画であることを示す堆積といえなくも無いが、これはあくまでも可能性である。狭い範囲の調査結果で結論は出せない。

弁ヶ谷に存在した寺院としては、崇寿寺、最宝寺、新善光寺、観音寺（観音寺谷名から）などがあげられる。観音寺を除く寺院は15世紀に痕跡を残していても不思議ではないので、どれかに特定されるべきだろうが、得られた考古資料のみでは不可能である。

最後に疑問を提示して終える。弁ヶ谷にこれらの寺院が存在した場合、文献に拠れば、すべての寺院がわずかながらも並立している時期がある。寺院の規模によるのだろうが、すべてが並立できるのだろうか。弁ヶ谷の地名を谷内に限らずに広く考える必要は無いのだろうか。

疑問である。

表1　遺物観察表(1)

図・遺物No.	遺構	種別		計測値 単位：cm 口径	底径	器高
1期						
1	遺1	土器	かわらけ皿	(11.0)	(6.0)	4.0
2	遺2	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.4	2.1
3	遺2	瓦質	手焙り	-	-	-
4	遺2	瓦質	手焙り	-	-	-
5	遺4	瓦質	手焙り	-	-	-
6	遺24	瀬戸	灰釉碗	(12.8)	3.9	(7.0)
7	遺24	瓦質	手焙り	(24.2)	(18.5)	(8.4)
8	遺24	磨常滑		縦 5.0	横 7.7	厚 1.05
9	焼土範囲B	瓦質	手焙り	-	-	-
10	焼土範囲	瓦質	手焙り	-	-	-
11	遺24 焼土範囲	瓦質	手焙り	-	-	(8.6)
12	遺24 焼土範囲	瓦質	手焙り	-	-	(8.2)
13	遺24 焼土範囲	瓦質	手焙り	-	(21.4)	(6.0)
14	遺24 焼土範囲	土器	かわらけ皿	(6.4)	(4.6)	2.1
15	遺24 焼土範囲	土器	かわらけ皿	(7.2)	3.95	2.5
16	遺24 焼土範囲	土器	かわらけ皿	7.85	5.0	2.5
17	遺24 焼土範囲	土器	かわらけ皿	8.5	5.7	2.4
18	遺24 焼土範囲	土器	かわらけ皿	9.0	5.9	2.7
19	遺24 焼土範囲	土器	かわらけ皿	9.1	5.4	1.7
20	遺24 焼土範囲	土器	かわらけ皿	(10.5)	6.3	(3.65)
21	遺24 焼土範囲	土器	かわらけ皿	(12.05)	(7.05)	(3.1)
22	焼土範囲B	土器	かわらけ皿	(12.0)	(8.4)	2.0
23	焼土範囲	土器	かわらけ皿	(12.4)	(8.8)	(2.95)
24	焼土範囲	土器	かわらけ皿	12.8	7.7	3.6
25	焼土範囲	土器	かわらけ皿	13.2	8.6	4.35
26	表土	瀬戸	天目碗	(12.5)	-	(5.8)
27	表土	瀬戸	灰釉菊皿	-	(7.4)	(2.0)
28	表採			-	-	-
29	No.128	土器	かわらけ皿	7.5	6.4	1.5
30	-	土器	かわらけ皿	6.8	4.8	2.0
31	No.128	土器	かわらけ皿	(7.6)	(4.8)	1.9
32	No.128	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.4)	1.9
33	表採	土器	かわらけ皿	7.2	5.4	1.6
34	No.57	土器	かわらけ皿	7.4	4.8	2.1
35	No.129	土器	かわらけ皿	(7.6)	5.0	2.2
36	No.41	土器	かわらけ皿	(7.3)	(4.2)	2.3
37	No.52-②	土器	かわらけ皿	6.9	5.0	2.3
38	No.28	土器	かわらけ皿	7.2	5.4	2.6
39	-	土器	かわらけ皿	(11.7)	(8.6)	2.7
40	-	土器	かわらけ皿	(11.0)	(7.2)	3.2
41	かわらけ②No.4	土器	かわらけ皿	11.8	7.0	3.7
42	かわらけ①No.3	土器	かわらけ皿	11.5	6.4	3.5
43	-	土器	打ち欠き	-	(7.1)	(2.5)
44	-	鉄製品?		長 11.4	-	厚 1.4
45	-	銅製品	皇宋通寶?1038年(北宋)	-	-	-
2期						
1	掘り下げ	瀬戸	天目碗	(11.3)	-	(5.6)
2	側溝	瀬戸	灰釉碗	-	-	(5.35)
3	-	瀬戸	卸皿	(10.1)	(3.7)	(2.15)
4	側溝	瀬戸	灰釉折縁大皿	(27.2)	-	(5.3)
5	-	瀬戸	直縁大皿	-	-	-
6	-	瀬戸	花瓶	(12.85)	-	(7.0)
7	-	瀬戸	花瓶	-	-	(1.5)
8	-	瀬戸	鉄釉小壺	4.9	-	(3.9)
9	側溝	山茶碗窯	片口鉢	-	-	-
10	側溝		摺鉢	-	-	-
11	側溝	-	-	-	-	(6.6)
12	-	常滑	甕	(36.0)	-	(10.0)
13	側溝	磨常滑		長 6.2	短 4.2	厚 1.2
14	-	-	壺	(31.2)	-	(2.45)
15	-		火鉢	-	-	-
16	-		火鉢	-	-	-
17	-	瓦質	手焙り	-	-	-
18	側溝	瓦質	手焙り(脚)	-	-	-
19	-	瓦質	手焙り	-	-	-
20	-	土器	かわらけ皿	(6.2)	3.5	2.1
21	-	土器	かわらけ皿	6.4	4.0	2.2
22	-	土器	かわらけ皿	(7.0)	(4.0)	2.4
23	-	土器	かわらけ皿	(6.35)	(4.0)	2.0
24	-	土器	かわらけ皿	(7.2)	4.8	2.1
25	-	土器	かわらけ皿	(7.2)	4.7	2.1
26	-	土器	かわらけ皿	7.0	4.7	1.8
27	-	土器	かわらけ皿	(7.2)	(4.0)	2.1
28	-	土器	かわらけ皿	12.4	7.6	2.9
29	-	土器	かわらけ皿	(12.4)	(7.6)	(3.0)
30	-	土器	かわらけ皿	12.4	7.9	3.1
31	-	土器	かわらけ皿	(13.0)	(7.0)	3.6
32	-	土器	かわらけ皿	-	(6.0)	3.1
33	-	土器	かわらけ皿	12.8	7.5	3.15
34	側溝	土器	かわらけ皿	(13.9)	8.0	3.35
35	-	土器	かわらけ皿	(13.9)	(8.5)	4.0
36	-	土器	かわらけ皿	(13.0)	7.6	4.0
37	-	土器	かわらけ皿	(14.6)	(8.0)	4.1
38	-	銅製品	嘉祐通寶1056年(北宋)	-	-	-
39	-	銅製品	皇宋通寶1038年(北宋)	-	-	-
40	-	銅製品	元祐通寶1078年(北宋)	-	-	-
41	-	銅製品	元豊通寶1078年(北宋)	-	-	-
42	-	土器	かわらけ皿	(14.7)	(9.6)	3.6
43	-	土器	打ち欠き	長 12.0	短 9.3	厚 0.8
44	-	土器	打ち欠き	長 9.2	短 9.0	厚 6.8
45	-	瓦	平瓦	-	-	-
46	遺102	常滑	甕	-	-	-
47	遺26	土器	かわらけ皿	7.5	4.4	2.3
3期						
1	遺34	土器	かわらけ皿	6.9	3.9	1.95
2	遺34	土器	かわらけ皿	6.9	4.3	1.9
3	遺34	土器	かわらけ皿	7.1	4.3	1.8
4	遺34	土器	かわらけ皿	7.5	5.2	1.8
5	遺34	土器	かわらけ皿	7.5	4.4	2.1
6	遺34	土器	かわらけ皿	(7.7)	5.0	1.9
7	遺34	土器	かわらけ皿	7.4	4.9	2.4
8	遺34	土器	かわらけ皿	(7.9)	(5.0)	2.1
9	遺34	土器	かわらけ皿	(6.9)	(3.9)	1.8

表2　遺物観察表(2)

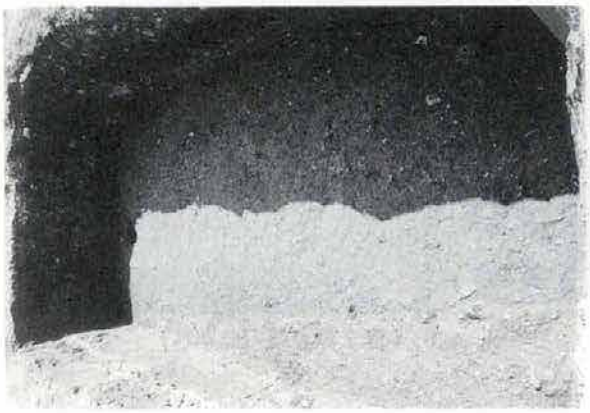
図・遺物No.	遺構	種別		計測値 単位：cm 口径	底径	器高
10	遺34	土器	かわらけ皿	(7.4)	(4.4)	1.95
11	遺34	土器	かわらけ皿	(7.9)	(5.6)	(2.2)
12	遺34	土器	かわらけ皿	7.4	4.6	2.1
13	遺34	土器	かわらけ皿	11.5	6.7	2.9
14	遺34	土器	かわらけ皿	11.9	7.6	3.1
15	遺34	土器	かわらけ皿	11.9	7.1	3.2
16	遺34	土器	かわらけ皿	11.9	7.2	3.1
17	遺34	土器	かわらけ皿	12.0	7.9	3.1
18	遺34	土器	かわらけ皿	12.0	7.7	2.9
19	遺34	土器	かわらけ皿	12.4	7.4	3.0
1	-	中国白磁	碗	-	4.95	(2.6)
2	-	青磁?		-	-	-
3	-	瀬戸	入子	(2.8)	(2.0)	0.6
4	-	瀬戸	鉄釉鉢	(27.4)	-	(6.5)
5	-	瀬戸	鉄釉皿	-	(11.4)	(1.15)
6	-	瀬戸	鉄釉瓶	-	-	(6.9)
7	-	常滑	甕	-	-	-
8	-	常滑	甕	-	-	-
9	-	磨常滑		縦 8.2	横 5.3	厚 1.5
10	-	瓦質	手焙り	-	-	-
11	-	瓦質	手焙り	(22.3)	-	(6.1)
12	-	土器	かわらけ皿	(7.0)	(4.0)	1.9
13	-	土器	かわらけ皿	7.0	4.4	1.8
14	-	土器	かわらけ皿	7.2	4.6	1.9
15	-	土器	かわらけ皿	(6.5)	(4.25)	1.8
16	-	土器	かわらけ皿	(6.8)	(4.4)	2.1
17	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.0)	1.9
18	-	土器	かわらけ皿	7.6	4.5	2.2
19	-	土器	かわらけ皿	7.8	4.3	2.2
20	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.6)	2.7
21	-	土器	かわらけ皿	(7.7)	(4.5)	(2.45)
22	-	土器	かわらけ皿	9.0	5.7	2.7
23	-	土器	かわらけ皿	(12.0)	(7.0)	3.0
24	-	土器	かわらけ皿	12.4	8.0	3.4
25	-	土器	かわらけ皿	(12.0)	(6.8)	3.9
26	-	土器	かわらけ皿	-	7.8	2.7
27	-	土器	打ち欠き	縦 4.6	横 4.8	厚 0.5
28	-	土器	打ち欠き	縦 5.1	横 4.1	厚 0.5
29	-	土器	打ち欠き	縦 8.0	横 7.5	厚 0.8
30	-	土製品	土錘	縦 5.8	横 2.1	-
31	-	瓦	平瓦	-	-	-
32	排水溝	銅製品	熙寧元寶1068年(北宋)	-	-	-
33	-	銅製品	開元通寶 960年(南唐)	-	-	-
34	-	銅製品	皇宋通寶1038年(北宋)	-	-	-
35	-	銅製品	景祐元寶1034年(北宋)	-	-	-
36	-	石製品	石臼	42.9	(32.5)	19.0
4期						
1	-	青磁	碗	-	4.9	(3.1)
2	-	青磁	鉢	-	-	-
3	-	常滑	無頸壺	-	(6.65)	(6.9)
4	-	常滑	片口鉢?	-	-	-
5	-	山茶碗窯	片口鉢	-	(9.9)	(4.2)

図・遺物No.	遺構	種別		計測値 単位：cm 口径	底径	器高
6	-	磨常滑		長 5.8	短 3.2	厚 1.2
7	-	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.4)	1.6
8	-	土器	かわらけ皿	7.0	5.6	1.5
9	-	土器	かわらけ皿	(7.6)	(5.0)	1.6
10	-	土器	かわらけ皿	7.4	6.0	1.5
11	-	土器	かわらけ皿	7.4	6.6	1.6
12	-	土器	かわらけ皿	8.0	6.2	1.6
13	-	土器	かわらけ皿	(7.8)	(6.0)	1.6
14	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.2)	1.4
15	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.0)	1.6
16	-	土器	かわらけ皿	(7.8)	(5.6)	1.6
17	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.0)	1.7
18	-	土器	かわらけ皿	8.2	6.8	1.5
19	-	土器	かわらけ皿	(7.8)	(4.8)	1.9
20	-	土器	かわらけ皿	(6.6)	(4.0)	2.1
21	-	土器	かわらけ皿	(7.2)	(4.7)	2.2
22	-	土器	かわらけ皿	(7.4)	(4.8)	2.3
23	-	土器	かわらけ皿	(7.2)	(4.8)	2.5
24	-	土器	かわらけ皿	8.0	4.0	2.5
25	-	土器	かわらけ皿	(11.0)	(7.6)	3.1
26	-	土器	かわらけ皿	(12.0)	(7.5)	3.0
27	-	土器	かわらけ皿	(12.0)	(8.4)	3.1
28	-	土器	かわらけ皿	12.4	8.5	3.1
29	-	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.2	3.6
30	-	土器	かわらけ皿	(12.0)	(6.8)	3.4
31	-	土器	かわらけ皿	(13.0)	(9.0)	3.3
32	-	土器	かわらけ皿	(13.0)	(7.6)	3.9
33	-	土器	かわらけ皿	14.2	8.85	3.9
34	-	土器	かわらけ皿	(12.4)	(9.3)	(2.4)
35	-	土器	打ち欠き	長 6.5	短 5.5	厚 1.0
36	-		鍔釜	-	-	-
37	-	瓦質	手焙り	-	-	-
38	-	瓦		-	-	-
39	-	石製品	砥石	長 18.5	巾 3.5	厚 2.3
40	-	石製品	上野砥石	長 8.6	巾 3.2	厚 2.1
41	-	石製品	鳴滝砥石	長 3.1	巾 3.2	厚 0.5
42	-	石製品	上野砥石	長 5.8	巾 2.5	最大 2.0
43	-	骨製品	笄	長 2.5	巾 1.5	厚 0.2
1	遺35	瀬戸	折縁大皿	-	-	-
2	遺35	土器	かわらけ皿	(7.0)	4.0	1.8
3	-	土器	かわらけ皿	7.4	4.6	2.1
4	遺35	土器	かわらけ皿	7.5	5.0	1.8
5	遺35	土器	かわらけ皿	7.5	5.1	2.2
6	遺35	土器	かわらけ皿	(7.4)	(5.8)	1.7
7	遺35	土器	かわらけ皿	7.4	6.1	2.0
8	遺35	土器	かわらけ皿	(12.0)	(7.4)	3.0
9	遺35	土器	かわらけ皿	(13.0)	(8.0)	3.2
10	遺38	土器	かわらけ皿	7.5	4.1	2.1
11	遺38	土器	かわらけ皿	13.9	6.7	3.2
12	遺44	土器	かわらけ皿	(7.4)	(6.4)	1.3
13	遺44	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.8)	1.7
1	排水溝	瀬戸	鉄釉小壺	-	-	-

表3　遺物観察表(3)

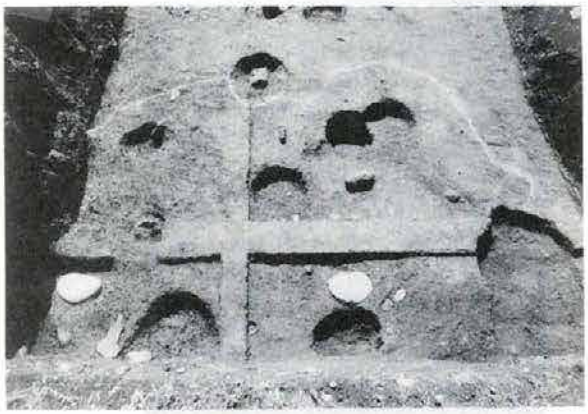
図・遺物No.	遺構	種別		計測値 単位：cm 口径	底径	器高
2	排水溝	山茶碗窯	片口鉢	-	-	-
3	排水溝	常滑	甕	-	-	-
4	排水溝	常滑	甕	-	-	-
5	-	常滑	甕	-	-	-
6	排水溝	土器	かわらけ皿	(7.2)	5.6	1.7
7	排水溝	土器	かわらけ皿	8.0	4.6	2.4
8	排水溝	土器	かわらけ皿	(12.0)	7.4	3.0
9	排水溝	土器	かわらけ皿	(12.6)	(8.4)	3.0
10	排水溝	土器	かわらけ皿	12.2	7.1	3.0
11	排水溝	土器	かわらけ皿	(12.5)	(7.8)	2.7
12	排水溝	土器	かわらけ皿	(12.0)	(8.4)	3.0
13	排水溝	土器	かわらけ皿	12.9	6.9	3.9
14	排水溝	土器	かわらけ皿	12.8	8.6	3.3
		5期				
1	サブトレ	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.2)	1.4
2	-	土器	かわらけ皿	7.5	6.0	1.7
3	-	土器	かわらけ皿	7.6	6.0	1.6
4	-	土器	かわらけ皿	(8.1)	4.5	2.25
5	-	土器	かわらけ皿	10.9	6.65	3.5
6	-	土器	かわらけ皿	11.0	6.6	3.1
7	-	土器	かわらけ皿	12.0	8.4	3.0
8	サブトレ	土器	かわらけ皿	(13.0)	(8.2)	3.3
9	サブトレ	土器	かわらけ皿	(12.0)	(8.0)	2.6
10	サブトレ	土器	かわらけ皿	(11.65)	(7.3)	3.5
11	サブトレ	土器	かわらけ皿	(12.0)	(7.6)	3.6
12	-	土器	かわらけ皿	(13.2)	(9.7)	3.4
13	サブトレ	土器	かわらけ皿	(13.3)	(9.0)	3.5
14	-	土器	かわらけ皿	(12.7)	(6.2)	3.5
15	-	土器	かわらけ皿	(7.0)	(6.0)	1.5
16	-	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.8)	1.3
17	-	土器	かわらけ皿	(7.4)	(7.8)	1.0
18	サブトレ	土器	かわらけ皿	7.4	6.0	1.6
19	サブトレ	土器	かわらけ皿	7.4	6.3	1.5
20	-	土器	かわらけ皿	(7.4)	6.5	1.8
21	トレンチ	土器	かわらけ皿	7.4	5.6	2.0
22	-	土器	かわらけ皿	(7.4)	(6.0)	1.5
23	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(7.6)	1.6
24	トレンチ	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.0)	1.8
25	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.6)	1.8
26	-	土器	かわらけ皿	8.0	6.7	1.7
27	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.2)	1.6
28	-	土器	かわらけ皿	(7.6)	(4.6)	1.9
29	-	土器	かわらけ皿	(9.8)	(6.0)	2.1
30	-	土器	かわらけ皿	8.2	5.5	1.9
31	-	土器	かわらけ皿	(7.8)	(5.8)	1.8
32	-	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.0)	1.6
33	トレンチ	土器	かわらけ皿	(8.0)	(5.4)	1.9
34	-	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.6)	2.1
35	-	土器	かわらけ皿	7.0	4.6	2.3
36	-	土器	かわらけ皿	(12.0)	(8.2)	2.8
37	-	土器	かわらけ皿	11.2	6.5	3.3
38	-	土器	かわらけ皿	(11.6)	(6.4)	3.3
39	トレンチ	土器	かわらけ皿	(12.0)	(6.4)	3.8
40	-	土器	かわらけ皿	(14.0)	(8.2)	3.8
41	-	漆器	皿	(8.8)	(5.9)	1.1
42	-	漆器	皿	-	-	-
43	-	銅製品		縦 4.6	横 4.5	厚 0.2
44	-	鉄製品	釘	長 9.6	巾 0.9	
45	-	骨製品	笄	長 10.2		厚 0.2
46	-	石製品	鳴滝砥石	縦 9.2	横 2.2	厚 1.4
47	-	木製品		長 9.2	巾 2.2	厚 1.4
48	-	木製品		長 19.9	巾 2.0	厚 2.3
49	-	木製品		長 17.3	巾 1.7	厚 0.9
50	-	木製品		長 20.7	巾 1.3	厚 1.2
1	遺45	土器	かわらけ皿	(7.6)	(6.0)	1.6
2	遺45	土器	かわらけ皿	8.0	6.4	1.8
3	遺45	土器	かわらけ皿	8.2	6.0	1.9
4	遺45	土器	かわらけ皿	(8.0)	(6.2)	1.6
5	遺45	土器	かわらけ皿	8.0	5.5	1.6
6	遺45	土器	かわらけ皿	8.3	6.5	1.8
7	遺45	土器	かわらけ皿	11.8	7.0	3.5
8	遺49	土器	かわらけ皿	7.5	5.7	1.6
9	遺49	土器	かわらけ皿	(11.2)	(8.0)	3.0
10	遺49	土器	かわらけ皿	(11.2)	(7.8)	3.2
11	遺52	土器	かわらけ皿	7.9	4.95	1.9
1	溝	土器	かわらけ皿	(7.0)	(5.0)	2.3
2	溝	土器	かわらけ皿	7.4	6.5	1.6
3	溝	土器	かわらけ皿	(11.0)	(7.4)	3.3
4	遺111	土器	かわらけ皿	12.3	8.5	3.3

▲1．Ⅰ区1期全景（南から）

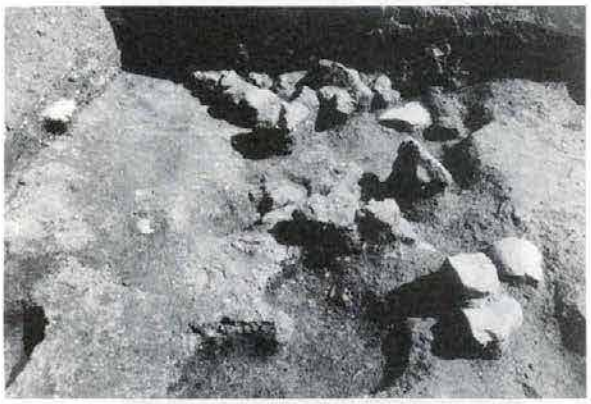


▲2．Ⅱ区1期全景（西から）

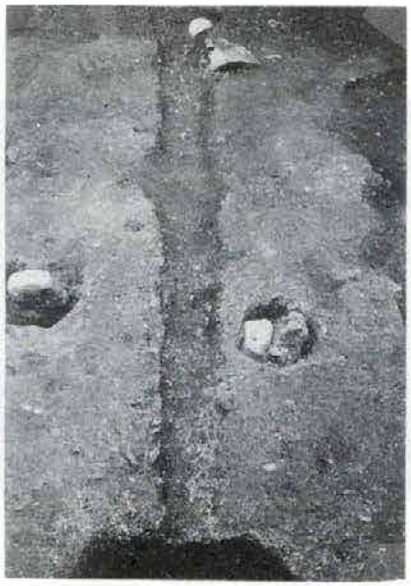
▲3．Ⅰ区 1期全景（北から）



▲4．Ⅰ区1期 遺構-24 焼土範囲、礎石（北から）



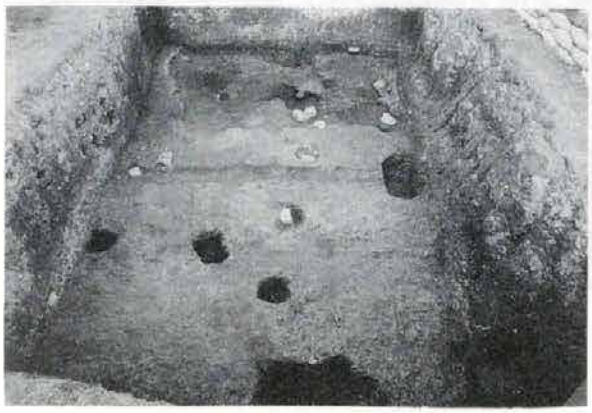
▲5．Ⅰ区 1期 遺構-24 土丹検出状況



▲6．Ⅰ区 2期 遺構-25 全景（東から）

図版2

▲1．Ⅰ区2期全景（北から）



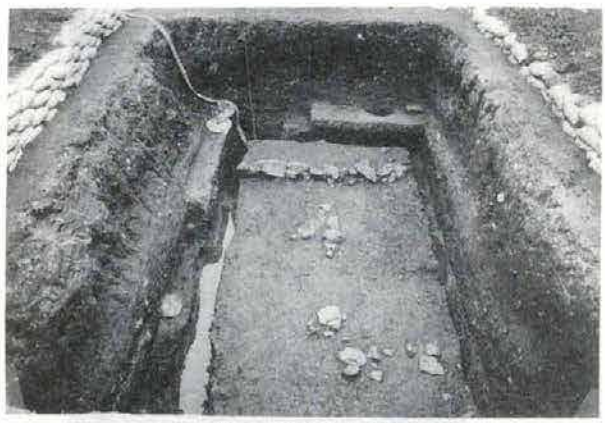
▲2．Ⅰ区 2期全景（南から）

▲3．Ⅱ区 2期全景（東から）

▲4．Ⅱ区 2期 礫 検出状況（北から）

▲5．Ⅰ区 3期 瓦 出土状況（南から）

▲6．Ⅱ区 2期 遺構102 検出状況（北から）



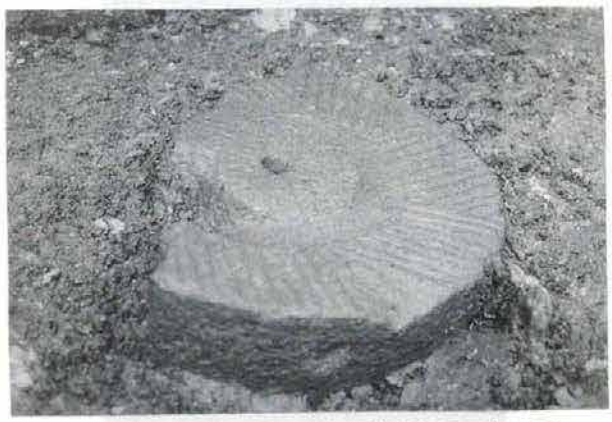
▲1．Ⅰ区 3期全景（北から）

▲3．Ⅱ区 3期全景（東から）

▲2．Ⅰ区 3期全景（南から）

▲4．Ⅰ区 3期 遺構33（東から）

▲5．Ⅰ区 3期礎石（西から）



▲6．Ⅱ区 3期 石臼 転用礎石検出状況（南から）

図版 4

▲1．Ⅱ区 2期礎石（北から）

▲2．Ⅰ区 3期遺構34かわらけ溜り

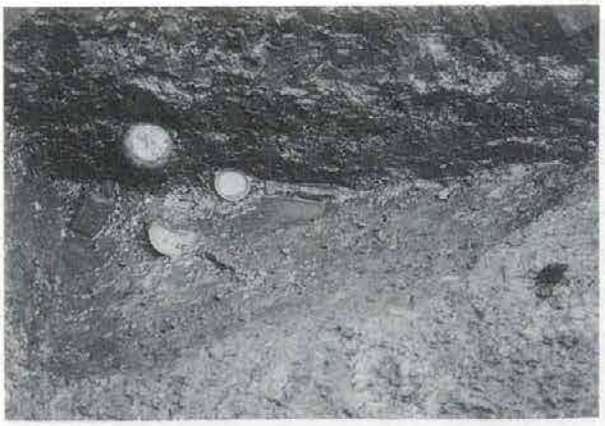
▲5．Ⅱ区 5期全景(西から)

▲3．Ⅰ区 4期全景（西から）

▲4．Ⅱ区 4期全景(東から)

▲6．Ⅰ区 5期 トレンチ

▲1．I区 5期トレンチ全景（北から）



▲2．I区 トレンチ 遺構52（西から）

▲3．I区 遺物出土状況

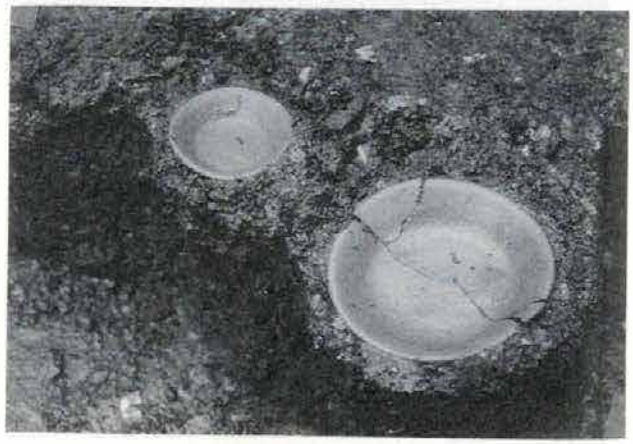
▲4．I区 5期 トレンチ、杭 検出状況（西から）

▲5．I区 5期 トレンチ、遺構50（西から）

▲6．I区 5期 トレンチ全景（西から）

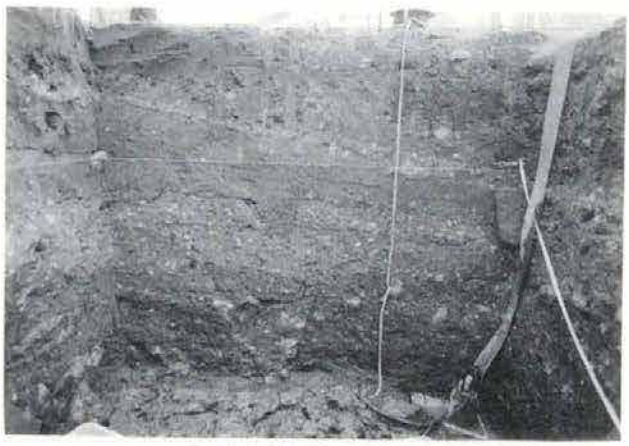
図版 6

▲1．Ⅱ区 5期 漆皿 出土状況（東から）

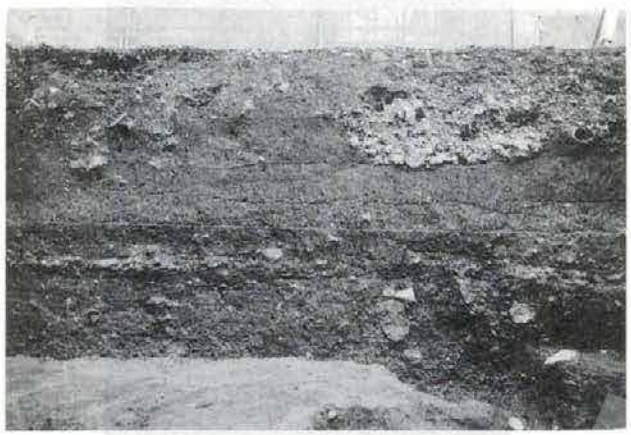


▲2．Ⅱ区 4期 遺構38、かわらけ出土状況（東から）

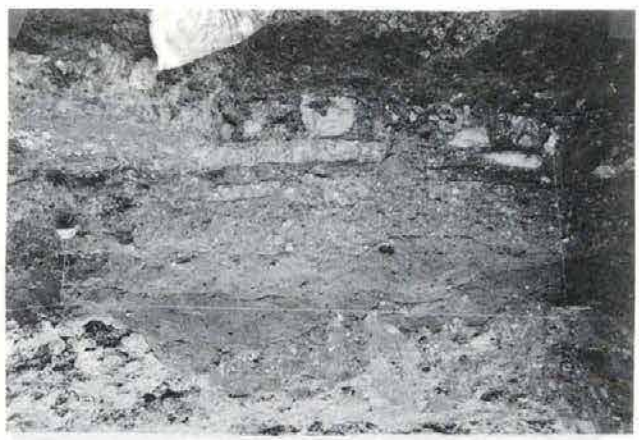
▲3．Ⅱ区 3期 遺物出土状況（西から）



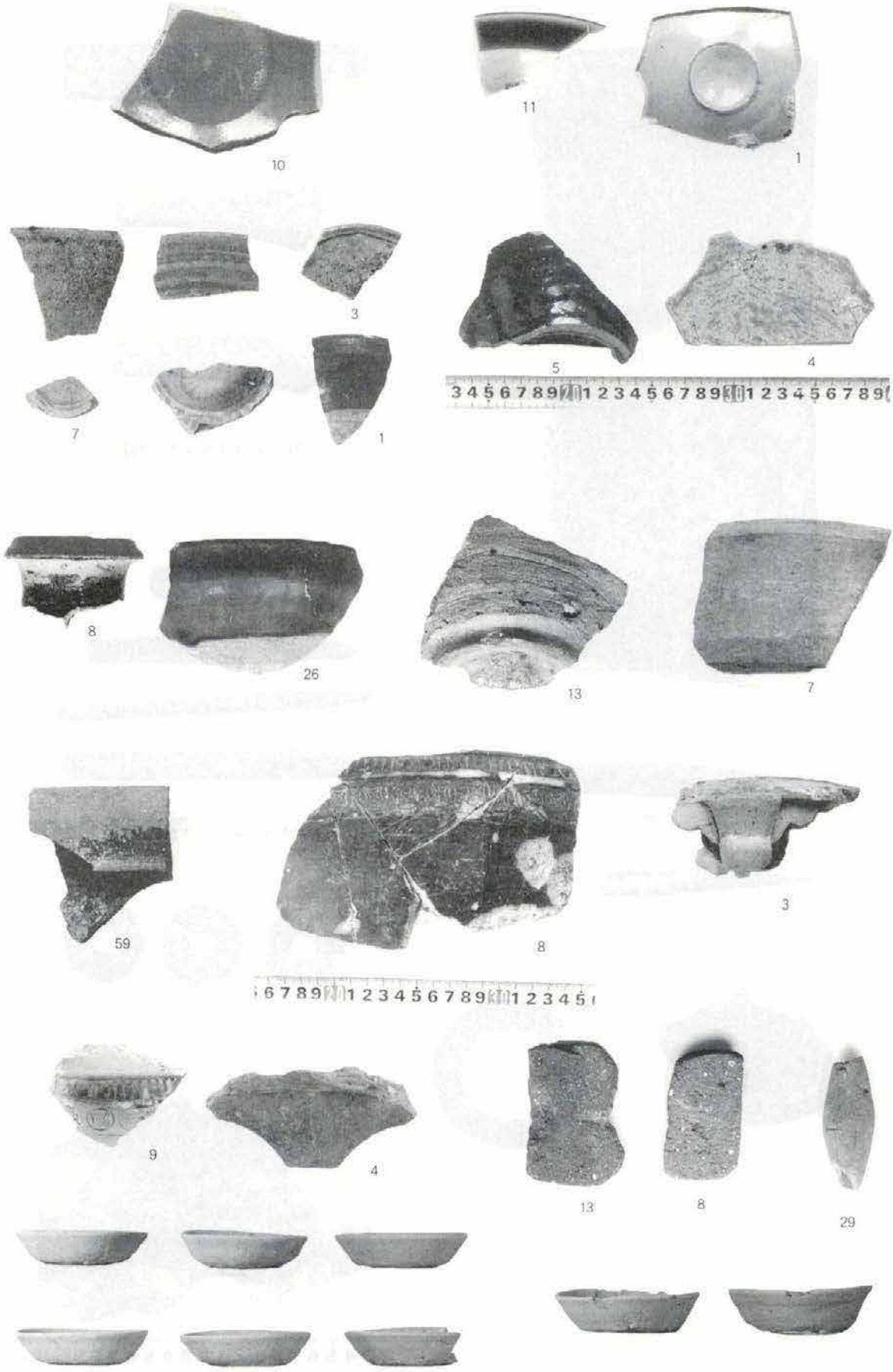
▲4．Ⅱ区 東壁セクション（西から）



▲5．北壁セクション（南から）

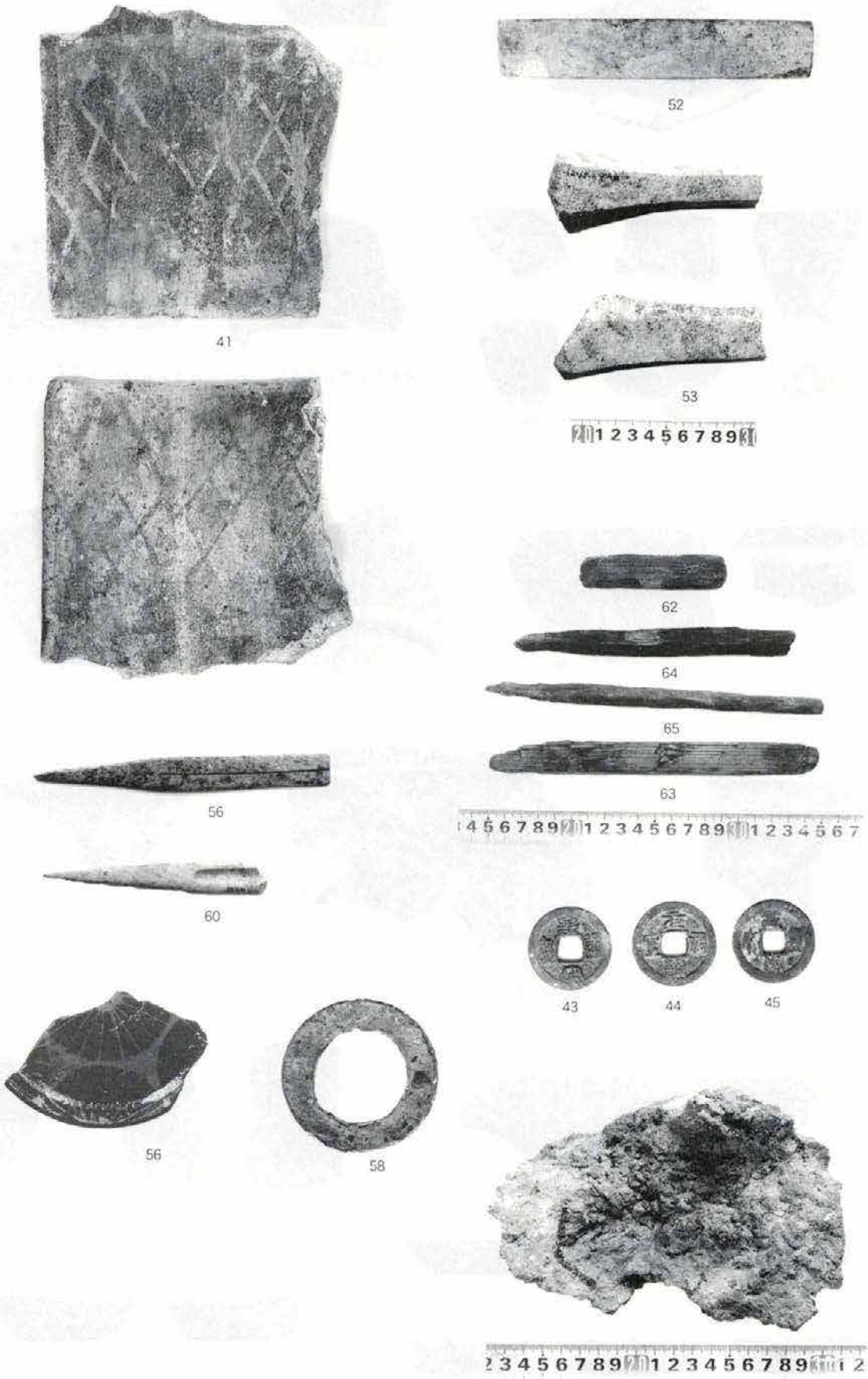


▲6．Ⅱ区 西壁セクション（東から）



出土遺物 (1)

図版 8



出土遺物 (2)

若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

わかみやおお じしゅうへんい せきぐん

由比ガ浜一丁目126 番 1

由比ガ浜一丁目126 番11

例　言

1．本報は、若宮大路周辺遺跡群（No. 242）内の鎌倉市由比ガ浜一丁目126番1（A地点）及び由比ガ浜一丁目126番11（B地点）における個人専用住宅の新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。調査面積はA地点が39㎡、B地点が36㎡の合計75.0㎡である。
2．発掘調査は、由比ガ浜一丁目126番1地点を平成17年4月4日から同28日、由比ガ浜一丁目126番11地点を平成17年5月9日から同20日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3．発掘調査体制は次の通りである。
　　調査担当者　熊谷満
　　調　査　員　伊藤博邦
　　作　業　員　鯉沼稔、佐藤美隆、渡辺輝彦
4．本報作成にあたっての資料整理参加者、および分担は次の通りである。
整理参加者　熊谷満、降矢順子、伊藤博邦、岡田慶子、加藤千尋、村松彩美
遺物洗浄：伊藤、岡田、加藤　遺物分類：降矢　遺物実測・トレース：岡田、村松　図版作成、写真撮影、原稿執筆：熊谷
5．本報の凡例は次の通りである。
・図版縮尺　全測図：1/80、遺構図：1/30、1/60、遺物図：1/3、1/2
・遺構図版　水糸高は海抜標高値を示す。
　　破線は推定線を示す。
・遺物図版　－・－および　は釉薬の範囲、←・→は使用痕の範囲を示す。
・遺物法量表　（ ）は復元数値、［ ］は残存数値を示す。
・遺物構成表　かわらけは、以下のように分類した。
　先頭のアルファベットは成形・器形を示し、Aを胎土粉質で口縁部外反する戦国期頃のロクロ糸切り成形、Cを焼成良好な薄手造りのロクロ糸切り成形、Bをそれ以外のロクロ糸切り成形、Dを手づくね成形、Eを特殊器形など含めその他とした。後部の漢字は器種を示し、大皿を大、中皿を中、小皿を小とした。
6．本報記載の「鎌倉石」は粗粒凝灰岩を示す。
7．現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）
石元道子、伊丹まどか、佐藤仁彦、汐見一夫、鈴木庸一郎、社団法人鎌倉市シルバー人材センター
8．本調査に関わる出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

第１章　遺跡の立地と環境 ……142
第２章　調査の経過と方法 ……144
第３章　検出された遺構と遺物 ……145
第４章　まとめ ……160

図 目 次

図１　調査地点周辺……142
図２　調査地点配置図……144
図３　遺構全体図……146
図４　１号方形竪穴建築址……147
図５　２号・３号方形竪穴建築址、土坑２～６ ……148
図６　Ｂ地点全体図、４号方形竪穴建築址……149
図７　溝・埋葬犬骨……150
図８　１，７，８号土坑……151
図９　出土遺物（１）……152
図10　出土遺物（２）……153
図11　出土遺物（３）……154
図12　出土遺物（４）……155

表 目 次

表１　遺物法量表（１）……157
表２　遺物法量表（２）……158
表３　遺物構成表 ……159

図 版 目 次

図版１　１．Ａ地点　西部全景(南から)……161
２．Ａ地点　１号方形竪穴建築址(北から)　161
３．Ａ地点　北部全景……161
４．Ａ地点　南東部全景(北から)……161
５．Ａ地点　溝(東から)……161
６．Ａ地点　１号土坑(東から)……161
７．Ａ地点　南東部調査区南壁……161
８．Ｂ地点　全景(南から)……161
図版２　１．Ｂ地点　４号方形竪穴建築址(南から)　162
図版２　２．Ｂ地点　４号方形竪穴建築址堆積土層(北から) 162
３．Ｂ地点　溝調査風景(西から)……162
４．Ｂ地点　埋葬犬骨……162
５．Ｂ地点　溝(西から)……162
６．Ｂ地点　溝堆積土層(西から)……162
７．Ｂ地点　12号土坑(南から)……162
８．Ｂ地点　14号土坑(北から)……162
図版３　出土遺物……163

第１章　遺跡の立地と環境

本調査地点は鎌倉市由比ガ浜一丁目126番１及び一丁目126番11に所在する、若宮大路周辺遺跡群（No. 242）の一地点である。寿福寺前から六地蔵交差点まで南北に通る道路は、鎌倉時代にはほぼ同じ道筋で今小路と呼ばれる路であったと考えられており、本調査地点はこの今小路と、御成中学校から下馬四つ角方面へと向かう東西道路との交差点南東角部に面して位置する。調査地点より約80m北には佐助川が東流しており、今小路や若宮大路を横切って滑川へと注いでいく。これにより寸断される今小路には裁許橋と呼ばれる橋が架けられており、この周辺には鎌倉時代に問注所があったとされている。問注所は諸国の訴訟を裁判する幕府機関で、元暦元年（1184）十月に公文所とともに設置された。もとは幕府西南の政所郭内にあったものが、弘長元年（1261）三月に焼失してしまい郭外へ移されることとなり、それがこの地であると推測されている。『相模風土記』は「昔頼朝の時、此辺に屋鋪有て、訴訟を決断す。按ずるに此屋鋪とは問注所の事にて、今も橋南の路傍に飢渇畠と名づくる古昔の刑罪場などあれば、又の伝因なきにあらず」と記す。「橋」は裁許橋のことと思われ、その南の路傍にある「飢渇畠」は、六地蔵交差点へ向かう途中左側、六地蔵にほど近いところに、かつて長い間荒れ地となっていた場所があったらしく、そこを指すものと伝えられる。六地蔵は、この刑場を弔うため江戸時代になって六体の地蔵が祀られたものだという。

本調査地周辺における発掘調査事例は比較的多い。今小路西遺跡では、御成小学校内（図1-2, 3）において南北道路、およびこれを境にして西に武家屋敷、東に方形竪穴建築址群が検出されており、年代的には14世紀前葉頃が当地の最盛期と考えられている。この南方の地点となる社会福祉センター用地

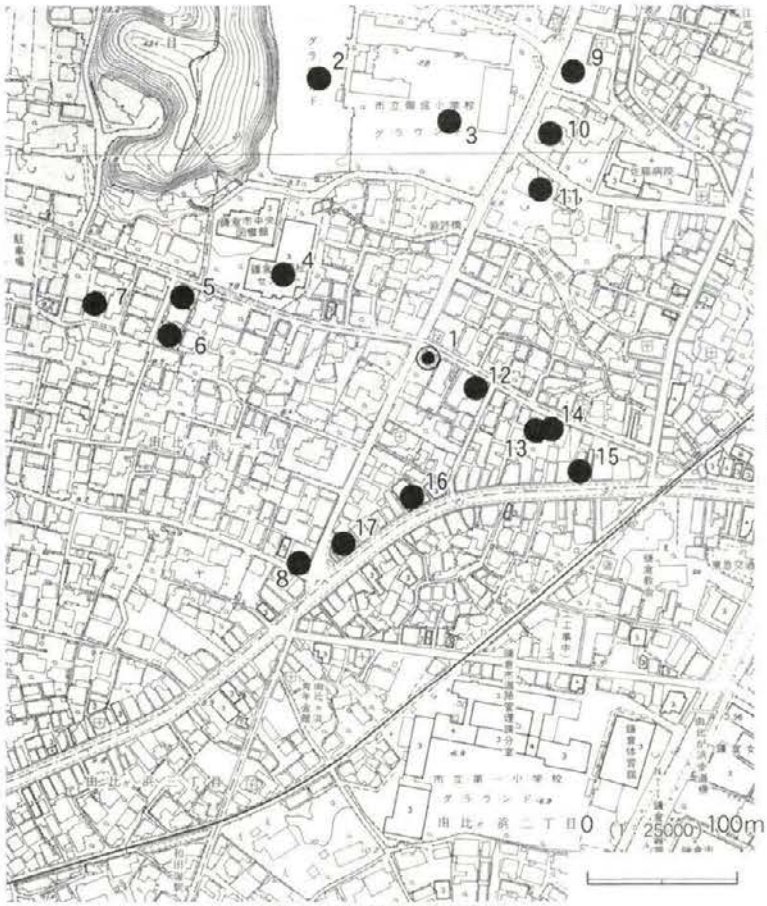


図１　調査地点周辺

1．本調査地点

今小路西遺跡（No. 201）

2．『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』1990 今小路西遺跡発掘調査団/鎌倉市教育委員会

3．『今小路西遺跡（御成小学校内）第５次発掘調査概報』1993今小路西遺跡発掘調査団/鎌倉市教育委員会

4．『今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地）』1993　今小路西遺跡発掘調査団

5．「今小路西遺跡　由比ガ浜一丁目148番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第１分冊）』2002　鎌倉市教育委員会

6．「今小路西遺跡　由比ガ浜一丁目148番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20（第１分冊）』2004　鎌倉市教育委員会

7．鎌倉市由比ヶ浜１丁目151番１地点　未報告　2010年刊行予定

8．「今小路西遺跡　由比ガ浜一丁目183番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第２分冊）』2002　鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

9．『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書－第85地点－』2002若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

10．未報告　2009年刊行予定

11．未報告　2010年刊行予定

12．「若宮大路周辺遺跡群　由比ガ浜一丁目123番５外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11（第1分冊）』1995　鎌倉市教育委員会

13．「若宮大路周辺遺跡群　由比ガ浜一丁目118番8地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11（第1分冊）「若宮大路周辺遺跡群　由比ガ浜一丁目123番5外地点」内』1995　鎌倉市教育委員会

14．「若宮大路周辺遺跡群　由比ガ浜一丁目118番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13（第2分冊）』1995　鎌倉市教育委員会

15．『由比ガ浜1-117-1地点遺跡－若宮大路周辺遺跡群・堀口ビル建設に伴う緊急発掘調査報告書－』1991　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

16．「若宮大路周辺遺跡群　由比ヶ浜一丁目128番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』1988　鎌倉市教育委員会

17．『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書（由比ヶ浜一丁目129番５地点）』1995　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団

(図1-4) では、佐助川の旧河道と思われる河川跡が検出されている。今小路の東面周辺では、御成町872番1地点（図1-9）や同783番1, 2地点（図1-10）、763番5地点（図1-11）など砂丘上に数多くの方形竪穴建築址が検出されている。本調査地点から最も近くでは、調査区北脇の東西道路を約40m東に行った道路沿い南側の由比ガ浜一丁目123番5他地点（図1-12）がある。この地点では現地表下約40cmの標高7.4m前後で基盤層となる砂層が露出し、方形竪穴建建築址４棟のほか土坑などを検出しており、出土遺物は13世紀後半頃のものが多いようだ。

また六地蔵に近接した地点では、由比ガ浜一丁目129番5地点（図1-17）で概ね19世紀代と考えられる土壙墓群が検出されているが、中世遺構としては13世紀後半～14世紀代の方形竪穴建築址や土坑群を検出しており、土壙墓は確認されていない。ほか由比ガ浜一丁目183番1地点（図1-8）でも中世期の検出遺構は13世紀後半～14世紀中頃までの方形竪穴建築址や土坑群を主としており、土壙墓は検出されていない。六地蔵周辺に問注所存続期の刑場であったという伝承を示す地点は、現在までのところ発見されていない状況である。

今小路東面周辺の砂丘は広い範囲で近世以降の削平を受けており、遺構検出面となる砂層の直上層に中世遺物包含層を挟まず、すぐ近世以降の堆積土となってしまうことが多い。この地域で検出される方形竪穴建築址群は、今小路に近いほど検出面から底面までの深さが浅く、東に離れていくほど深くなる傾向が見られ、同様に底面標高は今小路に近いほど高く、東側ほど低いものが多い。現在の地形を見ても、今小路辺りから東に向かってやや傾斜している状況が認められるが、中世にはより顕著な起伏が見られたものと思われる。

[引用・参考文献]

白井永二『鎌倉事典』1992年　東京堂出版
『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』1990年　今小路西遺跡発掘調査団/鎌倉市教育委員会
『今小路西遺跡発掘調査報告書（社会福祉センター用地）』1993　今小路西遺跡発掘調査団
「若宮大路周辺遺跡群（No. 242）由比ガ浜一丁目123番5他」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11（第１分冊）』1995年　鎌倉市教育委員会
『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書（由比ガ浜一丁目129番5地点）』1995　若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
「今小路西遺跡　由比ガ浜一丁目183番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18（第2分冊）』2002　鎌倉市教育委員会

第２章　調査の経過と方法

本調査は由比ガ浜一丁目126番１地点と同一丁目126番11地点の隣接した２地点における、個人専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財発掘調査である。隣り合った調査区ではあるがそれぞれ事業主が違うことから、調査はその地点ごとに実施された。以降は便宜上、一丁目126番１地点をＡ地点、一丁目126番11地点をＢ地点と呼ぶこととする。現地調査はまずＡ地点から始められ、調査期間は平成17年４月４日から同28日までの約１ヶ月間で、調査面積は39㎡である。現地表の標高は約8.4mを測るが、敷地内は現代の造成で厚く盛土されており、敷地脇を通る道路面の標高は7.4m前後である。調査はまず重機により厚さ100cm前後の表土を除去することから始められ、その後はすべて人力による作業となった。調査区東側の中央付近にコンクリートの構造体が残っており、ピンポールによって深さを確認したところかなり深くまで入っていることが判ったため、これは残したまま調査を行うこととなった。表土を除去すると中世基盤層となる灰白色砂層が露出し、この面においてすべての遺構を検出した。ただし、建築の基礎工事が現地表面より深さ150cmまでであることから、これより深い遺構に関しても規定の深さまでで中止することとなり、あとは部分的にトレンチを設定して下層の堆積土を観察した。検出された遺構を掘削後、測量・写真撮影などの記録保存を行い当地点の作業を終了した。次いでＢ地点を平成17年５月９日から同20日にかけて、同様の手順で調査を行った。調査面積は36㎡である。こちらも建築の基礎工事が現地表面より深さ150cmまでであることから、調査の最大掘削深度もそこまでとなった。

測量に際しては、日本測地系（座標系AREA９）の国土座標軸を用いてグリッドを設定した。このため本報で用いている方位標の北は真北を示す。世界測地系第Ⅸ系の国土座標値に準じて算出すると、X=-76140.000がX=-75783.2960に、Y=-25720.000がY=-26013.4301となる。また海抜標高値は、鎌倉市三級基準点No.53223（標高7.180m）を基に移設したものを使用している。

図２　調査地点配置図

第３章　検出された遺構と遺物

本調査は２地点に分けて調査が行われたが、本章では便宜上それぞれの遺構に連続した番号を通して付している。前述の通り本調査地点では、表土を除去した時点で中世基盤層となる灰白色砂層が広がり、この面においてすべての遺構を検出した。検出面標高は約7.4m。ここまでの出土遺物としては、図9-1,2は瀬戸縁釉小皿。いずれも瀬戸編年後Ⅲ期。３は瀬戸折縁深皿。後Ⅰ期。4は瀬戸直縁大皿。後Ⅲ～Ⅳ期。５は山茶碗窯系片口鉢。６はロクロ成形かわらけ。内底面中央に穿孔が認められ、外底面まで貫かれている。７～９は鉄製釘。図12-1～3は銭。１は明治十年の刻印が認められる竜一銭銅貨。２は元豊通寶。３は判読できなかった。検出遺構は方形竪穴建築址４棟、溝１条、土坑などである。以下、主立った検出遺構について説明を加える。

１号方形竪穴建築址

Ａ地点調査区北西角で検出された。検出面の標高約7.4m。調査区外北と西に延び、検出範囲内での平面規模は東西3.2m以上×南北6.2m以上。検出面からの深さは約120cmを測り、底面標高は約6.2m。軸方位はＮ－22°－Ｅ。南壁肩部分には浅い段差が認められ、土層断面の観察では本址に伴うものと判断された。検出範囲内での建物中央北半部は緩い段差がついて10cmほど下がる。下がった部分はそれほど平坦でなく、無数の窪みのように凹凸があり、東壁下にはやや角の崩れたような鎌倉石切石を検出している。

出土遺物は、図9-10～13がロクロ成形かわらけ。12は口縁部に油煙付着しており、灯明皿に使用されている。14は常滑甕。常滑編年７～８型式。15は常滑壺。16は土師器甕。17は砥石。鳴滝産仕上砥。18は鉄製釘。19は不明鉄製品。20は銅製品。下端部は折れて欠損しており、燭台の先端部分であろうと思われる。

２号方形竪穴建築址

Ａ地点調査区中央北部で検出された。検出面の標高約7.3m。調査区外北に延び、西端部は１号方形竪穴建築址に掘り込まれ失われている。現状での平面規模は東西4.5m以上×南北5.5m以上。最大掘削深度の都合上底面まで完掘することができず、一部トレンチによって底面までの深さを確認した。検出面からの深さ約80cmを測り、底面標高は約6.5m。軸方位はＮ－24°－Ｅ。底面には基礎材の痕跡と思われる、溝状を呈する浅い窪みをいくつか検出している。

出土遺物は、図9-21～25がロクロ成形かわらけ。23,24は口縁部に油煙付着しており、灯明皿に使用されている。26,27は山茶碗窯系片口鉢。28は土師器高坏の脚部。29は竜泉窯系青磁盤。底部片であるが、内底面に「金玉満堂」の押印が認められる。30は不明骨製品。鹿の中足骨加工品。先端尖り笄のようにも見受けられるが、上部は欠損しているもののすぼまる形状を呈している。31,32は鉄製釘。

３号方形竪穴建築址

Ａ地点調査区東部南で検出された。検出面の標高約7.4m。調査区外西に延び、北端部は現代撹乱に壊されている。現状での平面規模は東西2.4m以上×南北2.4m以上。最大掘削深度の都合上底面まで完掘することができず、一部トレンチによって底面までの深さを確認した。検出面からの深さ約100cmを測り、底面標高は約6.4m。軸方位はＮ－29°－Ｅ。２号方形竪穴建築址と重複関係にあり、底面まで確認した調査区西壁際トレンチの土層断面には２号方形竪穴建築址と思われる立ち上がりは認められなかったため、本址のほうが新しい時期のものと判断された。

出土遺物は、図９-33～36がロクロ成形かわらけ。37は土製円盤。かわらけ質胎土をもつロクロ成形

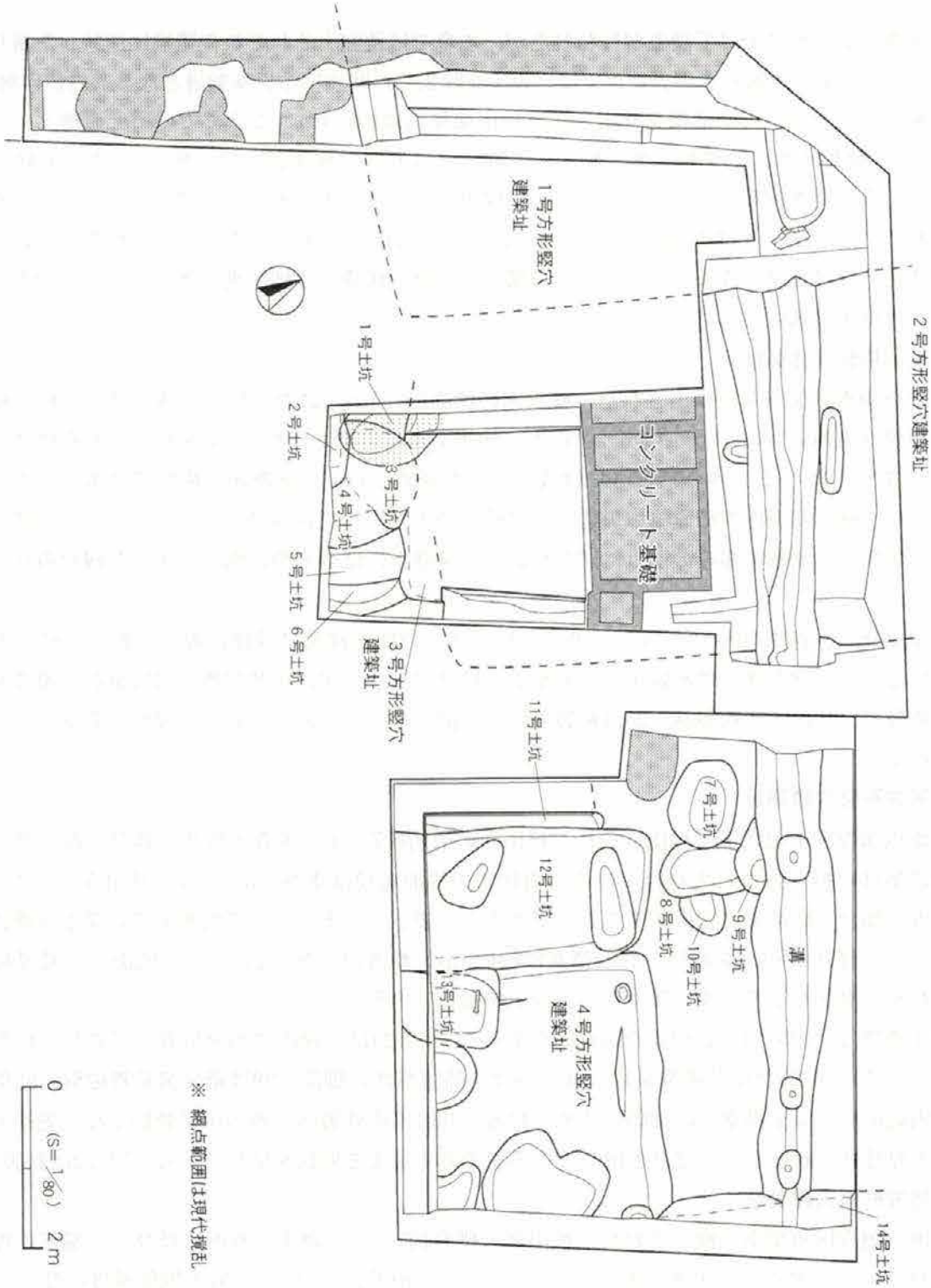

2号方形竪穴建築址
溝
14号土坑
9号土坑
10号土坑
8号土坑
7号土坑
4号方形竪穴
建築址
13号土坑
12号土坑
11号土坑
コンクリート基礎
1号方形竪穴
建築址
1号土坑
2号土坑
3号土坑
4号土坑
5号土坑
6号土坑
3号方形竪穴
建築址
※ 網点範囲は現代撹乱
0 (S=1/80) 2m

図3　遺構全体図

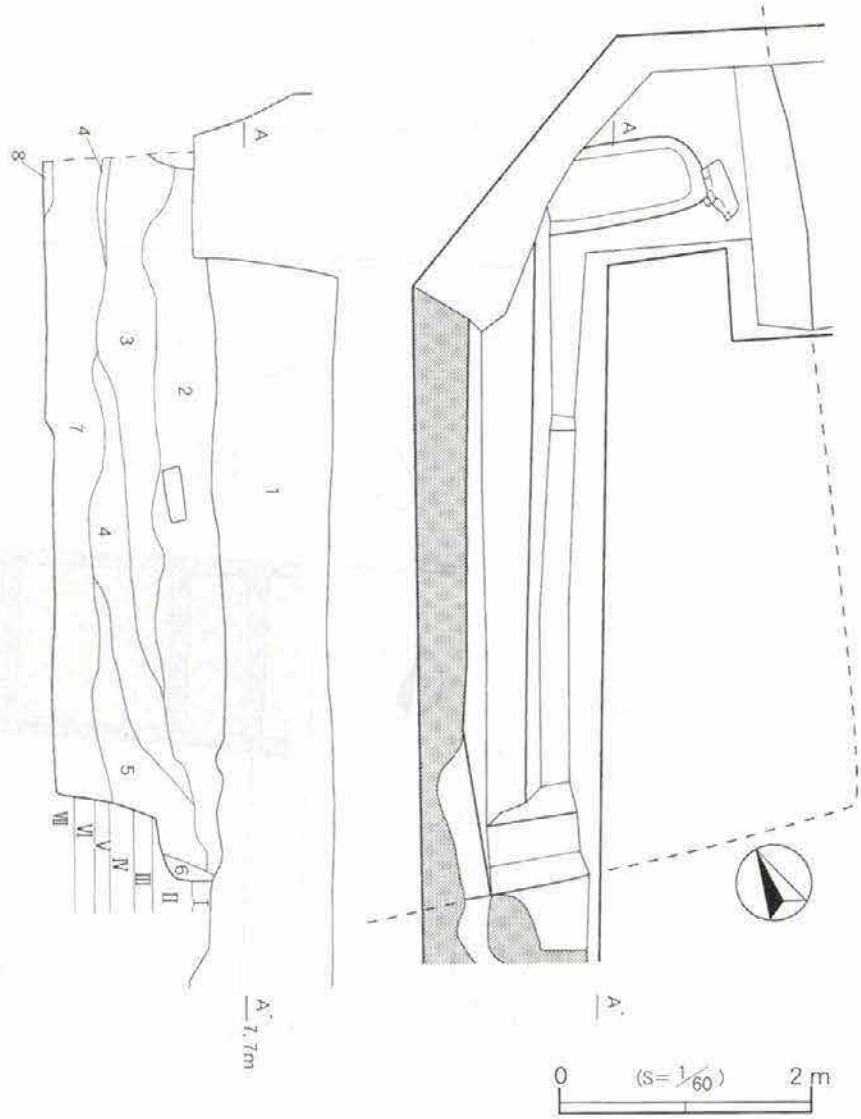


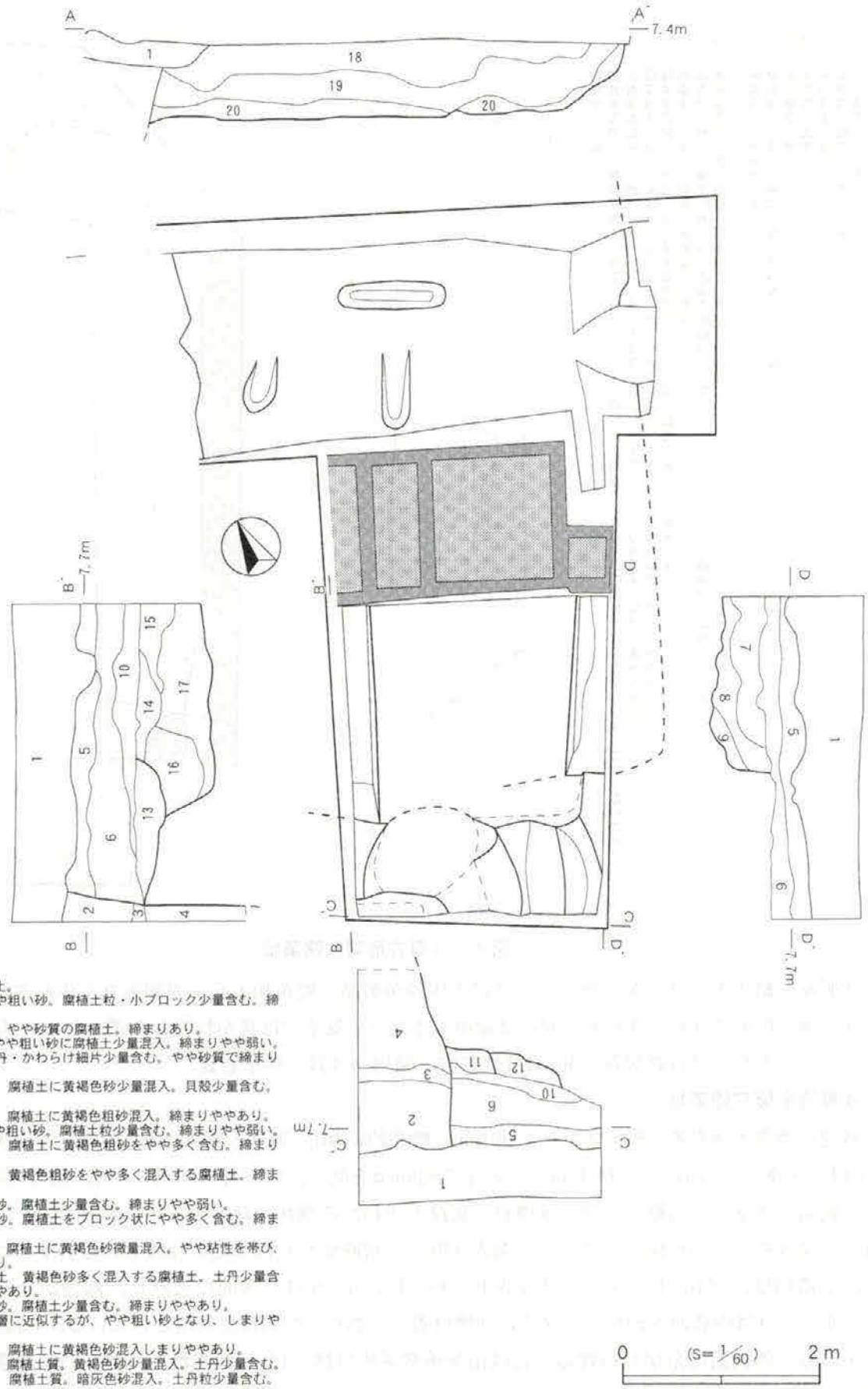
図４　１号方形竪穴建築址

鉢状製品を略円形に打ち欠いたもの。38は不明骨角製品。鹿角加工品。先端部丸く成形され、下部には内径７㎜の円形に穿孔がされる。穿孔は途中で止まり上端までは貫かれておらず、キャップ状を呈する。矢筈かもしれない39は鉄製鋸。40, 41は鉄製釘。図12-4は銭。熙寧通寶。

４号方形竪穴建築址

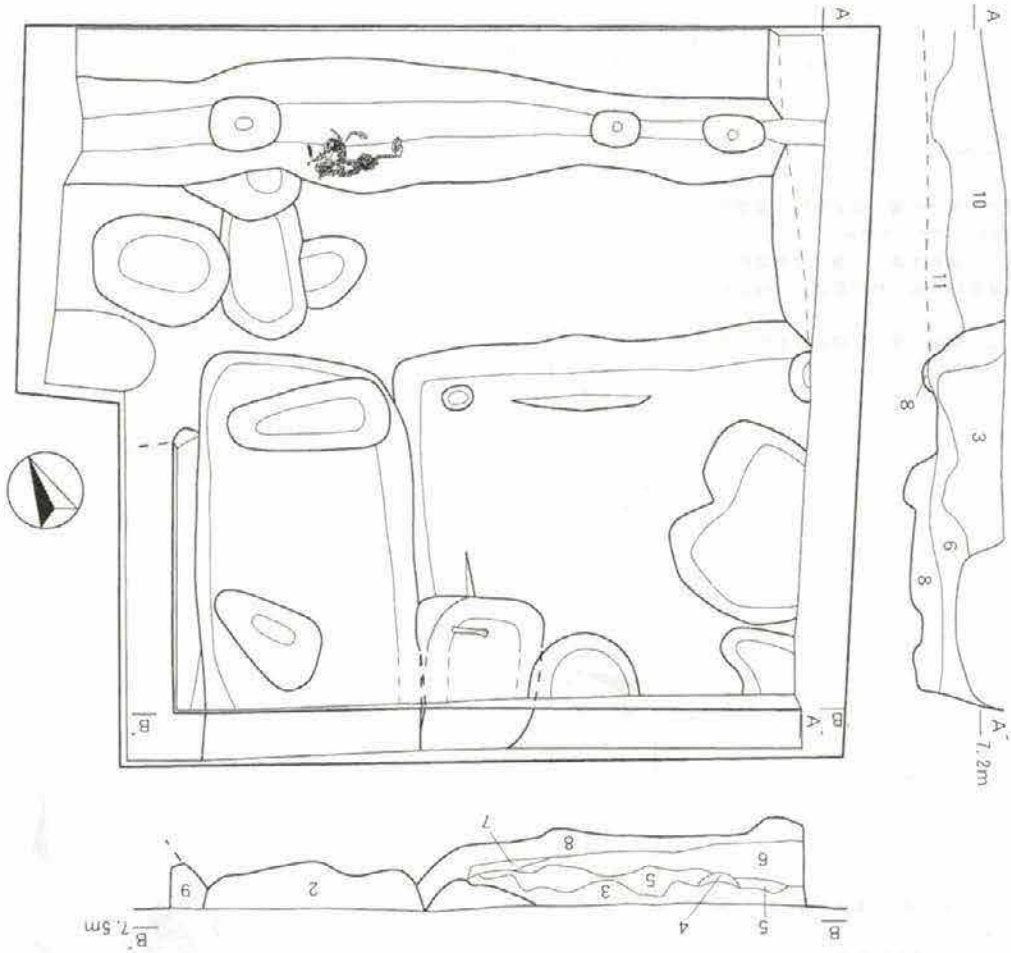
Ｂ地点調査区南東角で検出された。検出面の標高約7.4m。調査区外南、東に延び、平面規模は東西3.4m以上×南北3.1m以上。検出面からの深さ約60㎝を測り、底面標高は約6.8m。軸方位はＮ－24°－Ｅ。底面の北壁下と西壁下には、基礎材の痕跡と思われる溝状の窪みが認められた。また、底面には土坑状の窪みもいくつか検出しており、調査区壁の土層断面からは本址に伴うものと判断される。

出土遺物は、図10-１～10がロクロ成形かわらけ。７，８は２次的に被熱し、器表が全面的に暗灰色を呈する。９は内底面周囲がリング状に油煙付着しており、灯明皿に使用されている。11は白かわらけ。薄手造りで外底面に糸切り痕残る。12は山茶碗窯系片口鉢。13, 14は常滑片口鉢。15は竜泉窯系無文青磁碗。16は磨常滑。常滑甕片を転用したもので、研磨に使用されたもの。17, 18は砥石。いずれも鳴滝産仕上砥。19～22は碁石と思われるが、19, 20は黒色を呈しておらず、別な用途のものかもしれない。



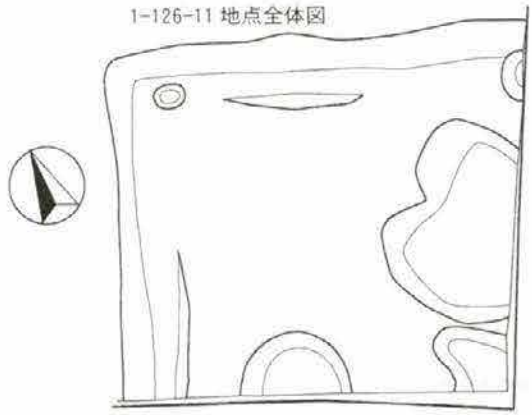
1. 黒褐色土　表土。
2. 黄褐色砂　やや粗い砂。腐植土粒・小ブロック少量含む。締まりややあり。
3. 暗褐色砂質土　やや砂質の腐植土。締まりあり。
4. 暗茶褐色砂　やや粗い砂に腐植土少量混入。締まりやや弱い。
5. 暗褐色土　土丹・かわらけ細片少量含む。やや砂質で締まりあり。
6. 暗褐色砂質土　腐植土に黄褐色砂少量混入。貝殻少量含む。締まりあり。
7. 暗褐色砂質土　腐植土に黄褐色粗砂混入。締まりややあり。
8. 暗灰色砂　やや粗い砂。腐植土粒少量含む。締まりやや弱い。
9. 暗褐色砂質土　腐植土に黄褐色粗砂をやや多く含む。締まりやや弱い。
10. 暗褐色砂質土　黄褐色粗砂をやや多く混入する腐植土。締まりややあり。
11. 黄褐色砂　中砂。腐植土少量含む。締まりやや弱い。
12. 暗灰色砂　中砂。腐植土をブロック状にやや多く含む。締まりやや弱い。
13. 黒褐色砂質土　腐植土に黄褐色砂微量混入。やや粘性を帯び、締まりややあり。
14. 暗茶褐色砂質土　黄褐色砂多く混入する腐植土。土丹少量含む。締まりややあり。
15. 黄褐色砂　粗砂。腐植土少量含む。締まりややあり。
16. 黄褐色砂　15層に近似するが、やや粗い砂となり、しまりやや弱い。
17. 暗褐色砂質土　腐植土に黄褐色砂混入しまりややあり。
18. 暗褐色砂質土　腐植土質。黄褐色砂少量混入。土丹少量含む。
19. 暗褐色砂質土　腐植土質。暗灰色砂混入。土丹粒少量含む。締まりあり。
20. 暗灰色砂　中砂。腐植土微量含む。締まりやや弱い。

図5　2号・3号方形竪穴建築址、土坑2～6



1. 暗褐色砂質土　腐植土質。粘性弱く。粒子弱く。細かい。締まりあり。
2. 暗褐色砂質土　腐植土質。灰褐色粗砂混入。炭化物少量含む。締まりややあり。
3. 暗褐色砂質土　腐植土質。灰褐色粗砂混入。炭化物やや多く含む。締まりややあり。
4. 暗褐色砂質土　腐植土質。3層に似るが炭化物多く含み、土丹粒を含む。締まりあり。
5. 暗灰色砂　中砂。腐植土粒微量含む。締まりやや弱い。
6. 暗灰褐色砂　中砂。腐植土少量混入。上面に薄い炭層が堆積する。締まりややあり。
7. 暗褐色砂質土　腐植土質。茶褐色中砂混入。炭化物多量含む。締まりややあり。
8. 暗褐色砂質土　腐植土質。茶褐色中砂、灰褐色粗砂混入。炭化物微量含む。締まりややあり。
9. 暗褐色砂質土　腐植土質。中層に灰色中砂をブロック状に含む。締まりややあり。
10. 暗褐色砂質土　腐植土質。灰褐色粗砂やや多く含む。締まりややあり。
11. 暗灰褐色砂　やや粗い砂。腐植土少量混入。締まりややあり。

1-126-11 地点全体図



4号方形竪穴建築址

0　(S=1/60)　2m

図6　B地点全体図、4号方形竪穴建築址

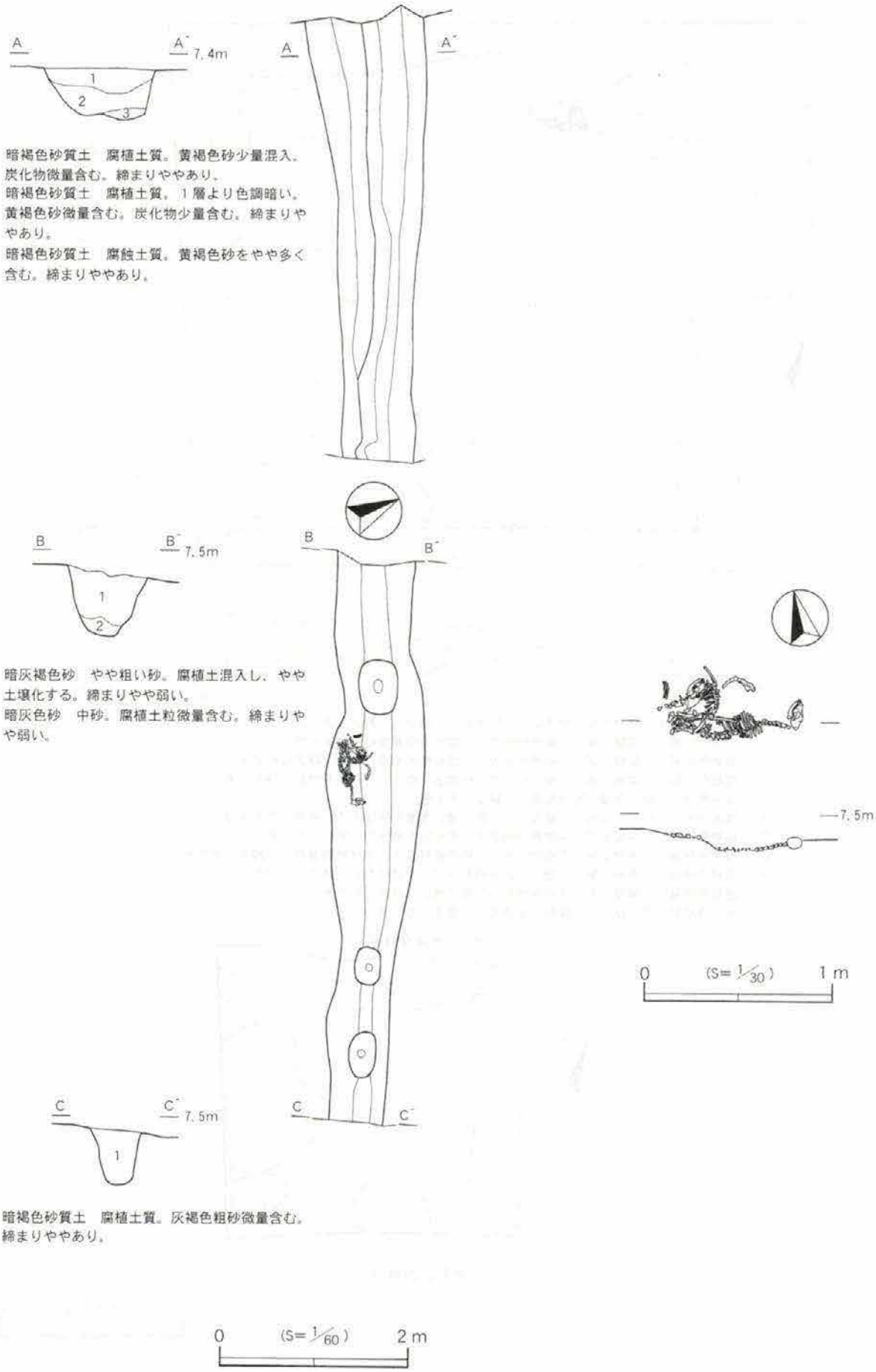

A
A'
7.4m
1
2
3
1. 暗褐色砂質土　腐植土質。黄褐色砂少量混入。炭化物微量含む。締まりややあり。
2. 暗褐色砂質土　腐植土質。1層より色調暗い。黄褐色砂微量含む。炭化物少量含む。締まりややあり。
3. 暗褐色砂質土　腐蝕土質。黄褐色砂をやや多く含む。締まりややあり。
B
B'
7.5m
1
2
1. 暗灰褐色砂　やや粗い砂。腐植土混入し、やや土壌化する。締まりやや弱い。
2. 暗灰色砂　中砂。腐植土粒微量含む。締まりやや弱い。
C
C'
7.5m
1
1. 暗褐色砂質土　腐植土質。灰褐色粗砂微量含む。締まりややあり。
7.5m
0
(S=1/30)
1 m
0
(S=1/60)
2 m

図7　溝・埋葬犬骨

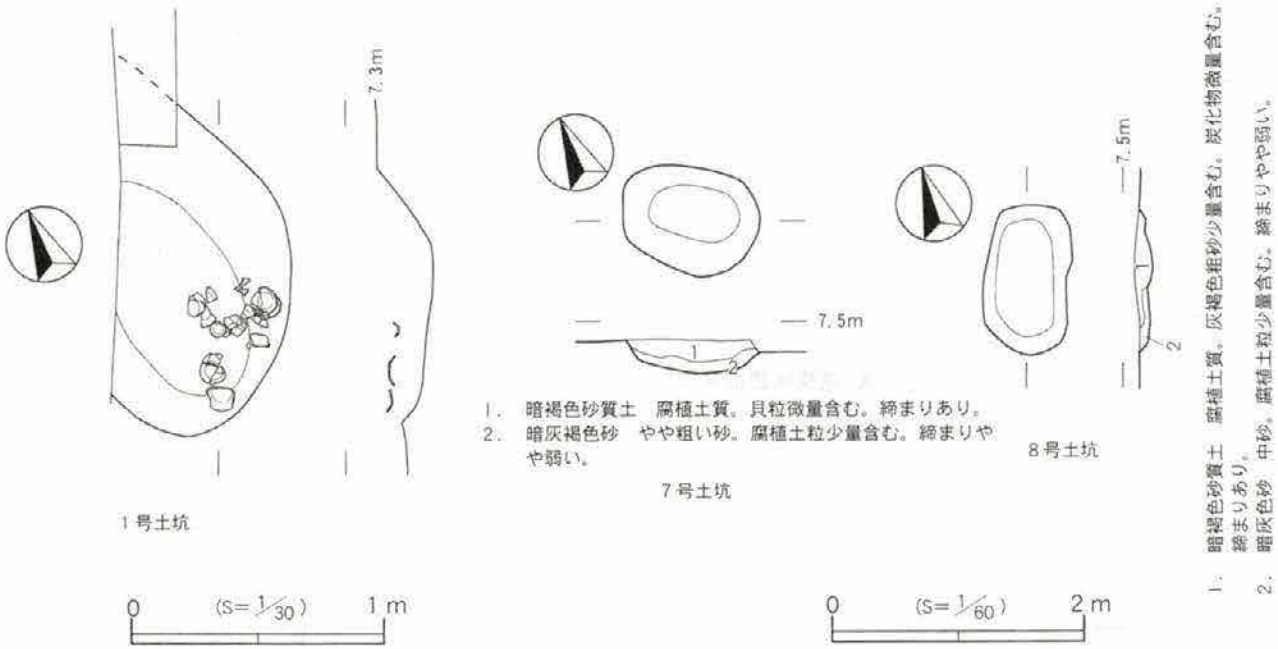


図8 1・7・8号土坑

23は骨角製品。鹿角加工品。箙の装飾具である前角。端部はL字に切り欠かれ、端部付近は穿孔される。その内側には円形の浅い溝が彫り込まれており、中央にも浅い穴が穿たれる。24は骨製品。装飾具と思われる。表面には浅い溝状の飾り彫りが施される。2次的に被熱しており白色を呈す。25は骨角製品。鹿角加工品。リング状の製品で、側面には対称に4ヶ所の穿孔が認められる。側面下部にはスリット状の浅い溝が彫られる。26,27は笄。鹿の中足骨加工品。28は鉄製火打金。上端付近に柄を取り付けるための穴が穿たれる。29は鉄製毛抜。30は鉄製鎹。31～39は鉄製釘。図12-5～9は銭。5は政和通寶。6は天聖元寶。7は元豊通寶。8は皇宋通寶。9は開元通寶。

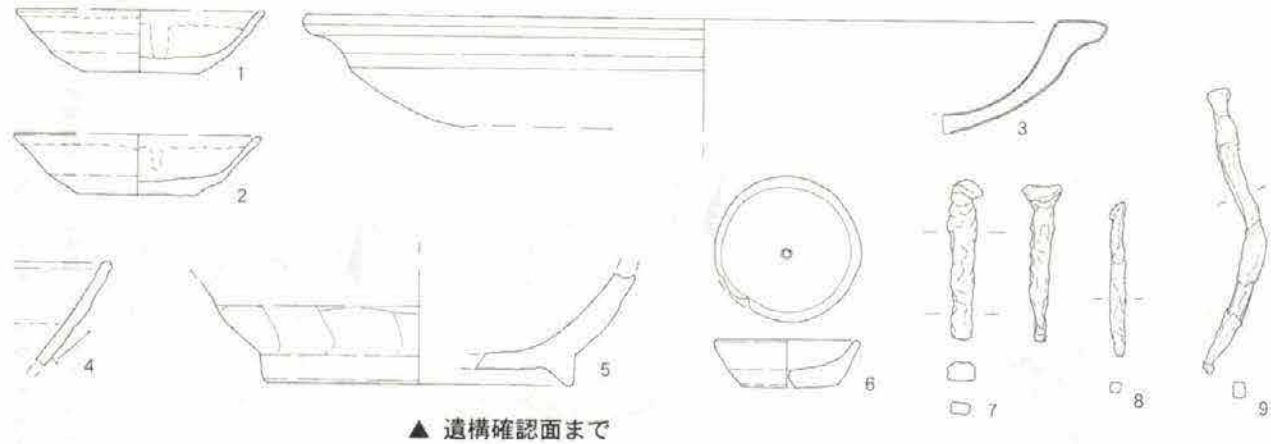
溝

A・B地点の調査区北部を東西に貫く状態で検出された。検出面の標高7.3m。検出面での幅は最大約1.0m、深さは約60cmを測る。調査範囲内での底面標高を比較すると西端付近が6.7m、東端付近が6.6mであり、流下方位は東と思われる。軸方位はN－117°－E。1号方形竪穴建築址と重複しているが新旧関係を平面的に捉えることはできず、重複部分は1号方形竪穴建築址としてまとめて掘り上げてしまった。中央付近から西側にかけて南側壁に段差を伴い、また溝幅も広がることから2時期の重複が考えられるが、土層断面では明瞭に区別することはできなかった。中央東付近の覆土上層から埋葬犬骨を検出している。頭骨は2頭分あり、1頭は頭から尻までが繋がった状態であるものの、もう1頭は頭部から頸部までと、胴部、さらに四肢骨が分離してバラバラに埋められている。1ヶ所にまとまっていること、またこの部分のみ溝幅が広がってしまうことを考えると、溝とは別に掘り込まれた穴に埋葬されたものかもしれないが、その土坑を検出することはできなかった。

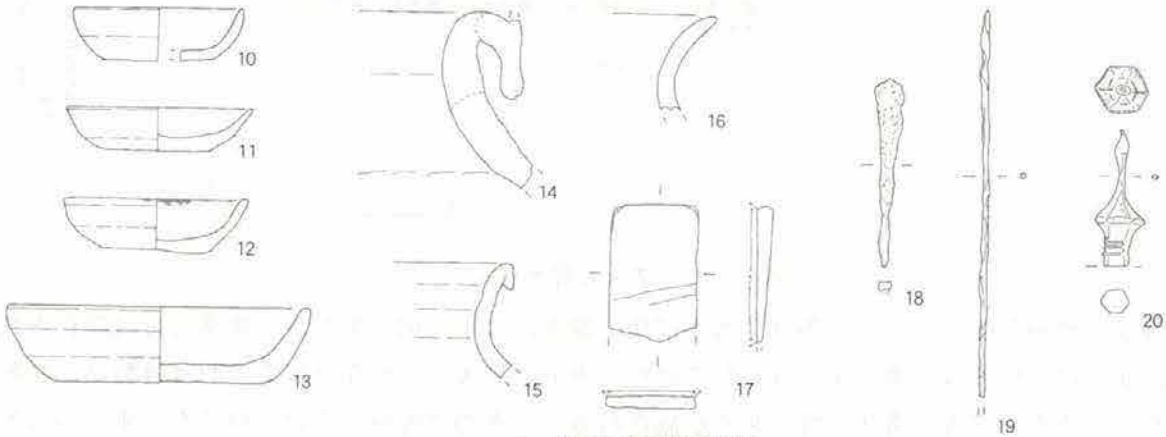
出土遺物は、図11-1～4がロクロ成形かわらけ。5は常滑甕。常滑編年5～6a型式。6は常滑擂鉢。7は瀬戸卸皿。8は土製品。鞴の羽口と思われるが、スラグの付着は認められない。9は土錘。10は硯。鳴滝産。裏面に成形時の擦痕とは別の刃物痕が認められ、砥石として転用した可能性がある。11は鉄製火打金。12～15は鉄製釘。

1号土坑

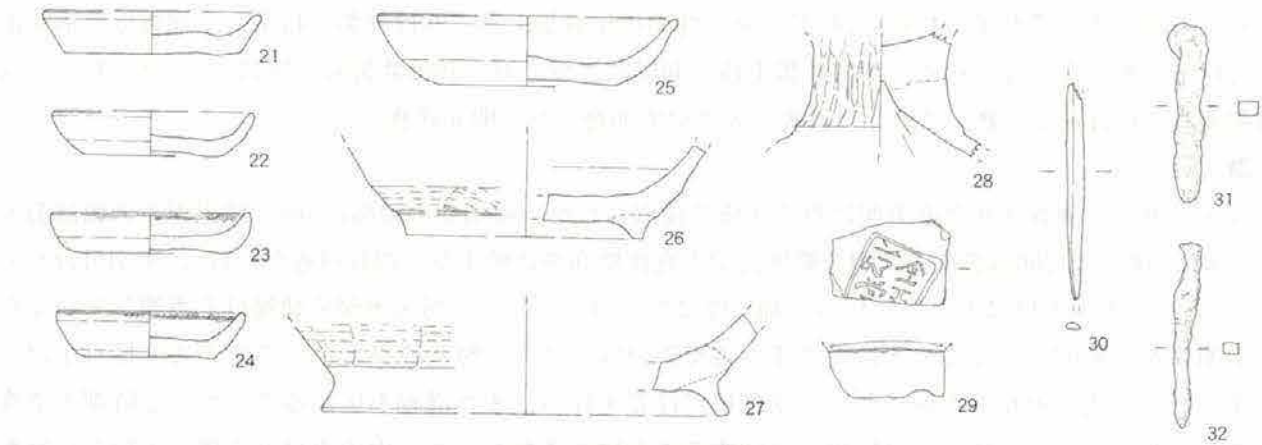
A地点調査区東部南端で検出された。検出面の標高約7.2m。調査区外西に延び、平面形は楕円形に



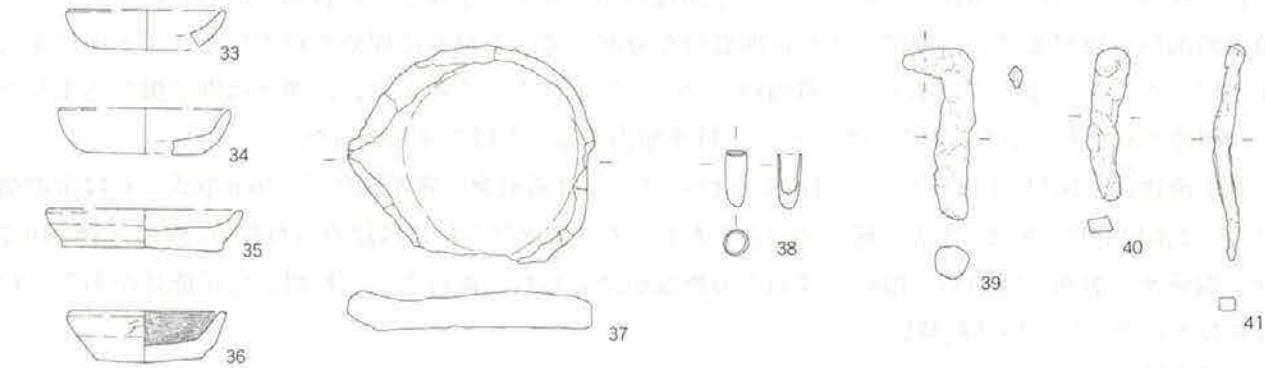
▲ 遺構確認面まで



▲ 1号方形竪穴建築址



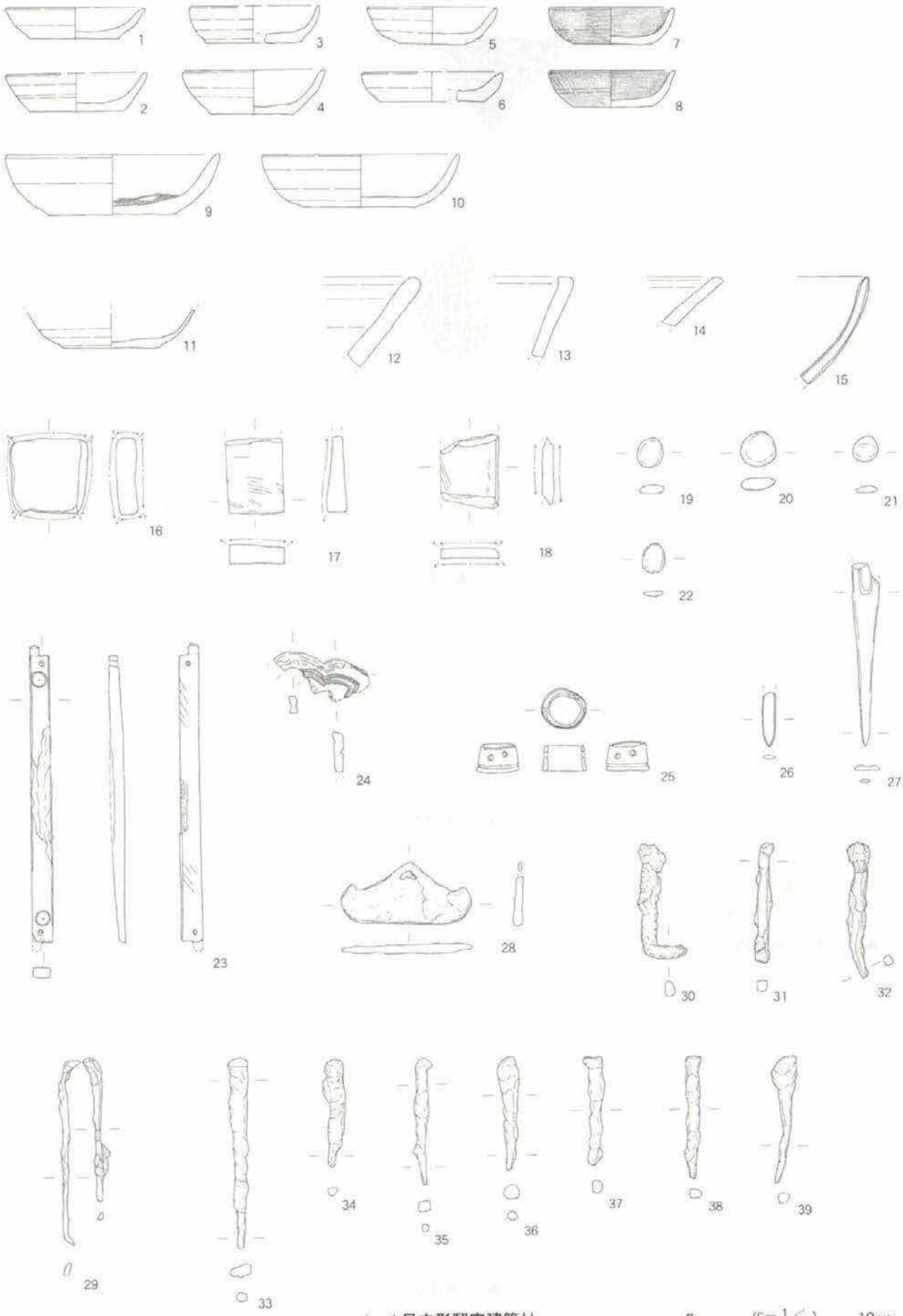
▲ 2号方形竪穴建築址



▲ 3号方形竪穴建築址

0 (S=1/3) 10cm

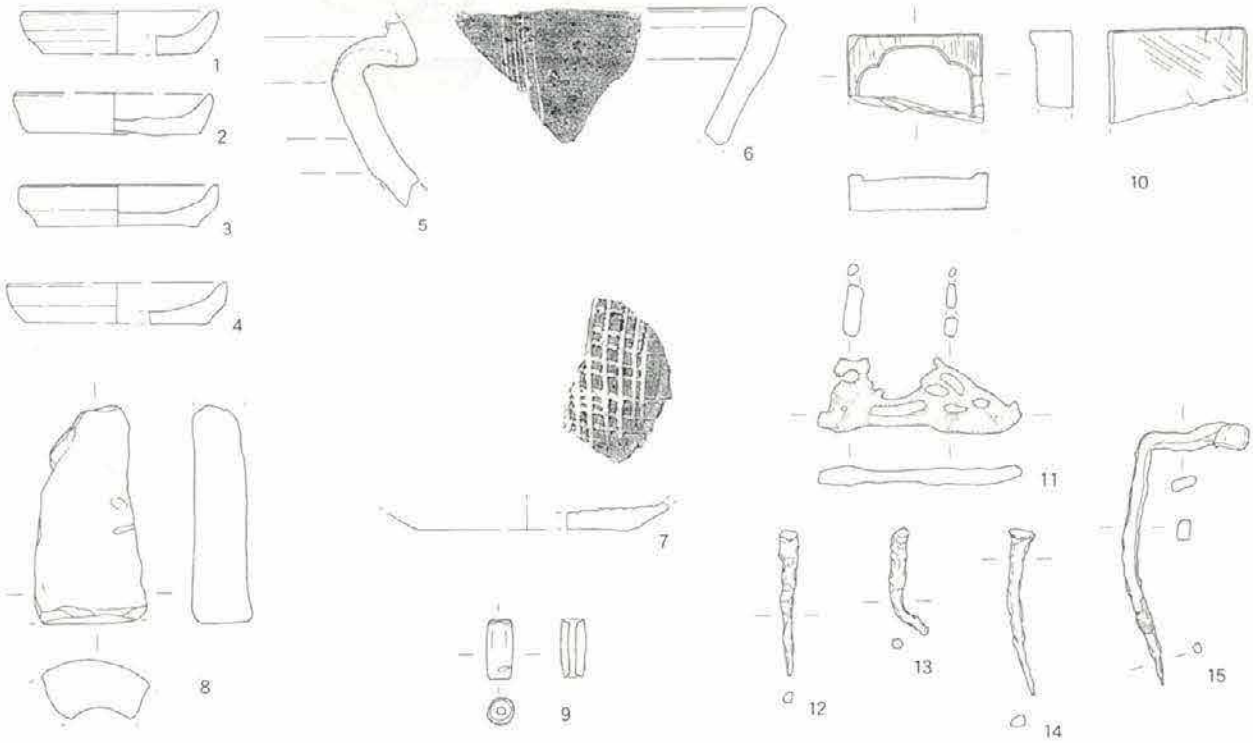
図9　出土遺物(1)



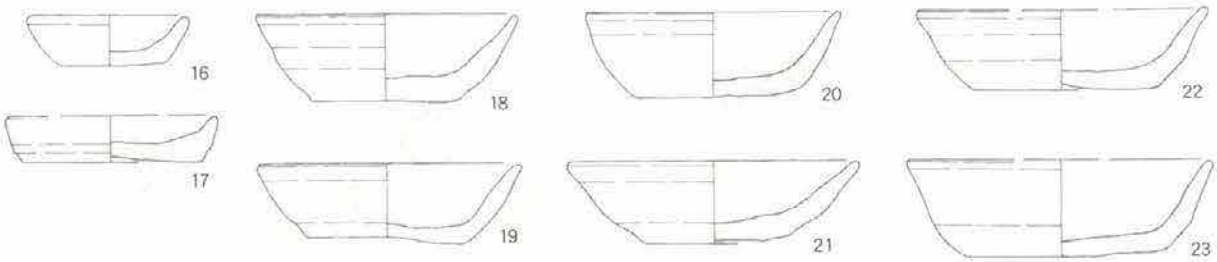
▲ 4号方形竪穴建築址

0 (S=1/3) 10cm

図10 出土遺物(2)



▲ 溝



▲ 1号土坑

▲ 3、4、5号土坑

▲ 14号土坑

0 (S=1/3) 10cm

図11 出土遺物(3)

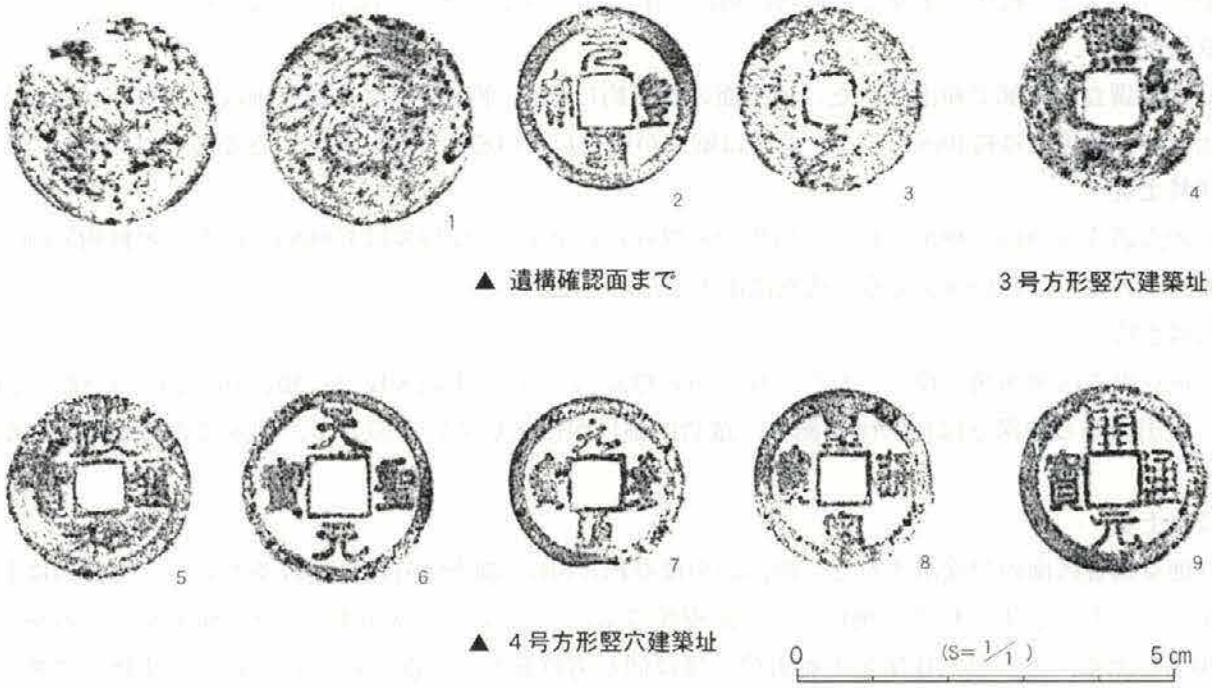


図12　出土遺物(4)

近い不定形を呈するものと思われる。現状での平面規模は長軸1.2m以上×短軸1.0m以上。検出面からの深さ約20cmを測る。覆土上層にかわらけがまとまって廃棄されている。

出土遺物は、図11-16～23がロクロ成形かわらけ。

2号土坑

A地点調査区東部南端で検出された。検出面の標高約7.2m。現状での平面規模は長軸90cm以上×短軸20cm以上。範囲が狭かったため底面まで完掘することができず、検出面からの深さ110cmまで掘削した。調査区外南・西に延び、平面形は不明。土層断面からは近・現代の撹乱坑である可能性が高い。出土遺物は細片がわずかに出土しているのみで、図示できるものはなかった。

3，4，5号土坑

A地点調査区東部南端で検出された。検出面の標高約7.4m。平面的に重複関係を捉えることはできず、当初1つの遺構として掘削を開始したために出土遺物が交錯してしまい、その帰属が不明であるので遺構名を列記することとした。また、3，4号土坑は最大掘削深度の都合上底面まで完掘することができなかった。3号土坑は現状での平面規模長軸150cm以上×短軸90cm以上。検出面からの深さ50cmまで掘削した。4号土坑は現状での平面規模長軸100cm以上×短軸80cm以上。検出面からの深さ50cmまで掘削した。5号土坑は平面規模長軸100cm以上×短軸60cm以上、検出面からの深さ約40cmを測る。

出土遺物は、図11-24がロクロ成形かわらけ。

6号土坑

A地点調査区東部南端で検出された。検出面の標高約7.4m。平面規模長軸100cm以上×短軸40cm以上、検出面からの深さ約10cmを測る。遺物は出土しなかった。

7号土坑

B地点調査区西部で検出された。検出面の標高約7.3m。平面規模は長軸約110cm×短軸約80cm。検出面からの深さは約20cmを測る。遺物は細片が出土しているのみで、図示できるものはなかった。

8号土坑

B地点調査区西部で検出された。検出面の標高約7.4m。平面規模は長軸約120cm×短軸約70cm。検

出面からの深さは約10cmを測る。遺物は細片が出土しているのみで、図示できるものはなかった。

9号土坑

B地点調査区西部で検出された。検出面の標高約7.4m。平面規模は長軸90cm以上×短軸40cm以上。検出面からの深さは約40cmを測る。遺物は細片が出土しているのみで、図示できるものはなかった。

10号土坑

B地点調査区西部で検出された。検出面の標高約7.4m。平面規模は長軸60cm以上×短軸約50cm。検出面からの深さは約10cmを測る。遺物は出土しなかった。

11号土坑

B地点調査区南西角で検出された。検出面の標高約7.3m。平面規模は長軸2.6m以上×短軸0.2m以上。検出面からの深さは約30cmを測る。遺物は細片が出土しているのみで、図示できるものはなかった

12号土坑

B地点調査区南西で検出された。検出面の標高約7.3m。調査区外南に延びるものの、平面形は長方形を呈するものと思われる。現状での平面規模は南北3.2m以上×東西約1.7m。検出面からの深さは約40cmを測る。方形竪穴建築址の軸方位とほぼ同じ方位をもって掘り込まれており、建物に付帯するような施設なのかもしれない。主軸方位はN－26°－E。底面に浅い窪みがいくつか認められるが、本址に伴うものか別遺構となるものかは捉えられなかった。

出土遺物は細片が多く、図示できるものはなかった。

13号土坑

B地点調査区南端部で検出された。検出面の標高約7.3m。平面規模は長軸1.2m以上×短軸約1.0m。検出面からの深さは約20cmを測る。遺物は動物骨のほか細片が出土しているのみで、図示できるものはなかった。

14号土坑

B地点調査区北東角で検出された。検出面の標高7.4m。平面規模は長軸2.4m以上×短軸0.5m以上。範囲が狭かったため底面まで完掘することができず、検出面からの深さ50cmまで掘削した。一部が検出されたのみであるので全容は明らかでないが、西辺が直線的に延びる様相を呈することから、方形竪穴建築址である可能性がある。軸方位はN－24°－Eを測る。

出土遺物は、図11-25が常滑甕。常滑編年6b型式。

表1　遺物法量表(1)

図版	No.	種　　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　　考
遺構確認面まで						
9	1	瀬戸　縁釉小皿	(10.0)	4.5	2.6	
9	2	瀬戸　縁釉小皿	(10.0)	4.6	2.5	
9	3	瀬戸　折縁深皿	(31.6)	—	[4.6]	
9	4	瀬戸　直縁大皿	—	—	[4.3]	
9	5	山茶碗窯　片口鉢	—	12.5	[4.6]	
9	6	土器　かわらけ	6.0	3.8	1.9	内底面中央に穿孔有り
9	7	鉄製品　釘	長さ[6.7]	幅1.2	厚さ0.8	
9	8	鉄製品　釘	長さ[6.5]	幅0.6	厚さ0.5	
9	9	鉄製品　釘	長さ12.0	幅0.8	厚さ0.5	
12	1	銅製品　銭	直径2.8			明治十年　竜一銭銅貨
12	2	銅製品　銭	直径2.4			「元豊通寶」
12	3	銅製品　銭	直径2.4			銘不明
1号方形竪穴建物址						
9	10	土器　かわらけ	6.6	4.2	(2.1)	
9	11	土器　かわらけ	7.5	4.0	1.9	
9	12	土器　かわらけ	7.4	4.4	2.1	口縁部油煙付着
9	13	土器　かわらけ				
9	14	常滑　甕	—	—	[7.1]	
9	15	常滑　壺	—	—	[4.5]	
9	16	土器　甕	—	—	[4.0]	古代土師器
9	17	石製品　砥石	長さ[5.5]	幅3.5	厚さ0.6	淡灰色　鳴滝産　仕上砥
9	18	鉄製品　釘	長さ7.2	幅0.7	厚さ0.4	
9	19	鉄製品　不明	長さ[15.6]	幅0.4	厚さ0.3	
9	20	銅製品　不明	長さ[5.5]	幅2.2	厚さ1.9	断面六角形　燭台先端部か
2号方形竪穴建物址						
9	21	土器　かわらけ	(8.6)	7.1	1.7	
9	22	土器　かわらけ	(7.8)	5.4	1.7	
9	23	土器　かわらけ	(7.8)	6.0	1.6	口縁部油煙付着
9	24	土器　かわらけ	7.2	5.3	1.8	口縁部油煙付着
9	25	土器　かわらけ	(11.8)	7.2	2.8	
9	26	山茶碗窯　片口鉢	—	(9.4)	[3.8]	
9	27	山茶碗窯　片口鉢	—	(16.2)	[5.0]	
9	28	土器　高坏	—	—	[5.1]	
9	29	青磁　盤？	—	—	—	内底面に「金玉満堂」押印有り
9	30	骨製品　不明	長さ[8.8]	幅0.7	厚さ0.4	
9	31	鉄製品　釘	長さ7.3	幅0.9	厚さ0.6	
9	32	鉄製品　釘	長さ7.5	幅0.6	厚さ0.5	
3号方形竪穴建物址						
9	33	土器　かわらけ	(6.3)	(4.1)	(1.5)	
9	34	土器　かわらけ	(6.8)	(4.9)	1.8	
9	35	土器　かわらけ	(7.8)	6.5	1.5	
9	36	土器　かわらけ	6.2	4.3	2.1	内面油煙付着
9	37	土器　円盤	長さ9.9	幅8.7	厚さ1.5	かわらけ質　底部糸切り
9	38	骨製品　不明	長さ2.3	直径1.0		キャップ状
9	39	鉄製品　鎹	長さ[7.0]	幅1.3	厚さ1.3	
9	40	鉄製品　釘	6.2	1.1	0.8	
9	41	鉄製品　釘	8.8	0.7	0.5	
12	4	銅製品　銭	直径2.4			「熙寧元寶」
4号方形竪穴建物址						
10	1	土器　かわらけ	(7.7)	4.9	1.5	
10	2	土器　かわらけ	(7.9)	5.3	2.1	
10	3	土器　かわらけ	(7.2)	(5.3)	2.1	
10	4	土器　かわらけ	(7.8)	4.5	2.5	
10	5	土器　かわらけ	7.2	3.7	2.1	
10	6	土器　かわらけ	(7.8)	(5.8)	1.7	
10	7	土器　かわらけ	(6.9)	4.2	2.1	2次的被熱により器表面暗灰色を呈す
10	8	土器　かわらけ	7.0	4.3	2.1	2次的被熱により器表面暗灰色を呈す
10	9	土器　かわらけ	11.9	6.9	3.4	内底面油煙付着
10	10	土器　かわらけ	(11.0)	6.2	3.0	
10	11	土器　白かわらけ	—	5.5	[2.2]	底部糸切り
10	12	山茶碗窯　片口鉢	—	—	[5.1]	
10	13	常滑　片口鉢	—	—	[4.6]	

表２　遺物法量表(2)

図版	No.	種　　別	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　　考
４号方形竪穴建物址						
10	14	常滑　片口鉢	—	—	[2.7]	
10	15	青磁　碗	—	—	[6.2]	
10	16	常滑　磨常滑	長さ4.4	幅4.1	厚さ1.1	甕片転用品
10	17	石製品　砥石	長さ[4.0]	幅3.1	厚さ1.1	淡灰黄色　鳴滝産　仕上砥
10	18	石製品　砥石	長さ[4.1]	幅3.3	厚さ0.6	淡灰黄色　鳴滝産　仕上砥
10	19	石製品　碁石？	直径1.6	厚さ0.6		白黒斑紋の花崗岩
10	20	石製品　碁石？	直径2.0	厚さ0.8		白黒斑紋の花崗岩
10	21	石製品　碁石	直径1.4	厚さ0.4		黒色粘板岩質
10	22	石製品　碁石	長さ1.8	幅1.2	厚さ0.4	黒色粘板岩質
10	23	骨製品　前角	長さ[17.3]	幅1.1	厚さ0.6	端部付近に穿孔・円形溝彫り有り
10	24	骨製品　装飾具	長さ[5.4]	幅[2.4]	厚さ0.5	蝶形？簪の装飾か
10	25	骨製品　不明	上端径2.0	下端径2.3	高さ1.5	側面計４ヶ所に穿孔、下端部溝彫りあり
10	26	骨製品　笄	長さ[3.2]	幅0.7	厚さ0.3	
10	27	骨製品　笄	長さ[10.4]	幅1.5	厚さ0.3	
10	28	鉄製品　火打金	幅7.3	高さ3.5	厚さ0.6	上部に穿孔有り
10	29	鉄製品　毛抜	長さ10.6	幅0.7	厚さ0.4	
10	30	鉄製品　鏃	長さ[6.4]	幅0.6	厚さ0.6	
10	31	鉄製品　釘	長さ6.6	幅0.9	厚さ0.6	
10	32	鉄製品　釘	長さ7.6	幅0.5	厚さ0.5	
10	33	鉄製品　釘	長さ11.0	幅1.2	厚さ0.6	
10	34	鉄製品　釘	長さ6.0	幅0.5	厚さ0.5	
10	35	鉄製品　釘	長さ7.6	幅0.6	厚さ0.6	
10	36	鉄製品　釘	長さ6.4	幅0.9	厚さ0.8	
10	37	鉄製品　釘	長さ6.0	幅0.9	厚さ0.6	
10	38	鉄製品　釘	長さ6.9	幅0.7	厚さ0.5	
10	39	鉄製品　釘	長さ7.3	幅0.6	厚さ0.6	
12	5	銅製品　銭	直径2.5			「政和通寶」
12	6	銅製品　銭	直径2.5			「天聖元寶」
12	7	銅製品　銭	直径2.3			「元豊通寶」
12	8	銅製品　銭	直径2.4			「皇宋通寶」
2	9	銅製品　銭	直径2.5			「開元通寶」
溝						
11	1	土器　かわらけ	7.7	(6.2)	1.8	
11	2	土器　かわらけ	(7.7)	7.0	1.6	
11	3	土器　かわらけ	7.8	6.4	1.65	
11	4	土器　かわらけ	(8.7)	(7.2)	1.5	
11	5	常滑　甕	—	—	[7.5]	
11	6	常滑　擂鉢	—	—	[5.6]	
11	7	瀬戸　卸皿	—	(8.6)	[1.0]	
11	8	土器　輪羽口	長さ[8.7]	幅[4.6]	厚さ2.3	
11	9	土器　土錘	長さ2.4	直径1.1	孔径0.3	
11	10	石製品　硯	長さ[3.5]	幅5.6	厚さ1.4	鳴滝産　裏面砥石に転用？
11	11	鉄製品　火打金	幅[8.1]	高さ3.0	厚さ0.8	装飾の透かし彫り有り
11	12	鉄製品　釘	長さ5.9	幅0.8	厚さ0.5	
11	13	鉄製品　釘	長さ[4.4]	幅0.6	厚さ0.4	
11	14	鉄製品　釘	長さ6.8	幅0.7	厚さ0.6	
11	15	鉄製品　釘	長さ14.0	幅0.8	厚さ0.7	
１号土坑						
11	16	土器　かわらけ	6.2	4.2	2.0	
11	17	土器　かわらけ	(8.2)	7.1	1.8	
11	18	土器　かわらけ	10.3	5.7	3.5	
11	19	土器　かわらけ	10.4	6.4	3.0	
11	20	土器　かわらけ	12.0	7.0	3.5	
11	21	土器　かわらけ	(11.4)	5.8	3.3	
11	22	土器　かわらけ	(11.6)	7.5	3.2	
11	23	土器　かわらけ	12.1	8.1	3.9	
３・４・５号土坑						
11	24	土器　かわらけ	8.3	5.3	2.6	内面油煙付着
14号土坑						
11	25	常滑　甕	(44.0)	—	[11.5]	

表3　遺物構成表

出土遺物構成（点数）　※かわらけ、骨・貝は別掲。

種別 / 出土位置	常滑		山茶碗窯		瀬戸				渥美	亀山・魚住・珠洲	青磁	青白磁	白磁
	甕・壺類	鉢類	碗・皿類	鉢類	碗・皿類	鉢類	壺・瓶類	小型品					
包含層まで	180	1	2	16	5	3	1	1	1		14		3
1号方形竪穴建物址	121	1	1	13	4	1	2				9	2	
2号方形竪穴建物址	113		1	13		1					7	2	2
3号方形竪穴建物址	98		1	2	2	5	1	2	1	1	4		
4号方形竪穴建物址	76	20	1	25			4		6	1	14	1	6
溝	92	1	2	7					1	1	7	4	1
1号土坑							1		1		1		
2号土坑	2												
3号土坑	4												
3，4，5号土坑	26	1			1	1	1		1		3		1
12号土坑	69		2	13	2		1	1			3	1	1
13号土坑	8						1						1
合計	789	24	10	89	14	11	12	4	11	3	62	10	15

種別 / 出土位置	土器		瓦	古代土器	転用品	鉄製品	銅製品	石製品	骨製品	鉱滓	土塁	貝・骨除く自然遺物	合計
	火鉢	その他											
包含層まで	1	1	4	2		5	4	4		3			251
1号方形竪穴建物址	6	1	2	1		5	1	4					174
2号方形竪穴建物址	2		1	3		2	1	6	1		1		156
3号方形竪穴建物址				2		2	1	2	1	1	1		127
4号方形竪穴建物址	8	1		6	1	12	5	21	5	1		3	217
溝	2	2		6		3		1				1	131
1号土坑						2							5
2号土坑													2
3号土坑													4
3，4，5号土坑						4		1					40
12号土坑	4		2	2				2					103
13号土坑												1	11
合計	23	5	9	22	1	35	12	41	7	5	2	5	1221

出土遺物構成（点数）

種別 / 出土位置	骨	アカガイ	アカニシ	アサリ	アワビ	オキナガイ	カキ	キサゴ	キビ	サザエ	サザエ蓋	サルボウガイ	シッタカ	スガイ
包含層まで	2	1	4	2	1			6		3	3			
1号方形竪穴建物址	4	3	11		2				1					2
2号方形竪穴建物址	1	1			6									
3号方形竪穴建物址		1	9		1		2			4		1		
4号方形竪穴建物址														
溝	1		1											
1号土坑			1							3				
2号土坑	1		1			1								
3号土坑			4									2		
3，4，5号土坑			3		1							2		
12号土坑			2					2					1	
13号土坑														
合計	9	6	36	2	11	1	2	8	1	10	3	5	1	2

種別 / 出土位置	タマキビ	ダンベイキサゴ	朝鮮ハマグリ	朝鮮ハマグリ属	ツノガイ	ツメタガイ	ツメタガイ属	バイガイ	ハマグリ	ハマグリ属	夜光貝	レイシ	不明	合計
包含層まで	2	58	2	38	2	1		7	8				7	147
1号方形竪穴建物址		38	17			4		5	1	33		1		122
2号方形竪穴建物址	3	18	20					3	60				2	114
3号方形竪穴建物址		86	44				3	6						157
4号方形竪穴建物址														0
溝		7				4		1	18					32
1号土坑		3						1	11					19
2号土坑		1							1					5
3号土坑		3						1	5					15
3，4，5号土坑		19						1	7				3	36
12号土坑		45	36		4			3	20		1			114
13号土坑														0
合計	5	278	119	38	6	9	3	28	131	33	1	1	12	761

出土遺物構成（重量）　※単位はg（グラム）

種別 / 出土位置	A大	A中	A小	B大	B中	B小	C大	C中	C小	D大	D小	E	合計
包含層まで				2850		190		20					3060
1号方形竪穴建物址				3990		220	90		90		30		4420
2号方形竪穴建物址				2875		260	25			40			3200
3号方形竪穴建物址				2650		240					10	30	2930
4号方形竪穴建物址				4940		195	210						5345
溝				2740		200	50	20				30	3040
1号土坑				1345		40				30		50	1465
2号土坑				10									10
3号土坑				210									210
3，4，5号土坑				1300		80							1380
12号土坑				1350		40	10		10				1410
13号土坑				80			50						130
合計				24340		1465	435	40	100	70	40	110	26600

第4章　まとめ

出土遺物から、各遺構の年代は大まかに13世紀末～14世紀前半、14世紀中～末葉、15世紀代に区分される。各遺構とも出土遺物の年代観には幅があるが、中世遺物とともに古代遺物も含まれてしまうことを考慮すると、その遺構において使用された遺物ばかりではなく、もともと埋土に混入していた遺物も多分に含まれるものと思われる。これらの古代遺物は細片ばかりで年代を明らかにすることはできないが、今小路西遺跡（図1-2,3地点）で８～９世紀代にわたる官衙遺構などが検出されているほか、周辺の調査地点では掘立柱建物跡や竪穴住居址などの古代遺構が散発的に検出されている。今回の調査では遺構の検出には至らなかったが、本調査地点周辺にまで古代集落が展開していた可能性は高い。13世紀末葉を遡る中世遺物も多く出土しており、13世紀代のどこかで地均しとともに方形竪穴建物群が造営され、それ以前の遺構が失われてしまったことも考えられるだろう。

13世紀末～14世紀前半と思われる遺構には、１・２号方形竪穴建築址が挙げられる。これらは重複関係にあり、１号方形竪穴建築址のほうが新しい時期のものと判断された。１号方形竪穴建築址はその西部が現在の南北道路、中世には今小路と呼ばれたであろう道路にまで延びており、本址の存続時期には今小路は現道路よりも西側を走行していたことが推測される。これに次ぐ14世紀中～末葉の遺構としては、３・４号方形竪穴建築址と東西溝が挙げられる。調査区北側には現在東西道路が走っているが、これとほぼ同じ道筋の道路が中世から存続していれば、検出された東西溝は中世の道路側溝であるかもしれない。由比ヶ浜１丁目151番１地点（図１-７地点）調査区北端部において大型土丹を敷き詰めた東西道路遺構（走行方位Ｎ－97°－Ｅ）が検出されており、これを直線上東に延長すると本調査区北西角の交差点付近に重なる。この道路遺構は幅５ｍ以上を測る比較的規模の大きなもので、幹線道路的な役割を担っていたことが想定され、今小路まで通じていたことが期待できる。本調査地点では道路面は検出されておらず、年代の整合性が現時点では不明であることも含めて一繋がりの道路遺構として捉えるには性急に過ぎるが、その可能性は考えておきたい。本調査地点の東西溝が道路側溝かどうかは今後資料の蓄積を待ちたいが、この溝をもってひとまず区画が限られることは違いない。３・４号方形竪穴建築址の軸方位はこの東西溝とほぼ平行・直交関係にあり、出土遺物からも溝と同時期に存続していた建物であることが推測される。この後、15世紀代の遺構としては、１号土坑が挙げられる。出土遺物はほぼかわらけで占められるものの、他の遺構群から出土しているものに比べて明らかに降る時期の型式を示しており、ほかに同型式のかわらけを含む遺構は検出されなかった。これ以降の遺構としては２号土坑が挙げられるが、前章で述べたとおり近・現代のものと考えられるのでこれを除外すると、ほかには検出されなかった。検出面より上層は明治期の硬貨を含む近・現代盛土層となるが15世紀代の遺物も多く混入しており、１号土坑の存在も含め少なくとも15世紀代まではこの地域での活動が継続していたものと捉えられる。

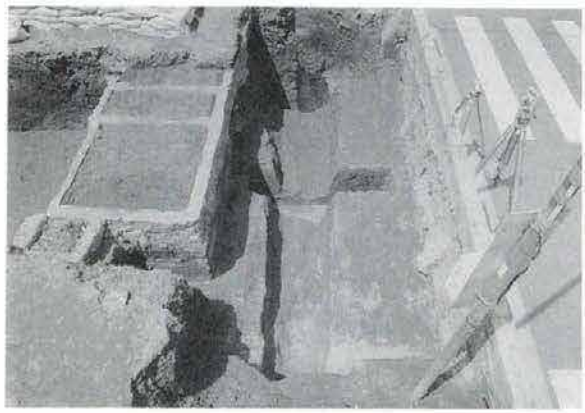
今回は変形した狭い範囲での調査であり掘削深度にも限りがあったため、検出遺構の繋がりや覆土の重複関係など判断に迷うことも多かったが、出土遺物は種類豊富であり本遺跡地での活発な活動を窺わせるものであった。方形竪穴建築址が密集する状況からは町屋的な景観が想像されるが、４号方形竪穴建築址からは武具・馬具に関わる遺物もいくつか出土しており、武家となんらかの関わりをもつ集団の活動域なのかもしれない。今回の調査では古代から13世紀末葉に至るまでの土地利用については不明であり、今後の周辺調査による資料蓄積が待たれる。

▲ 1. A地点 西部全景（南から）

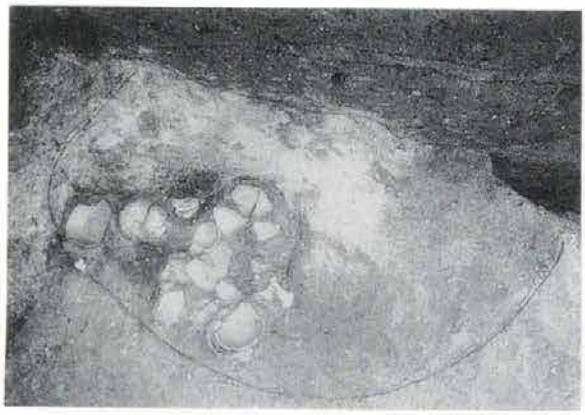
▲ 2. A地点 1号方形竪穴建築址（北から）

▲ 3. A地点 北部全景

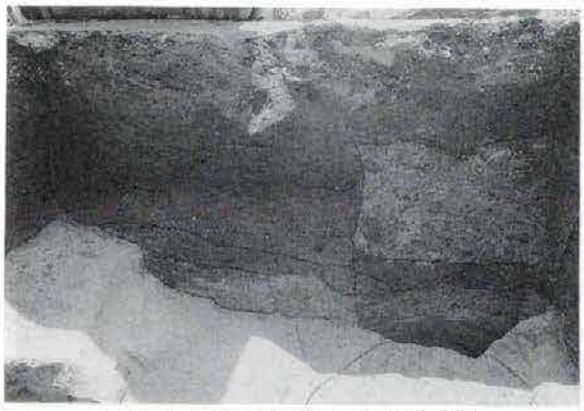
▲ 4. A地点 南東部全景（北から）



▲ 5. A地点 溝（東から）



▲ 6. A地点 1号土坑（東から）

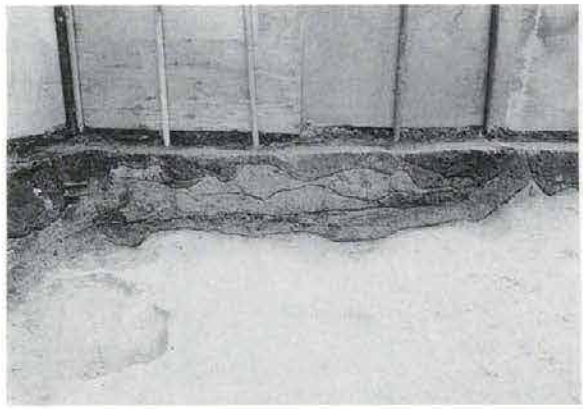


▲ 7. A地点 南東部 調査区南壁

▲ 8. B地点 全景（南から）

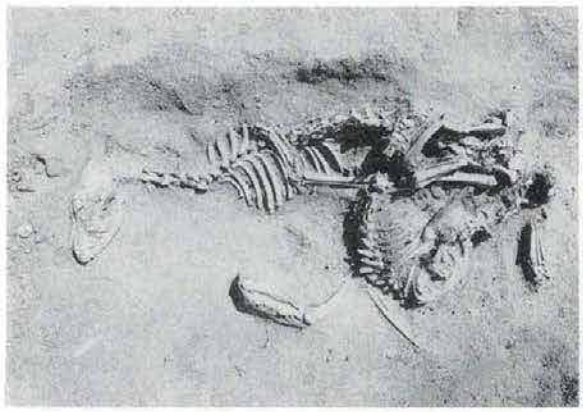
図版2

▲ 1. B地点 4号方形竪穴建築址（南から）



▲ 2. B地点 4号方形竪穴建築址堆積土層（北から）

▲ 3. B地点 溝調査風景（西から）



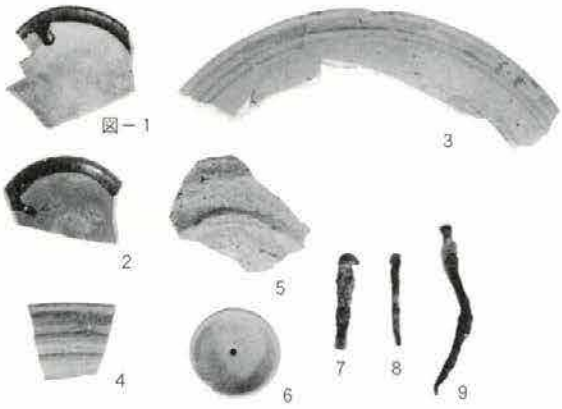
▲ 4. B地点 埋葬犬骨

▲ 5. B地点 溝（西から）

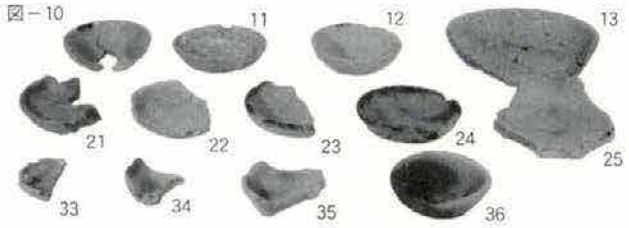
▲ 6. B地点 溝 堆積土層（西から）

▲ 7. B地点 12号土坑（南から）

▲ 8. B地点 14号土坑（北から）



▲ 遺構確認面まで

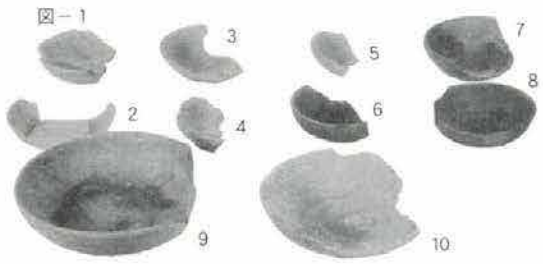


▲ 1～3号方形竪穴建築址

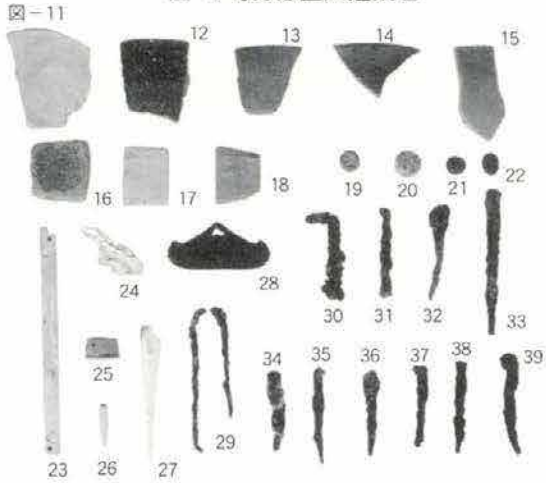
▲ 1号方形竪穴建築址

▲ 2号方形竪穴建築址

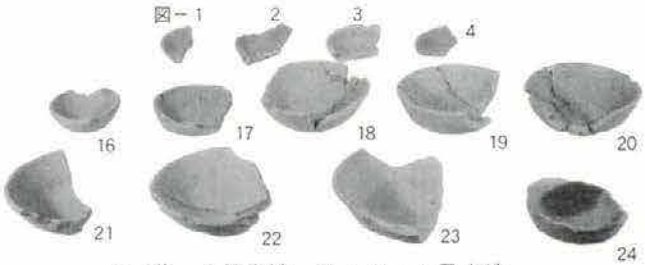
▲ 3号方形竪穴建築址



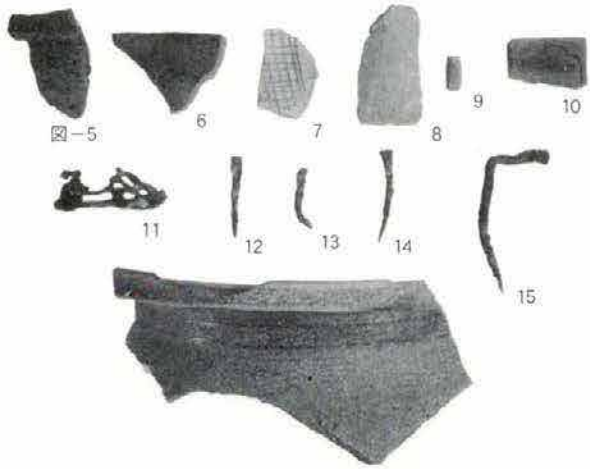
▲ 4号方形竪穴建築址



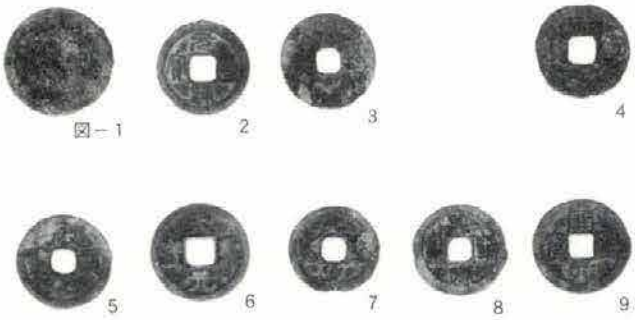
▲ 4号方形竪穴建築址



▲ 溝、1号土坑、3・4・5号土坑



▲ 溝、14号土坑



▲ 出 土 銭

出土遺物

最明寺北亭跡（No. 137）

さいみょうじきたていあと

山ノ内字明月谷295番４外

例　言

1．本報は、最明寺北亭跡（No. 137）内の鎌倉市山ノ内字明月谷295番４外における個人専用住宅の新築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告である。調査面積は15.0㎡
2．発掘調査は、平成17年９月13日から同22日にかけて鎌倉市教育委員会が実施した。
3．現地調査体制は次の通りである。
　　調査担当者　熊谷満
　　調　査　員　伊藤博邦
　　作　業　員　田島道夫、渡辺輝彦
4．本報作成にあたっての資料整理参加者、及び分担は次の通りである。
　　整理参加者　熊谷満、降矢順子、伊藤博邦、岡田慶子、加藤千尋、村松彩美
　　遺物洗浄：伊藤、岡田、加藤
　　遺物分類：降矢
　　遺物実測：岡田
　　遺物トレース：村松
　　遺構図版作成、写真撮影、原稿執筆：熊谷
5．本報の凡例は次の通りである。
　・図版縮尺　遺構図：1/60、遺物図：1/3
　・遺構図版　水糸高は海抜標高値を示す。
　・遺物法量表　　［ ］は復元数値を示す。
6．現地調査から本報作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力を賜った。記して感謝の意を表したい。
　（順不同、敬称略）
　押木弘巳、社団法人鎌倉市シルバー人材センター
7．本調査に関わる出土遺物、図面、写真などの資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

第１章　遺跡の立地と環境 ……168
第２章　調査の経過と方法 ……170
第３章　検出された遺構と遺物 ……172
第４章　まとめ ……174

図 目 次

図１　調査地点周辺 ……168
図２　調査区配置図 ……170
図３　遺構全体図 ……171
図４　第１面以下出土遺物 ……172

表 目 次

表１　遺物構成表・法量表 ……173

図 版 目 次

図版１　１．第１面全景(東から) ……175
２．遺構１（溝)(東から) ……175
３．遺構３，４（建物跡)(東から) ……175
４．第１面以下かわらけ出土状況 ……175
５．第１面以下全景(東から) ……175
６．岩盤面落ち込み(北西から) ……175
７．調査区北壁堆積土層 ……175
８．出土遺物 ……175

第１章　遺跡の立地と環境

本調査地は鎌倉市山ノ内字明月谷295番４外に所在する、最明寺北亭跡（遺跡台帳登録No. 137）の一地点である。調査地点の約180m南東には開基上杉憲方（1335～1394年）、開山密室守厳と伝えられる明月院があり、本遺跡は明月院門前を約30mほど南西に向かったところから北西に入り込む谷戸内に位置している。遺跡名に用いられている最明寺は鎌倉幕府第五代執権北条時頼（1227～1263年）の開基と伝えられ、時頼が山ノ内に別邸を有していたことから、その傍に建てられた持仏堂・禅定室といった趣の

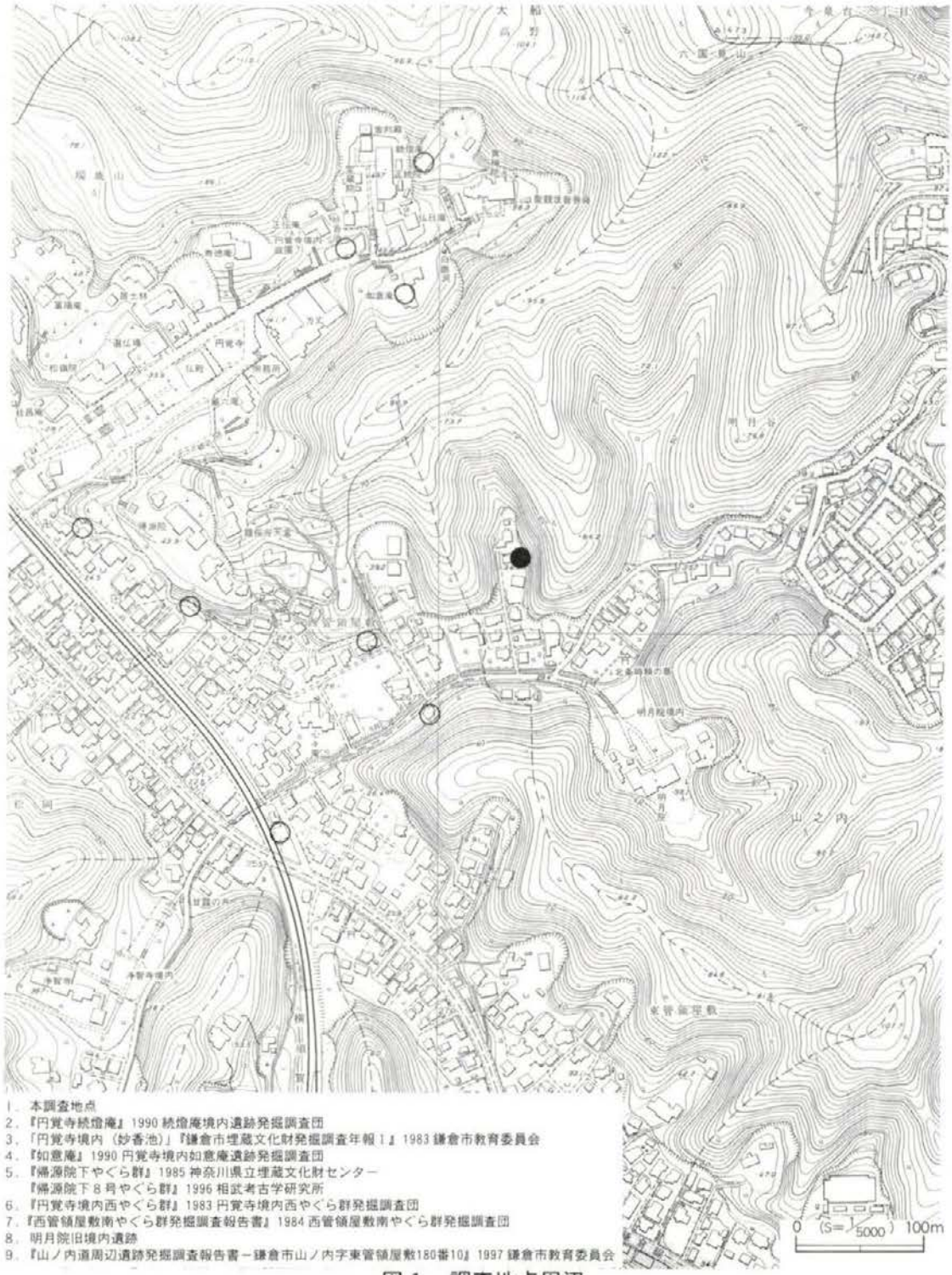


図１　調査地点周辺

ものと考えられている。『吾妻鏡』康元元年（1256）七月十七日の条に、「十七日乙巳、晴、将軍家御参山内最明寺、此精舎建立之後、始御礼仏也、相州可被遂御素懐之由、内々有其沙汰、依思食彼余波歟、殊被刷今日御出之儀、云々」とあり、時頼の出家（同年十一月二十三日）の準備として山ノ内の地に建立され、この日建立後はじめての礼仏式が行われた旨の記述がある。出家後の時頼はここで蹴鞠の会や競馬を催していることが『吾妻鏡』から知れ、臨終に際しては弘長三年（1263）十一月二十二日に、「於最明寺北亭」に没していることが記されている。『瓊玉集』文永元年（1264）の宗尊親王作歌に「最明寺の旧跡なる梅の盛なりける枝を、人の奉りけるを御覧して、心なき物なりなから墨染に、咲すもつらし宿の梅が枝」とあり、時頼没後の翌年にはすでに廃寺となってしまっていることが伺える。元亨三年（1323）から建武二年（1335）作成と推測される『円覚寺境内絵図』には、円覚寺境内に向かって尾根を隔てたすぐ右側の地域に対して「最明寺」という註記がされている。この註記がある平坦地での山ノ内路（現在の県道21号線鎌倉街道）に面しては何も描かれておらず、やや奥まったところで谷戸の入口付近を取り囲むようにL字に折れ曲がった塀と、それに連なって右に延びる土塁か切岸のようなものが描かれている。谷戸には階段が設けられ、登り詰めた谷奥は平坦地となり入口に門、門を入ると六角堂、さらに奥にも庵のような建物が描かれている。もっとも、この絵図が作成された頃には最明寺は廃寺であり、この六角堂が最明寺に関連するものかは判らない。最明寺廃絶後の周辺には、文永五、六年（1268, 1269）頃に禅興寺が開創される。開基は第八代執権北条時宗（1251～1284年）、開山は蘭渓道隆（1213～1278年）。応永元年（1394）頃の状態を描いたと推測されている『明月院絵図』には、境内入口の前方に禅興寺と註記がある。関東十刹の一つに数えられる大規模な寺であったが、いったん廃絶してしまい、永正六年（1509）に再興される。天正九年（1581）頃までは健在であったらしいが再び衰えてしまい、現在は塔頭の一つ明月院が残るのみとなった。この明月院には境内に北条時頼墓と伝えられる宝篋印塔や、本堂裏に上杉憲方墓という宝篋印塔を安置するやぐらがある。また、関東管領山内上杉氏の屋敷が明月院入口付近の東方にあったと伝えられており、現在は明月院門前から山ノ内路に至る谷を挟んで西側を西管領屋敷、東側を東管領屋敷と呼んでいるが、もとは両方を合わせて山内管領屋敷と呼ばれていた。『新編鎌倉志』によれば「明月院の馬場先、東隣の畠や。上杉民部大夫憲顕、源基氏の執事として此所に居す。しかれども山内の管領と云ふ。憲顕の末流を山内上杉と云なり。」というが、詳細な場所は不明である。その後の山ノ内は、16世紀末に徳川領になってから山ノ内村と称された。18世紀初頭の調べで民家は72軒、19世紀後半には154軒があった。この民家154軒の職業内訳は、専業農家41、農間の商25、農間工作人43、染物1、雑業40、鍛工3、医師1を数える。明治前期測量の『第一軍管地方二万分一迅速測図原図』を見ると、『円覚寺境内絵図』の「最明寺」註記のあった辺りと思われる平坦面では、山ノ内路に面して民家らしき建物が建ち並ぶほかは空閑地となっている。明月院から山ノ内路へ至る狭隘な谷では、禅興寺は既に跡形もなく明月院が残るに留まり、門前に11軒ほどの民家らしき建物がみられるものの、本調査地点においては単に谷地形として描かれるのみとなっている。

〔引用・参考文献〕

白井永二『鎌倉事典』1992年　東京堂出版
貫達人・川副武胤『鎌倉廃寺事典』1980年　有隣堂
三浦勝男『鎌倉国宝館図録　第十五集　鎌倉の古絵図Ⅰ』1968年　鎌倉国宝館
鎌倉市教育委員会編『としよりのはなし』1971年　鎌倉市教育委員会

第２章　調査の経過と方法

１．経過と方法

本調査は鎌倉市山ノ内字明月谷295番４外における個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された。現地調査期間は平成17年９月13日から同22日までの約１週間で、調査面積は15㎡である。調査はまず重機により表土を除去することから始められ、その後はすべて人力による作業となった。建築に伴う基礎工事計画が現地表面より深さ180cmまでの地盤改良であることから、調査の最大掘削深度もその深さまでとなった。調査の結果１枚の遺構面が検出され、これを第１面として調査を行った。この後さらに最大掘削深度までの掘り下げを行ったが遺構は検出されず、ここまでの測量・写真撮影などを行いすべての作業を終了した。

２．測量軸の設定

測量に際しては光波測距儀を用い、３級基準点No. 43413（X=－74131.202, Y=－25632.903）、および４級基準点Q100（X=－74126.253, Y=－25618.200）を基に、国土座標軸（日本測地系AREA9）に準じたグリッドを設定した。このため、本報中において使用される方位標はすべて真北を示している。世界測地系第Ⅸ系座標値に換算した数値は図２に付した。

３．堆積土層

本調査地点は丘陵に開析された支谷のひとつに立地しており、現地表の標高は約34.6mを測る。表土は約40cmの厚さをもつ現代の盛土層で、以下は遺構確認面まで約40cmの厚さをもつ遺物包含層となっている。この包含層は数層に分層できるが概ね近似した土質であり、市街地で見られる近世耕作土に似ている。ただし遺物はかわらけ細片を含むのみであり、大まかに中世以降の遺物包含層と捉えた。包含層直下は調査区東半部で岩盤削平面、西半部は土丹地業面となっており、これが第１面となる。西半部第１面以下の堆積土は、最上層が約20cmの厚さをもつ砂岩粒を主体とした地業層であり、以下最大掘削深度までの堆積土は、上層が砂岩粒・塊を多量に含んだ暗褐色土、下層が砂岩塊を主体とする青灰色砂質土となっている。

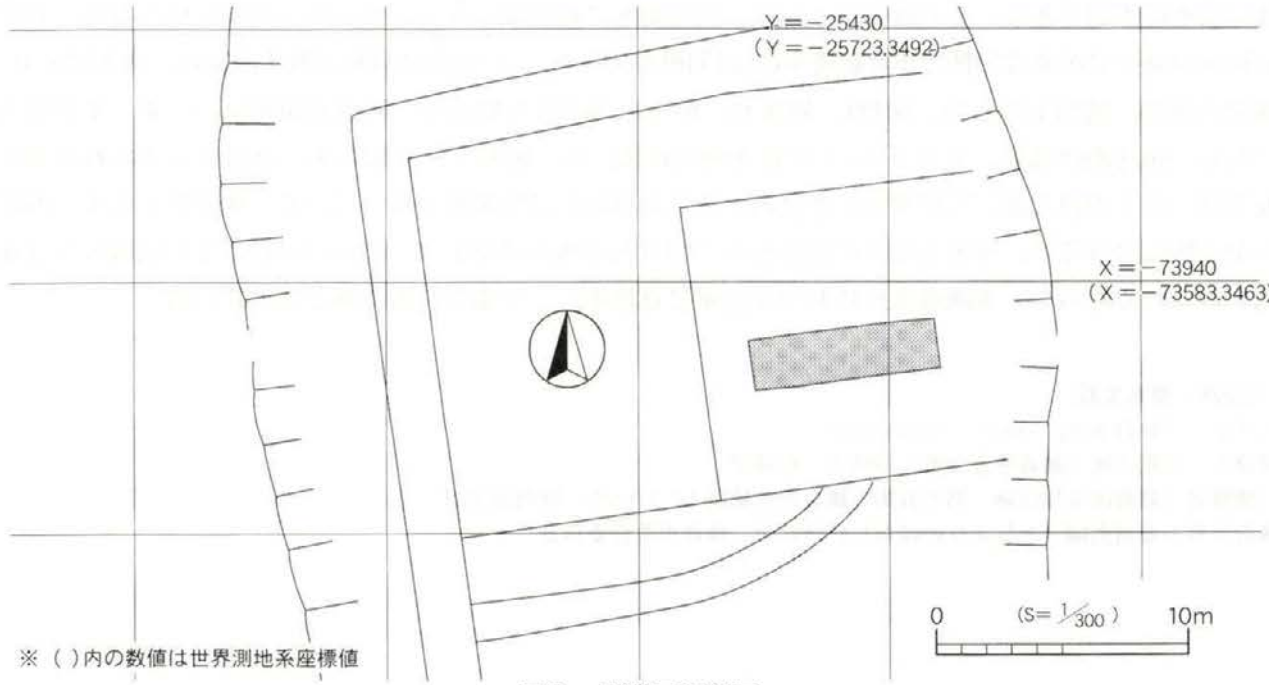
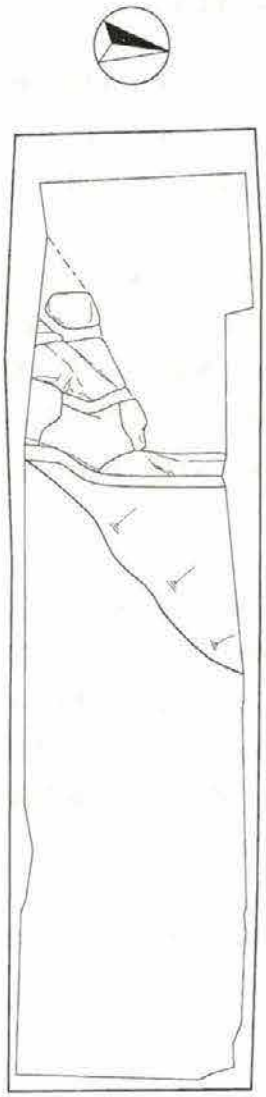
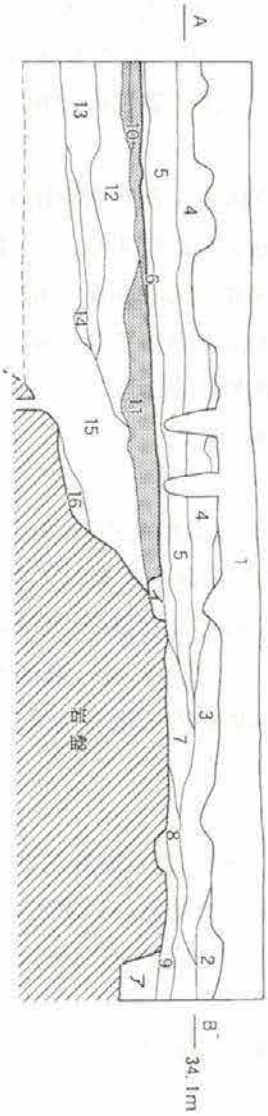
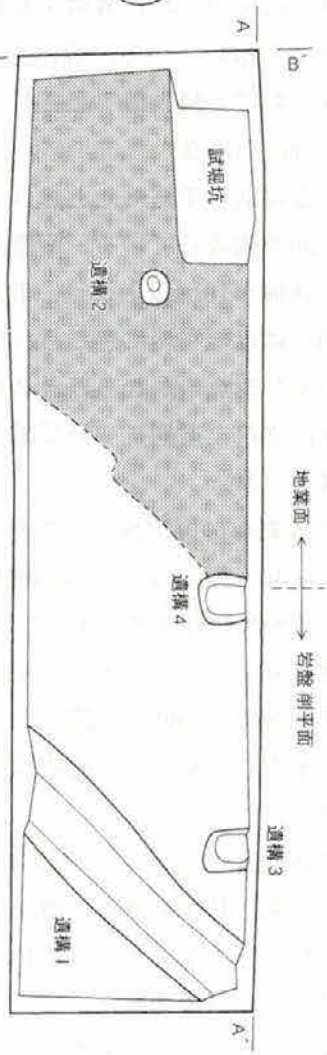


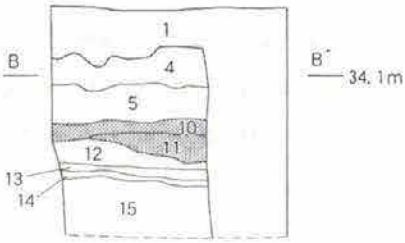
図２　調査区配置図



1面以下







1. 暗　褐　色　土　表土。
2. 暗灰褐色粘質土　炭化物を微量含む。若干砂性を帯びる。水田耕土に似た土。
3. 暗　褐　色　土　土丹粒を微量含む。炭化物を微量含む。
4. 暗　褐　色　土　土丹粒をやや多く含む。砂岩粒を少量含む。
5. 暗　褐　色　土　土丹粒をやや多く含む。 砂岩粒を少量含む。4層より色調やや明るい。
6. 暗　褐　色　土　砂岩粒を少量含む。やや砂性を帯びる。
7. 暗灰褐色土　灰色粘質土混入。土丹粒を微量含む。
8. 灰褐色粘質土　砂岩粒を少量含む。褐鉄を微量含む。
9. 灰　色　粘　質　土　褐鉄を少量含む。やや砂性を帯びる。
10. 黄褐色砂質土　砂岩粒・小塊を密に含む地業層。しまり有り。
11. 暗褐色粘質土　砂岩粒・小塊を多く含む地業層。しまり有り。
12. 暗褐色粘質土　砂岩粒・小塊を少量含む。しまり有り。かわらけ片を少量含む。
13. 青灰色品質土　砂岩粒・小塊を主体とし、暗褐色粘質土少量混入。かわらけ片を微量含む。
14. 暗褐色粘質土　砂岩粒・小塊を少量含む。しまり有り。
15. 青灰色砂質土　砂岩塊を主体とする。無遺物層。
16. 黒褐色粘質土　砂岩塊を微量含む。しまり有り。

ア. 黒褐色粘質土　砂岩粒・小塊を少量含む。しまりやや弱い。遺構1（溝）覆土。
イ. 暗　褐　色　土　砂岩粒を微量に含む。しまりやや有り。遺構4（柱穴）覆土。

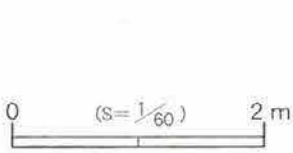


図3　遺構全体図

第３章　検出された遺構と遺物

本章では検出された遺構・遺物について説明を加える。文中での軸方位は、国土座標に準じた真北からの角度で示している。規模を表す[ ]で括られた数値は、調査区外に延びる等の理由から、確認できた範囲における最大値で記されている。出土遺物の分類・法量に関しては表１を参照頂きたい。

［第１面］（図３）

第１面は前章で述べたとおり、調査区東半部が岩盤削平面となり、西半部は地業面となって一繋がりの生活面を構成している。面標高を細かく比較すると、調査区東端中央が約33.88m、西端中央が約33.75mで西側が10cm以上低く、北端中央が約33.90m、南端中央が33.84mで南側が６cmほど低いものの、全体的にはほぼ平坦に感じられた。本面において溝１条、柱穴３口を検出した。また、第１面までの包含層中より28点のかわらけと２点の鉄製釘を出土しているが、いずれも細片のため図示しなかった。以下、検出された遺構について説明を加える。

遺構１（溝）

調査区東端付近で検出された。検出面の標高約33.9m。規模は幅約70cm×深さ約40cmを測り、軸方位はＮ－36°－Ｅを測る。岩盤削平面から掘り込まれており、断面形は逆台形を呈する。立ち上がりは西側がやや緩い印象もあるが、西岸の肩部は岩盤面の剥落が見受けられることから、開削時にはほぼ東西対称の立ち上がりを有していたものと思われる。底面標高は北端部が約33.52m、南端部が約33.49mと南側が約３cm低い。排水としては地形的に南方へ流すほかないものと考えるが、調査範囲内での高低差は小さい。本址から遺物は出土しなかった。

遺構２（柱穴）

調査区西部中央付近で検出された。検出面の標高約33.7m。平面規模は東西28cm×南北22cm、検出面からの深さ45cmを測る。断面形はＶ字形に近いＵ字形を呈する先細りの小穴であり、あるいは植物根かもしれない。本址からはかわらけ６点を出土しているが、いずれも細片のため図示しなかった。

遺構３、４（建物跡）

調査区北端中央から東側にかけ調査区北壁にかかる状態で、関連するものと思われる柱穴２口を検出した。検出面の標高約33.9m。遺構３は岩盤削平面から掘り込まれ、平面規模は東西32cm×南北[36]cm、深さ約13cmを測る。遺構４は岩盤削平面と地業面のちょうど境目に掘り込まれ、平面規模は東西40cm×南北[38]cm、深さ約13cmを測る。柱穴２口のみではあるが、平面形・深さなど掘り方の様子が近似すること、柱穴間が芯々で約200cmと１間幅をもつことから、調査区外北へ延びる掘立柱建物の可能

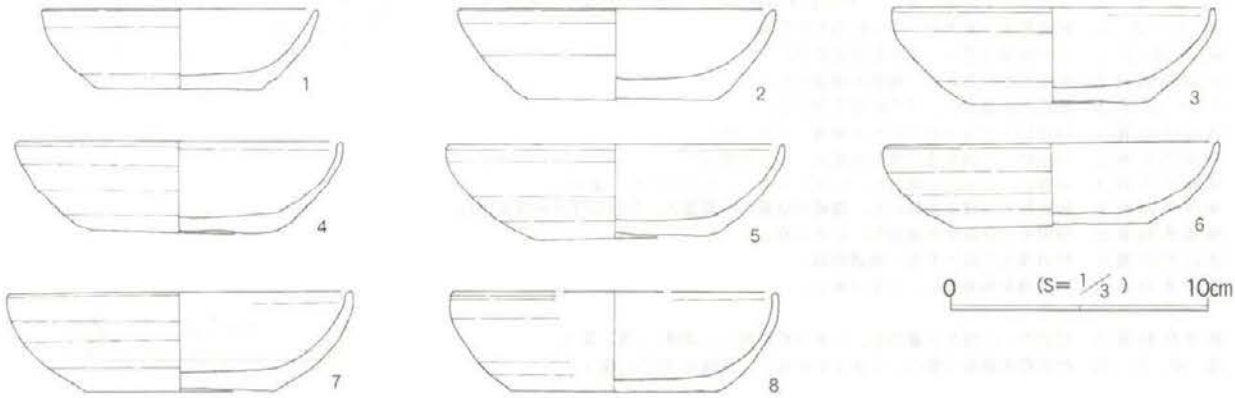


図４　第１面以下出土遺物

表１　遺物構成表・法量表

出土遺物構成表

出土位置	種別	分類	点数	重量(g)
包含層中	かわらけ	B大	18	67.7
包含層中	かわらけ	C大	10	20.6
包含層中	鉄製品	釘	2	—
遺構2	かわらけ	B大	5	22.5
遺構2	かわらけ	C大	1	17.7
第1面地業層中	かわらけ	B大	104	387
第1面地業層中	土器	—	1	2.5
第1面以下埋土上層	かわらけ	B大	4	178.9
第1面以下埋土上層	かわらけ	C中	1	97.7
第1面以下埋土上層	かわらけ	C大	24	824.1
第1面以下埋土上層	カーボン	—	2	—
合計			172	1618.7

出土遺物法量表

図4　第1面以下出土遺物

No.	種別	分類	口径	底径	器高	重量(g)
1	かわらけ	C中	10.7	6.6	3.0	97.7
2	かわらけ	B大	12.2	7.5	3.5	164.3
3	かわらけ	C大	12.4	7.6	3.8	140.2
4	かわらけ	C大	12.7	7.7	3.5	137.9
5	かわらけ	C大	13.2	7.0	3.5	132.7
6	かわらけ	C大	13.0	7.5	3.4	132.3
7	かわらけ	C大	13.3	7.4	3.9	123.7
8	かわらけ	C大	[12.8]	8.3	3.9	75.6

※かわらけ分類について
先頭のアルファベットは成形・器形を示し、Aを胎土粉質で口縁部外反する戦国期頃のロクロ糸切り成形、Cを焼成良好な薄手造りのロクロ糸切り成形、Bをそれ以外のロクロ糸切り成形、Dを手づくね成形、Eを特殊器形など含めその他とした。
後部の漢字は器種を示し、大皿を大、中皿を中、小皿を小とした。

性を考えたい。南北に主軸をとった場合の方位はN－9°－Wを測る。遺構３・４とも遺物は出土しなかった。

［第１面以下］（図３，４）

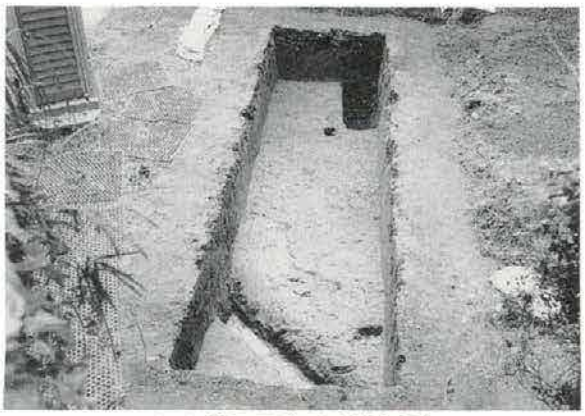
第１面西半部の地業層を掘り下げたところ、岩盤面が急傾斜する谷地形となっていた。標高32.8mを測る最大掘削深度までの間に生活面や遺構は検出されなかった。堆積土は大まかに上層・下層に分類され、上層は図３の10～14層、下層は15,16層である。上層は遺存状況の良好なかわらけも出土しており、人為的な埋め立てによるものであることが判った。下層は砂岩塊を主体とする無遺物層が堆積しており、人為的なものか判断し難い。遺物は地業層中よりかわらけ107点、弥生～古代土器１点、炭化物片２点を出土している。埋土上層からはかわらけ29点を出土しており、かわらけ以外の遺物は出土しなかった。地業層中より出土したものは細片のため図示しておらず、図４－１～８はすべて埋土上層から出土したものである。このうち、１，２は完形、５，６は正位に重ねられた状態で出土している。第１面以下では掘り込みを伴う遺構が確認されず、これらの遺物は谷の埋め立てを行った際に投げ込まれた、あるいは置かれたものと捉えている。

第4章　まとめ

本調査で検出された遺構は、岩盤を削平し谷を埋め立てて造り上げられた平坦面に立地している。中世期の土木工事としては多額の費用を要するものと思われ、武家・寺社など階級による事業であることが推測される。ただし、現在残る平坦地は東西幅20mほどのさほど広くないものでもあり、検出された建物跡については小規模のものを想定するのが穏当と思われる。出土遺物に関しては少量な上にほぼかわらけで占められており詳細な年代を比定することが難しいが、第１面以下の堆積土中より出土したかわらけは14世紀中葉を前後する頃の所産である印象が強い。検出された遺構が地業の後直ちに造られたものであったなら、その造営時期は最明寺の廃絶後・禅興寺の存続期間中を考えたい。ただし、遺構１（溝）・遺構３，４（建物跡）とも遺物は出土しておらず、これより降る時代のものであることも考え得る。また、溝の軸方位と建物跡の主軸方位は平行・直交関係になく、約45°違う。溝は谷の落ち込む方位、つまり自然地形に沿って作られ、建物跡は調査地点西側を登ってくる現道路と平行・直交関係にある。この溝が区画を示す目的で作られたものかどうかも定かでないが、溝と建物跡の存続時期が異なることも想定され、この谷戸内で大きな地割の改変が行われている可能性も考えられる。

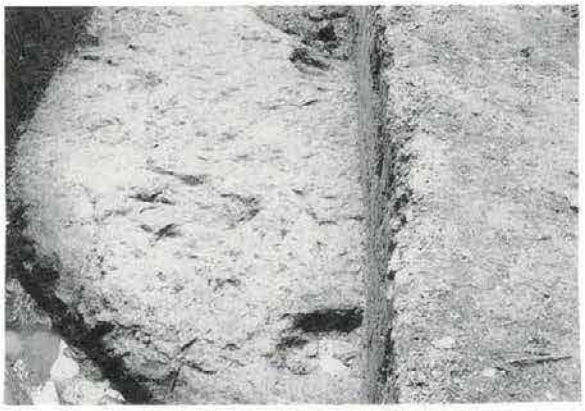
中世地業層中への混入ではあるが、中世を遡る土器細片を１点出土している。胎土などの印象としては弥生後期～古墳前期頃のものに似ているが、器種はおろか部位すら判らないほどの細片であるため年代についての明言は避けたい。本遺跡周辺では現在の北鎌倉女子学園辺りの台山藤源治遺跡などにおいて弥生時代後期頃の集落跡も検出されており、本遺跡の立地する丘陵にも中世を遡る遺構群の存在する可能性は考えられる。今回の調査では中世期の大規模な削平・埋め立てが行われておりそれ以前の遺構は検出されなかったが、今後周辺において調査する場合には留意する必要があるだろう。

今回は調査範囲が狭く、わずかに検出された遺構・遺物から遺跡の性格を判断することはできなかったが、周辺における発掘調査資料が増えてくれば本遺跡の性格も関連付けることができるようになるかもしれない。



▲ 1. 第 1 面全景（東から）

▲ 2. 遺構 1（溝）（東から）

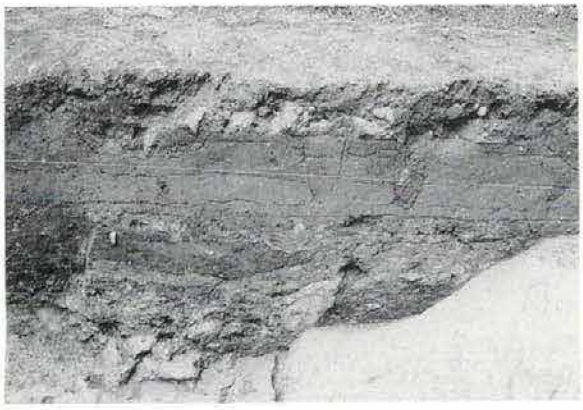


▲ 3. 遺構 3、4（建物跡）（東から）

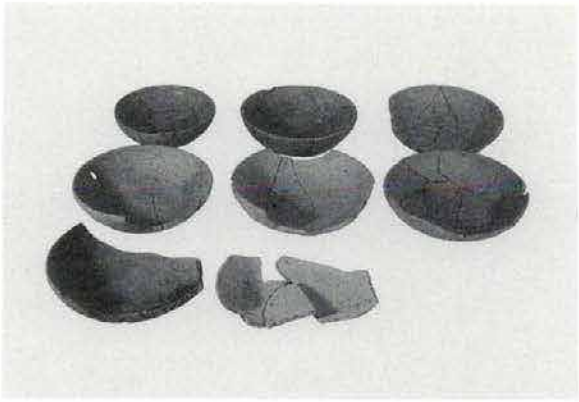
▲ 4. 第 1 面以下 かわらけ出土状況

▲ 5. 第 1 面以下 全景（東から）

▲ 6. 岩盤面 落ち込み（北西から）



▲ 7. 調査区北壁堆積土層



▲ 8. 出土遺物

天神山城（No. 384）

てんじんやまじょう

山崎字宮廻689番１

例　言

1．本報は、天神山城遺跡（神奈川県遺跡台帳No.384）内・鎌倉市山崎字宮廻689番1における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2．発掘調査は平成16年6月1日から6月17日まで実施した。調査面積は34.4㎡である。
3．調査体制は以下のとおりである。
　調査担当者：齊木秀雄
　調　査　員：三ツ橋正夫、小野笑美
　調査協力機関：社団法人鎌倉市シルバー人材センター
4．出土遺物の整理・報告書の作成は以下の分担で行った。
　執筆・編集：三ツ橋正夫、降矢順子
　遺物整理：鯉渕義紀、三浦恵、村松彩美
5．本報告に掲載した遺構・遺物の写真は三ツ橋が撮影した。

本 文 目 次

第１章　遺跡の概観 ……180
　第１節　調査地点の位置と環境 ……180
　第２節　調査経緯と経過 ……180
　第３節　調査方法 ……180
　第４節　堆積土層(図３) ……180
第２章　調査結果 ……184
　第１節　検出された遺構 ……184
　第２節　発見された遺物 ……185
第３章　まとめ ……188

図・表目次

図１　周辺の遺跡 ……181
図２　調査区配置図 ……182
図３　堆積土層 ……183
図４　検出遺構 ……184
図５　確認調査出土遺物 ……185
図６　包含層出土遺物 ……186
表１　出土遺物観察表 ……187

図 版 目 次

図版１ ……189
　１．１面全景(南から)、２．岩盤と崩落岩(北から)、３．北壁セクション(南から)、４．２面全景(南から)、
　５．Ｅ－２区遺物出土状況(北から)、６．Ｂ－２区遺物出土状況(西から)
図版２　出土遺物 ……190

第１章　遺跡の概観

第１節　調査地点の位置と環境

本遺跡は鎌倉市の北西部に位置しJR大船駅から南西約1.7kmの地点に当たる山崎字宮廻689番１に所在する。本址は丘陵地帯の北西先端部に当たる標高約63mの天神山の南西麓にあたり標高11.5mを測る。

『鎌倉市史』によれば天神山山上で旧くは縄文早期の遺物が採集されたと記されている。また、近年の調査では本址から東へ170mにある天神山城遺跡（山崎字宮廻760番地点）(1) で奈良時代の竪穴住居址４軒、古墳時代後期の竪穴住居址２軒が検出され、古墳時代前期の土器集中３箇所も確認されている。東へ600mの山崎・水道山戸ヶ崎遺跡 (2) では３次にわたる調査が行われており、第１・２次調査では弥生時代から古墳時代の竪穴住居址32軒、第３次調査では古墳時代中期から後期にかけての４軒以上と見られる竪穴住居址が検出されている。山崎・水道山戸ヶ崎遺跡の北側に隣接する水道山遺跡№20（台四丁目1169番１地点）(3) では遺構は検出されていないが縄文時代から平安時代までの遺物が出土しており特に弥生時代中期後半～古墳時代にわたり豊富な遺物が出土している。遺跡の南西約500mには山崎横穴墓群 (4)、約600mには垣根谷横穴墓群 (5) が確認されており、山崎横穴墓群から東へ150mの倉久保遺跡（№226）(6) では、古墳時代前期の住居址4軒、奈良時代前半の住居址1軒が検出されている。天神山北東山裾では古墳時代後期の祭祀関連と考えられる多量の遺物も採集されている。また、本址より南南東120mの天神山南西側山麓部では1993年に山崎天神山遺跡 (7) の調査が行われているが、少量の土師器片が検出されたにとどまり遺構は検出されていない。

＜引用・参考文献＞
齊木秀雄　1980「山崎・水道山戸ヶ崎遺跡」『鎌倉考古3』鎌倉考古学研究所
齊木秀雄　1981「鎌倉市内の発掘調査速報　山崎・水道山戸ヶ崎遺跡」『鎌倉考古５』鎌倉考古学研究所
菊川英政　1995「天神山採集の古墳時代後期土器」『鎌倉考古33』鎌倉考古学研究所
継　実　1996「倉久保遺跡（№226）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12　鎌倉市教育委員会
松山敬一郎　1997「天神山城（№384）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』13　鎌倉市教育委員会
若松美智子　2002「水道山遺跡（№20）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』18　鎌倉市教育委員会

第２節　調査経緯と経過

今回の調査は神奈川県埋蔵文化財包蔵地（№384）の範囲内の個人住宅の建設に伴って行われた確認調査の結果、弥生時代終末～平安時代の遺物の存在が確認されたため、本格調査に至り、平成17年６月１日～17日にかけて国庫補助事業埋蔵文化財発掘調査が行われた。調査面積は34.4㎡である。

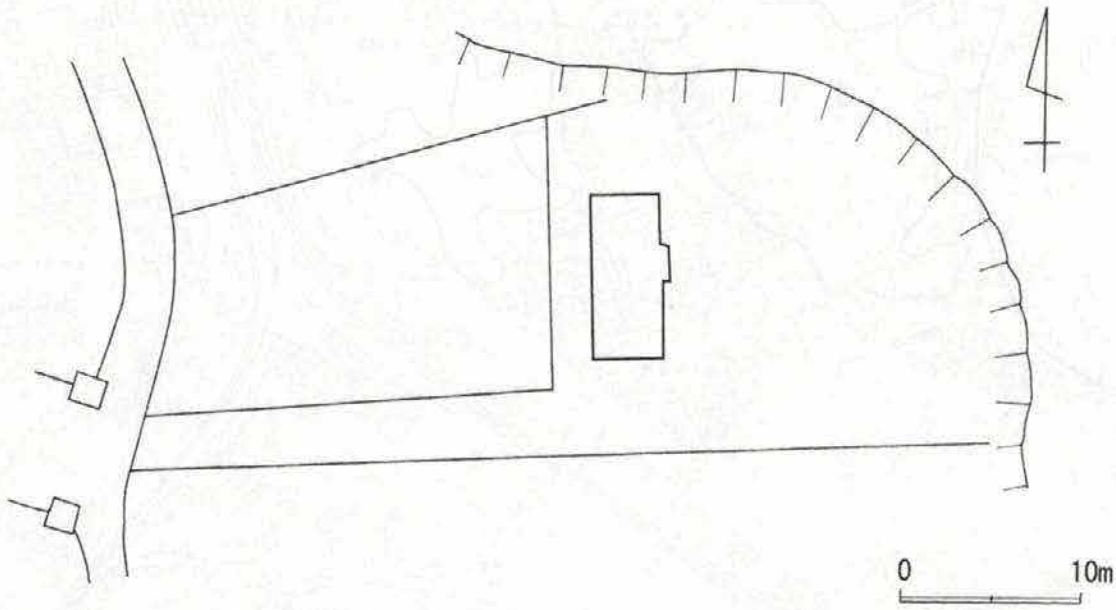
第３節　調査方法

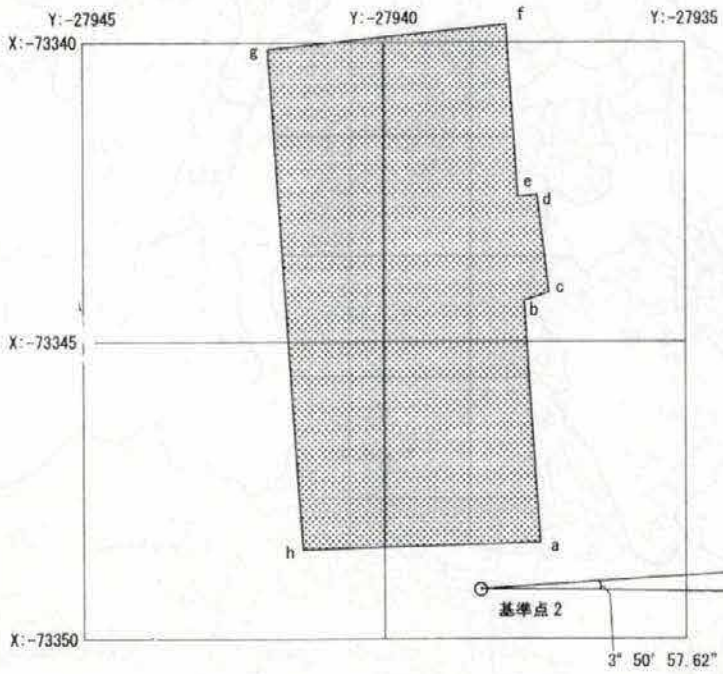
調査方法は盛り土を重機により掘削し、調査区の形状に照らして１mメッシュを設定するべく長軸にアルファベットを、短軸に算用数字を与えた。その後人力により遺構を確認しながら遺物採取を行った。トラバース測量による基準点移動作業から得た基準点２の国土座標はX－73349.102、Y－27938.350である。方位は日本測地系に基づいて真北を示し、調査区の南北軸は西へ 3° 50′ 58″ 傾いている。

第４節　堆積土層（図３）

384
(1)
(2)
(3)
(4)
(5)
(6)
(7)
385
359
360
361
362
351
209
430
226
237
238
218
350
378
432
285
20
429
63

図 1. 周辺の遺跡



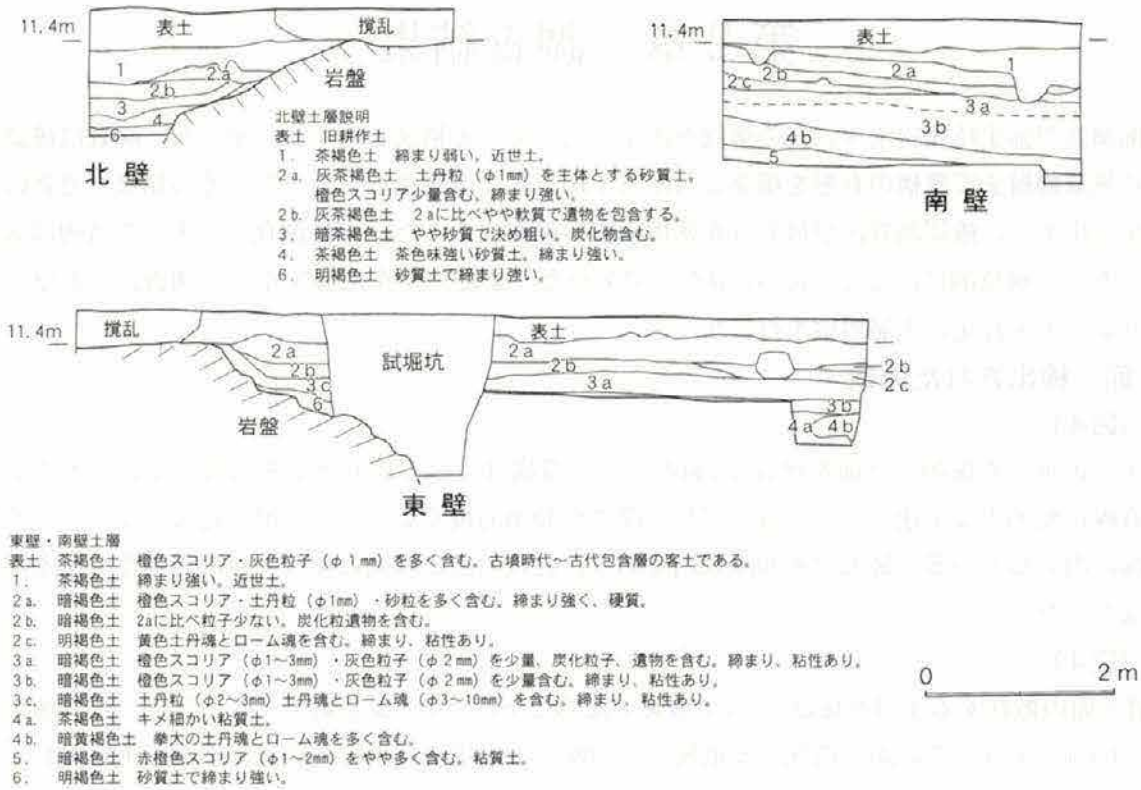


調査用基準点国家座標値（第Ⅸ系）

基準点 1
(X:-73348.761, Y:-27933.282)
基準点 2
(X:-73349.102, Y:-27938.350)

測点	X座標	Y座標
a	-73348.245	-27937.472
b	-73344.226	-27937.627
c	-73344.138	-27937.399
d	-73342.490	-27937.475
e	-73342.412	-27937.758
f	-73339.730	-27938.016
g	-73340.019	-27941.956
h	-73348.424	-27941.425

図２．調査区配置図



北壁土層説明
表土　旧耕作土
1.　茶褐色土　締まり弱い。近世土。
2a.　灰茶褐色土　土丹粒（φ1mm）を主体とする砂質土。橙色スコリア少量含む。締まり強い。
2b.　灰茶褐色土　2aに比べやや軟質で遺物を包含する。
3.　暗茶褐色土　やや砂質で決め粗い。炭化物含む。
4.　茶褐色土　茶色味強い砂質土。締まり強い。
6.　明褐色土　砂質土で締まり強い。

東壁・南壁土層
表土　茶褐色土　橙色スコリア・灰色粒子（φ1mm）を多く含む。古墳時代～古代包含層の客土である。
1.　茶褐色土　締まり強い。近世土。
2a.　暗褐色土　橙色スコリア・土丹粒（φ1mm）・砂粒を多く含む。締まり強く、硬質。
2b.　暗褐色土　2aに比べ粒子少ない。炭化粒遺物を含む。
2c.　明褐色土　黄色土丹魂とローム魂を含む。締まり、粘性あり。
3a.　暗褐色土　橙色スコリア（φ1～3mm）・灰色粒子（φ2mm）を少量、炭化粒子、遺物を含む。締まり、粘性あり。
3b.　暗褐色土　橙色スコリア（φ1～3mm）・灰色粒子（φ2mm）を少量含む。締まり、粘性あり。
3c.　暗褐色土　土丹粒（φ2～3mm）土丹魂とローム魂（φ3～10mm）を含む。締まり、粘性あり。
4a.　茶褐色土　キメ細かい粘質土。
4b.　暗黄褐色土　拳大の土丹魂とローム魂を多く含む。
5.　暗褐色土　赤橙色スコリア（φ1～2mm）をやや多く含む。粘質土。
6.　明褐色土　砂質土で締まり強い。

図３．堆積土層

調査区の北東では盛り土を除去すると岩盤が露呈した。この岩盤は北東にある天神山を形成する岩盤からの張り出しであることが明らかとなった。調査区北壁の土層は砂性が強く調査区外北側の岩盤の土砂の流入の影響を受けている。調査区内北壁から２ｍまでは砂性が強い。一方、東壁は東の谷からの流れ込みが考えられる。遺物の分布は東側に多く見られ、とりわけ試掘坑付近で多いが小片がほとんどである。また、盛り土は古墳後期～古代の遺物を含む客土であり、調査区東側を含めた付近にこの時期の包含層があることから東の小支谷もしくは丘陵部に生活の場があったものと推察される。現代ではA-1区には水田用水を低湿地部に送るための土管が北東方向に岩盤を掘り込んで埋設されており、施主の話によると昭和の初めの頃のものであるという。また、東側の狭く緩やかな当時畑の斜面を削り均して当地に家を建てる際に、東側の現畑からも遺物は多く確認されたという。

第２章　調査結果

確認掘調査で弥生時代終末～古代の遺物が出土したため、本格調査をするに至った。調査は確認結果をもとに無遺物層まで遺構の有無を確認しながら１m方眼で遺物採取を行った。その結果、遺物は比較的東側から出土し、確認調査区が最も分布密度の濃い範囲であった。本格調査で出土した遺物は大部分が小片であり、層位的には２a, ２b, ３a層からであった。また地形を把握するべく調査区の北壁と南壁にサブトレンチを設定し土層観察を行った。

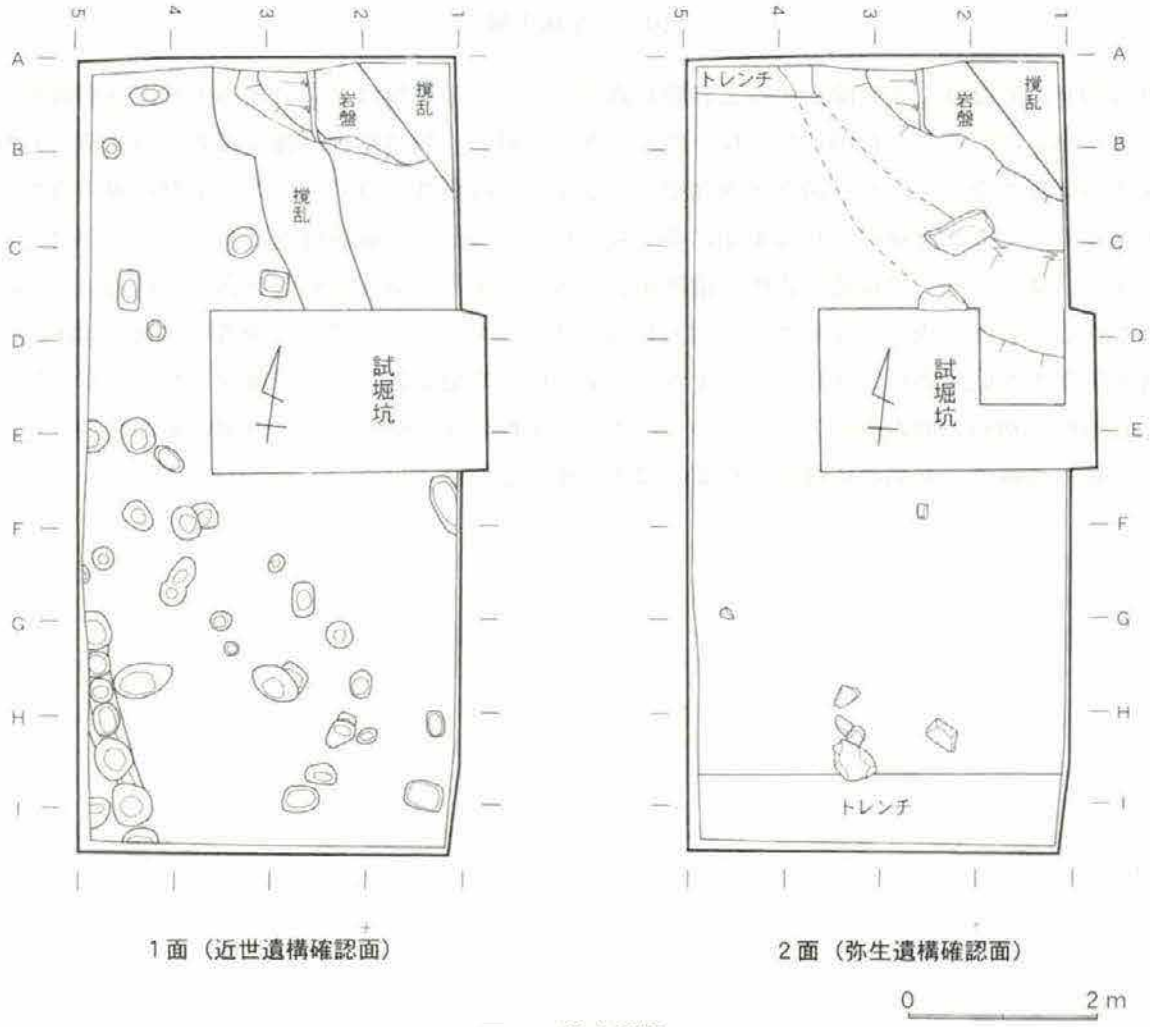
第１節　検出された遺構

１面（図４）

盛り土と近世土を掘削した面を便宜上1面とした。遺構はすべてが近世土を包含するピットである。南西側直線に配列する７連のピットはいずれも深さが30cm前後でしっかりと掘り込まれていた。それ以外は10cm以内のものが多く最大でも20cm以内であり、柱穴および柵列に伴うような規則性のある配列はみられなかった。

２面（図４）

３a層上面の散在する土丹を確認して3b層まで面的に下げ、３b層上面で２面とした。土丹塊の大きさは20～60cmであり、この面に散在する遺物から判断して古墳後期の天神山肌の崩落と推定される。土



１面（近世遺構確認面）　　２面（弥生遺構確認面）

図４．検出遺構

丹の厚さは20～30cmであり、堆積土層（3a層）に覆われるまで放置されていたと考えられ、その後も調査区内には近世まで遺構となるものは検出されていない。

第2節　発見された遺物

確認調査出土遺物（図5）

確認調査では弥生時代終末から古代にかけての遺物がややまとまって出土したが、細片が多く図示できたのは7点である。1は弥生時代終末から古墳時代初頭の口縁部がやや内湾しながら開く欠山式系の壷と考えられる。口縁部外面には刷毛状工具により施文され胴部以下にはさらにヘラミガキが施されている。2～4・7は7世紀初頭～前半に比定される坏である。2・3・7は口縁が内湾気味に立ち上がる特徴的形態を持つ。2は外面に7は内外面に黒彩が施されている。5は須恵器坏である。底面はヘラケズリによって回転糸切り痕が消されている。6は土師器甕である。胴部外面はナデ調整され、底面には木葉痕が観察される。全体的にみてやや古い遺物も混じるものの概して7世紀前半～8世紀を主体とした土器群としてよいであろう。

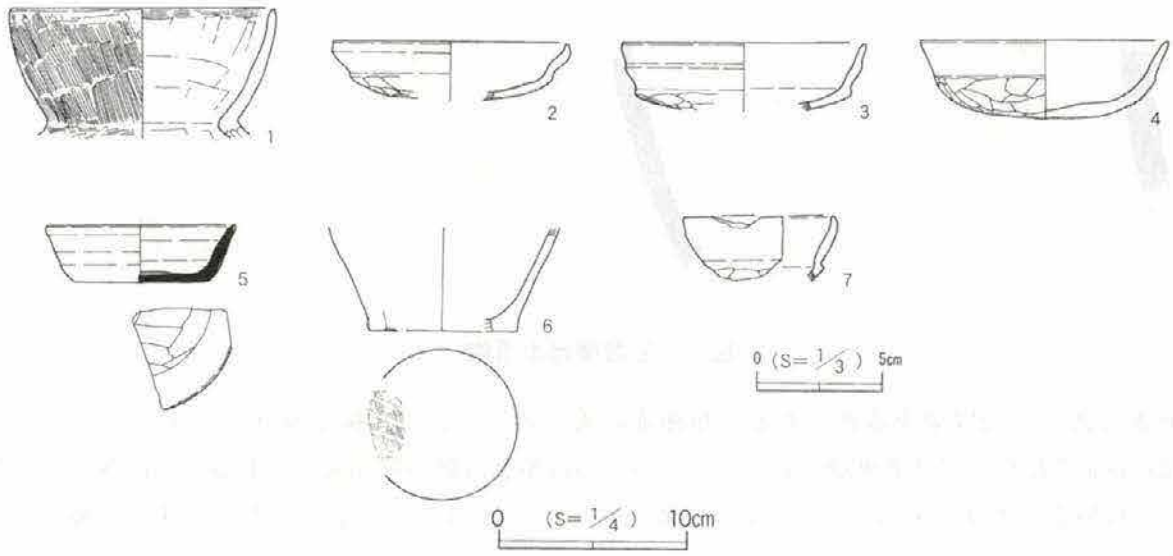


図5．確認調査出土遺物

包含層出土遺物（図6）

調査の結果、出土した遺物は弥生時代終末から古代にわたり、弥生土器4％、土師器93％、須恵器3％である。層位的には2層から8世紀初頭～後葉と考えられる土器群（8，10，11，13，15）、3層からは古式土師器などやや古いものも混じるが、7世紀前半～8世紀前葉と考えられる土器群（1，2，4・7）が出土している。図示できたのは15点である。1は土師器坩と考えられ口縁部内外面にハケメ工具によるナデが施される。2は土師器壷である。外面はハケメ調整したあとヘラナデされている。3は土師器甕である。口径は13.0cmを測り、胴部内面はハケメ工具によってナデ調整されている。4は土師器甕の口縁部破片である。器厚がやや厚い。口縁部はヨコナデされている。5は須恵器坏蓋である。古墳時代後期の所産であろう。6は須恵器高坏脚部と考えられるが、在地にはあまり認められない器形である。色調は灰白色を呈し脚部下端に突帯をもつ。7，8は土師器坏である。7はややつぶれた丸底坏。8はヘラケズリによって体部を作り出し、相模型坏と認められるものである。口径が14cm代であることから8世紀代の所産であろう。9は須恵器蓋で、口縁部に返りをもつ。10は土師器甕。11は須恵器

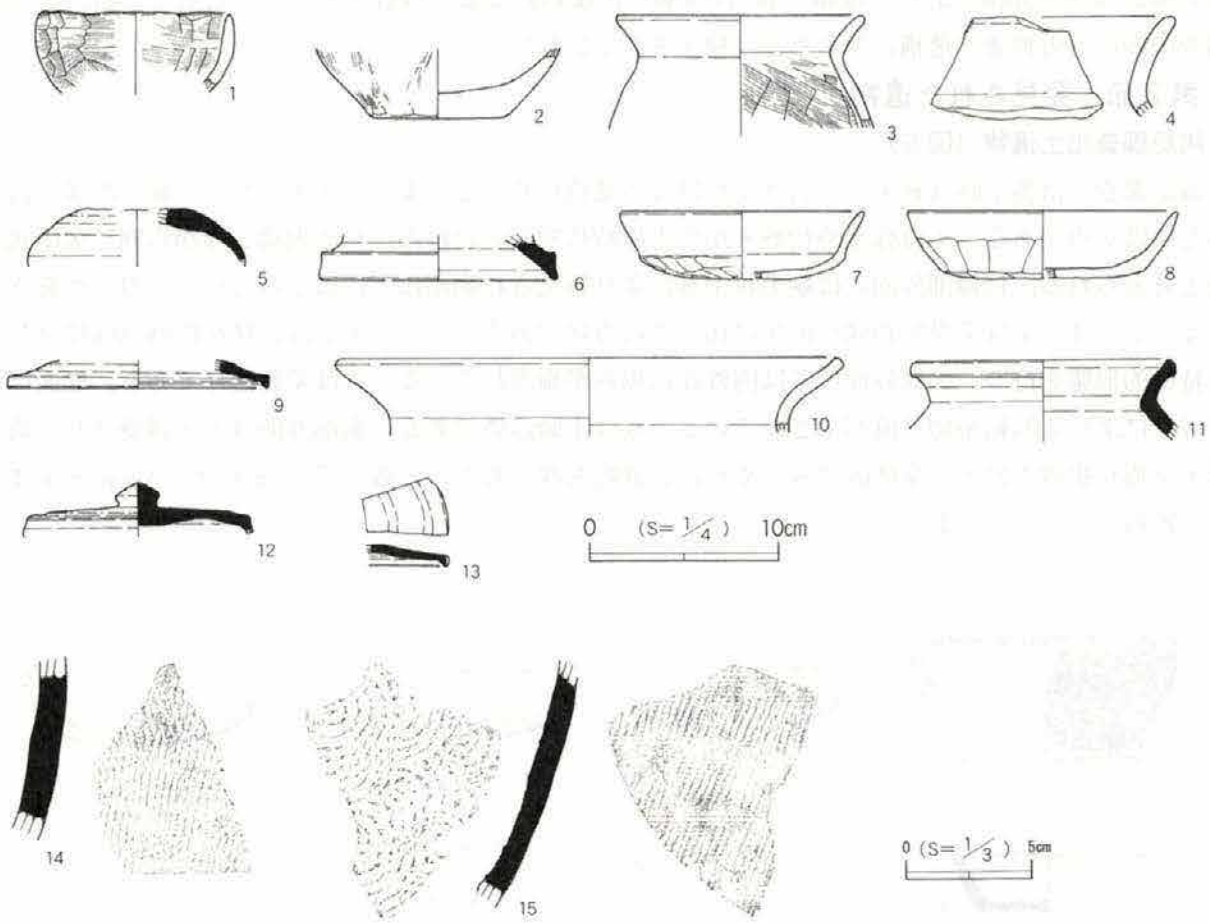


図6．包含層出土遺物

の小形壷である。12は須恵器蓋である。短頸壷の蓋と考えられる。擬宝珠状のつまみをもつ。天井部径は6.6cmである。13は須恵器坏蓋である。14、15は須恵器甕の胴部破片である。14は外面平行タタキ、内面は同心円オサエをヘラナデによって磨り消している。15にも外面に平行タタキ、内面に同心円オサエが認められる。

出土位置は次のとおりである。1はC－2区3層、2はI－4区3層、3はI－4区、4はC－2区3層、5はH－1区3層、6はH－I区3層、7はC－1区3層、8はE－2区2層、9はI－3区3層、10はE－2区2層、11はC－1区2層、12はB－2区、13はE－2区2層、14はB－3区3層、15はF－1区2層である。

表1　出土遺物観察表

図5　試掘調査出土遺物

番号	種　別	器　種	特　　徴	備　考
1	弥生土器	壺	法量（14.0）・（6.9）・―　残存 口縁部1/3　色調 明褐色 焼成 良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい(外) 口縁部タテ・ナナメハケ，胴部タテハケ→ナナメヘラケズリ せいけい(内) 口縁部ヨコハケ→ヘラナデ，胴部ヘラナデ	
2	土師器	坏	法量（13.2）・4.2・―　残存 1/3　色調 橙褐色 焼成 やや良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ，底部外面ヘラケズリ	
3	土師器	坏	法量（12.9）・3.6・―　残存 1/6　色調 暗橙褐色 焼成 良好　胎土 スコリア，角閃石を含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ，底部外面ヘラケズリ	
4	土師器	坏	法量（12.4）・3.1・―　残存 1/6　色調 暗褐色 焼成 良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ，底部外面ヘラケズリ	外面黒彩
5	須恵器	坏	法量（10.0）・3.1・(7.0)　残存 1/6　色調 灰白色 焼成 良好　胎土 砂粒を含む せいけい 口縁部内外面回転ナデ，底部外面ヘラケズリ	
6	土師器	甕	法量 ―・（5.5）・（8.0）　残存 底部 1/8　色調 橙褐色 焼成 やや良好　胎土 砂粒を含む せいけい 胴部外面ナデ，内面ヘラナデ	
7	土師器	坏	法量 ―・―・―　残存 口縁部破片　色調 橙褐色 焼成 良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ，底部外面ヘラケズ	内外面黒彩

図6　包含層出土遺物

番号	種　別	器　種	特　　徴	備　考
1	土師器	坩？	法量（10.0）・（4.3）・―　残存 口縁部1/4　色調 暗褐色 焼成 良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい(外) 口縁部ヨコハケ→ナデ　せいけい(内) 口縁部ヨコハケ→ヘラナデ	
2	土師器	壺	法量 ―・（3.6）・6.6　残存 底部 1/2　色調 橙褐色 焼成 やや良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい 胴部外面タテ・ナナメハケ→ヘラナデ胴部内面ヘラナデ	
3	土師器	甕	法量（13.0）・（5.9）・―　残存 1/6　色調 橙褐色 焼成 やや良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ，胴部外面ナデ，内面ハケメナデ	
4	土師器	甕	法量 ―・―・―　残存 口縁部破片　色調 橙褐色 焼成 やや良好　胎土 細砂粒を多く含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ	
5	須恵器	坏蓋	法量 ―・（3.0）・（5.0）　残存 1/6　色調 灰褐色 焼成 良好　胎土 白色針状物質を含む せいけい 天井部回転ヘラケズリ，口縁部内外面回転ナデ	
6	須恵器	高坏？	法量 ―・（2.4）・（12.6）　残存 脚部1/4　色調 灰白色 焼成 良好　胎土 鉄分を含む せいけい 脚部内外面回転ナデ，脚部下端突帯貼り付け	
7	土師器	坏	法量（12.8）・（3.6）・―　残存 1/4　色調 明褐色 焼成 やや良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ，底部外面ヘラケズリ	
8	土師器	坏	法量（14.2）・（3.7）・（10.8）　残存 1/3　色調 橙褐色 焼成 やや良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ，体部～底部外面ヘラケズリ	
9	須恵器	坏蓋	法量（13.8）・（1.4）・―　残存 1/10　色調 灰白色 焼成 良好　胎土 砂粒を含む せいけい 口縁部内外面回転ナデ	
10	土師器	甕	法量（26.2）・（4.0）・―　残存 口縁部 1/4　色調 橙褐色 焼成 やや良好　胎土 砂粒，スコリア含む せいけい 口縁部内外面ヨコナデ	
11	須恵器	壺	法量（13.6）・（3.6）・6.6　残存 口縁部 1/6　色調 橙褐色 焼成 やや良好　胎土 砂粒を含む せいけい 口縁部～胴部内外面回転ナデ	
12	須恵器	蓋	法量 ―・（3.6）・6.6　残存 底部 1/2　色調 橙褐色 焼成 良好　胎土 砂粒，鉄分を含む せいけい 口縁部内外面回転ナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	短頸壺蓋？
13	須恵器	坏蓋	法量 ―・―・―　残存 口縁部破片　色調 灰白色 焼成 やや良好　胎土 砂粒を含む せいけい 口縁部内外面回転ナデ，天井部外面回転ヘラケズリ	
14	須恵器	甕	法量 ―・―・―　残存 胴部破片　色調 灰褐色 焼成 良好　胎土 砂粒を多く含む せいけい 胴部外面平行タタキ，内面同心円オサエ→ヘラナデ	
15	須恵器	甕	法量 ―・―・―　残存 胴部破片　色調 灰褐色 焼成 良好　胎土 砂粒を含む せいけい 胴部外面平行タタキ，内面同心円オサエ	

第3章　まとめ

今回の調査では住居址などの直接集落の存在を決定づける遺構は検出されなかった。しかし弥生終末～古代の遺物が発見されている。周辺におけるこれまでの調査からもこの時期に天神山一帯に集落が形成されていたことが発見されており、弥生時代後期から平安時代まで丘陵上の狭小な平場や傾斜にも集落が点在している。遺物は中でも古墳後期以降が目立つ。また当時の地形からみると本址の北側には柏尾川が北東から南西方向に走り本址との間には広い泥質低湿地・後背湿地の空間域や河跡湖の存在も明らかになっていることから(註１)、本址の西側および北側の広い範囲にわたる低湿地域を生産基盤とした生活空間が成立していたと想像できる。

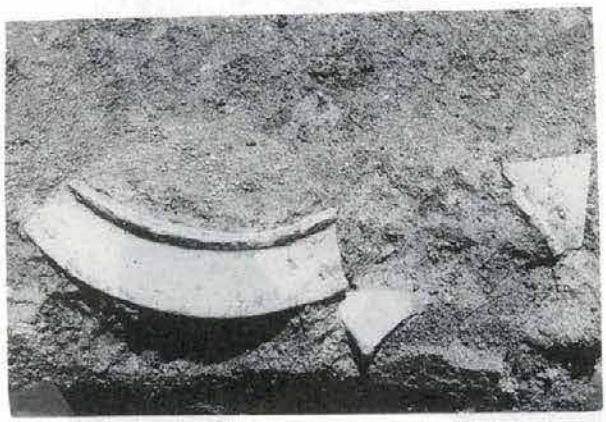
(註１)　上本進二　2004「鎌倉の地形発達史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第118集、７－24頁を参考にした。

▲ 1. 1面全景（南から）

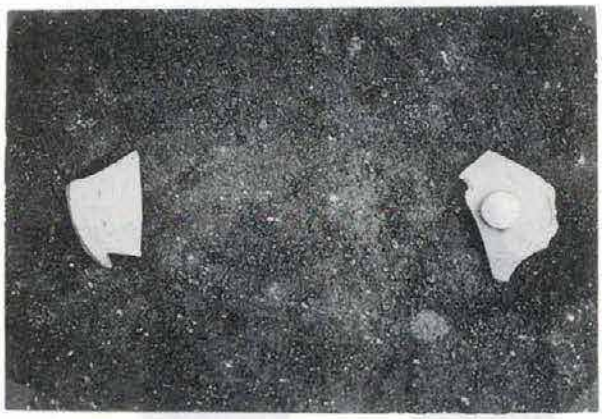
▲ 2. 岩盤と崩落岩（北から）

▲ 3. 北壁セクション（南から）

▲ 4. 2面全景（南から）

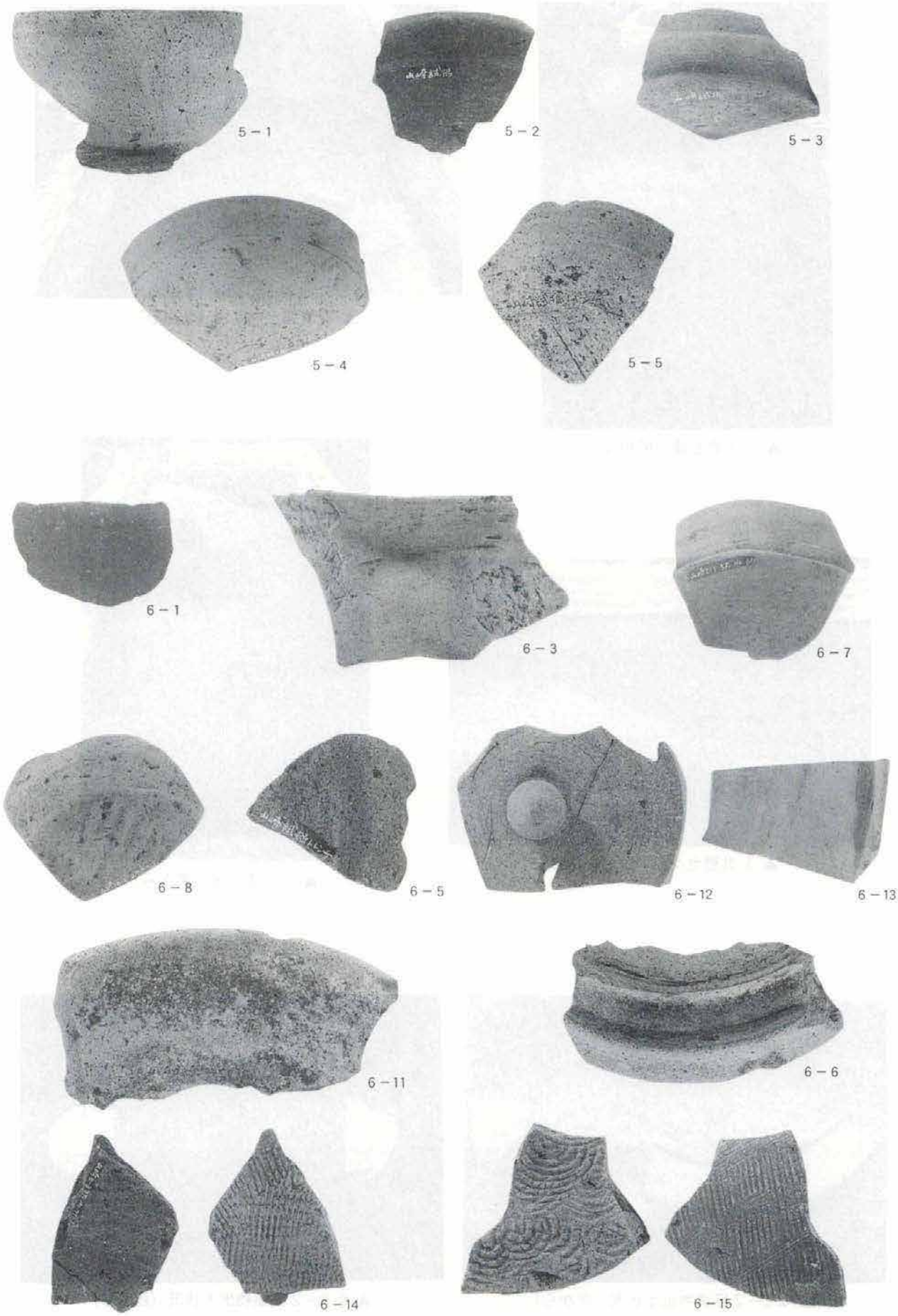


▲ 5. E－2区遺物出土状況（北から）



▲ 6. B－2区遺物出土状況（西から）

図版 2



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	平成20年度調査報告
巻次	25　（第２分冊）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者	原　廣志／斉木秀雄・降矢順子／降矢順子／熊谷　満／熊谷　満／三ツ橋正夫／三ツ橋正夫・降矢順子
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248-8686　鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
ずいせんじしゅうへんいせき 瑞泉寺周辺遺跡	神奈川県鎌倉市 二階堂字紅葉ヶ谷 647番6外	14204	338	35° 32′ 47″	139° 57′ 43″	20030912 ～ 20031025	50.00	個人専用住宅 （杭基礎構造）
さすけがやついせき 佐助ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 佐助一丁目 496番5	14204	203	35° 31′ 68″	139° 54′ 59″	20050307 ～ 20050528	56.00	個人専用住宅 （杭基礎構造）
べんがやついせき 弁ヶ谷遺跡	神奈川県鎌倉市 材木座六丁目 643番3	14204	249	35° 30′ 25″	139° 55′ 73″	20040925 ～ 20041111	44.50	個人専用住宅 （杭基礎構造）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 126番1	14204	242	35° 31′ 33″	139° 55′ 04″	20050404 ～ 20050428	39.00	個人専用住宅 （車庫の築造）
わかみやおおじしゅうへんいせきぐん 若宮大路周辺遺跡群	神奈川県鎌倉市 由比ガ浜一丁目 126番11	14204	242	35° 31′ 33″	139° 55′ 05″	20050509 ～ 20050520	36.00	個人専用住宅 （車庫の築造）
さいみょうじきたていあと 最明寺北亭跡	神奈川県鎌倉市 山ノ内字明月谷 295番4外	14204	137	35° 33′ 31″	139° 55′ 34″	20050913 ～ 20050922	15.00	個人専用住宅 （地盤の柱状改良）
てんじんやましろ 天神山城	神奈川県鎌倉市 山崎字宮廻 689番1	14204	384	35° 33′ 84″	139° 52′ 59″	20040601 ～ 20040617	34.40	個人専用住宅 （杭基礎構造）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瑞泉寺周辺遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	礎石建物跡、 土壙、柱穴、溝跡、 井戸、網代塀等	舶載陶磁器、国産陶器 かわらけ、金属製品、 瓦、木製品、石製品等	
弁ケ谷遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壙、柱穴、溝跡、 板壁建物跡、石列等	舶載陶磁器、国産陶器 かわらけ、金属製品、 木製品、石製品等	
佐助ヶ谷遺跡	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	土壙、柱穴、溝跡、 掘立柱建物跡、 石列等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、 金属製品等	
若宮大路周辺遺跡群	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	方形竪穴建築址、 土壙、柱穴、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、 金属製品、獣骨等	
若宮大路周辺遺跡群	都市	鎌倉時代 ～ 室町時代	方形竪穴建築址、 土壙、柱穴、溝跡等	かわらけ、銭、石製品 舶載陶磁器、国産陶器、 金属製品、獣骨等	埋葬された犬を発見
最明寺北亭跡	寺院	鎌倉時代 ～ 室町時代	柱穴、溝跡、岩盤削 平面等	かわらけ等	
天神山城	集落	弥生時代末 ～ 平安時代	岩盤造成遺構	弥生土器、土師器、 須恵器等	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　25
平成20年度発掘調査報告
（第 2 分 冊）

発行日　平成21年３月31日

編　集
発　行　鎌倉市教育委員会

印　刷　有限会社石橋印刷